
道具師と赤眼の少女

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道具師と赤眼の少女

【Nコード】

N7382L

【作者名】

山口

【あらすじ】

「最強の道具師」と謳われるロイは、銀髪に青い瞳をした少女を護衛することになった。彼女には恐るべき秘密があった。

第一部「道具師と赤眼の少女」第一話

深夜の街を、一人の若者が歩いていった。

名をロイと言い、今年で二十歳になる。金髪碧眼で肌が白く、中肉中背。目鼻立ちの整ったなかなかの美青年だ。

彼には右目がない。昔、家族と一緒に街の外を歩いていたとき化け物に襲われて失った。家族は護衛の人間ともども命を落とし、逃げのびたのは彼だけだった。それ以来ずっと一人で暮らしている。

彼は酒場に入った。薄暗い店内のカウンターには、痩せこけた白髪の老人が座っている。ロイはカウンター席に座り声をかけた。

「よう、リート。久しぶりだな」

老人はぎよろりとした目でロイを見つめた。

「待っていたぞ」

「待つててくれるのはいいけど、もう少し色気のある恰好をしるよ。じいさんが相手じゃ気分が萎えてくるから」

リートは鼻で笑った。

「お望みとあらば仕方がないな」

彼が笑顔のまま立ち上がると、その白髪がゆっくりと伸びだした。さらに顔から皺が消えていき、胸が大きく盛り上がった。

ロイはそのようすをじろじろと見ながらつぶやいた。

「しかし、すごい特技だよなあ」

間もなく、老人は二十歳くらいの女性に変わっていた。黒々とうねった長髪、薄紫の瞳、透き通るような白い肌。加えて完璧と言っているほどに調った顔立ち、起伏の激しい体。これらが組み合わせさり、見る者を一瞬で魅了するほどの色香を漂わせている。

ロイはリートを見つめて言った。

「いつ見てもいい女だな」

すると彼女は目を細め、くすりと笑った。

「わかっているわよ、そんなこと」

リートはカウンターから出ると、ロイの目の前に歩いてきた。その途端、甘い香りが辺りに漂った。

「ねえ、例の勝負はしてくれないの？」

彼女に見つめられ、ロイは思わず視線を反らした。この薄紫の瞳を見ると中に引き込まれそうな錯覚に陥る。彼は正気を保つために何度も首を振った。

そのようすを見ながらリートは薄笑いを浮かべた。

「あなたが勝つたら、私を好きにしていいいのよ。こんな素晴らしい話はないでしょ？」

「お前が勝つたら俺を食い殺すんだろ、冗談じゃない」

ロイは寒気を覚えた。こういうタイプの魔物が男にとって一番危険なのだ。普段は人間に紛れており、標的を見つけると甘い顔をしながら近づく。哀れな犠牲者は彼女の美貌と色香にだまされ、命を持っていかれることになる。

リートはロイの首を撫で回した。

「相変わらずつれないわね。いい男だけど」

「相変わらず危険な奴だな、いい女だけどさ」

二人は顔を見合わせて笑った。とは言え、双方の体には緊張が走っている。相手が妙な素振りを見せたらすかさず殺そうと思っているのだ。

彼らは、仕事の上で善きパートナーである。しかし同時に、ロイにとつてリートは「怖ろしい魔物」であり、リートにとつてロイは「魔物を葬り去る力を持つ危険な人間」なのだ。

「リート、今回の依頼の内容は？」

「久々の再会だって言うのにせつかちねえ。こんな美女を前にして喜びつてものはないの？」

「あるよ、お前ほどの美人は滅多にいないからな」

ロイがリートの頭を撫で回すと、彼女の瞳が怪しく輝いた。

「ねえ、今日は道具袋を持ってないの？」

ロイはうなずいた。

「今回は持つてない、重いからな。ここは城壁に守られた城塞都市で、魔物はあまり入ってこな……」

言いかけて彼は沈黙した。リートが牙をむき出していることに気づいたのだ。

「あなたほどの人間が、抜かったわね。私の前に丸腰で現れるなんて、『殺してくれ』と言ってるようなものよ。ふふふ、あははは！」

ロイが身構えると、リートの姿が視界から消えた。次の瞬間、彼は完全に背後を取られていた。

「一度、あなたみたいなお美男子をなぶり殺しにしてみたかったのよ。今までずっと狙ってたけど、ようやくその機会が来たわ！」

ロイはため息をつきながら首を振った。

「お前の足をよく見てみな」

「えっ？」

彼女が視線を下げた途端にロイは振り向き、首元に針を突きつけた。

「だましたわね、ひどい！」

「隙を見せる方が悪い。こいつの威力は知ってるな？」

リートは額に冷や汗をにじませながら答えた。

「知ってるよ、もう手を出さないから許して」

「いい子だ」

ロイは手を下ろしリートをにらみつけた。

「俺が丸腰でお前に会うわけないだろ、何回一緒に仕事してんだ」

「そうだよね、私が馬鹿でした。ごめんなさい」

「今度やったら問答無用で殺す、覚えておけ」

今の針にはロイ特製の毒薬が塗ってある。固い甲羅や鱗に覆われた魔物には通じないが、肌が柔らかい人間型の魔物には絶大な威力を発揮する。体に入れば全身が麻痺し、呼吸もできなくなって死に至るのだ。

「それで依頼の内容は？」

「城塞都市ウインザーまでの護衛だよ」

ロイは頭をかいた。

「うーん、遠いな。三日はかかる」

「危険な旅だよね、私がついていってあげようか？」

リートが微笑みながら言うと、ロイは眉をひそめた。

「お前がついてきたら余計危険だろうが。途中で俺を食い殺すつもりくせに」

彼女は目をしばたいた。

「すごい、あなたって相手の心が読めるの？」

ロイは苦笑いすると、リートの頬をつまんで左右に引き伸ばした。

「お前が考えていることくらいなら手に取るようにわかる。馬鹿な真似をするなよ」

「ごめんなさい、もう言いません」

「それで依頼主はどこにいるんだ」

「ああ、ちよつと待ってて」

リートは二階に上がり、一人の少女をつれてきた。

「この子が依頼主だよ」

ロイは少女を上から下まで眺めた。

肩まで伸びた輝く銀髪、どこまでも透き通った青い瞳と白い肌、整った輪郭にすらりとした手足。着ているのは、一枚の大きな布であつらえた膝丈くらいの服だ。かなりの美少女と言える。ただ、その表情はどこか物悲しげに沈んでいた。

「俺はロイ、お前さんの名は？」

「ネルです」

よく通る、はっきりした声だった。

「ここに来るとはお目が高い……と言いたるところだが、その前に聞きたいことがある」

「なんでしょっ」

「お前さんは護衛士の組合をいくつ知っている？」

護衛士とは、依頼者を護る職業のことだ。魔物が跋扈するこの世界で、戦闘能力の低い者が街の外を歩けば間違いなく命を落とす。

そのため、こういつた弱い人間は護衛士を雇うことになる。

「この街には三つの組合があると聞きました」

「そうだ。国の認可を受けた組合が二つ。受けていない組合が一つ」

「ここは認可を受けていないんですよね？」

ロイは目をしばたいた。

「なんだ、知ってるのか。じゃあ、なんで認可を受けていないかわかるか？」

ネルが首を振ると、ロイはリートを指さして言った。

「受付がこんな奴だからだ。胸ばかり大きくて頭は空っぽ、男を襲うことしか考えていない」

リートが拳を握りしめ、わなわなと震えながら叫んだ。

「ロイのせいでしょ、相手が金持ちと見るや法外な報酬を請求するから。ここの護衛士は一人残らず優秀なのに、あなたみたいに勝手なことをする人が……」

ロイはリートの口をふさぎ、ネルを見つめた。

「まあ、こういう理由があるわけさ。おかげで認可が下りない。下りなくても商売はできるんだが、なかなか客から信用されないんだ」

リートが再び口を挟んだ。

「信用されたいんなら、まず身なりに気をつけなさいよ。なんなの、その上から下まで黒づくめの服は。泥棒でもするつもり？ 怪しいつたらありゃしない」

ロイは首をすくめた。

「魔物に『怪しい』なんて言われるようじゃおしまいだな」

彼は再びネルを見つめた。

「結局、ここは信用もなければ報酬もかさむっていう最悪な組合なわけさ。他の組合なら、正式な訓練を受けた剣士やら弓闘士やらが良心的な値段で運んでくれる。そっちに行つた方がいいんじゃないかって、いて、いて、いて！」

ロイの頬をリートが思いきりつねっていた。

「なんであなたはそんなに商売っ気がないの。自分から客を追い払

うって、どれだけ馬鹿なの！」

「真実を正直に言って何が悪いんだ。ここの護衛士を一人雇う金があれば、他の組合の護衛士を三人は雇える。それに、うちの連中は確かに腕の立つ奴ばかりだが、正式な訓練を受けていないし性格もひん曲がってる」

「あなたが一番ひん曲がってるくせに、よくそういうことを言えるよね！」

二人が言い争っていると、ネルがおずおずと口を開いた。

「あの、ロイさん。待ち合わせの時間を深夜にした理由がわかりますか？」

「知るわけないだろ」

「私、日の当たる場所を歩けない人間なんです」

ロイは首をかしげた。

「なんだそりゃ、日の光を浴びると体が溶けるとか？」

「そうではなくて、ひっそり生きなければならぬ身分であるということです」

「ああ、犯罪者か」

「違います！」

「じゃあ、家族が犯罪者」

「それも違います！」

ロイにはその理由がさっぱりわからなかった。罪を犯したわけもないのに、なぜひっそり生きなければならぬのだろう。

「まあ、うちの組合に来た理由だけはわかったよ。他のところは身分の証明が必要だからな。その点ここはさすがだから、依頼人がどんな奴だろうが……」

彼は言いかけて口を止めた。ネルが顔を押しさえながら震えだしたからだ。

「どうした、大丈夫か？」

「あつ、ああ、ああああ！」

第二話

ロイは振り返り、リートに尋ねた。

「なんだこりゃ、どうなってるんだ」

彼女は頬を押さえながら、しみじみと答えた。

「人間の匂いを間近で嗅ぎすぎて、興奮しちゃったのかもね」

「え、こいつ人間じゃないのか？」

「れっきとした人間だよ。ただ、ちよつと問題が」

ロイは、ネルの変貌ぶりにひたすら驚いていた。

輝く銀髪と澄んだ青い瞳が、燃えるような赤に変わっている。先ほどまで大人しそうだったのに、今は相手を圧倒するほどの殺気に包まれている。

「こいつ、赤眼……」

ロイがつぶやいた途端、リートが店の奥へと逃げだした。

「絶対無理、私には止められない。ロイ、後はよろしくね」

「おい、協力しろ。仲間だろ！」

「こついつのつて、男の役目だと思うよ。か弱い乙女にやらせないで」

「はあああ？ か弱い乙女？ 誰が？」

リートが逃げだしたのも無理はない。赤眼の種族は、人間型の魔物の中で最も凶暴であり戦闘能力も高い。人間の頭くらい簡単に潰してしまうし、体も簡単に引き裂いてしまう。戦いが不得手な者が赤眼と対峙すれば、即死確定と言っていいだろう。

「くそ、こんなときに武器がないとは」

ロイは唇を噛んだ。彼は剣も弓も人並みに使うことができない。その代わり道具の扱いに長けている。それさえあれば、彼の戦闘能力は超一流の剣士に匹敵するほどだ。しかし、その道具を入れた袋を持ってきていないときている。

護身用の道具をいくつか忍ばせてはいるが、それらのほとんどは

相手を即死させるものだ。魔物化しているとは言え、依頼者の少女に使用して殺してしまうわけにはいかない。

ロイは、懐をこそごと探りだした。

「そう言えば、一つだけあったな」

取り出したのは、緑色の液体が入った小瓶だった。これを使えばネルを止められそうさ。しかし、使う前に殺されてしまったのはたまらない。そこで彼は一計を案じ、店の奥へと後退した。すると、リートが慌てて叫んだ。

「ちよつと、来ないでよ！」

「いいから力を貸せよ、頼むから」

ロイが耳打ちすると、彼女は渋々うなずいた。

「貸し一つだからね！」

「わかったわかった、いつか倍にして返すよ」

その間に、ネルがじわじわと間合いを詰めてきた。狙いはロイだ。彼は木製の椅子を持ち上げるや否や、思いきり投げつけた。

「これでも喰らいな！」

ネルが右手を振り上げて椅子を殴ると、いとも簡単に碎けてしまった。しかし、これで終わりではない。その間にリートが回り込んでいたのだ。

「おとなしくしてよ、これ以上暴れないで！」

リートがネルを羽交い締めにした。彼女の腕力は大人の男性三人に匹敵する。ところが、あっさりと振りほどかれてしまった。

「え、ちよつ、嘘ー！」

リートは逃げる間もなくネルに首をつかまれ、右手一本で空中に持ち上げられた。

「ロ、ロイ、助け……」

次の瞬間、ロイが放った液体がネルの顔を直撃した。彼女はすさまじい叫び声を上げながらリートを放り投げ、その場に倒れて動かなくなった。

リートは咳込みながらロイに尋ねた。

「まさか、殺したんじゃないでしょうね」

「気絶させたただけだ。依頼人を殺してどうすんだよ」

「そう、安心したわ」

リートがため息をつくとき、ロイは目を細めて彼女をにらみつけた。

「お前、こいつが赤眼ってことを知ってたのか」

リートは、おどおどしながら無言でうなずいた。

「それなら、なんでさっさと言わないんだ。俺は殺されるところだったんだぞ」

「確かにそうね、ごめんなさい。なかなか言う機会がなくて……それに、あなたなら襲われても大丈夫だと思ってたから」

「冗談じゃない」

ロイは吐き捨てるように言うと、近くにあったテーブルを拳で叩いた。

「お前にはわからないかもしれないけど、人間にとって魔物に襲われるのは大変なことなんだ。奴らは俺たちの何倍も力があるし、何倍も素早く動ける。奴らの爪は簡単に俺たちを切り裂くの、こっちの剣はなかなか刃が立たない」

リートが、うつむきながら言った。

「弱い剣士や弓闘士ならともかく、あなたが言う台詞じゃないと思うよ」

「そんなことはない！」

ロイは、たたみかけるように話し続けた。

「弱い人間ほど、魔物の怖さを知らない人間ほど、己と敵の差をわきまえずに平気で向かっていく。結果、そういう奴は真っ先に殺される。一流の剣士や弓闘士は、魔物に会ったらまず逃げることを考えるんだ。彼らが本気で戦うのは、血路を開くときだけなんだよ」

リートは首をかしげながら、何度も目をしばたいた。

「私はもう二百年近く生きてるけど、あなたほど強い人間を見たことがないよ。そんなに弱気な理由がわからないなあ」

ロイは近くにあった椅子に座り込み、ため息をついた。

「強い剣士が出てきて魔物をばっさばっさと斬り倒すなんて言うのは、絵空事なんだよ。奴らの固い体に剣はなかなか通じない。それどころか、刃こぼれして使えなくなることもしょっちゅうだ。剣なんてそんなもんなんだよ」

「じゃあ、弓は？」

「弓なら相手の急所を狙うしかない。いくら手足を撃つても奴らは倒れないからな。これも、どこに急所があるのかという知識と、動いている的に矢を命中させるという高度な技術が必要になる。知識と技術のどちらが欠けていても、その弓闘士は役に立たない。最も両方を持っている奴は、魔物の急所を撃つて倒すということの難しさを知っている。だから結局はさっさと逃げるわけだ」

リートはロイの肩を叩いた。

「あなたは剣士でも弓闘士でもない、道具師でしょ。きっと大丈夫だよ」

「道具師なんか一番危ない。道具をなくしてしまえばただの人だからな」

「本当に弱気なんだね、目茶苦茶強いくせに」

リートが笑うと、ロイは遠くを見ながらしみじみと言った。

「俺は今まで、熟練の戦士たちがどうやって魔物に対処するのかを何度も見てきた。それは、徹底した『逃げ』だ。逆に、経験の浅い戦士は殺気立って斬りかかる。前者は大体生き残り、後者は大体死んだ」

「わかった、わかったよ。それで、この子を護衛してくれるの？」

ロイは心底嫌そうに眉をひそめた。

「あんな、護衛って言うのは強い奴が弱い奴を護るもんだ。自分より強い奴を護ってどうするんだよ。第一、俺の命が危ないだろうが」「言い分はわかるけど、ロイにしかできないんだよ。こんな危険な子をつれて歩けるのって、人間ではあなたくらいだと思っよ」

彼は必死に首を振った。

「だから、護衛なんかいらねえだろうって。赤眼であるところを見

ると、こいつはキーマっていう種類の魔物だ。連中は、魔物の中でも屈指の強さを誇る。俺がついていく意味がない」

力説していると、いつの間にかネルが起き上がっていた。

「私……またやっちゃったみたいですね」

その髪と瞳は、元の色に戻っている。ロイは顔をしかめながら彼女に話しかけた。

「勘弁してくれよ、魔物の護衛なんか聞いたことがないぜ」
すると、ネルはロイをまっすぐに見つめた。

「私、魔物じゃありません！」

「はあ？ どこからどう見ても魔物だろうが！」

第三話

「本当に人間なんです。魔物の血が流れてるだけで」

ロイは目を見張った。

「そんな奴が世の中にいるとは知らなかったな」

すると、リートが口を挟んだ。

「知らないなんて意外だね。魔物には人間の血が流れてることもあるし、元は人間だったっていうのもいる。逆に、人間なのに魔物の血が流れているのもいる。魔物から人間になっただってというのは聞かないけどね」

「へえ、初耳だ」

ロイが感嘆しながらうなずいていると、ネルが彼の手を握った。

「私はときどき理性を失い、魔物になってしまっただけです。自分でそれを抑えることはできません。でも、ウィンザーの街には……」

「それを抑える薬でもあるのか？」

ネルは大きくうなずいた。

「じゃあ、別にお前さんが行く必要はないよ。ここで待ってる。俺がひとつ走り行って、買ってきてやるから」

「一刻も早く行かないと駄目なんです」

「なんでだよ」

ネルはしばらく沈黙した後、おもむろに話した。

「魔物になるまでの間隔が、段々短くなっていくから。このままだと、人間に戻れなくなってしまっただけなんです」

ロイは、それを聞いてうなずいた。

「じゃあ仕方がない、つれていくしかなさそうだな」

「どうか、お願いします」

「で、報酬の話だが」

ネルは表情を曇らせながら、札束を差し出した。

「あなたが要求する金額が高いことは、承知の上です。これでお願

いけないでしょうか」

「これって、いくらあるんだ？」

「五百ルピーあります」

ロイは札束を受け取り、じつと見つめた。五百ルピーと言えば、大の男が一年働いて得る金額と同じくらいだ。魔物に変化するといふ最悪のハンデを負いながらこれだけの金を貯めるには、血の滲むような努力が必要だったに違いない。

「これは、お前さんが働いて貯めたのか？」

ネルがうなずくと、ロイは札束を突き返した。

「俺が報酬を受け取るのは、明らかに金持ちな奴からだけだ。だから、いらない」

ネルは目を見開き、「信じられない」と言いたげな顔をした。護衛と言えば命がけの仕事だ。それを無料で引き受けてくれるなど、聞いたことがなかった。

「本当にいいんですか？」

「いいよ。俺が金持ちに高額な報酬を吹っかけるのは、貧乏人を夕ダで護衛してやるためだから」

ネルはしばらく黙り込んでいたが、やがて口を開いた。

「ロイさんは、私に一つ嘘をつきましたね」

「何が。俺は本当のことしか言っていないぞ」

「私がここに来たとき、『他の組合に行った方がいい』って言ったじゃないですか。でも、それは嘘でした。ロイさんは『最強の道具師』と言われる人です。そんな方が無料で護ってくれるなんて、この組合は最高だと思います」

ロイはぼりぼりと頬をかいた。

「まあ、そういう見方もあるか」

リートが口を挟んだ。

「受付は美人だしねえ、最高だよな」

「危険人物の間違いだろ」

翌朝、酒場には昨日と同じ三人が集まっていた。唯一違うのは、ロイとネルが大きな布袋を背負っていることだけだ。

リートは、袋をしみじみと眺めながら言った。

「それを持っているときのロイは、あり得ないくらい強いんだよね」

「あまり持ち上げるなよ、調子に乗るから」

ネルがロイに尋ねた。

「この袋の中身、本当に使っていないんですか？」

「好きに使い。もし俺が魔物にやられることがあったら、それを使って逃げる。俺が悲鳴を上げようが引き裂かれようが、一切かまうな」

「でも」

ネルは素直にうなずけなかった。生命の危機に陥っている者を見捨てるなど、血の通った人間のすることではない。

ロイは、ネルの顔をのぞき込みながら言った。

「いいか、よく聞け。俺の仕事は、依頼者を無事に目的地まで送り届けることだ。俺を助けるために依頼者が命を落としてしまったら、本末転倒なんだよ」

「そうかもしれないですけど」

「俺は護衛を引き受けた時点で、命を失う覚悟はできている。だから、死んでも気にするな。その代わり、自分だけはなんとしても生きのびろ」

ネルは、悲痛な面持ちでうなずいた。

「じゃあ、そろそろ行くか。リート、元気でな」

リートはロイの顔をじっと見つめた。

「道中、気をつけて。必ず生きて帰ってきてね」

「俺を殺そうとした奴が言うなよ」

「人が心配してあげれば、これだものねえ。あと、私の妹によろしくね」

「へいへい」

ロイとネルは酒場を出て、城塞都市の中を歩いていった。

周囲の建物は、石や煉瓦で造った堅牢なものばかりだ。どれも非常に窓が小さい。魔物が街に入り込んでくることを想定したものだった。

早朝だけあって、人通りは少ない。歩いているのは見回りの兵士くらいだ。彼らは金属性の兜や鎧を身に着け、剣や槍で武装している。これも建物と同様に、魔物の来襲を想定したものだ。

魔物が世の中に出没するようになって以来、人々は城郭や砦、城塞都市の中で生活することを余儀なくされるようになった。人間同士の戦争が一切なくなったのが救いではある。戦争など始めようものなら、血の臭いを嗅ぎつけた魔物たちが襲来し一人残らず食われてしまうからだ。

二人は、街の片隅にある出入口に向かって歩いた。そこには金属性の扉があり、脇に二人の兵士が立っている。ロイは彼らに声をかけた。

「外に出たいんで、扉を開けてくれ」

兵士の一人が答えた。

「またどこかに行くのか、三日前に帰ってきたばかりなのに」

「ああ、ウインザーに行くんだよ」

「ご苦労なことだな、気をつけて行ってこいよ」

兵士が脇にあるレバーを引くと、扉が外側に向かって倒れていった。この街の周囲は深い堀に囲まれており、この倒れた扉が橋になるのだ。

ロイたちが街の外に出ると、扉は再び閉ざされた。

「安全なのはここまでだ。これからは、いつ死んでもおかしくない」

ロイの言葉に、ネルは眉をひそめた。

「あまり脅かさないてください、私は怖がりなので」

「お前さんが、誰かを怖がる必要なんてあるのか？」

尋ねると、ネルは泣き出した。ロイは慌てて頭を撫でた。

「ごめんな、もう言わない。許してくれ」

すると、彼女は笑顔を浮かべた。

「はい、許します！」

その変わり身の早さにロイは呆れた。

「お前、今の嘘泣きだろ」

「あれ、なんでばれたのかな」

「ばれないと思う方が不思議だよ」

晴天の下、二人は草むらを歩いていった。周囲には森が広がっており、時々得体の知れない鳴き声がある。そのたびにロイは視線を走らせ、ネルは彼に身を寄せた。

「ところで、ロイさんは何歳ですか」

彼は、油断なく周囲を見回しながら答えた。

「二十歳だよ」

「え、私と三つしか変わらないんだ！」

ロイは首をかしげた。

「なんで驚くのか、わからないんだけど」

「すぐく大人びてるし、風格があるんですよ。何十年も戦場を渡り歩いた戦士みたいな」

「俺は仕事柄、人生のほとんどを街の外で過ごしている。毎日が戦場みたいなもんだ。だから風格はあるかもしれないな」

「本当にすごい人なんですね！」

ロイは必死で手を振った。

「あんまり持ち上げないでくれよ、つけ上がるから」

「つけ上がったロイさんを見てみたいです」

「自分の力を過信すれば、油断につながる。本当にやめてくれ」

二人は歩き続け、やがて広々とした草原に出た。ロイは袋を下ろし、中をこそごとと漁り始めた。

「さて、この大草原が問題だ。やたら見通しがいいから、遠くからでも見つかってしまう。今日は風が強いし、匂いも伝わってしまうわけだ」

「じゃあ、どうするんですか」

第四話

ロイは深緑色の液体が入った小瓶を取り出した。

「これを体に振りかけるんだ」

「なんですか、これ」

「ちよつと匂いを嗅いでみな」

ネルは瓶の口に鼻を近づけ、顔をしかめた。

「何これ、すごい臭い！」

「強い香りの植物を煮詰めて凝縮したものだよ。これを体に振りかければ自分の匂いが消える。魔物は人間の匂いを感知して近寄ってくるから、結構有効なんだ」

「うええ、やだなあ」

「死にたくなけりや我慢するんだな」

ネルは眉をひそめながら液体を振りかけ、ロイも続いて振りかけた。

「次に使うのは、これだ」

彼は、葉っぱに覆われた緑の布を取り出した。

「なんですか、それ」

「まあ見てな」

ロイは布を全身に被った。

「何に見える？」

ネルは首をかしげながら答えた。

「うーん、葉っぱのお化けかな」

「そう、植物系の魔物に見えるだろ。あいつらは他の連中に襲われにくいんだ。魔物は肉食系が多いからな」

「野菜より肉の方が人気あるんですね。おいしいですもんね」

「人気って言うのかな、それは」

二人は布を全身に被って歩き始めた。やがて、ロイが小声でネルに話しかけた。

「遠くにたくさん魔物が見えるだろ。あの中の一匹でもこっちに
向かってくる奴がいたら、すぐ教えてくれ」

ネルは周囲を見回した。遙か遠くに黒いものがいくつかうごめい
ている。また、空には巨大な鳥が飛んでいる。よく見ると、頭が二
つあるようだ。

「あの鳥みたいなのはラーヴァっていうんだ。人間の大人の身長が
大体一フィードで、あいつの体長は十フィードを超える。捕まった
ら助かる見込みはない」

ネルは思わず身震いした。

「あの黒いのはゲルガー、犬をでかくしたような奴だな。体長は四
フィードくらいで怖ろしく凶暴だ。力も強くて、人間の頭くらい簡
単に食いちぎる」

ネルの全身から血の気が引いた。

「本当に怖いですね」

「ゲルガーの怖さは、それだけじゃない。一匹が獲物を追いかけて
いるのを見つけると、次々と集まってくるんだ。あと、鋭い牙と爪
に加えて強力な武器を持っている」

「ラーヴァやゲルガー以外には、どんな魔物がいるんですか」

ロイはしばらく考え込んだ後、再び話し始めた。

「いろいろいるけど、この草原で注意が必要なのはその二種類だけ
だ。後は関わらなけりやどうってことない」

「関わらないように気をつけても、関わってしまうこともあるんじ
やないですか」

「男ならな」

ネルは首をかしげた。なぜ性別によって変わるのかがわからない。
無言のまま歩いていると、ロイが小声でささやいた。

「おい、あそこで誰か戦ってるぞ」

彼が指さした方向を見ると、一人の男性がゲルガーと戦っていた。
年齢は十八歳前後で、短い黒髪に浅黒い肌、がっしりとした体をし
ている。金属性の鎧を着込み、両手に一本ずつ剣を持っていた。

「ロイさん、加勢してあげてくれませんか」

「いらなと思うよ。一人で草原を歩いてるってことは、腕に自信があるんだろう。わざわざ俺たちまで危険を冒すことはない」

「そんなこと言って、あの人が殺されちゃったらどうするんですか！」

ロイは頭をかいた。

「依頼主がお人良しだと、これだから……」

言い終わらないうちに、ネルが叫んだ。

「見てください、他にも二匹来てます！ ロイは舌打ちした。戦っている剣士に向かって、二匹のゲルガーがじりじりと近づいている。距離を詰めて一斉に跳びかかるつもりなのだろう。

「お前は、ここで待ってる。くれぐれも布を手放すなよ」

ロイは言い残すと、二匹のゲルガーに向かって走った。

剣士は、この草原に来たことを後悔していた。

自分の剣技は一流だと思っていた。魔物など一瞬で斬り伏せられると思っていた。しかし、現実はそのなにごとにも甘くなかったのだ。

何度斬りつけても、ゲルガーはびくともしない。それに比べて、こちらは息が切れている。しかも、腕までしびれてきた。このままではやられてしまう。

突然、目の前にいるゲルガーが咆哮した。剣士は恐怖のあまり気が遠くなりそうだった。漆黒の巨体、爛々と輝く目、鋭い牙がどんだんプレッシャーをかけてくる。

彼が恐れおののいている間に、ゲルガーが地を蹴った。その巨体に似合わぬすさまじい速さだ。次の瞬間、剣士の眼前に鋭い牙が迫った。

「……の野郎！」

彼は身を翻して牙の一撃をかわし、同時に渾身の力で喉を斬りつけた。途端に血飛沫が上がり、ゲルガーは鮮血を噴き出しながら跳び下がった。

「やったか？」

手応えはあった。しかし、漆黒の魔獣はそれでも息絶えていない。剣士の額に冷や汗がにじんだ。さっきの攻撃は辛うじてかわしたが、次の一撃までかわす自信はない。

「仕方ねえな、一丁やるか」

彼は息を吸い込み、腹の底から大声を出した。

「うおらあああっ！」

その声にゲルガーがたじろいだ瞬間、剣士は疾走した。両手の剣も閃光となって走り、次々とゲルガーを斬りつける。しかし、相手も黙ってはいなかった。その鋭い爪で剣士に一撃を喰らわせたのだ。

「ぐああっ！」

鎧を着ていない左の太腿を、ざっくりとやられてしまった。動かそうとすると激痛が走る。これでは勝負にならない。

流れ出る血の臭いは、やがて他の魔物を呼びよせるだろう。そうなってしまうば生き残れる可能性は皆無だ。

剣士は落涙した。自分を送り出してくれた家族や友人の笑顔が浮かんでくる。皆の期待に応え、一流の護衛士になりたかった。しかし、それはかなわぬ夢と消えてしまったのだ。

「俺はもう終わりだが、ただでは死なない。お前も道連れだ！」

彼は剣を構えながら目の前の魔獣をにらみつけた。剣士としての最後の意地だ。激痛に耐えながら前進し、同時に渾身の一撃を繰り出した。その剣は相手の頭部を正確に斬り裂き、ゲルガーは肉塊となって転がった。

魔獣が絶命したのを見届けると、彼はその場に膝をついた。もう戦う気力は残っていない。それにも関わらず、一匹のゲルガーがこちらに向かって走ってくるのが見えた。

「いよいよ終わりか」

覚悟を決めたそのとき、目の前に全身黒づくめの男が現れた。口イだった。

「あきらめるな、俺が来たからには必ず助ける！」

剣士には、ロイが救いの神に見えた。しかし、自分でさえてこずったゲルガーをこの優男が倒せるのかという疑問もあった。

ゲルガーはまっしぐらに向かってくる。それに対し、ロイは先の尖った長い棒を二本持っているだけだ。剣士は、そのようすを見て絶望した。剣や弓ならともかく、あんなものでゲルガーを殺せるとは到底思えない。

どう見ても、あれは尖った金属性の棒にすぎない。そもそも、まともな武器も持たずにこの草原を歩いているなど正気の沙汰ではなかった。

「やつぱり、ここで終わりか」

剣士がつぶやいたのとほぼ同時に、ゲルガーが牙を剥いてロイに跳びかかった。

次の瞬間、すさまじい絶叫が響き渡った。ゲルガーの目に、深々と金属の棒が突き刺さっていたのだ。漆黒の魔獣はその場に倒れ、のたうちまわっている。ロイはその首を思いきり踏みつけ、冷たい声で言い放った。

「消える」

彼はもう一本の棒で、ゲルガーの口から脳天まで一気に貫いた。

「グア、ガッ！」

魔獣は奇妙な鳴き声を上げ、動かなくなった。

ロイは何事もなかったような顔で二本の棒を引き抜いた。剣士はそのようすを見て、ただ啞然とするばかりだった。自分が死力を尽くしてやっと倒した強敵を、この男はあっという間に屠ってしまったのだ。

驚いたのは、それだけではない。周囲を見ると、自分が倒した個体と今倒れた個体の他に三匹ものゲルガーの死体が転がっていた。この男が倒したのに違いない。もはや人間とは思えないほどの圧倒的な強さだった。

剣士は思わず、その場に平伏した。

「私はバートと申します。さぞや名高い戦士様とお見受けしました。どうか、お名前を教えてくださいませんか」

ロイは名乗らず、道具袋から小瓶と布を取り出した。

「傷の手当が先だ。早くしないと、また奴ら呼び寄せます」

彼はバートの太腿を消毒し、薬液を塗ってから布で縛った。

「俺は戦士じゃなくて、道具の扱いに長けただけの男だよ。名前はロイだ」

バートは目を見開いた。

「まさか、『最強の道具師』と呼ばれているロイさんですか？」

「そんな恥ずかしい名前で呼んでくれる奴もいる。迷惑な話だな」

バートはロイの手を握りしめた。

「噂はかねがね聞いております、ずっと尊敬していました」

ところが、ロイはその手を振り払った。

「そんなことはどうだっていい。さっさと草原を抜けて家に帰れ。」

半端な腕で一人歩きするから、こんな目にあうんだ。少しは反省しろ」

バートは返す言葉もなくうつむいた。ロイが無言で立ち去ろうとすると、目の前にネルが立っていた。

「ロイさん、ひどいですよ」

「何が。本当のことを言っただけだろう」

「それはともかく、この人をここに置いていく気ですか？ 怪我してるのに」

「そんなもの、自業自得で……」

「やっぱりひどい、最低です」

ロイは顔をしかめた。ここで長話などしていたら、どんどん死ぬ確率が上がってしまう。

「こいつもつれて行って言うのか？ 俺にとっちゃ足手まといでしかないのに」

そう言い放つと、ネルに無言でにらみつけられた。

「わかった、わかったよ。俺の負けだ、つれていくよ」

「人として当然です！」

第五話

ロイは顔を押しさえながら首を振った。自分の方が三歳も年上なのに、どうもこの少女にかなわない。

バートが、おずおずと声をかけてきた。

「本当にすみません。俺、がんばりますから」

「そうしてくれると助かるよ」

「ところで、これからどこへ行くんですか」

「ウィンザーだ」

バートは沈黙した。

「どうした、おじ気づいたか？ 結構遠いからな」

「そこまで行かなくても、途中の街まで送ってもらえれば」

「この草原とウィンザーの間に、街は一つもないはずだよ」

だんだんとバートの顔色が悪くなってきた。

「まさか、着くまでずっと野宿ですか？」

「そうだよ」

バートが完全に黙り込んでしまったのを見て、ロイは笑いながら言った。

「嫌なら置いていくけど、いいか？」

「とんでもない、ついていきます。どこまでもお供します！」

「そうか、じゃあさっさと行こう。こんなところに長居は無用だ」

葉っぱの付いた布を被つていこうと思ったが、バートの分がない。

ロイは仕方なく、自分の布を渡してやった。

「ロイさん、本当にすみません。この借りは必ず返します」

「本当だよ、二倍にして返せ」

三人はロイを先頭に歩きだした。間もなく、ネルが小さな悲鳴を上げた。

「ロイさん、大変です！」

前方から、五匹のゲルガーがこちらに向かって走ってきた。彼ら

の後ろにはラーヴァの姿も見える。ロイたちが倒したゲルガーの血の臭いを嗅ぎ付け、やってきたものだった。

擬態用の布を被ってじつとしていれば、あるいはやりすぎせたかもしれない。しかし、ロイの体がむき出しである以上は無理な話だ。ロイは後悔していた。あるときバートを助けていなければ、今頃こんな危険な目にあうこともなかったのだ。情にほだされて余計なことをするから、自分まで命を落とすはめになる。

バートが、ロイに小声でささやいた。

「この布は返しますから、あなたは彼女と一緒に逃げてください。俺がおとりになります」

ロイは同意しそうになったが、ネルがじつと見ているのを見て言葉を呑み込んだ。

「いや、お前がネルをつれて逃げる。俺がおとりになる」

「そんな！」

「ひたすらウインザーに向かって走るんだ。俺も後で追いつく」

ネルが口を挟んだ。「いくらあなたでも、あれだけの魔物に襲われたらひとたまりもないでしょう。死ぬつもりですか？」

「お前たちがいるから困ってるわけで、俺だけならどうにでもなるんだ。じゃあな」

ロイは一人で魔物の群れに向かっていった。バートはその後ろ姿を見送りながらつぶやいた。

「俺は今まで、あんなすごい人に会ったことがない」

ネルも、全身に熱いものが込み上げてくるのを感じていた。

「きつと、ああいう人を勇者って言うんだと思います」

ロイは、逃げだしたい気持ちで一杯だった。

ここにいるのが自分だけだったなら、さつさと逃げていたに違いない。それができないのは、自分がいなくなってしまうえばネルが襲われる可能性があるからだ。

今の彼には二つの選択肢があった。一つは、ネルの姿が見えなく

なるまで時間を稼ぎ、その後で自分も逃げることに。もう一つは、襲ってくる魔物たちを全滅させることだ。

「いや、待てよ」

ここでロイは、もう一つの選択肢に気づいた。ゲルガー最大の武器である、知能の高さを利用するのだ。極めて難易度が高いが、成功すれば生き残る確率はぐっと高くなる。彼は、その方法に賭けてみることにした。

ゲルガーの群れに接近すると、彼らは次々と跳びかかってきた。

ロイは一本の棒を振りかざし、相手の攻撃をさばきながら走り回った。動きを止めたが最後、一斉に跳びかかれて終わりだ。息が切れてしまわないうちに勝負を決める必要がある。

さらに彼は、道具袋からアーツと呼ばれる武器を取り出した。引き金を引くと連続で矢が発射されるもので、弓の経験がなくても使うことができる。矢の先には猛毒が塗ってあった。

しばらくゲルガーと渡り合っていると、ラーヴァが襲いかかってきた。ロイは必死に走りながら爪の攻撃をかわし、奇声を上げている双頭の怪鳥に向かって次々と矢を放った。

数本の矢がラーヴァの翼に突き刺さったが、その勢いは止まらない。飛来しては爪の一撃を繰り返す巨大な鳥に、ロイは心底辟易した。おまけに、前後左右からゲルガーが跳びかかってくる。一度でも捕まってしまうと命はない。ラーヴァが攻撃を空振りして飛び上がった直後に、二匹のゲルガーがロイの前方から突進してきた。いよいよかわせそうにない。彼は道具袋から瓶を取り出し、思いきり上下に振った。

ゲルガーたちが跳び上がったのと同時に、瓶の口からどす黒い液体が吹き出した。その液が顔面を直撃した途端、二匹の魔獣は悲鳴を上げた。

肉が焼けるような音が響いた。この液体は極めて強い酸性と毒性を持ち、生物の体など一瞬でぼろぼろにしてしまう。ゲルガーたちは叫び声を上げながらのたうち回った。

ロイは他の一匹の目にアーツの矢を叩き込んで絶命させ、もう一匹の鼻の穴に棒を突き刺し、頭まで貫通させて死に至らしめた。残るゲルガーは一匹だ。

最後の二匹をにらみつけると、相手は後ずさった。

ゲルガーは知能が高い魔物で、敵が強いということを知ると慎重な行動を取る。ロイはすでに四匹も倒したので、警戒されているのだ。これは彼の狙い通りだった。

「そうだ、俺は強いんだぞ。そこるところを、よく理解しろ」

呼びかけると、ゲルガーはうなり声を上げながらうろつくと歩き回っている。ロイは棒を突き付けつつ、再び飛来してきたラーヴァに視線を移した。

双頭の怪鳥に、さっきまでの勢いはない。矢に塗った毒が少しずつ効いてきているのだ。ロイは、つかみかかってきた爪をかわしながら再びアーツを発射した。矢は風を切って飛んでいき、顔面や頭に突き刺さった。

怪鳥はたまりかねて墜落した。二つの頭のうち片方はぐったりしている。もう片方は健在で、巨大なくちばしを広げて喰らいついてきた。ロイは薄笑いを浮かべながら悠々とこれをかわした。

「飛べない鳥が、俺に勝てると思うなよ！」

ロイは二本の棒を構え、目にも留まらぬ速さで次々と突きを繰り出した。怪鳥は全身から鮮血を噴き出しながら悲鳴を上げている。これを見ていたゲルガーは、すかさず襲いかかってきた。

ゲルガーは鋭い牙を突き立てた。狙ったのはロイではなくラーヴァだった。彼はロイを相手にするより、弱った怪鳥を狙った方が安全で戦果も高いということに気づいたのだ。それは、知能の高さによって導き出された結論だった。

ゲルガーがラーヴァの体を食いちぎっているのを確認したロイは、こっそりとその場を離れた。もう、ここに用はない。危機は過ぎ去ったのだ。

第六話

ロイがウインザーの方角に向かって走ると、ネルとバートが待っていた。

「なんだ、お前ら。逃げると言っただろう」

バートが首を振った。

「追いていけるわけないですよ」

「そうやって情に流される奴が、真っ先に死ぬんだぞ」

「それより、俺はロイさんの戦いっぷりを見て心底驚きました。噂以上の強さです。どうか俺を弟子にしてくれませんか？」

ロイは無言で歩きだした。

「待つてください、お願いします！」

「俺は剣を使えない。そんな奴に、剣士であるお前が何を教わろうって言うんだ」

「戦い方とか、心構えとか」

ロイは再び口を閉ざして歩き続けた。バートとネルは黙ってその後を追った。

「ロイさん。俺はあなたの噂を聞いて、自分も護衛士になろうと思っただけです。どれほど危険な場所であろうと、どれほど強力な敵に襲われようと、必ず護衛を完遂する最強の道具師。そんなあなたに俺はずっと憧れていました。今も、その気持ちは変わりません。いや、むしろ今の方が……」

ロイが話を遮った。

「最強の道具師なんて称号は、子どもだましの幻想だよ。人の強さは、その時々によって変わる。相手によっても変わる。場合によっちゃ『最弱の道具師』にもなりかねない。お前は、そんな幻想に憧れているのか？」

バートはしばらく沈黙した後、ロイをまっすぐに見つめて言った。「俺が憧れてるのは、ちんけな幻想じゃない。あなたという人間で

す」

ロイは押し黙った。

「確かに、以前の俺は『最強』という言葉に憧れていました。自分もそんな風と呼ばれたい。自信に満ちた人生を送ってみたい。でも、今は違います。最強と呼ばれるより、あなたのような人間になって世の中の役に立ちたい」

ずっと黙っていたネルが口を挟んだ。

「『あなたのような人間に』って言いますが、ロイさんは人間的に問題がありますよ」

ロイが眉間に皺を寄せると、ネルはそっぽを向いた。バートはそれを見ながら、慌てて手を振った。

「いや、違うんだ。ロイさんの人格に憧れてるんじゃない、実力とか実績とか」

「どうせ俺の人格は最低だよ」

「そんなこと言ってないですよ！」

ロイがむっつりと黙り込んでしまったのを見て、バートはほとんど困ってしまった。しばらくそのまま歩いていると、またネルが話しかけてきた。

「でも、いいところもありますよ。依頼者が貧乏な人なら、タダで護衛してくれるんです。今回もそうなんです。感謝してもしきれないです」

すると、ロイは顔をほころばせた。

「そうだよな、いいところもあるよな！」

バートは胸を撫で下ろした。このロイという人物は、意外と単純らしい。

「バート、俺は弟子なんぞ取る気はないんだ。技術を学びたいなら見て盗め。心構えを知りたいなら、普段の話を聞いておけ」

「わかりました、あなたを見て学びます！」

三人は大草原を抜けるべく歩き続けた。襲ってくる魔物もおらず、道中は平和だった。

ネルとバートが笑顔で歓談している脇で、ロイだけはしかめっ面をしていた。ネルは彼が不機嫌であることに気づき、おそろおそろ声をかけた。

「ロイさん、何か気に入らないことでもあるんですか」

「さっきの戦闘で、大量の矢と薬品を失った。まだ先が長いのに不安で仕方がない」

「大丈夫ですよ、ロイさんは強いから」

バートも口をそろえた。

「まったくです。薬なんかなくても、ロイさんは魔物を一瞬で倒すじゃないですか。なんの心配もい。ロイは頭を押さえながら首を振った。

「お前らの脳天気さが羨ましいよ」

ネルとバートは、ロイの不安などどこ吹く風だった。自分たちには、これ以上ないほど強力な仲間がいる。その事実が、彼らの気分を明るくものにしていった。

ロイは二人を交互に見ながら言った。「魔物は様々な方法で人間を狙ってくる。俺だってそのすべてを知っているわけじゃないし、すべてに対処できるわけじゃない。絶対に気を抜かないでくれ」

ネルとバートは笑顔でうなずいた。しかし、ロイから見れば本当に理解しているのか怪しいものだった。

しばらく歩いていると、ネルが声を上げた。

「あ、あれ！」

彼女が指さした方向を見ると、金髪に白い肌をした女性が倒れていた。年齢は二十歳くらいで、ぼろぼろになった布切れをまとっている。

ロイは女性をじっと見つめた後、言い放った。

「ほっとけ、先を急ぐぞ」

ネルは呆れ顔でロイを見つめた。

「本当に、あなたってという人は！」

「待ってくれ、これには事情があっただな」

彼が弁解しようとしている間に、バートは女性に向かって走りだしていた。

「おい、行くな。戻るんだ！」

「なんでですか、放っておけませんよ！」

ロイは舌打ちしながらバートの後を追ひ、ネルも続いた。

バートは女性の前に立ち、声をかけた。

「大丈夫ですか？」

女性は目を閉じたまま動かなかった。ぼろぼろになった布のすき間から、豊満な胸が見え隠れしている。バートは顔を赤らめながら女性を抱き起こした。

「しっかりとってください！」

揺さぶりながら叫ぶと、女性は目を開いた。バートは安堵のため息をついた。

「よかった、死んでいるのかと思いましたよ」

女性は口をぱくぱくと動かし、突然バートに抱きついた。彼が驚いて目を見開くと、背後からロイの声が響いた。

「そいつから離れる！」

その言葉と同時に、地表を破って無数のつるが伸びてきた。バートは逃げる間もなく絡め取られてしまった。

「ロイさん、助けてください！」

ロイは近づこうとしたが、つるに行く手を阻まれてかなわなかった。

「残念ながら無理だ」

「悪い冗談はやめてください！」

「冗談じゃないよ、本当だ。まあ、美女の養分になって死ぬのも一興じゃないか」

バートが泣きだしそうな顔をしているのを見て、ネルがロイの服を引っ張った。

「ロイさん、本当は助けられるんでしょ？ なんとかしてよ」

ロイはネルを横目で見ると、冷たい声で言った。

「俺が止めるのも聞かずに、勝手な行動を取ったあいつが悪い」

「バートは必死につるをほどこうとしたが、びくともしなかった。」

抱きついていてる女性を見ると、薄笑いを浮かべている。彼は思わず声を上げた。

「俺が悪かったです、助けてください！」

ロイは頭をかきながらつぶやいた。

「毎度毎度、世話が焼ける」

ロイはつるをかわしながら女性に近づき、その顔に赤色の液体をふりかけた。すると彼女はみるみるうちにしぼんでいき、つるも後退していった。

ロイは、自由になったバートを見据えた。

「こんな草原の真ん中に女が倒れているという時点で、少しは怪しいと思えよ」

「本当にすみませんでした」

三人は再び歩き始めた。やがて、ネルがしみじみと言った。

「あんな魔物もいるんですね」

「ああいう奴は結構多いよ。美女の姿で人間を騙し、捕まえて食い殺すんだ。お前が以前会ったリートって奴もその一人だよ」

「えっ、なんでそんな人が組合の受付をしてるんですか！」

「前に受付をしていた奴が、魔物に襲われて食い殺されちゃったからだよ。もっと強い奴を受付にしようということになって、つれてこられたのがあれだ」

「前の受付の人は、街の中で殺されたんですか？」

「ああ。人間のふりをした魔物にね。俺たち護衛士は散々魔物を殺してるから、奴らに怨みを買っている。奴らにしてみれば報復したいところだが、護衛士が強すぎて手が出せない。そこで、力のない受付を狙ったわけだ」

ネルは首をかしげた。

「リートさんは魔物なのに、なんで人間に手を貸してくれるんですか」

「あいつは強い男性が大好きなんだ。うちの組合には、俺を筆頭に腕の立つ奴がわんさかいる。それが目当てなんだよ」

「一緒にいて怖くないんですか？」

「もう慣れた」

「すごいですねえ」

第七話

ロイは苦笑した。本当はリートと一緒にいるより、ネルと一緒にいる方がよほど危険なのだ。

「他の護衛士の人にも会ってみたいです」

ネルが言うと、バートも口をそろえた。

「俺も会ってみたいです。剣を使う人っているんですか？」

「剣だけを使うっていう奴はいないな。剣と弓を併用したり、剣と道具を併用したりする奴ならいるよ」

バートは深くうなずいた。

「芸達者なんだなあ。その中で一番強いのがロイさんなんですよね？」

「世間ではそう言われてるみたいだけど、実際はどうかわからないよ。俺より強そうな奴もいるし」

ネルとバートは、感心しながらうなずいている。ロイはしばらく考え込んだ後、思い出したように目を見開いた。

「そう言えば、ウィンザー方面に行ってる奴がいたな。もしかしたら会えるかもしれない」

ネルが目を輝かせた。

「どんな人なんですか？」

「弓闘士で、かつ道具師でもある。五歳の頃から護衛士として教育された奴で、戦闘能力は極めて高い」

「かつこいいー。ぜひ会いたいです」

ロイは眉をひそめた。

「ただ、魔物を心底憎んでいてな。リートとものすごく仲が悪いんだ。お前が赤眼であることを知ったら、逆上して殺しにかかるかもしれない」

ネルががっくりと肩を落とすと、バートが目をむいて叫んだ。

「え、赤眼ってどういうことですか!」

「どういうも何も、そういうことだよ。これ以上聞くな」

ロイににらみつけられ、バートは沈黙した。

三人がしばらく無言で歩いていると、バートの腹が鳴った。

「ロイさん、俺の腹がご機嫌ななめです」

「どうすれば直るんだよ」

「『肉を山ほどもらえれば満足じゃ』と主張してます」

「お前の腹は王侯貴族か」

黙って聞いていたネルが吹き出した。

「バートさんのお腹にご機嫌を直してもらったために、下々の者がなんとかしましようよ」

「そう言われても、この草原じゃどうしようもないんだが」

再びバートの腹が鳴った。ロイは仕方なく、道具袋から木の実を取り出した。

「これでも食ってる」

「なんですか、これは。小動物じゃあるまいし」

「俺は、その実を食ってるだけでも十日くらいは平気だ」

「ロイさんの前世は小動物だったんですかね」

バートは木の実を口に放り込んだ。

「うん、コリコリしてた食感で、コクがある。それにちょっと苦味があつて……」

「苦味があつて？」

「じつにまずい」

ロイが顔をしかめると、横でネルが爆笑した。

「贅沢言つなら、食うな！」

「贅沢じゃなくて、率直な感想を述べただけです」

そのとき、ネルが前方を指さした。

「あれを見てください！」

ロイとバートが視線を向けると、城壁が見えた。どうやら城塞都市のようだ。

バートが叫んだ。

「街だ、街がある！」

ロイが首をかしげた。

「こんなところに街があるなんて聞いたことがない」

バートは、ロイとネルを置いて走り出した。

「肉だ、肉が食えるぞおおお！」

ロイとネルは、急いで後を追った。バートは凄まじい速さで走っており、なかなか追いつけない。

「あの人、よっぽどお腹が減ってるんですね」

「足を怪我しているくせに、なんで走れるんだろっ」

「食欲のなせる技なんじゃないですか」

「人間の欲望って怖ろしいな」

二人が話しながら走っていると、突然バートが立ち止まって太腿を押さえた。

「ぎゃあああ、足がいてえええ！」

ロイはようやくやく追いつき、冷たく言い放った。

「当たり前だ、馬鹿」

すると、バートはロイをにらみつけて言った。

「この傷を治すためにも、早く肉を食べなきゃならないんです」

「そ、そうか」

「だから俺は行きます。止めないでください！」

バートは足を押さえながら歩き始めた。ロイとネルは呆れ顔をしながらついていった。

やがて、城壁の前に着いた。正面には金属性の格子戸がある。バートが押して開こうとしたが、びくともしなかった。

「肉、肉が遠ざかる……」

肩を落としている彼を尻目に、ロイは城壁の上に向かって怒鳴った。

「誰かいないか！」

すると、兜と鎧で武装した兵士が顔を出して言った。

「誰だ、お前は」

「アルテナの街から来た、ロイという者だ。ウィンザーに向かう途中、ここに立ち寄った。食事をしたいので中に入れてほしい」

「まさか、道具師のロイか」

「そうだ」

「わかった、しばらく待て」

兵士の姿が消えると格子戸が少しずつ上がりだした。バートは、

「肉、肉！」と叫びながら街の中へ突進していった。

彼の姿が消えた後、ロイはつぶやいた。

「あいつ、どんだけ肉が好きなんだよ」

ロイは街に入り、周囲を見回した。建物は煉瓦で造られたものばかりで、地面は石畳で舗装されている。歩いている人々は、服装も髪の色もばらばらだった。

「別に変わったところもなさそうだが」

彼がつぶやくと、ネルが顔をのぞき込んできた。

「何か不安なことでもあるんですか」

「そりゃあ、あるさ。この街は地図に載ってないんだ。決して地図が古いわけじゃない。そうなると、つまりここは……」

言い終わらないうちに、ネルが遮った。

「ロイさん、誰か手を振ってますよ」

視線を向けると、二十歳くらいの女性が手を振っていた。

肩まで伸びた茶色の髪に茶色の瞳、日に焼けた肌。はつきりした目鼻立ち、引き締まった体。右腕には銀色の弓を抱え、背中には大量の矢が入った筒と布袋を背負っている。身に着けているのは革の鎧と革の長靴だった。

「ロイ、久しぶり」

「おお、アニエス。元気そうだな」

彼女はネルに視線を移した。

「今日はその子を護衛してるの？」

「そうだよ。お前は？」

「ウインザーまでの護衛が終わって、戻ってきたところだよ」
「なんだ、帰りも誰かの護衛をすればいいのに」
すると、アニエスは膨れっ面をした。
「そうしようと思ってたら、依頼主のおっさんに断られたんだよ！」
「なんでまた」
「『こんな小娘が護衛とはどういうことだ、信用できん！』って騒いじゃって。他の客を探したけどちょうどいいのがいなかったから、一人で帰ることにしたよ」
「まあ、その外見じゃ仕方がないかもな」
アニエスの顔がますます膨れた。
「腕は確かなのに、酷い扱いだよ！」
「まあまあ、落ち着けよ。お前の実力は俺もよく知ってるからさ」
「わかってくれるのはロイだけだよ」
「それで、すぐアルテナに帰るのか？」
アニエスは考え込んだ。
「今日は、この街に泊まっていこうかと思ってるんだけど……」
「言いたいことはわかる」
「だよ、ロイはどうする？」
「連れの馬鹿が消えたから、とりあえず探さないといけない」
「ふーん、大変だね。じゃあ、またね」
アニエスは手を振りながら立ち去った。
「あの女の人も護衛士なんですか？」
「そうだよ。しかも、かなり腕が立つ。一対一で戦ったら俺でも勝てないかもしれない」
「女の人なのにすごいですね」
「まあね。あと、魔物を前にすると豹変する。あまりの怖ろしさに正視できないくらいだ」
ネルが顔をこわばらせたのを見て、ロイは慌てて手を振った。
「人間に対しては優しい奴だから、怖がることはないよ」
「でも、私は」

「赤眼に変わらない限りは問題ないさ」

ネルは、すっかり黙り込んでしまった。ロイは「余計なことを言った」とばかりに自分の顔を押さえた。

二人が沈黙していると、バートがこちらに向かって歩いてきた。

「ロイさん、肉です。肉ですよ！」

彼は骨付き肉をくわえていた。

「ロイさんたちの分もありますよ」

そう言っただけで差し出したのは、骨だけだった。

「この野郎、いい度胸だな！」

ロイが激昂して殴りかかると、バートは縮み上がった。

「冗談ですよ、ごめんなさい！」

「冗談だと？ つまらなすぎて気絶しそうになっただろうが！」

第八話

「それよりロイさん、今日はこの街に泊まっていきませんか？」

「やめた方がいいと思うよ、どうも怪しいから」

「どこが怪しいんですか、こうやってちゃんと肉も食べられたし」

「肉の話はもういい。何度も言っぞ、この街は地図に載ってないんだ」

バートは首をかしげた。

「変ですねえ。じゃあ、新しい街なんじゃないですか？」

「そう思うなら、あの建物を見てみる」

バートが視線を向けると、その建物の壁は植物のつるでびっしりと覆われていた。

「あれが何か？」

「よほど時間がたたなきゃ、あんな風にならないだろう」

「建物は古いけど、街は新しいんですよ」

「なんだそりゃ」

「怪しくたって別にいいじゃないですか、ロイさんがいるんだし」

「うーん」

結局ロイは押しきられ、この街に泊まることにした。

しばらく歩き回っていると、宿屋は簡単に見つかった。ロイと

ネルは同じ部屋に泊まり、バートは別の部屋に泊まることになった。

ネルは部屋の隅で縮こまっていた。

「あの、男女で同じ部屋というのは一体……」

「そんなことより、絶対に俺のそばを離れるな。もしかすると、こ

こは今までで一番危険な場所かもしれない」

ネルの顔から血の気が引いた。

「どういうことですか」

「まず、一つ教えておく。魔物の中には、見た目が人間と全然かわらない連中がいる。リートがいい例だ」

「知ってますけど、それがどうしたんですか」

「もしかしたら、この街の住民たちは魔物かもしれない」

ネルは沈黙した後、おもむろに口を開いた。

「なんでそう思うんですか」

「できたばかりの街でもなさそうなのに、地図に載っていないのが怪しい。住民がみんな魔物で、立ち寄った人間を殺害しているんじゃないだろうか」

ネルは笑いだした。

「まさか、考えすぎですよ」

「ならいいけどな」

やがて夜になり、ネルはベッドで寝転んでいた。ベッドは二つあるのだが、ロイは使うこともなく床に座っている。ネルは見兼ねて声をかけた。

「ロイさんは休まないんですか？」

「心配しないで、ゆっくり休め。何かあったら叩き起こすから」

「じゃあ、交代で起きているっていうのはどうですか」

「その必要はない、俺はこれで充分だ。あと、香を焚いておきたいんだけれどもいいか？」

「かまいませんよ」

ロイは香を焚き始めた。その香りはかなり強く、すぐに部屋中に充満した。

ネルは思わず鼻を押さえた。

「何これ、鼻につーんとくるんですけど！」

「ああ、お前にも効くのか。効かないかと思った」

「これって、普通のお香じゃありませんよね！」

「まあ一種の魔除けと言うか、魔物除けだな。そのうち慣れて効かなくなるから、しばらく我慢してくれ」

ネルはしばらく文句を言っていたが、間もなく寝入った。ロイは手元にアーツと金属の棒を置き、目を閉じて座っていた。

やがて夜がふけてきた。ロイは相変わらずベッドを使うこともな

く、部屋の明かりをつけたままじっとしていた。

「奴らが魔物なら、そろそろ来そうなもんだが」

彼は窓の格子戸を少しだけ開き、隙間から外を眺めた。すると、無数の松明の炎がこちらに向かってくるのが見えた。

「どうやら、悪い予想が的中したな」

ロイはネルが寝ているベッドに近づき、小声で呼びかけた。

「おい、やっぱり連中は魔物だ。脱出するぞ」

彼女は寝ぼけまなこをこすりながら起き上がった。

「ええ、なんでそんなことがわかったんですか」

「いいから、さっさと用意をしる。ここにいたら死ぬだけだ」

二人が自分の道具袋を持ち上げた瞬間に部屋の扉が開き、一人の男性が跳び込んできた。腰布一枚を身にまとい、手斧を持っている。ネルが悲鳴を上げると、彼はロイに斬りかかった。しかし、ロイが跳び下がったためにその一撃は空を切った。

「護衛士ロイだな。仲間の仇だ、ここで死ね！」

ロイは男をにらみつけた。

「そう思うなら殺してみろ。ろくに腕もない奴に限って、威勢だけはいいもんだな」

「こいつ！」

男が激昂して斬りかかろうとすると、その顔面にアーツの矢が突き刺さった。彼が悲鳴を上げようとしたときにはすでに、ロイの持った金属性の棒が口から頭まで貫いていた。

ロイは棒を引き抜きながら言った。

「噛みつく相手を間違えたお前が悪い。恨むなら己の浅薄さを恨め」
ネルに視線を移すと、彼女はがたがたと震えていた。

「怖がらせてすまない。さあ、こんなところからさっさと逃げよう」
ロイは彼女の手を引き、バートの部屋に跳び込んだ。すると、彼は大いびきをかきながら眠っていた。

「おい、起きろ！」

「うーん、もう食えない」

「ここで死にたいのか！」

「もうたくさんだよ、お腹一杯だよ」

ロイはいらいらしながら、バートの頬を平手で打った。

「おい、金髪の美女が会いに来てるぞ！」

「ええつ、俺に？」

バートが一瞬で跳び起きたのを見て、ロイは呆れた。

「金髪の美女はどこですか！」

「金髪の美男子なら目の前にいるぞ」

「そんなもの、いりません」

「はつきり言いやがるな、こいつ」

バートはロイを見つめて尋ねた。

「それで、なんで起こしたんですか」

「話は後だ、一刻も……」

言い終わらないうちに、三人の男が跳び込んできた。全員が革の鎧を着込み、手に曲刀を握っている。バートは急いで二本の剣を引き寄せ、ロイはネルをかばいながらアーツを構えた。

三人のうち二人が一瞬で間合いを詰め、バートに斬りかかった。

バートは身を翻して斬撃をかわし、一人の首を薙ぎ払い、もう一人を真っ向から斬り下ろした。

血飛沫を上げながら倒れた仲間たちを見て、最後の一人は狼狽した。その間に、アーツの矢が首に突き刺さった。

ロイは棒でとどめを刺し、バートに向かって怒鳴った。

「俺が後ろから援護する。お前が血路を開け！」

「わかりました！」

バートを先頭に廊下へ出ていくと、曲刀を持った男たちが次々と向かってきた。ロイは間断なくアーツの矢を放ち、バートは目の前の敵を片端から斬り伏せた。

ネルは泣きだしそんな顔をしながら、ひたすらロイにしがみついていた。

「ロイさん、怖いです」

「心配するな、俺がついてる」

そう言いながらも、彼は焦っていた。もうすぐアーツの矢が切れてしまう。かと言って、ネルをつれたまま敵の中に斬り込むのは危険すぎる。

「バート、俺はネルを護らなければならない。今回はお前だけが頼りだ。頼むぞ！」

「任せてください！」

バートは、群がる敵を撫で斬りにしながら叫んだ。自分の剣が使えなくなると倒した相手の剣を奪い、それが使えなくなるとさらに奪って戦う。獅子奮迅の働きだった。

ロイたちは遂に包囲を破り、宿屋の外へ飛び出した。しかし、そこにも曲刀を持った屈強の男たちが待ち構えていた。

ロイが歯ぎしりをしているのを見て、先頭にいる四十がらみの男が声をかけてきた。

「道具師ロイだな」

無言でうなずくと、男はさらに続けた。

「お前は魔物たちの間でお尋ね者になってるよ。憎んでいる奴は一人や二人じゃないぜ」

ロイは男を見つめた。

「一つ聞きたい。俺はさつき、魔物除けの香を焚いていた。あれは人間には効果がないが、魔物にとっては効果を発揮する。しかし、部屋に入ってきた男には効いていなかった。彼は人間なのか」

男は薄笑いを浮かべた。

「たぶんそうだったんじゃないか、よく知らないけどよ。この街はお尋ね者の人間たちと魔物たちが共同で造って生活してるんだよ。どっちにしる仲間だ」

「つまり、人間も魔物もいるのか」

「そういうこつたな、ちなみに俺は魔物だ」

男が話し終わった瞬間、その後頭部に矢が突き刺さった。彼は目を見開いて崩れ落ちた。

「なんだ、誰だ！」

ロイが叫ぶと、次々と矢が飛んできて周囲の者たち突き刺さった。矢が飛んできた方向に視線を向けると、そこにはアニメスが立っていた。

「残忍な魔物たちと、それに手を貸す人間たち。どちらもこの世から消えるがいいわ！」

第九話

アニエスは矢を放ちつつ、ロイに呼びかけた。

「今のうちに早く逃げて！」

「すまん、助かった」

ロイがネルの手を引いて逃げようとする、彼女は振り払った。

「おい、何を……」

言いかけて、ロイは跳び下がった。ネルの髪と瞳が、燃えるような赤色に変わっていたのだ。

周囲の者たちが、目を見開いて叫んだ。

「うわああ、赤眼だ！」

「まずい、殺される。みんな逃げろ！」

ロイは舌打ちした。ネルはずっと密着していたせいで、人間の匂いを大量に吸い込んでしまったらしい。

「おい、俺だ。ロイだ。わからないのか！」

ネルは端正な顔に薄笑いを浮かべた。

「ちゃんとわかってるよ。でもね、無理なの。自分を抑えられないの」

ネルは地を蹴り、ロイに跳びかかった。ほぼ同時に右手の一撃が彼を襲った。喰らえば即死しかねないほどの、すさまじい威力を持っている。ロイはとっさに後退し、辛くもこれをかわした。

弓を構えたアニエスが怒鳴った。

「ロイ、私が仕留めるよ。なんとかして離れて！」

「やめろ、撃つな。こいつは仲間なんだ、絶対にやめろ！」

アニエスの眉が吊り上がった。

「その魔物が仲間ですって？　あなた、どうかしちゃったの？」

「どうもしてない！」

彼女は一瞬うつむいた後、再びロイに視線を移した。

「魔物に心を奪われちゃったんだね、かわいそうに。そんなあなた

を見るに忍びないよ、きつちり殺してあげる」

ロイは愕然としながら叫んだ。

「待ってくれ、これにはわけがあるんだ！」

アニエスは首を振った。

「そんなもの聞きたくないよ！」

彼女は弓を引き絞り、こちらに向かつて矢を放った。ロイが瞬時に身をかわすと、それは顔のすぐ横を通りすぎていった。

一方、ネルは周囲の男たちを捕まえて引き裂いていた。悲鳴と血飛沫が次々と上がる中、バートは途方に暮れながら剣を構えていた。「バート、ネルをなんとか止める！」

「無茶言わないでください、危なすぎて近寄れません！」

再びアニエスの矢が飛んできて、ロイの右頬をかすめた。このままではやられてしまう。彼は袋から粉を取り出して投げつけた。粉はアニエスの顔にかかり、彼女はひどく咳込んだ。

「もらった！」

ロイが間合いを詰めて弓を奪い取るうとすると、彼女の前蹴りが股間を直撃した。

「ぐああっ！」

ロイは悶絶しながら尻餅をついた。バートが助太刀をしようとしたが、ネルに阻まれて近寄れない。その間に、アニエスはロイを捕まえて馬乗りになった。

「さようなら。あなたを尊敬してたのに、残念だったよ」

ロイの目の前に、尖った金属の棒が突きつけられた。しかも、先端には猛毒らしき緑色の液体がたっぷり塗ってある。それを見て、彼の全身から血の気が引いた。

「やめろ、お願いだからやめてくれ！」

「見苦しいことこの上ないね、男なら潔く死になよ」

アニエスはロイの首を左手でつかみ、右手で金属の棒を思いきり振り下ろした。しかし、ロイが彼女の右手を途中で止めた。

「ロイ、あなたともあろうう人が堕ちたもんだね。まさか魔物の手先

になるなんて」

「手先なんかじゃない！」

「でも、充分あり得る話ではあったよ。あなたは、リートとすごく仲がいいもんね。気持ち悪くて吐き気がするよ」

棒は、ロイの目の前で小刻みに震えている。彼は額に冷や汗をにじませながら、必死にアニエスを説得した。

「聞いてくれ、あのネルっていう子は人間なんだ。ただ魔物の血が流れているから、時々変わってしまうんだよ」

「だから何。元は人間だろうと、今の彼女は魔物そのものだよ」

「だから、人間に戻る薬を買いに行く必要がある。俺はそのために護衛をしているんだ」

ロイの真剣な表情を見て、ようやくアニエスは彼を解放した。ロイは安堵のため息をつきながら起き上がった。

「わかつてくれたか、ありがとう」

アニエスは目を細めながらロイをにらみつけた。

「私は、あなたを超一流の護衛士として尊敬してるよ。でもね、魔物と仲良くしているのが本当に気に入らない」

「そうだろうな」

「あいつら魔物は、私の弟を目の前で引き裂いたんだよ。抵抗する力もない、病気の弟を。絶対に許さない。これからもずっとね」

二人が話していると、バートが悲鳴を上げた。

「ロイさん、助けてください！」

視線を向けると、彼は剣を構えたまま震えていた。その周りにはずたずたに引き裂かれた死体が散らばっており、ちぎれた腕をくわえたネルが不敵に微笑んでいた。

ロイは道具袋から小瓶を取り出し、彼女に向かって声をかけた。

「ネル、いい加減にしろ」

彼女はロイを見つめて言った。

「その薬、私を気絶させるためのものでしょ。二度は通じないよ」

そのとき、一人の男がネルに斬りかかった。

「この化け物め、死ね！」

しかし、その斬撃は虚しく空を切った。ネルは男の頭をつかみ、一瞬で潰してしまった。

彼女は動かなくなつた男の体を引き裂き、腕を食べ始めた。バートは顔面蒼白になりながら凍りつき、アリエスはその場で吐き続けている。ロイだけは顔色一つ変えなかった。

ネルが腕をちぎってロイに差し出した。

「おいしいよ、食べる？」

ロイは首を振った。

「一つ聞きたい。お前、普段の記憶はあるのか？」

「うん。あなたは私を護衛してくれてる人でしょ？」

「ああ」

「あなたのこと、結構好きだよ」

アリエスが吐くのをやめ、ロイをじろりと見た。彼は慌てて首を振った。

「ネル、好きなんだつたら言うことを聞いてくれないか」

「やだ」

ネルは口から血を滴らせながら笑った。

「私はあなたが好きだから、食べてあげようと思ってる。骨まで残さずにね。そうすればあなたは、私の体の一部になるでしょ。つまり、完全に一体化するんだよ。これって究極の愛だよ」

バートが呆れ顔で叫んだ。

「ふざけんなよ、相手を殺して何が愛だ！」

アリエスも顔をしかめて言った。

「完全に狂ってるね、これだから魔物は」

ネルはくすくすと笑った。

「私は、いろんな形の愛があつていいと思うよ。あなたたちの視野が狭いだけでしょ？」

ロイは小瓶を握りしめながら、ネルに近づいていった。それを見たバートは、背後から声をかけた。

「ロイさん、危ないですよ！」

「かまわない、お前たちは下がってる」

ネルが満面に笑みを浮かべた。

「私の愛を受け入れてくれるの？」

ロイはため息をつきながら答えた。

「お前のは愛じゃなくて、単なる欲望だ」

「どっちでもいいよ」

「とにかく、俺はお前を止める」

ネルはせせら笑った。

「やれるものなら、やってみればいいよ。あなたの片方しかない目をくり抜いて、何も見えない状態にしてあげるから。それから手足を一つずつもぎ取って、頭と胴体だけにしてあげる。最後に、泣き叫ぶあなたを少しづつ食べるの」

アニエスが貧血を起こして倒れたのをバートが支えた。彼自身の顔からも、すっかり血の気が引いていた。

ロイは瓶を持った右手を構え、ネルに向かって突き出した。同時に緑色の液体がほとばしり、彼女の顔に迫った。

「やったか！」

しかし、ネルは横に跳んでこれをかわしていた。ロイはさらに瓶を取り出し、中身をぶちまけた。

「しつこいなあ」

彼女は難なく液体をかわし、ロイの首をつかんで持ち上げた。

「よいしょつと」

ネルはロイを地面に叩きつけた。さらに、彼がうめき声を上げると顔をのぞき込んで微笑んだ。

「予定通り左目をもらっつよ」

そのとき、貧血を起こしていたアニエスが立ち上がり矢を放った。それは風を切って飛んでいき、ネルの眼前に迫った。

第十話

矢は顔面に突き刺さったかのように見えた。しかし、ネルは齒でがっちりと受け止めていた。

彼女が矢を捨てるやいなや、二度目の攻撃が襲ってきた。ア二エスが放った五本の短剣が空気を切り裂いて飛んできたのだ。ネルは顔色一つ変えずに、これらをすべて叩き落とした。しかしこれで終わりではなく、続けざまに金属の棒が突き出された。

「くっ！」

ネルは跳び下がってかわしたが、棒は次々と襲ってくる。ア二エスの右手から繰り出される凄まじい突きが、次第にネルを追いつめていった。

「こいつ、強い！」

「今頃気づいたの、馬鹿な魔物だね！」

ア二エスの猛攻の前にネルは押され気味だった。投げつけられる短剣、繰り出される突きや蹴り。次の攻撃に移るまでの間がほとんどない。

ネルが攻撃をかわすために後退したそのとき、布で鼻と口を塞がれた。ロイだった。

「ちょっと、これを嗅いでみてくれ」

ネルは息を吸い込んだ途端、気絶してしまった。布には強力な薬品が染み込ませてあったのだ。

ア二エスがとどめを刺そうとしたが、ロイが止めた。すると、彼女は眉間に皺を寄せながらロイをにらみつけた。

「あのさ、ロイ」

「なんだよ」

「馬鹿あつ！」

ア二エスの平手打ちがロイの頬を直撃し、彼はよろめいた。

「馬鹿あつ！」

再び平手で打たれ、ロイの頬は真っ赤になった。

「大事なことなんで二回言いました」

「だからって二回叩くなよ」

アニエスはロイに顔を近づけ、目を細めながらのぞき込んだ。

「自分で止められもしないくせに、こんな物騒な生き物をつれて歩くんじゃないわよ。馬鹿」

「遂に三回言いやがった」

「馬鹿つて言われても仕方がないでしょ。あなた、私がいなかったら間違いなく死んでたよ」

「遂に四回……」

「それに、道具師ロイともあるうものがこのざまはないでしょ。私にはやられるわ、赤眼にはやられるわ」

ロイは無言でうなだれていた。

「あなたは、うちの看板みたいなものなんだよ。わかってるの？」

「わかってます、申しわけありませんでした」

ひたすら頭を下げているロイを見て、バートが口を挟んだ。

「アニエスさん、もういいだろ。こんなに反省してるんだし」

「本当にわかっているのか怪しいもんだからさあ。もう一回叩いておこうかな」

アニエスがロイを見据えていると、彼は小声で言った。

「俺は相手を殺すことは得意んだけど、生け捕りにするのは苦手なんだ。手加減して戦うのにも慣れてないし」

その途端、アニエスの平手打ちが炸裂した。

「あなたは依頼主が殺されても、そうやって言いわけするの？ この業界の人間に言いわけなんて許されないんだよ、失敗したら死につながるんだから」

ロイは返す言葉もなくうつむいた。

バートがおろおろしながら二人のやり取りを見てみると、五十がらみの男性が声をかけてきた。

「お取り込み中、申しわけありません」

バートは彼をにらみつけた。

「なんだ、まだやる気か」

「とんでもない！」

男はその場に平伏した。

「私は、この代表者です。この度は誠に申しわけございませんでした。どうかお許しください」

バートは、きよとんとしながら男を見つめた。

「なんでいきなり謝るんだよ」

「あなた様のお仲間には赤眼の方がいらっしやいますよね。彼女にまた暴れられたら私も全滅です。なんでも言うことを聞きますので、もう暴れさせないでください」

バートは深くうなずいた。

「話はわかった。じゃあ、とりあえず綺麗な布をもらおうか。太腿の傷が開いてしまったんでな」

「承知致しました」

「それから、腹が減ったので肉を山ほど食いたい」

「承りました」

バートは満面に笑みを浮かべた。

「よしよし、物わかりのいい奴だな。何か問題があったら言ってい。俺はバート、この四人のリーダーだ」

その途端、ロイに殴られた。

「誰がリーダーだ、馬鹿野郎」

「すいません、調子に乗りました」

ロイは男に向かって言った。

「さつき地面に叩きつけられたとき、大量の薬品を失ってしまった。原料と瓶を調達したい。あと、アーツの矢がほしい」

アニエスが口を挟んだ。

「私も矢がほしいんだよね、あと短剣」

「わかりました、お望み通りにはからいます」

ロイたちは上等な宿屋に案内され、疲れを癒した。今度は誰も襲

つてこない。ロイとバートが同じ部屋に泊まり、アニエスとネルが同じ部屋に泊まった。

ネルはすっかり元に戻っており、ひたすらアニエスに謝っていた。「本当に申しわけありませんでした、どうかお許してください」

アニエスは無言でネルを見つめた後、口を開いた。

「赤眼に変わったときの記憶は残ってるの？」

ネルはうなずいた。

「はつきり残ってます。それだけに、元に戻ったとき辛いんです」

「人格が変わるわけじゃないよね？」

「はい、同一人物です」

アニエスの目が段々と細くなった。

「あなたはロイのことが好きなの？」

ネルは沈黙した。

「じゃあ、質問を変えるよ。あなたはロイを食べたいと思ってるの？」

ネルの顔から、一瞬で血の気が引いた。

「そんなことはありません！」

彼女が叫ぶと、アニエスは眉を吊り上げた。

「だって、赤眼とあなたは同一人物なんですよ。それなら、考えていることも一緒だよな」

ネルは小刻みに震えだした。

「私は、人を殺したいなんて思っていません。ましてやロイさんは恩人です。感謝しこそすれ、食べるなんてあり得ません」

「嘘だあ」

「本当です、信じてください！」

アニエスは、酒の入ったグラスを口に運びながら言った。

「あなた、自分で言うっておかしいと思わないの。人格が同じなのに考えてることが違っていて、どういう冗談なの？」

「魔物になると、頭がおかしくなってしまうんです。記憶はそのままなんですけど」

「それって、記憶を共有してるだけで別の人格なんじゃないの？」
「もしかしたら、そうかもしれないせん」

ネルが答えた直後、アニエスが口に含んでいた酒を吐き出した。
「ど、どうしたんですか」

「この主人をとつちめてやる！」

アニエスは部屋を飛び出し、ネルは慌てて後を追った。階段を降りて一階の広間に出ると、ロイが四十歳前後の男性の襟首をつかんで怒鳴っていた。

「俺に毒を盛るとはいいい度胸だな、死にたいのか！」

男性が震えていると、傍らにいたバートも怒鳴った。

「そつだそつだ、毒の入ってない肉をよこせ！」

アニエスは踵を返し、再び階段を昇っていった。ネルは目をしばたたきながら後を追った。

「お酒に毒が入ってたんですか？」

「そつだよ」

「なんでわかつたんですか」

「毒の味は大体知ってるから」

「味のしない毒もあるんじや」

「それに対しては、暇なときに少しずつ飲んで体を慣らしてある。

あと、解毒薬を持ってる」

ネルは感嘆しながら、さらに尋ねた。

「宿屋のご主人をとつちめなくていいんですか？」

「あの馬鹿二人が代わりにやってくれてるよ」

アニエスは部屋に戻ると、ベッドに寝転んだ。ネルも自分のベッドに入った。

「一つ言っておくけどさあ」

「なんでしようか」

「私は、あなたが嫌いだよ」

ネルは沈黙した。ここまではつきり言う人間も珍しい。

「魔物が嫌いだから、魔物に変わるあなたも嫌い。って言うか、憎

「んでる。死んでほしい」

「なんで、そこまで魔物を憎んでるんですか」

「アニエスは吐き捨てるように言った。

「身内が殺されたからだよ。あなたみたいなの、人間のふりした魔物にね」

「私は魔物じゃありません！」

「私には魔物にしか見えません」

第十一話

ネルが涙を溜めていると、アニエスは目尻を吊り上げた。

「ふーん、泣けばいいと思ってるんだ。そういう考え方、嫌いだよ」
さらに、彼女はたたみかけた。

「魔物の血を引いた人間なんて、はっきり言っただけ気持ちは悪いよ。そもそも、人間以外と関係を持つてることがあり得ない。あなたの親だから先祖だか知らないけど、どこかおかしいんじゃないの？」

ネルは震えながら答えた。

「父は人間で、母はキーマという種類の魔物でした。キーマは赤い瞳が特徴で、『赤眼』とも呼ばれています。二人とも私にはすごく優しくかったし、愛し合っていました。私から見れば何もおかしくなかったです」

「そりゃ、あなた自身がまともじゃないからねえ。変人から見れば、変人でもまともに見えるんだろうね」

ネルの眉が吊り上がった。

「父を悪く言うのはやめてください！」

「悪いものを悪いって言うことの何が悪いの」

ネルの呼吸が荒くなると共に、髪と瞳の色が少しずつ赤に変わってきた。アニエスはそれを見て、道具袋を引き寄せた。

「ふーん、興奮すると赤眼に変わるんだね」

「アニエスさん、謝ってください！」

「嫌に決まってるでしょ、馬鹿じゃないの。私は、あなたを殺したくてうずうずしてるんだよ。さっさとかかってきたら？」

ネルは必死に深呼吸をした。赤眼に変われば、また殺し合いになってしまう。さらに、自分とアニエスのどちらかが死ぬことになる。それだけは避けなければならない。

第十二話

そんなネルの思惑をよそに、アニエスは挑発を続けた。

「ほら、かかってくるなよ。その本性を存分にさらけだしてね。そうすれば、自分がどんな生き物であるのかはつきりと理解できるでしょ。あなたはおよそ、人間の社会には受け入れられない存在だよ。必死になって人間になろうとしているのを見ると、滑稽すぎて笑いが止まらないよ」

ネルの髪と瞳が、完全に赤く染まった。

「お前、殺してやる！」

「遂に本性を現したね、この魔物が。死ぬのはあなたの方だよ！」
アニエスは二本の棒を振りかざし、ネルに突きかかった。並の魔物なら一瞬で貫かれるところだが、ネルは素早く後退してこれかわした。

「逃げてるばかりで勝てると思わないでね！」

アニエスはネルを部屋の隅まで追い詰め、渾身の突きを放った。しかし、間一髪でかわされてしまった。

「し、しまっ……」

アニエスが慌てふためいた瞬間、首をつかまれて床に叩きつけられた。

「ぐえっ！」

激痛を耐えながら上を見ると、ネルが薄笑いを浮かべていた。

「お前の動きは、もう見切ったよ」

アニエスが唇を噛みしめていると、ネルが屈んで顔をのぞき込んできた。

「さあ、どうやって殺してほしいの。望み通りにしてあげるよ」

アニエスはネルをにらみつけた。

「煮るなり焼くなり、勝手にすればいいよ。あなたは勝者、私は敗者。負けた人間が要求することなんか一つもない」

「潔いんだね」

ネルが右腕を振り上げた瞬間、アニエスは涙を浮かべた。

「ティート、ごめんね。お姉ちゃん負けちゃったよ。あなたの無念を晴らせなかった……」

ネルは振り上げた右腕を止め、アニエスを見つめた。

「何それ、誰に言ってるの」

尋ねると、アニエスの瞳からとめどなく涙が流れ出た。

「ティート、これからあなたのところへ行くからね。今度こそ幸せに暮らそうね」

ネルは、振り上げた右腕を下ろして言った。

「ああ、殺された身内に言ったのね。どうせお前の声なんか届かないだろうにさ」

「余計なお世話だよ。それより、私を殺さないの？」

ネルは再びベッドに入りながら言った。

「殺したいと思ってるんだけど、なんか心の中で声がするんだよ。やめて、やめて」って。気持ち悪いからやめておくよ」

アニエスは起き上がり、ネルをじっと見つめた。髪と瞳は変わらず赤いままだ。しかし、彼女の中で何かが変わってきているらしい。

「ネル、一つ聞いていい？」

「どうぞ」

「今でも『ロイを食べたい』と思ってる？」

ネルは、けらけらと笑った。

「なんで私があの人を食べるの、恩人なのに。感謝しこそすれ、食べるなんてあり得ないよ」

アニエスは首をかしげた。これはいよいよおかしい。いや、むしろネルはまともになってきているのだが、それがおかしい。

「ネル、何か悪いものでも食べたの？」

「別に」

「なんかおかしいよ、言ってることが」

「今は魔物だし、人間から見ればおかしいんだろうね」

「いや、そうじゃなくて……」

「もう寝るから静かにしてよ」

アニエスが口を閉じると、ネルはさっさと寝てしまった。アニエスは呆然としながら、その寝顔を見つめていた。

やがて、ロイが部屋に入ってきた。

「おい、さっきすごい音がしたぞ。何があった」

アニエスは無言でベッドを指さした。そこには、赤眼になったネルが寝息を立てていた。

ロイは目を見張った。

「なんだこりゃ、どういうことだ」

「私が聞きたいくらいだよ」

アニエスは、ロイに一部始終を説明した。自分の挑発によって、ネルが赤眼になったこと。戦闘状態になり、負けたこと。それにも関わらず命を奪われなかったこと。ロイは黙って最後まで聞いてから、おもむろに口を開いた。

「おそらく、同化が始まっているんだろう」

「同化？」

「赤眼のネルと普通のネルとの間には、大きな性格の違いがある。考え方も違う。どういう理由かはわからないが、この差が埋まってきたということと言える」

「最終的に、どっち寄りになるの」

ロイは首を振った。

「はつきりとは言えない。ただ、今の話を聞く限りでは普通のネルの方が強いようだ。おそらくそっち寄りになるんじゃないだろうか。あくまで希望的観測だけだな」

アニエスが無言でネルを見つめてみると、ロイが手を振った。

「じゃあ、俺はもう寝るよ。お前もゆっくり休め」

アニエスはうなずき、ベッドに入った。

第十三話

翌朝、ロイたちは宿屋の前に集まっていた。これからアニエスはアルテナに帰り、ロイたちはウインザーに向かうことになる。

アニエスはロイを見つめた。

「じゃあ、元気でね。くれぐれも気をつけて」

「ああ、お前もな」

「あと、ギルの情報をつかんだら教えてね。見つけたら息の根を止めておいて」

「できるものならな」

アニエスはネルに視線を移した。髪は銀髪に、瞳は青色に戻っている。

「ネル。もし今後、あなたが赤眼になって人間を殺している場面を見つけたら迷わず射るからね」

「はい、いろいろ申しわけありませんでした」

アニエスは、最後にバートを見ながら言った。

「あなたには、別に言うことないなあ」

「言うことないほどいい男ってことか！」

「あ、一つあった。その腐った頭をなんとかしなよ」

バートが口をあぐりと開けていると、アニエスは手を振りながら立ち去った。ロイは彼女を見送った後、バートとネルに声をかけた。

「さあ、行くぞ。次は砂漠だ」

三人は並んで歩きだした。やがて、バートがロイに尋ねた。

「ギルって誰ですか」

「最強の魔物と呼ばれる奴だ。魔剣の使い手でもある」

「魔剣？」

「折れることもなければ歯こぼれもせず、人間の血を吸った時に斬れ味が増すという怖ろしい剣だ」

「バートが身震いしていると、ロイはさらに続けた。」

「最近、奴によって城塞都市が一つ壊滅させられたそうだが、ネルが目を見開いた。」

「なんでそんなことを！」

「恐ろしく残忍な奴で、人間を殺すことに生きがいを感じてるんだよ。」

「ロイは一旦沈黙し、再び口を開いた。」

「俺の家族を奪ったのもあいつだ。絶対に許さない。」

「三人は無言で街を歩き続けた。やがて、ネルが沈黙を破った。」

「ロイさんは、魔物を憎んでますよね。」

「当たり前だ。」

「じゃあ、私のことも憎んでますか？」

「ロイは首を振った。」

「俺が憎んでいる魔物はギルだけだ。他の奴は関係ない。」

「ネルは胸を撫で下ろした。」

「本当によかったです。」

「それより、昨日のことだけど。」

「え？」

「お前は赤眼に変わっても、自分を抑えられるようになったのか？
ネルはうなずいた。」

「魔物になったとき、『人間を殺したい』っていう衝動が突き上げてくるんです。それを抑え込むことができるようになりました。」

「素晴らしい進歩だな。」

「私は人間になって、その社会の中で生活していきたくいんです。魔物になったあげく人間を殺していたら終わりですから。」

「ロイは、ネルの髪をくしゃくしゃと撫でた。」

「偉いよ、よくやった。」

「ネルは頬を赤らめ、バートは興味深そうに彼女の顔を眺めていた。城塞都市から出てしばらく歩くと、広々とした砂漠に出た。ロイは二人を見回しながら言った。」

「ここで気をつけるべき魔物は、ドルムントという奴だ」

バートは二本の剣を構えた。

「どんな奴だろうが、叩き斬ってやりますよ」

「無理だからやめとけ。奴らに見つかつたら、ひたすら逃げるんだ」
バートは目をむいて叫んだ。

「道具師ロイともあろう人が、一戦も交えずに逃げるんですか？」

「そうだよ、戦ったところで消耗するだけだからな」

「冗談じゃない、そいつはどんな奴なんですか」

ロイは腕を組みながら答えた。

「体長は人間の五倍くらいかな」

「結構でかいですね」

「全身が固い鱗で覆われていて、背中には甲羅がある」

「ほうほう」

「鼻の辺りと頭に鋭い角があつて」

「へえ」

「侵入者を見つけると突進してきて突き殺す。魔物だろうが人間だろうがお構いなしにな」

バートの顔が青ざめた。

「そんな奴、どうやって倒すんですか！」

「弱点はある。首のつけ根の部分だけが鱗に覆われていないんだ。

あとは目だな」

「そんなの狙ってる間に、ぶっ飛ばされるじゃないですか！」

「だから逃げようって言うてるだろ」

二人が話している間に、前方に巨大な生き物が現れた。サイに亀の甲羅を付け、頭に角をつけたような魔物だ。

ロイは魔物を指さした。

「ほら、あれがドルムントだ」

「でかつ！」

第十四話

「あんな奴が、この砂漠にはうようよいるわけだ。一刻も早く抜ける必要がある」

バートとネルがうなずくと、ロイはドルムントを見据えた。

「こつちを見てるな、どうやら気づかれたらしい。走れ！」

三人は全力で走りだし、後ろから一頭のドルムントが続いた。意外に足が遅く、やがて引き離すことができた。

バートが後ろを振り返りながら叫んだ。

「へっ、うすのろが。怪我してる俺すら捕まえられないのかよ！」
すると、ロイが怒鳴った。

「馬鹿、前を見るろ！」

バートが視線を戻すと、前方から一頭のドルムントが突進してきた。

「げっ、どうするんですか！」

ロイは無言で、道具袋から瓶を取り出した。中にはどす黒い液体が入っている。

「それ、ゲルガーに使った奴ですか？」

「そうだ」

ロイは素早く瓶を振り、その口を前方に向けた。途端に黒い液体が噴き出し、ドルムントの顔面に振りかかった。

「ゲゲアアアッ！」

ドルムントがひるんだ隙に、ロイたちはその横をかけ抜けた。すると、ネルが前方を指さした。

「もう一頭来ます！」

ロイは舌打ちしながらアーツを構え、魔物目がけて次々と矢を放った。しかし、それらは額に当たって跳ね返されてしまった。

「くそっ、目を狙ったのに。走りながら撃つのは難しいな」

ロイは再び矢を放ったが、やはり額に当たって弾かれた。その間

に、ドルムントはどんどん近づいてくる。

「バートが怒鳴った。」

「ロイさん、さっきの液体は？」

「品切れだ」

「使えねー！」

「お前に言われたくないな」

ロイは金属性の棒を二本取り出し、ネルに向かって言った。

「俺が食い止めるから、お前は先に逃げろ！」

ネルはうなずき、ロイから離れた。

「バート、お前は加勢しろ。できる限り奴を引きつけるんだ」

「わかりました！」

バートが前に出ると、ドルムントがまっしぐらに突っ込んできた。

「俺の超絶剣技を見せてやるぜ！」

バートは横に跳躍して突進をかわし、首筋目がけて斬りつけた。

「おらあっ！」

ドルムントは鮮血を噴き出し、悲鳴を上げながら後退した。

「とどめだ！」

バートは全体重をかけつつ、再び首筋目がけて斬りつけた。しかし、今度は角でがっちり受け止められてしまった。

「くそ、この野郎！」

叫んだ瞬間、ロイがドルムントの首を突き刺しているのが見えた。

「グギヤアアアッ！」

ドルムントはふらつきながら逃げ出した。

「ロイさん、おいしいところだけ持ってくんだなあ」

「そんなこと、どうでもいい。行くぞ」

二人はネルを追った。彼女はロイたちのはるか先を走っていたが、急に立ち止まった。前方から、また一頭のドルムントが迫っていたのだ。

ロイが怒鳴った。

「ネル、俺に向かって走れ！」

ロイは、ネルの代わりに魔物の相手をするつもりだった。しかし、彼女はそこを動かなかった。

「何をやってるんだ、早く逃げる！」

ロイが再び怒鳴ったとき、ネルの髪の色がみるみるうちに赤く染まった。ドルムントはお構いなしに突撃してきた。

「ネル！」

ロイは必死に叫んだ。いくら赤眼に変わっても、あの突進を喰らえばひとたまりもないだろう。しかし、そんな心配をよそに、ネルは右腕一本でドルムントを止めていた。

「ネル、よくやった。あとは俺に……」

ロイが言いかけると、ネルは道具袋から金属の棒を取り出し魔物の首筋に突き刺した。ドルムントは悲鳴を上げながら、すさまじい勢いで逃げだした。

「ネル、お前……」

彼女は振り返り、にこりと笑った。髪も瞳も赤いままだ。

「私、少しはあなたの役に立てたかな」

ロイはネルの手を握りしめた。

「役に立ったさ、ありがとうな」

バートが叫んだ。

「もう一頭来てます、さっさと逃げましょう！」

ロイとネルはうなずき、その場を後にした。

その日の夜、ロイたちは木陰で野宿していた。バートは毛布をかぶって横になり、いびきをかいている。ロイとネルはまだ起きており、座って話し込んでいた。ネルの髪と瞳は、相変わらず赤いままだ。

「いつまで赤眼でいるつもりなんだ」

「戻りたいんだけど、戻れないんだよね」

ロイは、ネルをじっと見つめた。

「魔物化が進んでるってことかな」

ネルは首を振った。

「私、興奮すると赤眼に変わるんだよ。落ち着くと元に戻るの。それが戻れないってことは……」

「興奮が収まらないってことか」

ネルはロイを見つめ返した。

「私の顔、赤くなってるでしょ？」

「暗くてよくわからないな」

ネルは視線を落とした。

「実は、あなたの組合に行く前に他の組合に行って護衛の依頼をしてたんだよ。でも、赤眼であることを話した途端につまみ出された。まともに相手をしてくれたのはリートさんだけだったよ」

ロイは深くうなずいた。

「まあ、あいつも魔物だからな」

「リートさんが親身になってくれたのも嬉しかったし、あなたが無償で護衛を引き受けてくれたのも本当に嬉しかった」

「貧乏人から金なんかむしり取ったら、寝覚めが悪いと思ったただだ」

ネルはロイの手を握りしめた。

「私は、一つ感じたことがあるんだよ。ロイさんはぶっきら棒だし冷たく見えるけど、実はすごく優しい人なんだって」

ロイは必死に首を振った。

「それはない、絶対がない。俺のバートに対する態度をみてください、ひどいだろ」

「それは、後輩を厳しく鍛えてあげてるんでしょ？」

ロイはネルを眺めながら思った。どうやら、彼女は恋をしているようだ。おそらく今まで、男性からろくな扱いをされてこなかったのだろう。だから、少し優しくされたくらいでコロツとってしまったのだ。

「ネル、一つ言っておく。お前は魔物に変わることさえなくなれば、かなりいい線いっている。わざわざ俺なんか選ぶことはない」

「『俺なんか』って言い方はないんじゃない。ロイさんはすごく魅力的な人だよ」

「そうじゃなくてだな。俺は職業柄、一つの場所に留まることがない。しかも、常に生命の危険に晒されている。要するに、会えないし早死にするし男としちゃ最悪の部類だ。どうせならもっとまじな相手を選べ」

ネルはしばらく沈黙した後、ロイの頬を撫でた。

「あなたは、半分魔物みたいな私を受け入れてくれた。本当に嬉しかったよ。だから、私もあなたのすべてを受け入れる。会えないとか早死にするとか、関係ないよ」

ロイはネルを見て寒気を覚えた。月明かりに照らし出された彼女の顔が、ぞつとするほど美しい。気をしっかり保たないと、吸い込まれてしまいそうな雰囲気だった。

「こんな美しい女に、今までお目にかかったことがない」

つい、そんな言葉が口をついて出てしまった。ネルはそれを聞いて満面に笑みを浮かべた。

「ありがとう、嬉しいよ」

彼女はロイに体を寄せ、上目使いに顔をのぞき込んできた。すると、甘い香りがロイの鼻をくすぐった。

彼は必死に自分を保ちつつ、ネルの頭を撫でて言った。

「明日も早い、そろそろ休もう」

彼女は何か言いたそうにしていたが、やがて無言で横になった。

ロイも続けて横になると、寝ていたはずのバートがぽつりと言った。

「あれで終わりですか、つまらないなあ」

ロイは顔を真っ赤にしながら言った。

「うるさい、早く寝ろ」

「へいへい」

第十五話

翌日。三人はひたすら歩き続け、城塞都市ウィンザーに到着した。すっかり日が暮れており、周囲を闇が包み込んでいる。

ロイは、ネルとバートを一軒の酒場につれていった。中に入ると客はおらず、カウンター席に一人の少女が座っていた。年齢は十七八くらいに見える。短い金髪にぱっちりした青い瞳、小柄で華奢な体をしている。着ているのは、袖がなく胸元が大きく開いた紫色の服だった。

ロイは彼女に声をかけた。

「よう、リーム」

彼女は目を輝かせた。

「あつ、ロイ！ 久しぶり！」

「元気そうだな」

「ロイも元気そうだね、今日も護衛で来たの？」

「ああ、この子の護衛で来た」

ロイはネルを紹介した。

「ネルには赤眼の血が流れていて、時々魔物化するんだよ。それを治す薬がここにあるらしいから買いにきたわけさ」

「ああ、あれね。まだ売ってたかなあ」

「明日買いにいってみるよ。あと、ギルの情報は入ってないか」

リームは眉をひそめた。

「つい三日前、隣の城塞都市が壊滅したんだよ。ギルの仕業じゃないかって言われてるんだけど」

「そんなことをする奴は、あいつくらいしかない」

バートがロイの袖を引っ張った。

「ロイさん、俺も紹介してくださいよ」

「ああ、悪い」

ロイはバートを紹介した。

「こいつはバートっていう名前で、一応剣士だ。それなりに腕は立つが、頭が軽い」

「頭が軽いつてどういうことですか!」

バートがむっとしながら叫ぶと、リームはけらけらと笑った。

「私はリーム、よろしくね」

「バートです、よろしく。すごくかわいい人ですね」

「魔物だけどね」

「えっ?」

バートが口をぱくぱくさせていると、ロイが笑いながら言った。

「そうそう、リートがよろしくつてさ」

「うん、お姉ちゃんは元気なの?」

「元気すぎて困る、殺されそうになったよ」

「ごめんねー、今度会ったら注意しておくから」

ロイは、店の奥にある階段に視線を移した。

「二階は空いてるかな? 今日はもう遅いから、ここに泊めてほしいんだが」

「うん、部屋は全部空いてるし好きに使っていいよ。他の護衛士の人はみんな出ちゃったから」

「あと、道具の補充をしたい」

「なんでも揃ってるから、好きに持っていけばいいよ」

バートがロイに尋ねた。

「ここって護衛士の組合か何かですか?」

「そうだよ」

「俺も、組合に入りたいなあ」

すると、リームが声をかけた。

「構わないよ。ただし、試験をさせてもらっけど」

「いいんですか、やった!」

ロイは、狂喜しているバートを見ながら言った。

「さて、そろそろ寝るか」

翌朝、ロイはネルをつれて街へ出た。バートは試験のため、酒場に残された。

周囲には煉瓦で造られた住宅や商店が建ち並び、目抜き通りでは食料品や衣類、武器や防具などを売っている。多くの人間で混雑している中、ロイはネルの手を引きながら薬屋を探した。

「ロイさん、何から何までありますがどうぞいます」

「乗りかかった船だ、気にするな」

やがて薬屋が見つかり、二人は店に入った。中には木製ね棚が並んでおり、透明な瓶に入った様々な薬品が置いてある。ロイは、奥のカウンターの中に座っている白髪の老女に声をかけた。

「魔物化を抑える薬を探しているんですが」

「ああ、あれならもうないよ。材料になる薬草が採れなくなっちゃまってねえ」

「今後、入荷する予定は？」

「ないねえ」

「この街には、他にも薬屋はありますか」

「ここしかないよ」

ロイはしばらく考え込んでから、さらに尋ねた。

「その薬を売っている街は、他にないんでしょうか」

女性は首を振った。

「材料になる薬草が、ウインザーの近くでしか採れないんだよ。しかも、二日くらい置いておくと効果がなくなってしまう。最後に売れたのが十日くらい前だから、もう効果がある薬はどこにもないだろうね」

ネルががっくりと肩を落としたのを見て、ロイは肩を叩いた。

「望みを捨てるな。そのうち、また薬草が生えてくるかもしれないじゃないか」

ネルは無言でうなずいた。

「それで、お前はこれからどうするつもりなんだ」

「特に決めてないです、行くあてもないし」

「じゃあ、リームのところで働いたらどうだ。酒場としちゃ全然繁盛してないけど、護衛士の組合としての仕事はたくさんある」

「いいんですか？」

「いいかどうかはリーム次第だけど、たぶん問題ないと思うよ」

二人は薬屋を出て、再び酒場に向かった。そのとき、突然ロイが立ち止まった。

「どうしたんですか」

「あそこにいる奴から、すさまじい殺気を感じる」

ロイが指さした方向には屋台があり、そこには一人の男が座って骨つき肉を食べていた。肩まで伸びた金髪に白い肌、切れ長の目によく通った鼻、すつきりとした輪郭をしている。肩幅はかなり広い身に着けているのは漆黒の服で、腰には長剣をはいていた。

ロイがじつと見つめていると、男は店員に向かって言った。

「ご主人、実にうまい肉だ。こんなうまいものを食べたのは久しぶりだ」

「ありがとうございます」

「お礼に殺してあげよう」

「えっ？」

次の瞬間、店員の首から上が消えていた。男は椅子から立ち上がり、近くにあった酒瓶を手にして一気に呑み干した。

「今日はよき日だ、実によき日だ！」

男の大声を聞いて、周囲の人々は視線を集めた。すると、彼はさらに続けた。

「君たちは、これより天に召されることになる。魔剣グラフィードの鎧となつてな！」

その途端、周囲がざわめいた。

「なんだあいつ、気違いか？」

「魔剣グラフィードって、どこかで聞いたな」

「まさか、街を一つ潰した奴じゃ……」

男は突然笑いだした。

「魔剣士ギル、参上。これより狩りを始める！」

周囲の人々の顔から、一瞬で血の気が引いた。女たちは子どもをつれて逃げだし、男たちは剣を抜いてギルを包囲した。

ギルは口角を吊り上げながら、周囲を見回した。

「君たちのような雑魚が、私を倒せるとでも思っているのか。身のほどを知らぬ馬鹿どもだな！」

男たちは一斉に斬りかかり、その剣はギルの体を捕らえたかのように見えた。しかし次の瞬間、彼らは真つ二つにされて地面に転がっていた。

「弱き者は死に、強き者は生きる。これすなわち真理なり！」

ギルが高笑いしていると、その前に赤眼と化したネルが立ち塞がった。

「これはこれは、まさかこんなところに赤眼がいるとは。私の手伝いをしてくれるのかな？」

「そんなわけないでしょ、いい加減にしなさい！」

ロイがネルの肩を叩いた。

「ネル、下がってる。こいつは俺が倒す」

ギルはあざ笑った。

「また馬鹿が一人増えたようだな。さつさと逃げれば助かるかもしれないものを、なぜわざわざ死に急ぐのか」

ロイも笑顔を浮かべた。

「その考え方には同意する。しかし、男にはやらなきゃならないときがあるんだよ」

ロイはネルを下がらせ、ギルに向かって歩いていった。

「お前には家族を殺された上に、右目まで奪われた。この借りは百倍にして返す。道具師ロイの名にかけてな！」

周囲に集まった人々から歓声が上がった。

「おい、道具師ロイだつてよ！」

「あの『最強の護衛士』か？」

「がんばれ、ギルなんぞやっちまえ！」

ギルは周囲を見回した。

「彼を殺した後は、君たちの番だ。絶望と激痛にもがき苦しむがい！」

ギルは一瞬で間合いを詰め、ロイを真つ向から斬り下げた。ロイはこれを綺麗にかわし、地面に黒い玉をいくつも投げつけた。

「小細工をしようが無駄だ！」

ギルが叫ぶと、玉から黒い煙が噴き出して視界を閉ざした。彼は剣を振り回しながら叫んだ。

「小賢しい真似をするな！」

やがて煙は消え去り、ロイとギルの姿が現れた。ロイはかすり傷一つ負っていないのに対し、ギルは左肩から下が溶けてなくなっていた。

「ば、馬鹿な……」

呆然としているギルの背後からネルが近づき、背中から胸まで貫いた。途端に緑色の血飛沫が上がり、ギルは苦悶の表情を浮かべた。「この私が、貴様ら虫けらに！」

ギルはネルを振り払い、ロイに向かって疾走した。

「消えてなくなれ！」

閃光が走った。

ギルの顔面から頭部にかけて、金属の棒が貫いていた。彼が右手から剣を取り落とすと、ネルがそれを拾って一閃させた。

「ごめんね、さようなら」

首から上がなくなったギルの死体は、よろめいて崩れ落ちた。

周囲から歓声が上がった。

「すげえええ、まるで相手にならなかったぜ！」

「さすが『最強の護衛士』！」

「そっちの姉ちゃんも強かったな！」

ロイとネルは男たちに囲まれ、笑顔を振りまいていた。ネルが赤眼であることなど、誰も気にしていないようだ。それからしばらく、歓声はやむことがなかった。

それから、一年の月日が過ぎ去った。

リートの酒場に、一人の女性が訪ねてきた。

「お姉ちゃん、来たよー」

「リームじゃない！ 店はどうしたの？」

「他の人に任せてきたよ。元気してた？」

リートは笑顔を浮かべ、リームを抱きしめた。

「元気だよ。リームも元気そうでよかった」

「そうだ、お姉ちゃん。あの二人は？」

「出払ってるよ、なかなか捕まらないんだよね」

リームはため息をついた。

「ロイさんは伝説的な存在だからねえ」「魔剣士ギルを倒した最強の道具師」って呼ばれて、引つ張りだこだよ」

「ネルさんもそうなの？」

「『赤眼の魔剣士ネル』とか呼ばれて、同じくらい人気があるよ。グラフィードを使わせたら右に出る者がいないって」

「あの人、結局人間に戻れなかつたんだね」

「本人は納得してるみたいだよ。『どんな自分でも、自分であることには変わらないから』って」

「そうだよ、自分が嫌いだなんて悲しすぎるもんね」

「そうそう、私たちみたいに自分大好きでいかないとね」

酒場にはいつまでも、二人の笑い声が響いていた。

(第一部 完)

第二部「道具師と悲劇の王女」第十六話

城塞都市ウインザーの中を、一組の男女が歩いていった。

先頭を行くのは大柄な男性だ。歳は三十前後。精悍な顔立ちにたくましい体をしており、鉄の鎧を着込んでいる。さらに幅広の剣を佩いており、鉄の槍を握りしめていた。

彼の後ろに続く女性は中肉中背で、純白の外套を身にまとっている。フードを被っている上に顔の下半分を白い布で隠しているため、あまり顔がわからない。腰には金と銀で彩られた細身の剣を佩いている。

やがて、周囲をうっすらと闇が包み込み始めた。そろそろ日が暮れるようだ。彼らは歩き続け、一件の酒場の前で立ち止まった。

女が透き通るような声を出した。

「ここですね」

男が大きくうなずいた。

「先に私が入ります。妙な連中がいるようなら槍の錆にしてやりますので、どうかご安心を」

男は扉を開けて酒場に入った。奥にカウンター席があり、手前にはテーブルと椅子が並んでいる。彼は油断なく視線を走らせ、カウンターの中にいる一人の少女を見つけた。

「いらっしやいませえー」

その間延びした声を聞いて、男は一瞬気が抜けそうになった。しかし、ここで油断するわけにはいけない。彼は顔を引きしめて少女を観察した。年歳は十七、八くらいだ。短い金髪にぱっちりした青い瞳、小柄で華奢な体をしている。着ているのは、袖がなく胸元が大きく開いた黄色い服だった。

男はずかすかとカウンターに近づき、少女をにらみつけた。

「ここは護衛師の組合だな？」

少女は首をすくめた。

「そんなににらまないでよ、怖いなあ」

「そんなことはどうでもいい、質問に答える」

少女はおずおずと口を開いた。

「そうだよ、護衛の依頼？ おじさん強そうだし、いらなんじゃ
ないの？」

「俺ではない、彼女を護衛してほしいのだ」

彼の言葉に応じて、女性が歩いてきた。

「エルゼと申します、どうかよろしくお願いします」

「私はリーム、よろしくね」

リームは、エルゼをじっと見つめて尋ねた。

「なんで顔を隠してるの」

「これは失礼しました」

エルゼは被っていたフードをはずし、顔の下半分を覆っていた布も取り去った。その途端、リームは声を上げた。

「すっごい美人！」

エルゼは十八歳で、胸まで伸びた金髪と青い瞳、白い肌の持ち主だった。凜とした顔つき、すらりとした体をしている。端麗な容姿と優雅な立ち居振る舞いは、どこか俗人を寄せつけないような雰囲気醸し出していた。

リームは男性に視線を移した。

「おじさんの名前は？」

「ラウドだ」

「ラウドさん強そうだし、自分で護ればいいんじゃない？」

彼は目を細め、いまいましそうに言った。

「今まではそうしてきたんだが、もう限界だ。俺一人ではどうにも
ならない」

「そんなにたくさん敵から狙われてるの？」

「ああ、魔物も人間も引つくるめてかなりの数だ」

「ふーん。立ち話もなんだから、座って話そうよ」

リームが椅子を勧め、ラウドとエルゼは座った。リームは彼らに

紅茶を出し、テーブルを挟んだ向かい側に座った。

ラウドが真つ先に口を開いた。

「とにかく、一人でも優秀な護衛がほしいんだ。頼む」

リームは手帳を取り出してめくりだした。

「今日、ロイが来る予定だよ。明日はネルとバートが来る。他の護

衛士たちはかなり遠くにいるんで、早くても三日はかかりそうだね」

「そんなに長くは待てないんだ、明日中には出発したい」

「じゃあ、自動的にその三人になるけどいい？」

ラウドは腕を組んで考え込んだ。

「三人の実力がどの程度のものか見てみたいんだが」

それを聞いてリームは苦笑した。

「ラウドさんは、ロイとネルの実力を知らないの？」

「彼らが凄腕の護衛士だということは聞いている。しかし、それはあくまで噂だ。実際に会ってみなければなんとも言えない」

「じゃあ、ロイがここに来るのを待ってみれば？ 気に入らないな

ら他の組合へ行けばいいしさ」

「そうだな」

ラウドはうなずき、エルゼに視線を移した。

「それでよろしいでしょうか、セレ……」

彼は言いかけ、慌てて口を止めた。エルゼは刺すような目でラウドを見た後、にっこりと微笑んだ。

「かまいません、待たせてもらいましょう」

第十七話

三人は酒場で食事をしながらロイを待ったが、彼は一向に姿を現さない。リームは首をかしげた。

「おかしいなあ、今日この街に到着するはずなのに。何かあったのかな」

ラウドがパンをかじりながら言った。

「どこかで力尽きてるんじゃないか？」

「ロイに限ってそれはないよ」

そのときエルゼが立ち上がり、店の扉を開けて外を眺めた。

「すっかり暗くなってしまったわ、今日のところは帰った方がいいよね」

ラウドがため息をついた。

「この暗闇の中を帰るんですか。また襲われなければいいんですが、うんざりしている彼を見て、リームが話しかけた。

「ここに泊まっていけば？ 二階の部屋が四つ空いてるから。普段は護衛士が使ってるんだけど、今日は誰もいないし」

「いいのか？ すまないな」

「いいよ、気にしないで」

リームは二人を二階へ案内した後、再び一階の酒場に降りてきた。

「ロイは、まだ帰ってこないのかなあ」

彼女は人間の姿をしているが、実は魔物の一種だ。特徴としては何百年も生きることと戦闘能力が桁違いであること、変身すること、夜になっても一切眠らないということが挙げられる。

リームはカウンターの中にある椅子に座り、冊子を取り出して読み始めた。ここに立ち寄った護衛士たちが各地の情報を書き込んでいる物だ。

その中で目を引いたのは、現在の国王が病に倒れ容態は悪化する一方だという話だった。

「へえ、誰が後を継ぐんだらう」

さらに読んでいくと「国王には娘が一人いるだけなので、王位を継承するのは彼女である可能性が高い」と書かれていた。

「いいなあ、王女様」

リームはため息をついた。

「私だって王家に生まれてれば、こんな場末の酒場で埋もれていることもなかったのに」

そんなことを考えながら冊子をめくっていると、一人の男性が店に入ってきた。年齢は二十歳前後。ぼさぼさの茶髪に浅黒い肌をしており、所々破けた服を着ている。顔と体はがりがりに痩せており、やたら眼光が鋭い。

見るからにみすばらしい男だが、なぜか腰には立派な長剣を佩いていた。緋色の鞘に納めされ、柄は金や銀で彩られた豪華な物だ。

リームはその風体に一瞬眉をひそめたが、すぐに笑顔になって声をかけた。

「いらつしやいませえー」

男はつかつかとリームに近づいてきて、カウンターの前にある椅子に腰を下ろした。

「なんでもいいから酒をくれ、金はあるからよ」

彼は一万ルピー札を十枚、カウンターに叩きつけた。大の男が十日間ぶつ通しで働いてようやく手にすることができる金額だ。リームは彼と札を見比べてから尋ねた。

「随分景気がいいじゃない、何か商売でも当たったの？」

男は下卑た笑みを浮かべた。

「いい仕事をもらったんだよ、これは前金の一部だ。成功させりゃ、もつとたくさんの金が入る」

「ふーん、すごいねえ。その剣も前金で買ったの？」

「これは違うなあ」

どうせ、盗んだか強奪したかのどちらかだろう。この男にその剣は不釣り合いだ。リームは酒をグラスにつきながら、さらに尋ねた。

「お兄さんの仕事ってなんなの」

「人探してどこだなあ」

「探してどうするの」

「おっと、それ以上聞くなよ。言えることと言えねえことがあるんだよ」

男はそう言うと、酒を一気に呑み干した。

「こりゃうめえ！ 生き返るぜ」

「よかったねえ」

「ところでよう、お嬢ちゃん。この辺で貴族っぽい女を見なかったか？ ごつい男をつれてるんだけどよ」

リームはすつと目を細めた。

「さあね」

「本当か？ この店に入っていくのを見かけたっていう話を聞いたんだがなあ」

「知らないよ」

リームが首を振っていると、男は笑いながら言った。

「黙って出してくれねえかなあ。俺も、お前らともめたくねえんだよ。ここは護衛士の巣窟だろ？ 人間だろうが魔物だろうが瞬殺しちまう奴らがいる場所になんぞ、本当は近づきたくもねえんだ。俺だって命は惜しいからなあ」

「だから、知らないって言ってるでしょ」

「だんだんと男の目つきが鋭くなった。」

「せつかく平和的に事を収めようとしてやってるのに、まだシラをきるってか」

彼はいきなり剣を抜き、リームに突きつけた。

「いざとなりやあ、てめえを人質にする事だつてできるんだぜ。わかってんのかこの馬鹿が」

リームは鼻で笑った。

「こんな物で私を脅せると思ってるの？ あなたこそ馬鹿だね」

「言っじゃねえか、ガキが。一遍死なねえとわからねえらしいな」

男がリームを斬りつけようとした途端、彼女の姿が視界から消えた。

「んっ、あれ？」

男が目をむいて叫ぶと、背後からリームの声がした。

「消えなよ、お兄さん。あなたなんか私の敵じゃないよ」

男は舌打ちすると、振り向きざまにリームを斬り下げた。しかし、その剣は空を切った。

リームは離れた場所に立ち、端正な顔に笑みを浮かべていた。

「もうやめておきなよ、そんな腕じゃ私にかすり傷一つつけられないから」

男は齒噛みしながら大きく踏み込み、剣を一閃させた。だが、リームは一步後退しただけでこれをかわした。

「何者なんだ、てめえはよお！」

男は一瞬力を溜め、直後に床を蹴ってリームの胸を薙ぎ払った。

しかし、これもかわされた。間髪入れずに素早い突きを入れたが、かすりもしない。

「てめえ、なめてんじゃねえぞ！」

男が再び斬りかかった瞬間、リームが彼の首をつかんで疾走した。

「え、ええええ？」

彼は抵抗する間もなく、壁に叩きつけられていた。

「ぶぐえっ！」

「いい声を出すねえ」

リームが解放すると、男は顔を抑えながらよろよろと歩きだした。

「どこにいくの、もしかして逃げる気？」

その言葉を聞いて、彼の口角が吊り上がった。

「まさか、これで勝った気になってるんじゃないだろうな？」

第十八話

リームはくすくすと笑った。

「勝ったも負けたもないでしょ、最初から勝負にすらなっていないだから」

すると、男は目を見開いた。

「言ったな。俺に盾突いたことを死ぬほど後悔させてやるぜ」

男は突然、痙攣を始めた。リームがその様子を眺めていると、彼の体がどろどろに溶けだした。

「うええ、気持ち悪い！ なんなのこいつ！」

「今さら謝ったところで手遅れだからな」

やがて彼の肉体は液体と化して流れ落ちてしまい、そこには剣を握りしめた骸骨だけが残った。

「まさか、女相手に本気を出すことになるとは思わなかったぜ。さすがは護衛士の組合と言ったところだな」

「うげ、骨が喋ってる！ どこから声を出してるの」

「どこからだっついていいだろうが。それより俺の名前を覚えてやるよ。ニムルドってんだ。聞いたことあるだろ？」

リームの全身から血の気が引いた。ニムルドと言えば、音に聞こえた殺し屋だ。標的が人間であろうが魔物であろうが、金さえもらえば確実に仕留める。護衛士たちにとっては実に厄介な存在だった。リームは身構えた。おそらく、もうさっきのようにはいかないだろう。気を引きしめてかからないと殺されるはめになる。

暗い店内を、燭台の上に並んだロウソクの炎がやわらかな光で照らしている。その中に浮かび上がった骸骨の姿は、この上なく不気味だった。

ニムルドが突然叫んだ。

「ヒャアウ！」

リームが目を見開いた瞬間に、ニムルドが彼女の横をすり抜けた。

同時に横薙ぎの斬撃を放っている。リームは跳びのいたがかわしきれず、左腕を斬られて顔をしかめた。

「くっ……」

流れ出る血を押さえていると、ニムルドがけたけたと笑った。

「俺に本気を出させたてめえが悪いんだぜ、怨むなら自分の馬鹿さ加減を怨みな！」

そのとき、二階からラウドが降りてきた。

「騒がしいな、何があったんだ」

彼はニムルドの姿を認めて目をむいた。

「こいつ、また来たのか！」

リームが痛みをこらえながら叫んだ。

「ラウドさん、エルゼさんをつれて逃げて！ こいつは私が食い止めるから！」

ラウドは首を振った。

「少女が一人で戦っているのに、大の男が逃げることなどできないな」

彼は鉄槍を構えた。槍先だけでなく柄の部分まで鉄でできた剛槍だ。

ニムルドがラウドに視線を移した。

「やっぱりいやがったな、ガーランド。ってことはセレスもいるんだよな！」

リームは首をかしげた。

「ガーランド？ セレス？ 誰それ」

「そいつらの名前だろうが、知らねえのか？」

ニムルドがそう言った瞬間、ラウドが疾走した。

「うおおおおっ！」

その槍の一撃がニムルドの頭を直撃し、弾き飛ばした。首のなくなった骸骨は、両手を振り回しながら右往左往した。

「おわっ、俺の頭が！」

リームは素早く彼の背骨をつかんでへし折り、体ごと持ち上げて

床に叩きつけた。

「ぐえっ！」

ニムルドはしばらく動かなかったが、やがて再び起き上がって自分の頭を拾い上げた。

「なんて野蛮な連中だ、まったく。お里が知れるぜ」

彼が頭を首の上に乗せると、ぴたりとくっついた。

「さあ、ここからは俺の反撃だぜ」

ラウドの額に冷や汗がにじんだ。

「こいつ、不死身か？」

リームも眉間に皺を寄せていた。

「まいったなあ、こんなの倒せないよ」

ニムルドが再びけたけたと笑った。

「当たり前だ、てめえらなんぞにやられるか。あの道具師ロイやら、魔剣士ネルなら話は別かもしれないねえがな！」

彼はそう言った途端、目にも留まらぬ速度で突きを繰り出した。

リームは身を翻してかわしたが、さらに斬撃が迫ってくる。今にも斬られるかと思われたとき、ガードが槍を構えて突きかかった。

「くせ者が、何度も何度も王女を狙いおって！」

槍はニムルドの頭部を貫いたが、彼は笑っているだけで倒れる様子もなかった。

「今日と言う今日は逃がさねえぜ、絶対に仕留めてやる！」

ニムルドが剣を振りかざしてラウドに斬りかかろうとしたそのとき、店の扉を開けて誰かが入ってきた。皆が一斉に目を向けると、ロイだった。

「なんだ、取り込み中みたいだな。えらいときに帰ってきたもんだ」
彼は金髪碧眼で肌が白く、中肉中背。目鼻立ちの整った、なかなかの美青年だ。今年で二十一歳。子どもの頃に魔物に襲われ、右目を失っている。

リームが満面に笑みを浮かべた。

「ロイ、お帰り！ 待ってたよ！」

「おう、ただいま」

ロイは笑顔を浮かべた後、ラウドとニムルドを一瞥した。

「さて、俺はどいつを片づけねばいいんだ？」

「その骸骨をなんとかしてよ、ニムルドっていう殺し屋だよ！」

ロイが冷たい視線を向けると、ニムルドはがたがたと震えだした。

「やべえ、本当にやべえ！ よりによって、こいつに会っちゃまうとはよお！」

第十九話

ロイはニムルドを見据えて尋ねた。

「なんだ、俺を知ってるのか」

「知らねえ方が不思議だぜ、ついてねえなあ」

「そうか、逃げるなら今だぞ。別に追う気もないしな」

ニムルドは震えながら剣を突きつけた。

「馬鹿言っんじゃねえよ、俺を誰だと思ってる。魔族きつての殺し屋ニムルド様だぞ？ 相手が最強の道具師だろうが、一步も引く気はねえよ！」

「そうか、勇敢だな。いい加減に震えるのをやめたらどうだ？」

ロイは背負っている布袋の中から、一本の瓶を取り出した。

「骸骨、一つ教えておいてやるよ。自分より強い敵に出会ったとき生き残るには、逃げるのが一番だ。そこでつまらない意地を張って無理に戦うから早死にする。今のお前はまさにそれだ」

それを聞いて、ニムルドの震えが激しくなった。

「人間の分際で俺をコケにしゃがって、もう許さねえ！」

彼は瞬時に間合いを詰め、ロイを袈裟がけに斬りつけた。しかし、その剣撃は綺麗にかわされていた。

「くそっ！」

さらに横薙ぎの一撃を放ち、上段から斬り下ろし、足を狙って斬り払った。だが、ロイは前後左右に少しずつ跳び回るだけですべてかわしていた。

「骸骨、おもしろい踊りだな」

「この野郎、とことん馬鹿にしゃがって！」

突然、ロイが瓶を投げつけた。それはニムルドを直撃し、中の液体が振りかかった。

「なんだこりゃ、なんの真似だ」

びしょびしょになったニムルドが首をかしげると、ロイは燭台に

近づいて一本のロウソクを手を取った。

「こういうことだよ」

彼がロウソクを突き出した途端、ニムルドの体にかかっている液体に引火した。

「ぐげあああつ！」

ニムルドは一瞬で炎に包まれ、倒れて転げ回った。ロイは無言でそのようすを眺めていたが、やがて思い出したように口を開いた。

「まずい、これじゃ店が火事になる」

彼は、ニムルドを蹴飛ばして転がしながら店の外へ出ていった。

リームとラウドは呆気にとられながら見送った。

やがて、ラウドが目を見黒させながら言った。

「なんだ、あいつは。信じられない強さだな」

リームが大きくうなずいた。

「まあねえ、人間の中じゃ一番強いんじゃない？ 魔物にだってあんなに強いのはいないと思うよ」

しばらくすると、ロイが店に入ってきた。手に一本の剣を持っている。ニムルドが使っていたものだ。

「骸骨はゴミ同然になったんで、適当に捨ててきた。この剣は戦利品だ。ほしい奴はいるか？」

ラウドが進み出て、剣をまじまじと見つめた。

「これは、まさか」

そのとき、二階からエルゼが降りてきて言った。

「随分騒がしいけど、何が……」

彼女は剣を目にした途端に叫んだ。

「その剣をどこで！」

ロイが剣を見つめながら答えた。

「ニムルドっていう殺し屋が持ってたんだ。今ちょうど始末したんで、もうこの世にいないけどな」

エルゼはロイに近づき、はらはらと涙を流した。

「それは、私の母が護身用に持っていた物です」

「そうなのか、じゃあお前さんに渡すよ。お母さんに返してあげてくれ」

「母はもうおりません、何者かに暗殺されたんです」

ロイはしばらく沈黙した後、剣を差し出した。

「じゃあ、これは形見だな」

「ありがとうございます、大切にします」

彼は剣を渡した後、頭をかいた。

「しまったなあ、あの骸骨を殺すんじゃないかった。お前さんの母親を暗殺した犯人なのか聞き出してあげばよかったよ」

「いえ、彼で間違いないでしょう。『王宮の中でニムルドを見かけた』という話を聞いておりますし」

ロイが目を見張った。

「王宮？ お前さんは一体……」

エルゼは「しまった」とばかりに口を押さえた後、おもむろに切り出した。

「もう隠し立てもできませんね。私の名はセレス・ティア・ラ・ロマージュ。現国王の娘です」

続けてラウドが口を開いた。

「俺はガーランド・シュバイヤー。近衛兵長だ」

ずっと黙っていたリームが口を挟んだ。

「え、今まで偽名を使ってたの!」

「騙してすまない、できる限り身分を隠しておきたかったのだ。王女の命を狙う不屈き者がいるのでな」

ロイはセレスとガーランドを交互に眺めた。

「それで、王女と近衛兵長がなんでこんな薄汚いところに?」

リームが目吊り上げた。

「薄汚くないよ、毎日掃除してるもん!」

「そうか、悪い悪い」

セレスはロイをじっと見つめた。

「ここには超一流の護衛士たちがいると聞きました。どうか、私を

王宮まで護衛してください」

「はあ？」

ロイは目をしばたいた。

「お前さん、王女だろ？ 護衛の兵士なんぞいくらでもいるだろうに、なんで俺みたいない一般市民にわざわざ頼むんだよ」

ガーランドがつつむきながら答えた。

「本当に情けない話なんだが、兵士の中に王女の命を狙う者が紛れ込んでいるんだ。だから、下手に護衛をつけられない」

ロイはしばらく沈黙した後、セレスを見つめながら言った。

「俺が思うに、王宮には帰らない方がいいぞ。母親が暗殺された上に自分の命まで狙われるような場所に行けば、結局早死にする事になるだけだ」

セレスは首を振った。

「父上が危篤なのです、帰らねばなりません。今まで、信頼できる護衛が見つからずに困っております。あなたは信頼できそうですし、ぜひお願いします」

「俺に頼まなくても、ガーランドがいるだろうに」

それを聞いて、ガーランドが歯を食いしばった。

「悔しいが、俺一人ではどうにもならんだ。敵が多い上に一人一人が強すぎる」

第二十話

「あんたはかなり強そうだけど、それでもだめなのか」

ロイが尋ねると、ガーランドはうなずいた。

「さすがに一人では無理だ。最近はろくに睡眠もとっていないし、このままでは倒れてしまう」

「そうか、今日はゆっくり休んだ方がいいぞ。俺とリームが番をしてやるから」

「護衛を引き受けてくれるのか？」

ロイがうなずくと、ガーランドは満面に笑みを浮かべた。

「セレス様、これほどの男が護衛についてくれたからにはもう心配ありません」

「そうですね。ロイ様、本当に感謝致します」

「気にするな。それより報酬についてだが」

セレスが沈黙すると、ロイはさらに続けた。

「額はお前さんに任せる。適当に払ってくれ」

リームが声を上げた。

「ええっ、金持ちが相手ならふっかけるはずなのに！」

「いくら金持ちが相手でも、窮状にある人間の足元を見るような真似はしたくない」

ロイはリームの腕に視線を移した。

「それより、怪我は平気なのか。俺が手当してやるつか？」

彼が腕に触れると、リームは真っ赤になりながら振り払った。

「いい、いい！ 大丈夫だから！」

「何を赤くなってるんだよ」

ロイが笑っていると、セレスが口を開いた。

「それでは、休ませていただきます」

「ああ、また明日な。ガーランドもゆっくり休みなよ」

セレスたちは頭を下げた後、二階へ上がっていった。ロイはそれ

を見届けると、店の入口に向かって声をかけた。

「おい、そこのお前は何か用なのか」

すると、扉を開けて一人の男性が入ってきた。年齢は二十歳前後、やせ型で長身。胸まで伸びた漆黒の長髪、病的なほどに白い肌をしている。着ているのは長袖の服とズボンで、腰に数本の短剣を帯びていた。顔立ちは調っているが、どこか影を感じさせる。

「よく気づいたな、さすがはロイだ」

「お前の異様な殺気に気づかない方がどうかしてるよ」
リームが目をしばたいた。

「私、全然気がつかなかったけど」

ロイは苦笑した。

「少し平和ボケしてるんじゃないか？」

「そうかなあ。ところで、まさかこの人も殺し屋？」

男は目を細めて言った。

「こいつはご挨拶だな、お前らと同業だよ」

「え、ごめんなさい！」

リームが必死になって謝っていると、男は笑いながら手を振った。
「そんな気にしなくていい。俺はレヴィンって言うんだ、よろしくな」

「どうも、私はリームです」

ロイはレヴィンを見据えながら言った。

「護衛士の組合から抜けたお前が、ここになんの用で来たんだよ」

「知ってるのか、これは話が早いな。実は折り入って話がある」

ロイはしばらく沈黙した後、口を開いた。

「話を聞こう。まあ座れよ」

レヴィンは椅子に座り、ロイもテーブルを挟んだ向こう側に座った。リームは紅茶を入れてレヴィンの前に置いた。

「わざわざすまないな、お嬢さん」

「いいえ」

レヴィンはロイに視線を移した。

「知つての通り、俺は他の組合に所属していた。しかし、一つ問題があつてな。そこは国に認可された組合であるがために、護衛の料金が最初から決められてしまつてゐるんだ。その点、この組合は自由に料金を設定できる」

ロイがうなずくと、レヴィンはさらに続けた。

「率直に言えば、俺はもつと金がほしい。だから前の組合を抜けてこちらに来た。どうか俺をここに入れてくれないか？ お前も知つての通り腕は立つぜ」

ロイはしばらく考え込んだ後、首を振つた。

「すまないが、他を当たつてくれ」

レヴィンは目を見張つた。

「なんだつて、俺の腕に不満があるのか！」

「腕じゃない、人間性だよ」

レヴィンはロイをにらみつけながら毒づいた。

「そうか、わかつたぞ。俺みたいな手練が入れば、お前の地位が危うくなる。だから難癖をつけて追い出そうつて言つんだな。小さい男だ！」

「なんとでも言え」

「俺を入れなかつたことを後悔するなよ！」

レヴィンは椅子を蹴り倒し、店から出ていった。リームはそれを見て、おずおずとロイに尋ねた。

「怒らせちゃつたみたいだけど、いいの？」

「いいさ、あんな奴を入れたら俺たちの命が危うくなる」

「どうということなの？」

ロイはリームを見つめながらしみじみと言つた。

「聞いての通り、あいつは金が目的で組織を乗り換えようとした。つまり金で動く人間つていうことだ。そういう奴は護衛士に向いていない」

「なんで？」

「金を積まれれば、敵にあつさり寝返る危険性が高いからだよ」

リームは目をぱちくりさせた。

「誰だってお金はほしい物だと思うけど」

「そりゃそうさ、でもな。俺にしるネルにしるアニエスにしる、この組合に所属している人間は金以外の目的を持って仕事をしているんだ」

「ロイだってお金持ち相手にふっかけるじゃない」

「もう二年くらいのつき合いなのに、まだ俺を理解してないらしいな」

ロイは、ため息をつきながら続けた。

「俺が金持ちからふんだくるのは、貧乏人をタダで護衛してやるためだ。自分のために使う金と言えば服や靴を買うのと、最低限の食べ物を買うだけ。家だつて持つちやいない」

「なんでわざわざ貧乏人のために？」

ロイは遠い目をしながら答えた。

「俺の両親は貧乏なせいで、弱い護衛しかつけられなかった。それで二人とも命を落とし、俺も片目を失った。こんな思いをする人間がこれ以上増えるのは絶対にごめんなんだよ」

「国に認可されてる組合は、結構安い料金で護衛してるらしいじゃない。あっちに入れば……」

「安いと言っても、男の月収くらいの料金は取るんだよ。認可されてない組合に比べて安いって言うだけなんだ」

第二十一話

「へえ、そうなんだ」

「それはさて置き、金を儲けるのが目的なら護衛士より殺し屋の方がいい。護衛は長いこと時間を取られるが、暗殺は殺してしまえば終わりだから数をこなせる。もちろん違法だし、相手によっちゃ時間を食うこともあるけどな」

リームは身震いした。

「ロイは暗殺なんかしないよね？」

彼は笑いながら答えた。

「しないよ。ただ、さっき来たレヴィンって奴は気になるところだな」

「どうして」

「俺たちの仲間になる気があるのなら、あんな殺気を放っているのは不自然だ。仲間になったふりをして誰かを殺すつもりだったんじゃないかな」

「まさかあ、考えすぎだよ」

「だといいけどな」

その後、数時間が経過して朝になった。ロイはセレスが起きてきたのを見て声をかけた。

「おはよう。悪いが、少しだけ眠らせてくれ」

「ずっと起きていらっしやっただのですか？」

「ああ、ニムルドみたいな奴がまた来たらまずいからな」

ロイが二階に上がっていくと、代わりにガーランドが起きてきた。久しぶりにぐっすり眠らせてもらった。ロイ殿のおかげだ」

リームがそれを聞いて微笑んだ。

「よかったねえ」

「ところで、他の護衛士はまだ戻らないのか」

「うん、来るまでご飯でも食べていようよ」

リームがテーブルに朝食を並べていると、店の扉が開いて一組の男女が入ってきた。

一人はバートだった。年齢は十九で、短い黒髪に浅黒い肌、精悍な顔立ちにがっしりした体をしている。金属性の鎧を着込み、二本の剣を佩いていた。

もう一人はネルだ。今年で十八歳。肩まで伸びた輝く銀髪、透き通った青い瞳と白い肌、整った輪郭にすらりとした手足をしている。着ているのは、一枚の大きな布であつらえた膝丈くらいの服だ。腰には剣を一本佩いている。

バートが満面に笑みを浮かべた。

「いやあ、ただいま！ リーム、会いたかったぜ！」

彼がリームを抱きしめると、彼女は悲鳴を上げた。

「嫌あああ！ 何すんの、暑苦しい！」

ネルが呆れながら声をかけた。

「ちよつと、やめなよ。嫌がつてるでしょ」

「俺みたいないい男に抱きしめられて、嫌がることなんかあるもんか！」

ネルは無言でバートの耳を引つ張った。

「いて、いててて！ 何すんだよ！」

「何すんだよじゃないでしょ、いい加減にしなさい！」

バートが引き離されたのを見て、リームが笑顔を浮かべた。

「ネル、久しぶり！ 強くなったもんだねえ」

「まあね。こんなのと四六時中一緒にいると、強くならざるを得ないんだよ。美女を見つけるたびにふらふらついていつちやうんだから。その度に叱ってつれ戻したよ。もう犬みたいな物で」

「俺を動物と一緒にすんな！」

「そうだね、ごめん。犬がかわいそうだよね」

「なんだと！」

バートが顔を真っ赤にしたが、ネルはそれを無視してセレスに視線を移した。

「この人は？」

リームがセレスを紹介した。

「こちらはセレスさん、王女様だよ。あっちはガーランドさん。近衛兵長だつてさ」

それを聞いた途端にネルとバートは後ずさり、慌てて平伏した。

セレスは、戸惑いながらネルに近づいて声をかけた。

「おやめください、どうかお顔を上げてください」

「とんでもございません、私のような下賤の者が王女様に近づくな
ど恐れ多いことです」

「お願いですから、どうかお立ちになつてください。そちらの方も」

二人が渋々立ち上がると、セレスはネルの手を取った。

「私は護衛の依頼に来たのです。どうか力をお貸しくください」

「勿体ないお言葉です。お力になれるかわかりませんが、がんばります」

そのとき、突然バートが進み出た。

「このバートにお任せください！ 俺はこの代表で、音に聞こえた護衛士……」

その途端、彼はネルに殴られた。

「代表はロイさんでしょ、堂々と嘘をつかないで！」

「いてえ！ お前、最近ロイさんの行動が似てきたな」

セレスが吹き出した。

「ネルさん、楽しいお仲間ですね」

「とんでもございません、色々と迷惑なだけです！」

「あつ、そういうことを言うか！ こないだ首狩り族に襲われたとき助けてやったのに！」

「あなたが私を助けたのはその一回だけだけど、私があなたを助けたのは十回を超えてるよね」

バートが歯噛みしているのを見て、セレスはまた笑った。

「本当ににぎやかでいいですね」

ネルは懽然としながら言った。

「にぎやかなのは認めますけど」

そのとき、バートがテーブルに近づいて声を上げた。

「おっ、骨付き肉がある！ 俺のために用意してくれたんだな！」
彼が肉にかぶりついた途端、リームが怒鳴った。

「ちよ、何してんの！ それは王女様たちの朝食……」

「え、俺のじゃないの？」

「なんでいない人の朝食なんか作るのよ、馬鹿ー！」

第二十二話

リームがぎゃあぎゃあわめくと、バートが真顔で言った。

「俺が悪かった！」

「謝っても肉は元に戻らないよ！」

「その通り、今さらどうしようもない」

彼はそう言いながら、再び肉にかぶりついた。

「だから、引き続き俺が食べるということだ」

リームは、バートの後頭部を殴りつけた。

「いってえな、何すんだよ！」

「何すんだよじゃないでしょ、本当に最悪だよ！」

リームはセレスに向かつて頭を下げた。

「ごめんなさい、お肉は今ので最後なんです」

セレスは苦笑しながら手を振った。

「いいんです、お気になさらないください」

「本当にごめんなさい。バート、あなたも謝ってよ！」

バートは、もぐもぐと口を動かしながらセレスに言った。

「いやあ、肉って本っ当においしいですね」

その途端、今度はネルにどつかれた。

「いってえな、どいつもこいつも！」

「あなたが悪いんですよ！」

バートは、ネルをじっと見つめて言った。

「ネル」

「何よ」

「想像してくれ。砂漠を丸一日飲まず食わずで歩き続けた男の前に、

「コップ一杯の水があったとする。彼はどうすると思う？」

「そりゃ、すぐ飲み干すでしょうね」

バートは力強くうなずいた。

「そうだ。ところが、それは王女様の水だった」

「はあ」

彼は両腕を広げた。

「しかし、だ。誰が男を責められるだろう。艱難辛苦を耐えてきた人間が、たった一杯の水を飲んだくらいで責められると言っるのはあまりにも酷な話じゃないか」

ネルは眉をひそめた。

「それがなんなの」

「だから、今まで護衛の任務についていた俺が骨付き肉にかじりついたくらいで責められるのは酷だと……」

ネルとリームの拳がほぼ同時に、バートの顔面にめり込んだ。

「いつてえええ！」

彼が叫ぶと、リームが平手打ちをしながら言った。

「変な言いわけしないでよ！」

さらに、ネルがバートの頬をつまんで引つ張った。

「どうすれば反省するの、あなたは」

セレスが苦笑しながらネルたちに声をかけた。

「あの、本当にもういいですから」

ガーランドはその様子を見ながら、げんなりした表情でつぶやいた。

「この連中が護衛で大丈夫なんだろうか」

やがて、ロイが二階から降りてきた。

「なんだか騒がしいな、誰か来たのか」

その声を聞いて、ネルが笑顔を浮かべた。

「ロイさん、お久しぶり！」

ロイはネルの姿を認めると目を細めた。

「ネル、久しぶり。また一段とかわいくなっただな」

彼女は顔を真っ赤にしながらかうつつむき、髪と瞳まで赤く染まった。

ガーランドがそれを見て声を上げた。

「髪と瞳の色が変わった！」

セレスがうなずきながら言った。

「『赤眼のネル』という異名があるのになぜ青い瞳をしているのか
と書いていましたが、謎が解けました」

「ガーランドはネルに近づき、上から下までじろじろと眺めた。

「君が魔剣士ネルか、噂は聞いている。強者ぞろいの護衛士たちの中
で屈指の戦闘力を誇るそうだな。しかし、とてもそうは見えない
んだが……」

ネルはすつと目を細めた。

「じゃあ、試してみます？」

そう言った瞬間、彼女は体から凄まじい殺気を放った。ガーラン
ドは圧倒されて立ちすくんだ。

「いや、いい。よくわかった。勘弁してくれ」

ネルは殺気を抑えて笑顔を浮かべ、ガーランドは胸を撫で下ろし
た。

そのとき、ロイが全員を見回しながら言った。

「護衛はこの三人で充分だろう、出発しようか」

ロイは道具や食糧などが入った布袋を背負った。ネルとバート、
セレスとガーランドも服や食糧が入った袋を背負った。

リームは店に残り、再び組合の受付を務めることになる。彼女は
ロイの顔を見つめて言った。

「必ず生きて帰ってきてね」

「ああ、約束するよ」

「ネルも気をつけて行ってきてね」

「ありがとう、行ってくるね」

バートが無言で自分を指さしたが、リームは無反応だった。

「おい、俺にはなんの言葉もないのか！」

「あなたは別にどうでもいいし」

「またまた、俺が帰ってこなかったら号泣するくせに」

「はあああ？ 誰が！」

二人が言い争いを始めたのを見て、ロイが慌てて引き離れた。

「さあ、行こう。目指すは王宮だ」

ロイの言葉に、同行の四人が手を振り上げた。
「おー！」

一行が最初に向かったのは、アルピナス火山だった。今は活動していないが、半年前に噴火したらしい。ごつごつした岩肌ばかりが目立ち、樹木がほとんど生えていない。

ロイが山頂を眺めながら言った。

「さて、どうしようか。まっすぐ登っていけば半日で向こう側に着く。遠回りしていくと一日以上かかる」

セレスが目をはちくりさせながら尋ねた。

「わざわざ迂回する必要があるんですか？」

ロイはうなずいた。

「この山には恐ろしく強い魔物が住んでるんだ。グレゴールっていう名前で、『炎の番人』とも呼ばれている。以前、他の組合の連中がこいつに襲われたことがあってね。護衛士五人のうち三人が殺され、二人が怪我を負わされたらしい」

バートが口を挟んだ。

「大丈夫、俺がぶつた斬つてやりますよ！」

「そんな簡単な相手じゃないんだ。まず奴の特徴としては、人間を狩るという点が挙げられる」

ネルが眉をひそめた。

「魔物が人間を狩るって、そんな」

「本当だよ。奴は『バラケード』っていう大トカゲを何匹も飼っていて、人間を見つけるとけしかけるんだ。それで人間たちの隊列が乱れたのを見計らって、真っ先にリーダーを殺してしまう」

ガーランドが感嘆のため息をついた。

「なんとという知能の高さだ」

「それだけじゃない、奴らは本当に強いんだ。トカゲの方は人間の三倍くらいの長さで、鋭い牙を持っている上に体が硬い鱗で覆われている。あと、赤い毒液を吐く。こいつを喰らうと鎧ごと溶かされ

る」

ロイ以外の四人は、一様に目を見開いた。

「さらにまずいのがグレゴールだ。大きさは人間と変わらない。見た目は、鳥の頭に人間の上半身と鳥の下半身をつけて背中に羽根をつけた感じだな。こいつは二足歩行で、口から火の玉を吐き出す」
バートが叫んだ。

「なんですか、それ。インチキすぎですよ！」

「それだけじゃない、凄まじい武器を持っている。刀身が燃えていて、折れることも刃こぼれすることもない魔剣だ」

聞いていた四人は、顔面を蒼白にしながら黙り込んだ。戦って勝てる相手とはとても思えない。

セレスがおずおずと尋ねた。

「遠回りしてふもとを歩いていけば、会う可能性は低くなるんですか？」

「奴は山頂付近に住んでいるから、上の方を堂々と歩くよりは低くなるかもしれない。あくまで『かもしれない』って言う程度の話だよ」

さらにガーランドが尋ねた。

「そんな奴に襲われたら、何か打つ手があるのか」

ロイは腕を組んで考え込んだ。

「あることはあるけど、危険なんだよなあ」

それを聞いて、バートが身を乗り出した。

「ロイさんをいけにえにして逃げるって方法ですね。ぜひやりましょー！」

そう言った途端、彼はロイとネルに代わる代わる殴られた。

「ぐえっ！ 何するんですか！」

「お前をいけにえにしてやるのか？ ん？」

第二十三話

ガーランドが、ロイをまっすぐに見つめて言った。

「どんな手があるのか聞かせてくれないか」

「敵の戦法を逆手に取るんだよ」

「逆手に？」

「奴はトカゲをけしかけた後、リーダーを狙って攻撃してくる。ここであんたに聞こう。今いる五人のうち、誰がリーダーだと思う？」

ガーランドはすかさず答えた。

「ロイ殿に決まっているだろう」

「じゃあ、リーダーに見えるのは？」

ガーランドは腕を組みながら全員を見回した。

「俺はこの中で一番年上だし、体格もいい。俺だろうな」

ロイがうなずいた。

「そこだよ。たぶんグレゴールも、ガーランドがリーダーだと勘違いするはずだ。だから真っ先にあんたを狙ってくる。この時点で俺は眼中にないわけだ」

「だろうな」

「奴があんたに気を取られている隙を狙って、俺が攻撃する」

ガーランドは首をかしげた。

「グレゴールは空を飛んでいるだろう、どうやって攻撃するんだ」

「これを使うのさ」

ロイは背負っている袋から、アーツと呼ばれる武器を取り出した。形は現代のクロスボウによく似ており、引き金を引くと連続で矢が発射される。弓の経験がなくても使える便利な物だ。矢の先には口イ特製の強力な毒が塗っており、これが体内に入ると呼吸困難に陥ったりしびれて動けなくなったりする。

ガーランドはアーツをしげしげと眺めた。

「この矢が当たる見込みはどのくらいあるんだ」

「距離によるからはつきりとは言えないんだが、まあ三割つてころだな」

「それじゃ倒せないだろう」

「これはあくまで作戦の一環だ。続きを聞いてくれ」

ガーランドが黙り込むと、ロイは全員を見回しながら説明を始めた。

「まず役割を分担する。ガーランド、ネル、バートの三人はトカゲの相手をしてくれ。奴らは突進する速度が人間より速いが、方向転換するのは人間より遅い。なので、常に横に跳びながら立ち回ると有利だ。それから先に言っておくが、正面から斬りかかったところで普通の剣では歯が立たない」

それを聞いて、バートが口を尖らせた。

「じゃあどうしろって言うんですか！」

「最後まで聞けよ。奴が大きな口を開けたら、毒液を吐き出してくる合図だ。まずはこれを横に跳んでかわせ。次に間髪入れず跳び込んで、奴の開いた口に剣を突き刺すんだ」

ネルがため息をついた。

「至難の技ですねえ」

「ネルなら正面きつて戦ってもいけるかもしれないな。お勧めはしないけど」

黙っていたガーランドが口を開いた。

「早く先を説明してくれ」

「あんたはネルやバートと違い、グレゴールの火の玉にも狙われることになる。気をつけてくれよ」

「わかった」

「俺はその間にグレゴールを狙う。矢が当たればいいが、たぶん当たらないだろうな」

「結局だめじゃないか」

「当たらなかつた場合は、とにかくグレゴールの火の玉をかわすことに専念してくれ。奴には、それと剣しか武器がない。通じないこ

とがわかれば剣を抜いて突撃してくるはずだ。そこを狙って俺が倒す」

「ガーランドが顔をしかめた。

「厳しい作戦だな、危険極まりない」

「やるのか、やらないのか」

「他に手はないんだろう？」

「俺にはこれしか思いつかないな」

「じゃあ、やるしかないじゃないか」

「セレスが口を挟んだ。

「あの、私はどうすれば」

「戦闘に参加する必要はないから、自分の身だけ護ってくれればいい。トカゲに狙われたら剣を突きつけて牽制してくれ。鳥に狙われたら俺の影に隠れるんだ」

「わかりました」

「他にいい作戦があれば、誰か提案してくれ。なければこれでいくけどいいか？」

四人は渋々ながらもうなずいた。ロイはバートが不満そうにしているのを見て意外に思い、声をかけた。

「ガーランドが文句を言うならともかく、お前は何が気に入らないんだよ」

「事実上のリーダーがロイさんで、リーダーに見えるのはガーランドさん。じゃあ俺はなんなんですか」

「ロイは首をかしげた。

「なんなんだって、そりゃ……」

「どうせ俺は下っ端だよ！」

「誰もそんなこと言ってないだろ」

「見てるよ、いつかリーダーになってやるからな！」

「ロイは肩をすくめながらため息をついた。

「わかったわかった、さあ行こうか」

「ちっともわかってないくせに！」

ロイはかまわず、セレスに視線を移した。

「まっすぐ登るか迂回するか、どっちがいい？ お前さん次第だ」
セレスはロイを見つめた。

「私は一刻も早く王宮にたどり着きたい。まっすぐ行くことを望みます」

バートが笑顔で同調した。

「そうこなくっちゃ。魔物がいるから避けて通るなんて、まどろっこしいことはできないですよね」

ロイはガーランドに視線を移した。

「異存はないか？」

彼は大きくうなずいた。

「セレス様がそうおっしゃる以上、俺に異存などない」
「わかった。じゃあまっすぐ行こう」

五人は、岩と渴いた土ばかりの山をまっすぐ登っていった。樹木がほとんど生えておらず、身を隠す場所はない。グレゴールに見つかるのは時間の問題だった。

しばらく歩いていると、はるか遠くから甲高い鳴き声が聞こえた。

ロイは素早く視線を走らせ、グレゴールの姿を認めた。

「どうやら見つかったらしいな」

ロイがそう言うと、バートがいまいました。眉をひそめた。

「あの鳥野郎、なんとか撃ち落とせないもんですかね」

「今は無理だな、距離が離れすぎてる」

やがて、かすかに見えていたグレゴールの姿が消え去った。ロイはすぐさま全員に呼びかけた。

「奴はバラクードをかき集めて来るはずだ、気を引きしめろ！」

その声に応じ、バートとセレスが剣を抜いた。ガーランドも槍を握りしめている。

最後に、ネルがグラフィードを引き抜いた。紫色の光を放つ魔剣だ。その斬れ味は普通の剣の比ではない。さらに、彼女の髪と瞳が赤く染まった。こうなると戦闘能力がはね上がり、相手が人間たる

うが魔物だろうが簡単に引き裂いてしまふ。

ロイがネルを一瞥した。

「ネル、頼りにしてるぞ」

それを聞いた彼女は強くうなずいた。

「任せといて」

一行がしばらく山道を歩いていると、向こうから隊列を組んだトカゲの集団がやってきた。ロイがそれを見て叫んだ。

「来たぞ、バラクードだ！」

ロイをのぞく四人は剣や槍を構え、バートが前に進み出た。

「ほら、かかって来い！ このバート様に勝てると思うなよ！」

すると、トカゲたちは走り寄ってきた。人間の大人の身長を二フイードとすると、彼らの体長は三フイード近くある。しかも口には鋭い牙が並んでいる。危険な敵であることに間違いなかった。

第二十四話

敵の数は全部で五匹だ。バートは左右二本の剣を握りしめ、先頭のバラクードに跳びかかった。

「うおらあああっ！」

彼は渾身の力でトカゲの頭部を斬りつけたが、わずかに出血させるだけの結果に終わった。ロイがそのような様子を見てため息をついた。「あいつ、俺の話をちゃんと聞いてたのかな」

ネルが首を振った。

「絶対聞いてないよ、バートだし」

その間に、バートは二匹目の頭部を狙って斬りつけた。しかし、こちらも刃が立たなかった。

「ちくしょう、なんだよこいつらは！」

彼が叫びながら跳び下がると、バラクードたちが一斉に口を開いた。ロイはそれを見て叫んだ。

「バート、毒液が来るぞ！ 横に跳んでかわせ！」

「わかりました！」

彼が大きく横に跳躍すると、その脇を毒液の塊が通りすぎていった。次の瞬間、ガールランドが槍を構えて突進した。

「うおおおおっ！」

その巨体が繰り出した強烈な突きが、先頭にいたバラクードの口から頭にかけて貫いた。途端に青い血飛沫が上がり、トカゲはその場に崩れ落ちた。

「よし、次だ！」

彼がそう言いながら横を見ると、首を斬り裂かれたバラクードの死体が転がっていた。

「ええっ？」

ガールランドは仰天しながら周囲を見回した。誰がやったのか知らないが、人間業でないことだけは確かだ。やがてその視線の先にネ

ルが映った。

彼女はグラフィードを振りかざし、次のバラクードを斬り刻んでいた。バートの一撃を受けても動じなかった大トカゲが、鮮血を噴き出しながら倒れている。ガーランドはそれを見てため息をついた。「あれが魔剣士ネルか、道具師ロイに匹敵する強さだな」

一方、セレスは二匹のバラクードに狙われていた。剣を構えて牽制しても、彼らはおかまいなしににじり寄ってくる。彼女はたまらず悲鳴を上げた。

「誰か助けて！」

その声に応じ、ロイがセレスの前に跳びだした。

「下がってる！」

セレスはうなずき、急いで逃げだした。ロイはそれを見届けてからバートに向かって叫んだ。

「こいつらをなんとかしてくれ！俺はグレゴールの相手をしなきゃならないんだ！」

「まったく、人使いが荒いなあ」

バートは剣を振りかざして疾走した。

「らあああつ！」

彼の二本の剣が閃光と化し、バラクードの首を斬りつけた。だが、わずかに出血させただけで効果がなかった。

「だめならもう一度斬るだけだ！」

バートは同じ場所を狙って何度も斬りつけた。やがてトカゲの首から血飛沫が上がった。

「おらおらおらおら！」

バートの連撃を受け、バラクードは首をずたずたに斬り裂かれて倒れ伏した。その間に、もう一匹のバラクードはガーランドの槍に目を突き刺されていた。

目の痛みでのたうち回っているトカゲの前に、ネルが現れた。

「ごめんね、さようなら」

彼女が剣を一闪させると、バラクードは血を噴いて絶命した。

上空で戦いのようすを見ていたグレゴールは、ひたすら驚愕していた。五匹いたバラクードが全滅させられている。考えられないことだった。

今まで襲った人間たちは皆、トカゲをけしかけただけで大混乱に陥った。その隙を狙ってリーダーを倒してしまえば、統率する者がいなくなり壊滅するだけだった。

しかし、今回の五人は違う。トカゲにやられるどころか逆に屠ってしまったのだ。しかも戦ったのは五人のうち三人だけで、余力を残していることは充分に考えられる。

グレゴールは襲撃をあきらめて逃げることも考えた。しかし、仲間を全滅させられたまま引き下がるのはあまりにも癪だ。そこで五人を狙って次々と火の玉を吐き出した。

その瞬間、ロイが叫んだ。

「撃ってきたぞ、みんな気をつける！」

人間の拳大の火の玉が次々と振り注いだ。しかし、全員が的確にかわしており当たる気配がない。ロイはすかさずアーツを構え、グレゴールに向かって次々と矢を発射した。

グレゴールは素早く飛び回り、辛くもロイの矢をかわした。お返しとばかりに火の玉を吐き出しまくったが、ロイにはかすりもしない。業を煮やしたグレゴールは剣を抜いた。刀身が炎に包まれた凄まじい魔剣だ。

ロイは袋から瓶を取り出して左手で上下に振り、さらに分銅のついた鎖を取り出して右手で振り回した。

「さあ来い、お前に殺された護衛士たちの仇をとってやる！」

その声に応じ、グレゴールがロイに向かって急降下してきた。バートやネルが応戦しようとしたがとても間に合わない。炎の剣がロイの眼前に迫った。

グレゴールの放った鋭い斬撃がロイの右肩をかすめ、鮮血が飛び散った。しかし、彼は顔色一つ変えずに鎖を投げつけた。

鎖は炎の剣に巻きついた。グレゴールは慌てて振りほどこうとし

だが、もう遅い。ロイは動きの止まった相手に瓶を向けて蓋を開けた。途端に緑色の液体が噴き出し、グレゴールに降りかかった。

「グガアアアッ！」

グレゴールが絶叫した。この液体はロイが作ったもので、極めて強い酸性と毒性を持っている。彼が痛みではたついていて、バートが跳びかかってきた。

「これでも喰らいな、鳥野郎！」

バートは全体重をかけて正面から斬り下げた。グレゴールは真つ二つに斬り裂かれ、肉片と化して転がった。

「っしやあ、見たか！」

バートが拳を振り上げた。ロイはそのようすを眺めながらぼつりと言った。

「俺の見せ場を取りやがって」

バートは胸を張りながら高笑いした。

「まあ、これが俺の実力ですよ。当然の結果ですよね！」

「ところで、お前は俺の話を全然聞いてなかっただろ。トカゲを正面から斬ったところで……」

「終わったことは気にしない！ それより、この剣をもらっていいですかね？」

バートは炎の剣を手を取った。ロイは剣をしげしげと眺めた後、セレスに尋ねた。

「バートがこう言ってるけどいいか？」

彼女は笑顔でうなずいた。

「ネルとガーランドは？」

「別にいいよー」

「俺も異存はない」

バートは跳び上がって喜んだ。

「っしやあ！ これで俺は最強の剣士になったぜ！」

ネルがそれを聞いて目を細めた。

「最強？ あなたが？」

バートの顔から血の気が引いた。

「いや、なつたつもりと言っつか、なれたらいいなあと言っつか
ネルがくすくすと笑った。

「ロイさんや私を差し置いて、あなたが？」

「いや、あの」

「ふーん、じゃあ私と一対一で戦って勝てるんだ。すごいねえ」
バートの声がだんだん小さくなった。

「やっぱり二番……いや、三番でいいかな」

ロイがそれを見て吹き出した。

「なんだ、お前らしくもない。『勝てるに決まってるだろ』って言
つてやれよ」

「そんなこと言ったら虐殺されるじゃないですか！」
ネルが満面に笑みを浮かべた。

「虐殺なんかしないよ、ひと思いにばつさりやってあげる」

バートが悲鳴を上げた。

「ロイさん、この赤い女を止めてください！ ほとんど殺人兵器で
すよー！」

「止めるのは無理だな、俺も命は惜しいから」

バートが逃げ出そうすると、ネルに捕まった。

「そんなに怖がらないで、冗談だよ。あんまり調子に乗ってるから
こらしめただけ。これからはロイさんの言っことを聞きなよ」

バートは顔をしかめた。

「お前が言っつと冗談に聞こえないんだよ！」

第二十五話

グレゴールを葬ったロイたちは、再び山道を進んでいった。

ロイが傷ついた右肩を消毒しながら歩いているのを見て、ネルは眉をひそめた。

「傷は大丈夫なの？」

「ああ、こんなのどうってことないよ」

「ロイさんに何かあったら、私……」

ロイは歯を見せて笑った。

「大げさだなあ、ネルは」

バートが同調した。

「本当だよ、俺が怪我しても気にしないでくせに」

すると、ネルがしれっとした顔で言った。

「別にバートはどうでもいいし」

「なんでリームにしろお前にしろ、俺に対してそんなに冷たいの？」

「なんでって、なんとなく」

バートは首を振った。

「やれやれ、好きな相手ほどいじめちまうっていう心理か」

「はあ？」

「まあいいや、それよりこの魔剣を見てくれよ。鞘に入れると炎が消えるのに、外に出すと燃えだすんだぜ！」

ガーランドが剣をまじまじと見つめた。

「すごいもんだな、名前はあるのか？」

バートは首をかしげた。

「ロイさん、これって名前はあるんですか？」

「さあ、聞いたことがないな」

「じゃあ俺が勝手につけてもいいですかね？」

「好きにすればいいさ」

バートは腕を組んで考え込んだ。

「やっぱり『バート様最強』かな。『バート様最高』もなかなかいい。『バート様抱いて』も捨てがたいな」

すると、ロイが首を振りながらバートの肩を叩いた。

「魔剣グレゴールにしとけ」

「どうしてですか！」

「グレゴールが持ってたからだよ」

「そんなの嫌です！」

「魔剣『バート様抱いて』よりはずっとましだろ」

「どこがですか！」

「じゃあ多数決にしようか。『魔剣グレゴール』がいい人は手を挙げてくれ」

その言葉に応じ、バート以外の全員が手を挙げた。バートはぷりぷりしながら叫んだ。

「魔剣『バート様抱いて』がいい人！」

手を挙げたのは彼だけだった。

「うわあああ！ 覚えてるお前ら！」

剣の名前はグレゴールに決定した。バートは地団駄を踏んだが、判定は覆らなかった。

五人がさらに山道を進んでいくと、向こうから一人の男性が歩いてきた。年齢は二十歳前後、やせ型で長身。胸まで伸びた漆黒の長髪、病的なほど白い肌をしている。着ているのは長袖の服とズボンで、腰に数本の短剣を帯びていた。

ロイはその顔を見て目を細めた。

「あいつ、なんでこんなところに」

男は無言で近づいてきて、五人の前に立ちふさがった。

「よう、ロイ」

「レヴィン、なんの用だ。組合に入れろって話なら……」

「違うよ」

彼はロイたちを見回した。

「この山にはグレゴールがいるだろ。何人かやられたんじゃないか

？」

「あいにくだが、それはないな」

レヴィンはため息をついた。

「まあ所詮は鳥だな」

ロイはレヴィンを見据えながら尋ねた。

「それよりなんの用だ。俺たちは先を急いでるんだよ」

「ああ、それはだな」

レヴィンは口角を吊り上げた。

「道具師ロイ、ここで死ね」

彼は腰の短剣を引き抜くが早いか、ロイに向かって投げつけた。

ロイはとっさに身を翻し、辛くもこれをかわした。

次の瞬間、バートが魔剣グレゴールを抜いてレヴィンに斬りかかった。

「この野郎！」

しかし、レヴィンは薄笑いを浮かべながら悠々とこれをかわした。そこにガーランドが突きかかった。

「くせ者め！」

レヴィンは跳び上がって槍をかわし、同時にガーランドの顔面を蹴飛ばした。

「ぐあっ！」

ガーランドが顔を押しえると、レヴィンは地面に降り立ちながらあざ笑った。

「笑わせるなよ、おっさん」

その途端、紫の閃光が走った。ネルの魔剣グラフィードだ。

「おおっと、危ねえ」

レヴィンは軽く後ろにのけぞっただけでこれもかわした。それを見たロイが慌てて仲間たちに呼びかけた。

「みんな下がれ、そいつは危険だ！」

レヴィンは一旦跳び下がり、余裕の表情で全員を見回した。バート、ネル、ガーランドの三人は武器を構えたまま絶句していた。こ

の男の強さは桁違いだ。三人の手練を相手にして息一つ切らせていない。

レヴィンはネルを見つめた。

「ロイの強さを十とすると、お嬢さんは七か八つてところだな。なかなかのもんだ」

ネルがレヴィンをにらみつけたが、彼はかまわずガーランドに視線を移した。

「おっさんは四か五つてところかな」

突然バートが怒鳴った。

「俺はいくつだよ！」

「せいぜい二か三だ」

「ふざけんな、この野郎！」

バートが激昂して斬りつけると、レヴィンは軽く横に跳んだだけでかわした。

「こいつ！」

バートは間髪入れずに上段から斬り下ろし、胴を狙って薙ぎ払い、さらに顔面を狙って鋭い突きを放った。レヴィンは跳び回りながらすべてかわし、直後に短剣を引き抜いて一閃させた。

「ぐあっ！」

バートは右手の甲を斬られて剣を取り落とした。レヴィンはそれを見てせせら笑った。

「弱い奴がでしゃばるなよ、早死にするぜ」

そのとき、ロイが進み出た。

「みんな下がれ、こいつは俺が倒す！」

レヴィンは、ロイが右肩を押さえているのを見て尋ねた。

「なんだ、怪我してるのか？」

「だったらなんだよ」

レヴィンはため息をついた。

「やめだ、また今度にしよう」

「甘くみるなよ、少し怪我したくらいで……」

「違う、無傷のお前を倒さないと意味がないんだよ」

ロイは首をかしげた。

「なんだよ、それは」

レヴィンはロイを見つめた。

「俺は護衛士から殺し屋に転職した。そっちの方が金になるからなところ俺は、殺し屋として名前が通っていない。そこでお前さんを標的にしたんだ」

「なんだかよくわからないな」

「護衛士として有名なお前を正面きって倒せば、俺の実力は国内外に鳴り響く。当然ながら商売もやりやすくなるって話だよ」

「要するに売名目的か」

「ああ。だから、弱っているお前を相手にしても仕方がない。『ロイが怪我をしていたから勝てたんだ』なんて思われたら意味がないからな」

ロイはすつと目を細めた。

「怪我が治ってぴんぴんしてる俺と戦って勝てるつもりか？」

「さあ、それは微妙なところだな」

「もう一つ聞こう。お前は以前、俺の組合に来たことがあったな。」

そのとき組合に入りたいと言ったが、あれは嘘なのか？」

レヴィンは鼻で笑った。

「真つ赤な嘘だよ、偵察に行ったただけだ。怒って出ていったのも演技だよ」

レヴィンはそう言うのと踵を返した。

「じゃあな、ロイ。首を洗って待ってる」

彼が去っていくのをロイたちは呆然と見送った。最強の道具師と赤眼の魔剣士を含む五人を平然と相手にする人間がいるなど、考えられない話だった。

バートが右手を左手で押さえながら叫んだ。

「ちくしょう、この借りは絶対返してやるからな！」

セレスがロイに近づいて尋ねた。

「あの男について何かご存知ですか？」

ロイはレヴィンが去った方角を見つめながら答えた。

「この国には約五千人の護衛士がいる。その中で一番強いと言われているのが俺だ。レヴィンも屈指の使い手なんだが、その割に名前を知られていない。あまり仕事をしなかったからな」

「どうして仕事をしなかったんでしょう」

「人を護るには、四六時中気を張っていないければならない。あいつにはそれが堪えられなかったんだよ」

セレスはうなずいた。

「だから護衛士をやめて殺し屋になったんですね」

「それもあるだろうし、殺し屋の方が儲かるっていうのもあるんだろうな。高額な報酬を請求できるし、殺せば終わりだから数をこなせるし」

ガーランドが口を挟んだ。

「彼が殺し屋になったいきさつはともかく、正々堂々と正面から戦おうという男気には感心させられたな」

ロイは考え込んだ。

「それは男気によるものじゃなくて、その方が名前が売れるからだと思うよ」

第二十六話

ずっと黙っていたネルが震えながら口を開いた。

「私の攻撃がかすりもしないなんて、どれだけ強いのか」

ロイはうなずいた。

「世の中広いからな、中にはあんなのもいるのさ。下手な魔物を相手にするよりよっぽど危険だ。本当に強い奴ってというのは、本人が人間であるか魔物であるかに関わらず恐れられているもんだよ」

ネルはおびえた目でロイを見つめた。

「あなたもその一人なんだよね」

ロイはぼかんとしていたが、やがて頭をかきながら言った。

「そうだけど、あまり怖がられると悲しいと言うかなんと言うか」

すると、セレスが進み出てロイの手を握りしめた。

「私は怖くなどないです、あなたを信頼していますから」

ネルは目を見開いてロイにすがりついた。

「私だってロイさんを信頼してるからね！」

ロイは二人を交互に見ながら口ごもった。

「いや、その、ありがとう」

バートがぶすつとした顔で言った。

「ちえっ、なんでロイさんばかりもてるんだよ」

すると、ガーランドがバートに近づいて肩を組んだ。

「信頼してるぞ！」

バートは顔をしかめた。

「ちくしょう、嬉しくねえなあ」

ロイはガーランドを見つめて尋ねた。

「手酷く蹴られたみたいだけど、平気なのか？」

「あの程度、どうってことはない」

「そうか、さすがだな」

ロイはバートに視線を移した。

「お前は手を斬られたんだっとな、手当てをするから……」
「できればロイさんじゃなくて、ネルか王女様にしてもらいたいです」

ロイがネルを見ると、彼女は知らんぷりをしている。セレスを見ると、困惑しながら両手を振っていた。

ロイはバートに視線を戻した。

「そういうことだから、あきらめな」

「なんでこうなるんだよ、ちくしょう！」

バートは手当てをされた後、ロイに尋ねた。

「俺ってそんなに弱いですか？」

「いや、その辺にいる剣士よりずっと強いと思うよ」

「レヴィンが、俺の強さは二か三だっつて」

「あまり気にするな」

バートはロイをまつすぐに見つめた。

「正直に答えてください。自分の強さを十としたとき、俺はどのくらいだと思いますか」

ロイはしばらく考え込んだ後、おもむろに言った。

「三かな」

バートは頭を抱えた。

「うわあああ、やっぱりそうなんだ！」

「落ち着けよ。お前は筋がいいし、これからどんどん伸びるはずだ。知識と経験を積み重ねていけば、そのうちもっと強くなれるさ」

「強くなれるって、どのくらいまでですか」

「それはわからないよ」

バートがしよげ返っているのを見て、ロイはその肩を叩いた。

「さっきグレゴールを両断した一撃はすごいものだった。大丈夫、お前なら一流の剣士になれる。俺が保証するよ」

バートは満面に笑みを浮かべた。

「ありがとうございます！」

ネルがそれを見てくすりと笑った。

「すごく単純だよね、あなたって」

バートは眉間に皺を寄せた。

「なんか底意地が悪いよな、ネルって」

「はあ？ 何言ってるの」

「なんだよ、本当のことだろ」

二人がにらみ合いを始めたのを見て、ロイはため息をついた。

「お前たち二人は離れて歩け」

五人は歩き続けて山を越え、ふもとにあるルーベンスの街に着いた。石造りの高い壁に囲まれた城塞都市だ。

中に入ると、バートが一目散に駆けだした。

「うおお、飯だ飯だ！」

ロイが引き止めようとしたが、とても間に合わない。どうしようかと思っていると、ネルがくすりと笑った。

「大丈夫だよ、お財布を取り上げてあるから」

やがて、バートが半べそをかきながら戻ってきた。

「金がないのを忘れてた」

それを見たネルが呆れ顔で声をかけた。

「いつもいつも集団行動を乱してばかり。少しは反省しなよ」

「やなことだ。それより俺の財布を返せ！」

「だめだよ、持たせるとすぐどこかに消えちゃうんだから」

バートは口を尖らせた。

「お前は俺の親か？」

「違うよ、あなたがあまりにも子どもだから代わりに叱ってるだけ」

「俺より年下のくせに生意気なんだよ！」

「何よ、やるの？」

ロイは盛大なため息をつき、がっくりと肩を落とした。この二人は寄ると触ると喧嘩になる。その上、止めてもなかなか収まらない。

ガーランドがロイの肩を叩いた。

「統率する人間の辛さがわかるだろう？」

ロイが黙ってうなずくと、セレスがしみじみと言った。

「世の中には合う人間と合わない人間がいるんですよ。同じ生き物なのに悲しいことです。私と執政官も少しはわかり合えれば……」
「執政官？」

「いえ、私事です。失礼しました」

セレスの顔は憂いを帯びていた。するとバートが彼女を見てつぶやいた。

「そういう表情も、またいいですね。美人は何をしても様になるなあ」

「えっ？」

セレスは顔を赤らめながらうつむいた。

五人はつれだつてルーベンスの街を歩いた。堅牢な煉瓦造りの建物が整然と並んでいる。また、ここは「水の街」と呼ばれているだけあつて内部を大きな運河が横切っており、そこから枝別れした水路が街の至るところを流れていた。

セレスがそのようすを見ながらロイに言った。

「ああやって各所に水を引いているんですね」

「ロイがうなずいた。」

「建物と言ひ水路と言ひ、よく整備された街だな。しかも人が多くて活気がある。そのくせゴミ一つ落ちていないのがたいしたもんだ。なかなかいいところだね」

目抜き通りを歩くと人でごった返していた。道の両側には商店や屋台が並び、売り子がさかんに客を呼び込んでいる。商品は食べ物や衣類を始め、書物や薬、食器など様々だった。

バートがロイに声をかけた。

「腹が減りました。ここで何か食べませんか」

「いいけど、あまり高そうな店はちよつとな」

「じゃあその辺の屋台にしましょう」

ロイは屋台を眺めた。

「ぼつたくらえたりしないだろうな、中にはそういうのもいるからさあ」

「値段がちゃんと書いてありますし、大丈夫ですよ」

ロイははつとしてセレスを見つめた。王女に食事をさせるのに、屋台はまずいのではないだろうか。

セレスはにっこり微笑んだ。

「私はかまいませんよ、お任せします」

ガーランドが横で苦い顔をしたが、特に何も言わなかった。「王女本人がいいと言っているなら仕方がない」と思っているのだ。

バートが近くにある屋台を指さした。

「じゃあ、あそこにしますか」

それは、四十がらみで小太りの女性がやっている屋台だった。パンや肉、果物や野菜などが陳列されており、彼女の前には鍋や鉄板、食器などが並んでいる。

ロイがうなずくと、バートは屋台の椅子に腰を下ろした。

「おばちゃん、なんでもいいからくれよ！」

ロイも苦笑しながら腰を下ろした。

「適当な奴だなあ」

他の三人も彼に続いて座った。

店の女性は首をかしげた。

「なんでもいって言われてもねえ」

するとバートが笑顔で言った。

「腹にたまるものならなんでもいいよ」

すると、女性は焼いた豚肉と生野菜が挟まったパンを差し出した。

「これなんかどうだい？」

バートはパンを受け取って頬張った。

「うめえ！ おばちゃん、目茶苦茶うめえよ！」

彼がにこにこ笑いながら食べているのを見て、女性も笑いだした。

「あんた、本当においしそうに食べるねえ。他にも食べるかい？」

「おう、食べる食べる！」

女性は鍋の中から何やら料理を取り出した。バートが見てみると、トマトと一緒に煮込んだ鶏肉だった。

「いいねえ！ 最高だよおばちゃん！」

バートが鶏肉をぱくついているのを見て、ロイがしみじみと言った。

「お前、本当に幸せそうだなあ」

「そりゃそうですよ、うまいもの食べてりゃ」

ネルがくすくす笑った。

「単純でいいよねえ」

「ふん、偉そうに。お前はロイさんに優しくされてりゃ幸せなんだろう？ 単純さじゃ俺といい勝負じゃないか」

「な、何を……」

ネルの顔がみるみるうちに赤くなり、髪と瞳まで赤に染まりだした。バートはそれを見て爆笑した。

「わかりやすっ！」

「よ、よくも……バートのくせに！」

「ああ？ バートのくせになってなんだよ！」
すると、店員の女性が怒鳴った。

「うちの店で喧嘩はやめとくれよ！」

その剣幕に二人は縮こまった。ロイはそれを見て感嘆した。

「こいつらを一瞬で黙らせるとはたいしたもんだな」

女性は笑って言った。

「恐れ入っただろ。そうだ、兄さんは何か食べないのかい？」

第二十七話

「あまり腹は減ってないんだよなあ。それより喉が渴いたんで、何か飲み物をくれないか」

「はいよ」

女性は大きな缶を取り出し、中身をコップに注いだ。オレンジ色をしたジュースだった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

ロイはジュースを受け取り、少し飲んでみた。

「濃厚な甘みがある割に後味はさっぱりしている。不思議なもんだな。なかなかうまい」

女性は強くうなずいた。

「そうだろそうだろ。この辺りで採れるサンゴラって果物で作ったんだよ。これが実物ね」

彼女は陳列してある果物を手に取った。皮が赤く、丸い形をしている。ネルがそれを見て目を輝かせた。

「食べてみたーい！」

「そうかい、じゃあ切ってあげるよ」

女性はするするとサンゴラの皮を剥き、いくつかに切って皿に盛りつけた。オレンジ色のみずみずしい果肉が輝きを放っている。

「いただきまーす！」

ネルはサンゴラを頬張った。

「おいしーい！ 幸せー」

途端にバートが鶏肉を嘔き出した。

「お前、人のことを単純とか言っておきながら……」

「え、そうだっけ？ えへへ」

「えへへじゃねえよ、まったく」

ロイたちはしばらく屋台で食事をした。バートは肉や野菜を山の

ように平らげ、ネルやセレスを驚かせた。

ロイはそのようすを横目で見ながら女性に尋ねた。

「この街は平和でいいな」

「まあそうなんだけど、最近困った人たちが来るようになってねえ」
「困った人たち？」

「この国の王城から来た兵士たちだよ。行方不明になってる王女様を探してるらしいんだけどね。ものすごく態度が横柄で、酷いことになるとお金を払わないんだよ」

セレスが目を見開いて言った。

「私の城に勤めている兵士たちはきちんと教育されています、そんなことをするはずが……」

女性は目を丸くした。

「私の城？」

セレスは慌てて手を振った。

「以前、お城で働いていたことがあるんです、それでつい」

「ああ、そうなのね」

ロイが全員に呼びかけた。

「さて、そろそろ行くか。今日の宿を探さないとな」

他の四人がうなずくと、彼は全員の料金を払って立ち上がった。するとバートが叫んだ。

「ロイさん太っ腹！」

ネルが頭を下げた。

「ごちそう様です」

ロイは何も反応せず、遠くを見つめていた。セレスが不審に思い声をかけた。

「どうかしたんですか」

ロイはようやく口を開いた。

「誰かに監視されていたようだ。俺がにらみつけたら逃げたけどな」

「どんな人間でしたか」

「ガーランドと同じ鎧を着て、槍を持ってたよ」
「ガーランドが目を細めた。」

「俺と同じ恰好をしていたのなら、兵士である可能性が高いな。問題は、彼が悪意を持っているかいないかだ」

「悪意を持っている奴は暗殺を狙うわけか」

「ガーランドは大きくうなずいて言った。」

「もっとも好意を持っている人間なら、逃げたりせず声をかけてくるだろう。逃げたところを見るとどうも怪しい。早くこの街を離れた方がよさそうだな」

「そうだな、じゃあさっさと行こう」

五人はつれだつて歩きだした。しばらくすると、目の前に五人の兵士が立ちふさがった。

兵士の一人がロイを見据えた。

「我々は王女とガーランドに用がある。他の者は立ち去ってもらおうか」

ロイはすつと目を細めた。

「それはできないな、俺は王女の護衛なんぞね」

兵士は目を丸くした。

「護衛だと？ どの馬の骨が知らんがとつと消え失せる。王女は我々が預かる」

「ガーランドが口を挟んだ。」

「お前はどこの所属だ。なんの権限があつてそんなことを言っている」

兵士は口角を吊り上げた。

「貴様に教える必要などないわ、誘拐犯が」

「誰が誘拐犯だ。俺は王女を護るよう、国王から直々に命令されてここにいます」

「よくそんな出まかせが言えるものだな」

「ガーランドは必死に怒りを抑えながら冷たい声で言った。」

「これが国王からの命令書だ、よく見る」

彼は懐から丸めた紙を取り出して広げた。それには、王女専属の護衛に任命するという文章と共に国王の署名があつた。

しかし、兵士は一瞥しただけであざ笑つた。

「そんなものまで偽造するとはご苦労なことだ。今、城内は貴様が王女を誘拐したという噂で持ち切りだぞ」

「ふざけるな、そんなことをしてなんの得があるんだ！」

「俺が知るか、自分の胸に聞いてみる」

ガーランドが激昂して突きかかろうとしたのを、王女が必死で止めた。

「おやめなさい！ あなたが忠義の士であることは、私がよくわかつております。このような者たちの虚言に惑わされてはなりません！」

兵士がにやにやと笑いながら言つた。

「ガーランド、今すぐ王女を引き渡すなら貴様を見逃してやる。抵抗する気なら容赦なく殺す。好きな方を選べ」

「ふざけたことをぬかすな！」

なおも突きかかろうとするガーランドを、王女がまた必死で止めた。

「わかりました、私がそちらに行けばいいのですね。ガーランド、ここでお別れです」

「王女、なりません。危険です！」

兵士が口を挟んだ。

「王女がこう言つておられるのだ、貴様はさつさと消えろ」

ガーランドが歯ぎしりしていると、ロイが進み出た。

「悪いが王女は渡せないな」

兵士はロイをにらみつけた。

「まだいたのか、部外者は引っ込んでいろ」

「俺は護衛である以上、信用の置けない人間に彼女を渡すこととはできない」

「信用の置けない？ 何を根拠に」

「ガーランドが正式な護衛であることは、今までの経緯と命令書から明らかだ。つまり嘘をついているのはお前の方ということになる。どうせよからぬことを企んでいるんだろう。見え見えだよ」

今度は兵士が激昂した。

「戯れ事をほざくな！ これ以上逆らう気なら皆殺しにするぞ！」

「ほう、俺を道具師ロイと知つての物言いか？」

兵士は目を見張り、他の兵士たちにも緊張が走った。道具師ロイと言えば、国内はおろか国外まで名を轟かす強者だ。並の人間が戦って勝てる相手ではない。

ところが、兵士は不敵な笑みを浮かべた。

「そうか、貴様があの道具師か。ちょうどいい、一度お手合わせ願いたいと思っていたところだ。俺も腕に自信があるのでな！」

彼は仲間たちに向かって怒鳴った。

「王女以外はやってしまえ！」

途端に、四人の兵士たちが槍を構えて突きかかってきた。ロイはそれをかわしながら叫んだ。

「ガーランドはセレスを護るんだ！ ネルとバートは俺に手を貸してくれ！」

第二十八話

ガーランドはセレスをつれて引き下がり、ネルとバートは魔剣を抜いた。先に跳びだしたのはバートだった。

「おらああああっ！」

突きかかってきた兵士の一人を、炎に巻かれた強烈な斬撃が襲った。彼は槍の柄でさばこうとしたが、木製であったために叩き斬られてしまった。

「くそっ！」

槍を斬られた兵士は剣を抜き、他の三人がバートに突きかかった。しかし、ネルのグラフィードがごとく弾き返した。

その間に、ロイは兵士の一人と対峙していた。さつきまでしゃべっていた男だ。年歳は二十代後半で中肉中背、彫りの深い顔にたくましい体をしており目つきが鋭い。

「俺の名はガルシアだ、よく覚えておけ。あの世に逝ったら他の亡者たちに吹聴して回るがいい。道具師ロイはガルシアという勇士に手も足も出さず殺されましたとな！」

「よくしゃべる男だ」

ロイは相手を見据えながら、先の尖った金属性の棒を構えた。

ガルシアは鉄の兜と鎧を身につけている。そのために頭部や肩、胴体への攻撃は効かない。武器は槍が一本、腰に佩いている剣が一本。今のところ、剣を使うつもりはないようだ。

ガルシアが槍を構えて鋭い突きを繰り出した。ロイは身を翻してこれをかわしつつ、一瞬で間合いを詰めて相手に迫った。

ロイの棒が顔面を貫こうとした瞬間、ガルシアは剣を抜いてロイを真っ向から斬り下げた。

「おおっと！」

ロイは間合いの外に跳び下がってこの一撃を逃れた。ガルシアは攻撃の手を休めず、さらに踏み込み雷撃のような突きを連続で放つ

た。

これもかわしたものの、完全に避けることはできなかった。切っ先が頬をかすめ鮮血が流れ出した。

ロイは頬を押さえながら内心舌を巻いていた。この兵士、大きな口を叩くだけのことはある。他の四人とは段違いだ。かわしてもかわしても次から次へと剣撃を放ってくる。並大抵の使い手ではない。

ロイは二本の棒を構えて相手に呼びかけた。

「お前の剣技はたいしたもんだ。驚いたよ」

ガルシアは口角を吊り上げた。

「ほう、まだしゃべれるだけの余裕があるのか」

「ああ、確かに強いが俺ほどじゃないからな」

「ほざけ！」

ガルシアは大きく踏み込み、相手を間合いに捕らえて胴を薙ぎ払った。並の戦士なら両断されて転がっているところだ。しかし、ロイは瞬時に後退してかわしていた。

「ええい、ちょこまかと！」

ガルシアは剣を振りかざし、袈裟がけにロイを斬りつけた。だがこれも当たらない。彼の顔に焦りが見え始めた。

「なぜだ、なぜ倒せない！」

ガルシアは一瞬体を沈めた後、地を蹴った。同時に渾身の突きを放っている。それは遂にロイの体を捕らえたかのように見えた。ところが綺麗にかわされ、逆に棒を突きつけられてしまった。

「ば、馬鹿な……この俺が」

「剣を捨てる」

ガルシアは歯噛みしながら剣を投げ捨てた。ロイが周囲を確認すると、他の兵士たちはネルとバートによって追い散らされていた。

ネルのわめき声が聞こえてくる。

「バートの戦い方は危なっかしくてたまらないよ！」

「ネルが慎重すぎるだけだろ、普通あんなもんだよ」

「うっん、こんなに無鉄砲なのはあなたくらいだよ。他の護衛士を

「見習ったら？」

「これが俺のやり方なんだ、別にいいだろ！」

ロイがげんなりしていると、ガルシアはその場に座り込んだ。
「俺の負けだ、煮るなり焼くなり好きにしろ」

するとガーランドが近寄ってきて、彼の顔をのぞき込んだ。

「誰の命令で動いているのか言え」

ガルシアはそっぽを向いた。

「言えんな、それは機密事項だ」

今度はセレスが進み出た。

「あなたは私をどうするつもりだったんですか」

ガルシアは不敵に笑った。

「お察しの通り、こっそり始末するつもりでした」

「どうしてそんなことを！」

「そういった命令を受けているからですよ」

ロイもその場にしゃがみんでガルシアを見つめた。

「お前はその命令になんの疑問も持たないのか？」

「持たないさ、持つ必要などないしな」

ロイは金属性の棒を突きつけた。

「これが何に見える」

ガルシアは怪訝そうに眉をひそめた。

「何って、単なる棒だろう」

ロイは強くうなずいた。

「そう、単なる棒だ。俺の商売道具でもある」

「それがどうした」

「道具自体に意志はない。幼い子どもが持てばおもちゃになるし、俺が持てばそれなりの武器になる。使う人間次第でなんにでもなる反面、自分自身では何もすることができない」

「だから、それがなんだって言うんだ」

「今のお前はこの棒と同じだと言ってるんだよ」

ガルシアは押し黙った。

「自分で判断することを放棄し、他人の意のままに動くだけの道具。それがお前だ」

ガルシアは眉間に皺を寄せた。

「それは違う。棒は自分で何も考えることができないが、俺は考えることができる」

するとロイは鼻で笑った。

「できるとは思えないな、実際何も考えていないようだし」

ガルシアは身を乗り出して反論した。

「我々の指導者であるあの方が王位に就けば、その腹心である俺も甘い汁を吸うことができる。だから俺はこうして働いているんだ」

「ほう、そのためなら次期王位継承者である王女を殺害することもいとわないのか」

「人の上に立つには多少の悪事も必要だ」

「王女を殺害することが多少の悪事か？」

ガルシアが沈黙すると、ロイはさらに続けた。

「現在、この国の王位は世襲制だ。現在の王が没すればその息子が後を継ぐことになる。息子がいないなら娘だな。だから今回は王女にお鉢が回ってくるわけさ」

「そんなことは言われなくてもわかっている」

「お前はその制度を無視して王女を殺害し、勝手に他の人物を王位に就けようとしている。自分で筋が通っていると思うか？ 他の人間を王位に就けたいのなら正当な手続きを踏んで制度を改革し、周囲の了承を得た上でやればいい話だろう。いい大人が『王女を殺害すれば王位を奪い取れる』という短絡的な発想をしていること自体恥ずかしいと思わないか？」

ガルシアは一言も言い返せずにうつむいた。

「そんなくだらない計画を立てている時点で、お前の上司の器はたかが知れている。およそ上に立てる人間じゃない。王になったところで足元から崩れ落ちるのは目に見えてる。誰かに仕えるのならばつましな人間に仕えろ」

ガルシアはいよいよ縮こまった。それを見たセレスが彼に声をかけた。

「私は王位になど興味はありません。欲しいと言う方がいらっしやるなら喜んで差し上げます。病床にあり、いつこの世を去るとも知れない父上に一目会いたいだけなのです」

ガルシアはセレスを見上げた。

「王女……」

「どうか、その旨をあなたの上司にお伝えください」

ロイはセレスを見つめた。

「こいつを逃がしていいのか？」

「私がかまいません」

「だとさ、ガルシア。よかったな」

ガルシアは目を見開いた。

「俺はあなたを殺そうとしたのですよ。それなのに何もせず逃がしてくれるのですか？」

セレスはにっこり微笑んだ。

「ええ。幸い、こちらには何の被害もないようですし。ただ、一つだけ約束してください。二度と私たちに剣を向けないということ。ガルシアは力強くうなずいて立ち上がった。

「約束致します」

するとロイも立ち上がり、ガルシアの肩を叩いた。

「約束は守れよ」

「必ず守る」

ガルシアは王女に一礼してから立ち去った。ロイはそれを見届けてからセレスに向かって言った。

「あいつを締め上げて黒幕を吐かせた方がよかったんじゃないかな？」

「いいですよ」

「甘い人間だな、俺も人のことは言えないけどね」

二人は顔を見合わせて笑った。

第二十九話

ロイたちはしばらく休息した後、ルーベンスの街を出た。ここに留まっていればまた兵士の集団に襲われる危険があるからだ。

草原を歩いている途中、バートがぼつりと言った。

「あの屋台の料理はうまかったなあ」

ロイはそれを聞いて微笑んだ。

「また行けばいいさ。それより右手の傷は大丈夫か？」

バートは右手を振り回した。

「こんなのだうってことないですよ、ロイさんこそ肩は大丈夫ですか？」

グレゴールに斬られた場所がずきずきと痛んでいる。さっきの戦闘で傷が開いてしまったらしい。

「大丈夫だよ、心配しないでくれ」

そうは言ったものの、ロイは内心不安だった。自分の戦闘能力が落ちてしまうことはなんとしても避けたい。

この国には、並外れた強さを持つ人間や魔物が多数存在する。その中でも圧倒的な実力を誇るのが護衛士の上位にいる人々や、ごく一部の魔物たちである。

こういった者たちに襲われた場合、ロイがいなければどうにもならない。レヴィンを相手にしたときがいい例だ。

ロイの見るところ、ガーランドは戦士として完成されている。それだけに伸びしろが少なく、飛躍的な実力の向上は望めない。確かに強いが、それはあくまでも常人から見たときの話であり上位の護衛士から見れば子どものようなものだ。

バートは素質に関して言えば群を抜いているが、技量と経験が明らかに不足している。ネルは攻撃力や速度でロイを凌ぐが、魔剣グラフィードを使いこなせておらず動きに無駄が多い。両者とも、ロイの代わりを努めるには頼りなさすぎる。

ロイが渋い顔をしながら歩いていると、ネルが微笑しながら言った。

「また何か悩んでるの？」

「ん、まあね。でもたいしたことじゃないよ」

「あまり思いつめると体に毒だよ」

「そうかもしれないな」

ロイもつられて微笑んだ。上位の護衛士に匹敵するような強力な敵がそうそう現れるとも思えない。それ以外の相手なら、ネルやバートだけでも充分撃退できる。あまり悲観する必要もないだろう。

五人はさらに歩き続け、タニアの森にたどり着いた。ロイは仲間たちを見回しながら言った。

「この森にはレン族という原住民の集落がある。おそろしく凶暴な連中で、魔物ですら近づかないほどだ。彼らの戦闘能力は並の戦士の比じゃない」

その途端、バートがさげんだ。

「そんな奴ら、俺がぶった斬ってやりますよ！」

「やめる、お前一人でどうにかなる相手じゃない」

ネルが口を挟んだ。

「見つからないようにする方法はないの？」

「残念ながらないな。奴らは目がいい上に、鼻や耳も動物並に効く。擬態したところですぐ見抜いてしまうし」

「じゃあ、こっそり行くっていうくらいしかないんだね」

「そうだな」

ロイたちは深い森の中へ入っていった。最初は獣道を通って進むことができたが、やがてそれもなくなってしまう。高く伸びた草が行く手を阻み、なかなか先に進めない。

ロイがため息をついた。

「こりやまいったなあ、今日中に抜けられるかどうか怪しいぞ
するとバートが剣を抜いた。

「これで草を薙ぎ払いながら進みましょうか」

「いいけど、火事にならないように気をつけるよ」

バートは先頭に立ち、炎の剣で草を焼き払いながら進みはじめた。ロイはそのすぐ後に続き、ついた火を踏み消しながら進んだ。

バートがにこにこ笑いながら叫んだ。

「こりゃ便利だぜ！」

ロイは慌てて声をかけた。

「大声を出すな、レン族に聞こえたら……」

彼は言いかけたところで目を見張った。バートの足元に縄が張つてあるのを見つけたのだ。

「バート、止まれ！」

「え？」

バートの足に縄が引っかかったのを見て、ロイが叫んだ。

「まずい、全員伏せろ！」

五人が一斉に伏せたとき、その頭上を無数の矢が通りすぎた。

縄に何か引っかかると、自動で矢が放たれるという仕掛けになっていたのだ。

ロイは矢の嵐が収まったのを見てから立ち上がった。

「危険な連中だとは聞いていたけど、まさかこれほど……」

言いかけたところで、足元の草がざわついた。

「え？」

次の瞬間、彼は大きな網に捕らえられ近くの気に吊り下げられてしまった。

「しまった、こんな手に！」

歯ざしりしながら周囲を見ると、他の四人も同様に捕まっていた。「となると、次に出てくるのは……」

彼の予想通り、レン族の男たちが現れた。上半身は裸で腰に布を巻いており、手には槍を持っている。総じて精悍な顔立ちで、体もたくましい。髪と瞳は漆黒で肌は浅黒く、顔や手足に赤や白の紋様が描かれている。

彼らは、網に捕われた五人を担いで進んでいった。ロイたちは生

きた心地もしない。おそらく殺されてしまっただろう。

草木が鬱蒼と繁る中を抜けると、広々とした草原に出た。そこには草と木で造った家や石造りの調理場があり、女や子どもの姿が見えた。どうやらここが彼らの集落であるようだ。

ロイたちは集落の中央に集められた。相変わらず網から出してもられない。遂にバートがレン族の男たちに向かって怒鳴った。

「おい、なんのつもりだ！ さっさとここから出しやがれ！」

彼らは顔を見合わせると、黙って立ち去った。

「こら、どこ行くんだよ。出せって言ってるだろうが！」

バートがまたもや怒鳴ったが、周囲にはすでに誰もいなくなっていた。ロイが道具袋から短剣を取り出し、網を斬り裂こうとしたそのときだ。

向こうから二人のレン族が歩いてきた。一人は杖をついた白髪の老人で、もう一人は十八歳くらいの少女だ。どちらも、一枚の布であつらえた服を身につけている。

少女はロイたちを見回してから口を開いた。ぱっちりした目が特徴的で、よく鍛えられた体をしている。

「お前たちはどこから来た」

ガーランドが目を見開いた。

「なんだ、言葉が通じるのか」

「質問に答える」

「ウインザーの街だ。王城へ行く途中、ここを通っただけなのだ。敵意はない。どうか解放してくれ」

少女が傍らの老人に何やらささやくと、彼はうなずいて一言二言発した。少女はそれを聞いてから、ガーランドに向かって言った。

「長老は『信用できない』とおっしゃってる」

「どうすれば信用していただけるのか」

少女は再び通訳を務めた。

「我々は強い者を信じ、その言葉に従う。お前たちがここを通りたいたのであれば、自分たちが強者であることを証明してみせよ。それ

ができないのであれば通すわけにはいかない」

「ガーランドは呆れて首を振った。

「無茶苦茶な理屈だな、どうやって証明すればいいんだ」

「我々レン族の誇る勇者と、一対一で戦ってもらおう」

それを聞いてバートが叫んだ。

「そいつをぶちのめせばいいんだな、お安い御用だ！」

ロイたちは網から出してもらえたものの、今度は後ろ手に縛られて草原の隅に集められた。やがて少女が声をかけてきた。

「誰が戦うんだ」

バートが目をむいて声を上げた。

「俺、俺がやる！」

するとレン族の男たちが現れ、彼を解放した。いつの間にか周囲に人が集まってきている。老人から幼い子どもまで様々だった。

そろそろ日が暮れてきたようで、薄闇が辺りを包み込んでいる。

レン族の男たちが篝火を焚いた。その後、彼らは座り込んで肉や山菜を食べ始めた。バートと勇者の戦いを見物するつもりなのだ。

間もなく、ロイたちの前に一人の男が現れた。堂々たる偉丈夫で、長い木の棒を二本握りしめている。彼はそのうちの一本をバートに差し出した。

バートは棒を振りかざした。

「これで戦えつてことか」

さっきの少女が現れてバートに告げた。

「使っていい武器はそれだけだ。素手で戦ってもかまわないけどな」

「おう、上等だ。やってやるぜ！」

第三十話

バートは対戦相手を見ながら自分を指さした。

「俺はバート！ お前は？」

なんとか意味が通じたようで、男も自分を指さして言った。

「リカルド」

「リカルドだな、行くぜ！」

バートはすかさず踏み込んで、思いきり棒を振り下ろした。しかし、簡単に弾き返されてしまった。

「こいつ！」

続けざまに横薙ぎの一撃を放ったがさばかれた。間髪入れず突きに転じたがかわされ、さらに足を払ったがこれもかわされた。

「なんだこいつ！」

いよいよバートの顔に焦りが見え始めた。まるで攻撃が通じない。ロイはそのようすを見ながら、冷静にリカルドの戦闘能力を分析していた。彼は体が大きいのにやたら動きが速く、自分やネルに匹敵するほどだ。後はどのくらいの力と技、打たれ強さを持っているかが鍵になる。

バートが大きく跳躍し、渾身の力を込めて棒を頭上から振り下ろした。

「うおらあああつ！」

リカルドはその場を動かなかった。あわや棒が直撃するかと思われたその瞬間、彼はバートの胸を薙ぎ払った。

「ぐえつ！」

バートは空中で一撃を喰らい、腹と腰を押さえながら地面に落下した。彼はあまりの痛みに立ち上がれず、そのまま勝負がついた。

周囲から歓声が上がっている。仲間の勝利を喜んでいるのだ。やがてリカルドが何やら叫び、少女が通訳した。

「他に戦う奴はいるか」

今度はネルが立ち上がった。

「私が行くよ、ロイさんは怪我してるし」

ロイはネルを見つめた。

「いいのか？ あいつはかなり強いぞ」

「任せて」

「わかった、気をつけるよ」

ネルはうなずき、リカルドの前に歩いていった。少女が棒を差し出したが、ネルは手を振った。

「いらない、素手でいいよ」

彼女が拳を構えると、リカルドも棒を投げ捨てた。対等の条件で勝負するつもりなのだ。

ネルは大きく息を吸い込んだ。その髪と瞳が見る見る内に赤く染まっっていく。周囲のレン族から驚きの声が上がった。少女も目を見開いてロイをつつついた。

「あいつは何物だ、魔物なのか？」

「人間だけど魔物の血が流れてるんだよ」

「なんとという怖ろしさだ」

ロイは苦笑した。

「魔物たちですら怖れて近づかないレン族の人間が、そんな弱気なことを言うなよ」

少女は首をかしげた。

「お前、やけに詳しいんだな」

「レン族は有名だからさ」

少女は人なつっこい笑顔を浮かべた。

「強いことで有名なら、こんな嬉しいことはない」

ロイも微笑した。

「そうか、よかったな。ところで、なんでお前さんは俺たちの言葉がわかるんだよ」

「お前みたいな金髪の人間に誘拐されて、その国でこき使われてたんだよ。そのとき言葉を覚えた。結局そいつを張り倒して逃げてき

たけどな」

ロイは笑いだした。

「さすがはレン族の娘だな、張り倒された奴の顔を見てみたかった」
「そろそろ戦いが始まるぞ、見なくていいのか」

「ああ、そうだな」

ロイは二人に視線を移した。ネルは髪と瞳を完全に赤く染め、鋭い目つきでリカルドをにらみつけている。

「始めましょうか」

リカルドが身構えた途端、ネルが疾走した。ロイの目ですら捕らえるのが難しいほどの凄まじい速度だ。この上、人間だろうが魔物だろうが簡単に引き裂くほどの力を持っている。並の戦士では束になってもかなわない。

リカルドは目を見張り、身を翻してネルの拳打をかわした。しかし、すかさず次の一撃が迫ってくる。彼は眉間に皺を寄せ、ネルの拳を手の平で受け止めた。

その瞬間、彼は顔をしかめて後ずさった。攻撃が想像を遙かに上回る威力だったのだ。ネルは一瞬笑みを浮かべ、リカルドの腹を思いきり蹴飛ばした。

リカルドがよろけながら苦悶の表情を浮かべると、ネルは目を見開いて彼に跳びかかった。

「終わりだよ、あつははは！」

彼女がとどめの一撃を放とうとしたとき、リカルドが突然ネルの首をつかんだ。

「うっ！」

ネルは急いで振りほどこうとしたが、もう遅かった。リカルドは右腕一本で彼女を持ち上げ、思いきり地面に叩きつけた。

「きゃあっ！」

ネルは立ち上がろうとしたが、痛みあまり再び崩れ落ちた。戦いはリカルドの勝利で終わった。

ロイは後ろ手に縛られたままネルに駆け寄った。

「大丈夫か！」

ネルは力なく微笑んだ。

「ごめんなさい、負けちゃったよ」

「気にするな、よくやってくれた」

ネルは再び後ろ手に縛られ、今度はロイが進み出た。彼は少女から棒を受け取ってリカルドに突きつけた。

「バートとネルの受けた痛み、十倍にして返してやるよ」

少女がロイの言葉を通訳すると、リカルドは鼻で笑いながら棒を振りかざした。いよいよ周囲は盛り上がり、レン族の男たちが次々と叫んでいる。

そうは言ったものの、ロイは内心不安だった。このリカルドと言う男、万全の体調で臨んでも危ない。さすがはレン族の勇者だ。それなのに自分は、右肩に怪我を負った状態で戦わなくてはならないときている。

彼は心の中で自問自答した。

「できるか？ いや、やるしかない。俺がこいつを倒す以外に道はないんだ」

ロイはまっすぐに棒を構え、リカルドを見据えた。

「いつでもいいぞ、どこからでも来い！」

少女が通訳したが、リカルドはなかなか動かなかった。ロイに隙がないので手を出せないのだ。

「来ないならこっちから行くぞ！」

ロイは一瞬で間合いを詰め、鋭い突きを繰り出した。リカルドはわずかに体を反らせてこれをかわし、横薙ぎの一撃を放とうとした。しかし、それはかなわなかった。ロイは突きを外した直後に肘の一撃を喰らわせていたのだ。リカルドは顔を押しさえてよろめきながら後ずさった。ロイはその機を逃さず、リカルドのみぞおちを狙って渾身の突きを放った。

その一撃はあやまたず決まった。しかし、同時にリカルドが振り下ろした棒もロイの右肩を捕らえていた。両者は苦悶の表情を浮か

べ、その場に崩れ落ちた。

ロイがよるめきながら立ち上がったとき、周囲は大きな歓声に包まれていた。ほぼ同時にリカルドも立ち上がっている。彼がロイに向かつて何やら言っていると、また少女が通訳した。

「お前は肩を怪我していなければこれほど苦戦しなかつたはずだ。悔しいが負けを認める」

「怪我をしたのは俺のせいであつて、この勝負には関係ない話だ」とすると、リカルドは右手を差し出した。

「いずれにしろ、お前の方が強いことは確かだ。俺は今までこれほど強い人間と戦つたことがない。お陰でいい経験になつた」

ロイがその手を握り返すと、再び周囲から歓声が上がつた。

やがて、長老が近づいてきてロイに言つた。

「お前は素晴らしい戦士だ、その力を認めよう」

ロイたち五人は解放されたばかりか、レン族の女たちからもてなされた。ロイが肉や山菜を頬張っていると、リカルドに話しかけられた。傍らには通訳の少女もいる。

「戦士よ、お前の名前を聞かせてくれないか」

「俺はロイ、戦士じゃなくて道具師だよ」

「道具師？」

「剣や槍じゃなくて、道具を使って戦うんだ」

リカルドは目を見張つた。

「ロイは戦士としても充分な腕前なのになあ」

「力や技だけじゃ倒せない相手がいるんだよ」

「そうか、大変だな」

ロイは苦笑した。

「まあな、お前みたいな仲間がいれば心強いんだが」

すると、リカルドは首を振つた。

「すまないが、今は事情があつてこの集落から離れられないんだ」

「そうか、残念だ」

「でも、またこの近くに来ることがあつたらぜひ寄つてくれ。その

頃にはどうにかなるかもしれないから」

ロイは大きくうなずいた。

「わかった、必ず立ち寄るよ」

第三十一話

ロイたちは十分な休息をとった後、集落を出発することになった。別れ際にロイはリカルドの手を握った。

「まあ会おうぜ」

リカルドは笑顔を浮かべ、手を握り返した。

「ああ、きつとな」

ロイは通訳の少女に視線を移した。

「そう言えば、名前を聞いてなかったな」

少女はにっこり笑った。

「エリスだよ」

「エリスか、また会おう」

ロイたちはレン族と別れ、再び深い森の中を歩いていった。リカルドが歩きやすい道を教えてくれたので、進むのは楽だった。

やがてバートがロイにたずねた。

「次にいくのは、どんなところなんでしょうね」

ロイは地図を取り出して眺めた。

「ハデイスの街だ」

「どんな街だか知ってますか」

「剣士の街だよ。住民のほとんどが剣の使い手だ。老若男女問わずな」

ネルが目を見張った。

「どれくらい強いんですか」

「言語を絶する。それこそ剣を手足のように扱うんだ。この国で名を馳せている剣士たちは大体がハデイスの出身だよ」

「私がその街に行ったら、上から何番目くらいの強さですか？」

ロイは首をかしげた。

「真ん中よりは上だと思っけど」

「ええっ？」

ネルはロイに食ってかかった。

「私より強い剣士がごろごろいるってことですか？ そんなわけないですよね！」

ロイはネルの剣幕にたじろぎながら答えた。

「あの街は特別なんだって。どこかおかしんじゃないかってくらい、みんなが剣術気遣いなんだよ。その中には俺ですらてこずる奴が何人もいる。いや、下手をすればこつちがやられるかもしれない。ネルが目を見張っていると、ロイはさらに続けた。

「俺は一時期ハデイスに住んでいたんだよ。そのとき、野盗の集団がこの街を襲撃したんだけどね」

「へえ、どうなったんですか」

「三十人くらいいた野盗は一人残らず叩き斬られた。応戦した住民はたったの五人で、死傷者はなし。他の住民はのんびり見物してたよ」

それを聞いてバートが口を挟んだ。

「化け物ですか、そいつらは！」

「魔物の集団に襲われたこともあるよ。結果は野盗とほぼ同じだったな。住民はただでさえ強いのに、魔剣まで使ってるから」

ロイ以外の四人は絶句した。

「あと、その街には俺の師匠が住んでいるんだ」

ガーランドが意外そうな顔をした。

「剣術の師匠か？ ロイ殿は剣を使わないようだが」

ロイは苦笑した。

「俺は元々剣士だったんだよ。でも全然見込みがなかったから諦めたんだ。自分より才能がある奴が周りにごろごろいたし」

「じゃあ何を教わったんだ」

「かわし方やさばき方だよ。自分が剣を使わなくても敵は使ってくるわけだから、対処方を知らないとな」

「なるほど。ロイ殿の師匠であるなら、よほど強い人なんだろうな」

「この国の剣士の中で一、二を争うほどだよ」

やがて五人は森を抜け、広々とした平原に出た。前方には壁に囲まれた城塞都市が見える。ロイがそれを指さして言った。

「あれがハデイスだ」

バートが笑顔を浮かべた。

「よし、まともな飯が食えるぞ！」

「いや、寄らないで先に進もう」

「なんでですか！」

「ちよつと問題が」

「どんな問題があるんですか！」

ロイは素通りすることを主張したが、四人に反対されて沈黙した。バートが先頭に立って歩き、ロイは一番後ろでネルに引きずられながら進んだ。ネルは呆れ顔をしながらロイに声をかけた。

「いい加減に諦めなよ、何がそんなに嫌なの」

「言いたくない。とにかく、あまり近づきたくないんだよ」

ロイが駄々をこねているのを見て、ネルはため息をついた。

「小さい子どもみたいだね、まったくさあ」

「なんとでも言えばいいさ」

ロイの抵抗もむなしく、五人はハデイスに到着した。一応城塞都市なのだが、門が開いている上に番兵もいない。これでは簡単に侵入されてしまう。

ネルが眉をひそめながらつぶやいた。

「ここの住民って警戒心がないのかな」

ロイは開きっぱなしの城門を見つめた。

「警戒する必要があるんだよ。ここで悪事を働けば、周囲の剣士に一瞬で叩き斬られるからな」

「ものすごい街だねえ」

「そのせいで治安はいいよ。人間と魔物が一緒に住んでるのに争いも起きない」

ネルは目を見張った。

「え、人間と魔物？」

「魔物もたくさん住んでるよ。この街では剣の腕が立つ奴や、剣の知識がある奴が偉いんだ。人間だろうが魔物だろうがね。だからどつちも住んでる」

「ある意味、いい街だね」

「まあね、わかりやすいと言っかなんと言っか」

五人は街の中に入っていった。住民たちは一人残らず剣を佩いており、魔物らしき者もちらほら見える。中には鋭い牙を剥き出しにしていたり背中に鋭いトゲを生やしていたりする者もいるが、別段誰も気にしていない。ネルはそういうすを見て心底驚いた。

目抜き通りを歩いていると、魔物に声をかけられた。赤くこつこつした肌、鋭い目と牙、隆々とした筋肉。上半身は裸で、下半身には腰布を巻きつけており、一振りの剣を佩いている。

「よう、ロイじゃねえか！」

ロイは目を見開いた。

「おお、ザウラ！ 久しぶりだなあ」

二人が笑顔で肩を叩きあっているのを見て、セレスがおずおずとたずねた。

「あの、その方は？」

ロイが満面に笑みを浮かべながら答えた。

「この街に住んでたとき、つるんでた奴だよ。見た目はこついけど気はいいんだ」

ザウラはセレスに笑顔を向けた。

「よろしくな、姉ちゃん」

「は、はあ。セレスです、よろしく」

セレスは顔をひきつらせながら頭を下げた。ザウラは再びロイに視線を移し、近くの店を指さしながら言った。

「あの店の前で、これから賭け試合やるんだよ。お前も見てったらどうだ？」

「おお、またやってるのか。せっかくだし見ていこうかな」
にこにこしているロイを見て、ネルが彼の袖をつまんだ。

「ねえねえ、この街に来るの嫌だとか言ってたなかつた？」

「言ったよ」

「その割にやたら楽しそうじゃない」

「苦手な奴に会わなけりゃ楽園なんだよ」

「苦手な人って誰なの」

「気にすんな、それより食事しよう」

ロイは四人とザウラをつれて、近くの店に歩いていった。店の前にはテーブルや椅子が並んでおり、外で食事ができるようになってる。ロイたちはパンや料理を注文し、テーブルに並べて食べだした。

ロイがパンをかじりながらザウラにたずねた。

「賭け試合はいつ始まるんだ？」

「そろそろ始まる時間だよ」

やがてわらわらと人や魔物が集まってきた。するとザウラが立ち上がった。

「さて、暴れさせてもらうか」

ロイが目を見開いた。

「なんだ、お前も出るのか」

「おうよ、今日こそは勝つぜ。最近負けっぱなしだからな」

ザウラが集団に向かって歩いていくと、その中の一人が叫んだ。

「賭け試合を始めるぞ！ 腕に自信がある奴は全員参加しろ！」

バートがロイにささやいた。

「賭けつて違法じゃないんですか？」

「この街だけ特例で認められてるんだよ。賭け試合を禁止したら暴動が起きかねないから」

やがて第一試合が始まった。戦うのはザウラと一人の男だ。二人とも、木でできた模擬の剣を握りしめている。ザウラの体格も素晴らしいが、対する男も負けてはいない。歳は二十歳前後で、はつきりした目鼻立ちにがっしりした体をしている。

周囲から次々と声が上がった。

「ザウラ、やっちまえ！」

「レイフォード、負けんじゃねえぞ！」

審判の男性が口を開いた。

「模擬の剣以外の武器を使うのは禁止、相手の目を狙うのも禁止。先に『まいった』と言った方の負けだ。さあ、始める！」

その途端、ザウラが目をむいた。

「うおおおっ！」

彼は目にも留まらぬ速度で疾走し、頭上から剣を振り下ろした。剣ごと粉碎しかねない強力な一撃だ。相手はこれをごつちりと受け止めた。

ザウラはすかさず剣を引き、今度は胴を狙って一閃させた。しかし、男は瞬時に後退してこれをかわした。

「ザウラ、腕を上げたな」

「おうよ、今日こそ引導を渡してやるぜ！」

「できるもんならやってみな。今度は俺から行くぞ！」

男は地を蹴り、同時に鋭い突きを放った。真剣であれば相手の体を貫通するに違いない。ザウラが眉間に皺を寄せながらこれをおかわすと、男は連撃を繰り出した。

「おらああああっ！」

次々と襲ってくる怒涛の突きを、ザウラは顔色一つ変えずにさばき続けた。男はおかまいなしにさらなる連撃を加えている。バートはそのようすを見ながらロイに言った。

「恐ろしく強い人たちですね」

「まあな、どつちも一流の剣士だよ」

「彼らはこの街の剣士の中で、どれくらいに位置するんですか」

「真ん中くらいかな」

「ええええー！」

バートが絶叫し、ロイの隣にいたネルも目を見張った。

「嘘でしょ、あれで真ん中なの？」

「だから、この街は特別なんだってば。普通の物差しで測れないん

だよ」

ネルとバートは絶句しながら戦いのようすを見つめていた。セレスとガーランドも同様だ。ロイは仲間たちの反応を見ながら思った。

「まあ当然だよな。元住民だった俺が言うのもなんだけど、この街がおかしいんだよ」

第三十二話

戦いはいよいよ白熱し、周囲の歓声も一段と大きくなった。

男が鋭い突きを繰り出せばザウラがさばき、ザウラが激しく斬りつければ男がこれをかわして斬り返す。両者一歩もゆずらず、どちらが勝つのかまったく予想がつかない。

ロイも椅子から立ち上がって応援していた。

「ザウラ、そこだ！ 行け！」

ザウラは表情を引きしめつつ、渾身の力で相手を斬り下げた。だが、しっかりと受け止められてしまった。

ザウラが後退した瞬間、男が反撃に出た。くるりと後ろを向いたかと思うと、振り向きざまに剣を一閃させたのだ。ザウラは辛くもこれをかわしたが、男はさらに回転しながら次々と斬りつけてくる。観戦者の一人が叫んだ。

「出たぜ、レイフォードの円舞斬！」

バートが目を見張りながらロイにたずねた。

「あれ、目茶苦茶さばき辛くないですか？」

「だろうな、一度後ろを向いてしまつから斬撃の軌道が見えにくい。後ろを向いている間を斬りつけたところだが、相手が速すぎてそれも難しい」

ザウラがさばききれずに体勢を崩した瞬間、男が足を狙って薙ぎ払った。ザウラはなんとかわかしたものの、その顔には焦りが見え始めている。ロイが見かねて叫んだ。

「落ち着け、冷静さを失ったら負けだぞ！」

ザウラはロイを見て大きくうなずいた。今の一言で落ち着きを取り戻したのだ。彼は再び顔を引きしめ、踏み込むと同時に素早く斬りつけた。

男は難なくこれを弾いたが、ザウラの攻撃は止まらない。胴を狙った薙ぎ払い、頭や肩を狙った斬撃、首や胸を狙った突きが次から

次へと繰り出された。今度は男が劣勢に立たされ、攻撃をさばきそこねてふらついた。

「もらった！」

ザウラは相手の肩を狙って激しく斬りつけた。男はさばこうとしたが間に合わず、直撃を受けて座り込んだ。

「まいった！」

男が叫んだのを聞いて、審判が手を挙げた。

「勝負あり！ 勝者ザウラ！」

周囲から大きな歓声が湧き起こる中、ザウラはロイに向かって歩いてきた。

「久々に勝ったよ、お前のおかげだ！」

ロイは笑顔でザウラの肩を叩いた。

「いや、お前の実力だよ。よくやったな」

その間に、次の試合が始まるうとしていた。ロイが再び観戦しようとする、横から肩を叩かれた。

「ロイじゃないの、久しぶりー！」

視線を向けると二十歳くらいの女性が立っていた。胸の辺りまで伸びた波打つ金髪、紫色の瞳に白い肌、彫りが深く端正な顔立ちをしている。革の鎧と長靴を身につけている他、腰に長剣を佩いていた。

ロイは彼女を見るなり顔をしかめた。

「げっ、ライザ」

ライザはむくれながら言った。

「何、その顔。私に会ったのがそんなに嬉しくないの？」

ロイは必死に手を振った。

「別にそういうわけじゃ」

「じゃあ、どついうわけなの」

「いや、その……」

ロイが冷や汗をかきながら口ごもっていると、ネルがたずねた。

「この人は誰なの？」

その途端、ライザが元氣一杯に叫んだ。

「ロイの恋人でーす！」

ネルは一瞬で凍りつき、ロイは真っ赤な顔をしながら必死に手を振った。

「平気で嘘をつくなー！」

「あら、嘘をついてるのはどっちなの」

「いつ恋人になったんだよ！」

ライザはにこにこしながらロイによりかかった。

「私は恋人だと思ってるよー」

「俺は思ってるない！」

「またまた、照れちゃってさあ」

ライザはネルに視線を移した。

「ああ、なるほど。また新しい女の子に手を出したわけね。それで私を邪魔者扱いするんだ、嫌だねえ」

ネルの髪と瞳がどんどん赤くなっていくのを見て、ロイの顔が真っ青になった。

「ライザ、からかうのはやめてくれ！ ネルが本気にするだろ！」

「へえ、この子ネルっていうんだ。もしかして怒ってる？」

ネルが拳を握りしめながら震えていると、ライザは笑いだした。

「おもしろーい、髪と目が真っ赤になってるよ！ じゃあこんなことをしたらどうなるのかな？」

ライザはロイに近づき、その頬に口づけをした。ロイは仰天して叫んだ。

「何すんだよ！」

次の瞬間、怒り心頭に発したネルがライザに跳びかかった。だが、ライザは微笑しながらこれをかわした。

「怖い怖い！ もしかしてあなたって赤眼のネル？」

「だったらなんなの！」

「すごい、有名人じゃない！ 私と勝負してよ！」

「勝負って、どんな？」

ライザはにやりと笑った。

「ちょうど今、賭け試合をやってるじゃない。あれだよ」

ネルは怒りを必死に抑えながら、辛うじて微笑んだ。

「剣闘試合をやるうっての？ いいよ、受けて立ってあげる！」
すると、ロイが必死に首を振った。

「ネル、やめとけ。ずたぼろにされるのは目に見えてるぞ！」

ネルはロイを見据えた。

「ロイさんは私の力を信用してないの？」

「そんなことないよ、ただライザを相手にするのは……」

「ただの女の人じゃない、何も怖がることないよ！」

ロイはなんとかやめさせようと説得したが、彼女は聞く耳を持たなかった。

「仕方がない。ライザ、手加減してやってくれよ。相手は女の子なんだから」

「はあ？ 私も女なんですけど。なんで手加減しなきゃならないの？」

ロイは洗面を作り、ネルに視線を移した。

「きつくなったらすぐに降参するんだぞ」

「なんでよ、降参するのはこの女でしょ！」

ロイの調停は火に油を注いだだけの結果に終わった。彼はしおしおと引き下がり、店の前にある椅子に腰を下ろした。彼はしおし

ため息をついているロイにバートが話しかけた。

「あのライザって女、この街で何番目くらいの強さなんですか」

「上から五番目くらいかな」

そのとき、バートが食べている料理を嘔き出した。ロイは慌てて跳び下がった。

「汚ないな、何してんだよ！」

「すいません、驚いたもんで。本当の話ですか？」

「ああ。彼女は天性の才能がある上に、三歳の頃から毎日剣技を磨いてきた。教えたのは俺の師匠だよ」

「それじゃあ、いくらネルでも危ないですね」

ロイは大きくうなずいた。

「街が野盗に襲われたとき、八人をぶった斬ったのがあいつだ。相手にかすらせもせずにな」

バートが絶句しながらライザを見つめると、彼女は周囲の人々や魔物たちに大声で呼びかけていた。

「赤眼のネルとライザの賭け試合、はっじまってるよー！」

途端に大きなざわめきが起こった。

「おい、こりやおもしろそうだぞ！」

「世紀の一戦じゃねえか？」

「どっちに賭けようか迷うなあ」

観客が充分に盛り上がってきたところで、ライザは二本の木製の剣を手を取った。

「ネル、何本使う？」

「一本でいいです」

「まあ何本使おうと同じだけだね」

ネルは剣を受け取り、ライザをぎろりとらんだ。

「嫌ー、この子怖ーい！」

ライザがわざとらしく騒いでいるのを見て、ネルは血管が切れそうになった。

「さっさと剣を構えてください！」

「何怒ってるの、短気だねえ」

このままではネルが暴れだしかねないので、審判の男性ががさつさと手を挙げた。

「使えるのは模擬の剣のみ、目を狙うのは禁止。先に『まいった』と言った方が負けだ。では始め！」

彼の言葉が終わるや否や、ネルが地を蹴って跳びかかった。同時に強烈な斬撃を放っている。ところがライザの姿はなかった。

「えっ？」

ネルは思いきり剣を空振りし、周囲を見回した。そのとき背後に

凄まじい殺気を感じた。

「くっ！」

跳びのきながら振り向くと、彼女がいた場所をライザの剣が斬り裂いていた。ネルは全身に寒気を感じた。これは怖ろしく手強い相手だ。押し潰されそうなほどの重圧を感じる上に、紫の瞳を見ていると呑み込まれそうになる。

ライザはネルを見ながら剣を振りかざした。

「少しは驚いた？ ふふふ、あっはははは！」

ロイがそのようすを見ながらため息をついた。

「あいつは美人だし強いけど、どうしようもない短所があるんだよなあ」

バートが首をかしげた。

「短所ってなんですか」

「性格が悪い」

「そんなに悪いですかねえ」

ロイは大きくうなずいた。

「最悪だよ、他人をからかうことを生き甲斐にしてるような奴だ。

あいつがいるからこの街に来たくなかったんだよ」

「なるほどねえ」

バートがうなずいていると、ライザに怒鳴られた。

「うるさいよ、そこ！」

第三十三話

ネルはライザが視線をそらしたのを確認し、その隙を狙って斬りつけようとした。ところが、再び彼女が視界から消えてしまった。

「ええっ？」

ネルは狼狽した。自分の斬撃は相手を真つ二つにするほどの威力だが、当たらなければなんの意味もない。それ以前に相手の姿を追うことすらできていないのだから問題外だ。

次の瞬間、背後から斬撃が襲ってきた。振り向きながら必死にかわすと、またもやライザが消えている。もう泣きだしたい気分だった。

そのとき、黙って観戦していたザウラがつぶやいた。

「相変わらずたちが悪いな」

バートがそれを聞いて彼に尋ねた。

「ザウラさんには彼女の動きが見えますか？ 俺にはよく見えないんですけど」

「なんとか見えるよ。ついでに奴の攻撃方法も知っている」

「へえ、どんな方法ですか」

ザウラはネルを指さした。

「ネルが右から左へ斬りつけたとき、ライザは……」

「はい」

「ネルから見て左斜め後ろの位置に思いきり跳ぶんだよ。相手の攻撃をかわしつつ視界から消えるわけだ」

「左から右に斬ってきたときは？」

「当然、右斜め後ろに跳ぶ」

バートが感心しながらうなずくと、ザウラはさらに続けた。

「次に、相手の背後に向かって思いきり跳ぶ。これと同時に斬撃を放つわけだ」

「通じないときはどうするんですか」

「相手の斜め後ろに跳び、次に背後に跳ぶという動作を高速かつ連続で繰り返す。そのうち相手は、反応できなくなったり無理に反撃しようとして隙を見せる。そこをばっさり斬るんだよ」

「嫌な戦い方をしますねえ」

ザウラはため息をついた。

「それはまだましな方だぞ。奴の剣技にはえげつないものがある。何せ性格が最悪だから、繰り返す技も最悪だ」

「へえ、例えば？」

「いきなり体勢を極限まで下げて、相手の股をくぐるんだ。それと同時にぶつた斬るのさ」

「え、どこを」

「男の大事なところだよ」

バートがすくみ上がっていると、ロイがげんなりしながら口を開いた。

「ライザが真剣でそれをやったところを見たことがあるよ。斬られた奴は泣き叫びながら死んでいった。あまりの悲惨さに思わず顔をそむけたけど、その光景が目には焼きついて離れなかつたなあ」

バートは、あまりの怖ろしさに何も言えなくなってしまった。近くにいたセレスとガールランドも顔をしかめている。ザウラはロイたちを見回しながら肩をすくめた。

「あのネルって子が怪我をしないことを祈ってるよ」

そのネルは、絶体絶命の危機に陥っていた。相手がほとんど視界に入らない上に、背後から斬撃が飛んでくる。このままでは何もできないうちにやられてしまう。

そこで彼女は剣を構えたまま、ひたすらライザの動きを追うことにした。相手の正確な位置を把握できなければ、いくら攻撃したところで効果は見込めない。まずはライザの姿をしっかりと目で捕らえる必要がある。

ネルは間もなく、ライザが三角跳びをしていることに気がついた。これがわかればしめたものだ。相手の軌道を予測して先に剣を振る

えば勝手に向こうから斬られてくれる。

ネルは斬撃をわざとはずし、ライザが三角跳びをした瞬間を狙ってすかさず剣を一閃させた。これが決まれば勝てるはずだ。ところがライザは極限まで体勢を下げて攻撃をかわし、間髪入れずに地を蹴った。

ライザが股間を通り抜けようとした直前、ネルは跳びのいてかわした。その途端、周囲から歓声が上がった。

「すげえ、ライザの技をかわしやがった！」

「さすがは赤眼の魔剣士だな！」

ネルは必殺の一撃を辛うじて避けたものの、表情が凍りついていた。これほど変則的な戦い方をする人間を相手にしたことがない。どう対処していいのか見当もつかなかった。

ライザはようやく動きを止め、ネルを見つめながら言った。

「赤眼のお嬢ちゃん。あなたは腕力も脚力も男よりはるかに上なんですよ？」

「ええ、まあ」

「私はあなたと違って、いくら鍛えても男に及ばないんだよね。でも剣士である以上は彼らに勝たなければならぬ。それで編み出したのがこの戦法だよ。相手に自分の力を発揮させないのが目的なの。ネルがうなずくと、ライザはさらに続けた。

「見たところ、あなたは興奮すると赤眼に変わるみたいだね。うらやましいよ。普段はどこから見ても単なる女の子なのに、都合のいいときだけ赤眼の力を使えるなんて」

ネルは呆然としていた。他人からうらやましがられるなど初めての経験だ。この体質は忌まわしいものだと思っていたが、それを好ましく思う人間もいるらしい。

ライザはネルを見据えながら剣を構えた。

「あなたは選ばれた人間、私は選ばれなかった人間。でも、こんな私にだって意地がある。能力の差を自分の剣技で埋めてみせるよ」
ネルはそれを聞いて静かに言った。

「ライザさんの剣技っていうのは、私みたいな未熟者に対しても正面から戦えないほどお粗末なものなんですか？」

途端にライザの眉が吊り上がった。

「今、なんて言ったの」

「ライザさんの剣技は、私と正面きって戦えないほどお粗末なのかなと思つて」

ライザは目をむいて叫んだ。

「あなたに何がわかるの！ この街で上位にいる人たちはね、正攻法でいったら絶対に倒せないような猛者ばかりなんだよ。だからこつういう戦法を選んでの。それについてとやかく言われる筋合いは……」

「言いわけは見苦しいですよ。今相手にしているのはその人たちじやなくて、この私でしょ？」

ネルはくすくすと笑いながらライザを指さした。

「私みたいな素人相手にすらまともに戦えないなんて、弱者以外の何者でもないですよ。あなたって実は弱いんじゃないですか？」

ライザの顔が赤く染まったのを見て、バートがつぶやいた。

「ネルの意地の悪さがいかに発揮されてるなあ」

ロイも口を開いた。

「ネルはあれでライザの技を封じたつもりなんだろうけど、逆効果かもしれないぞ」

「どうしてですか」

「ライザは正攻法で戦つても怖ろしく強いんだよ。それでも何人かに負けるから、悔しがって試行錯誤してるだけの話で」

「じゃあ、どっちにしろネルは勝てないと」

「おそろくな」

ライザが目を見開き、ネルをにらみつけた。

「今持つてるのが真剣だったら、あなたの首をはねてるころだよ」

「無理ですよ、あなたのお粗末な腕じゃ」

「言つたね！」

ライザはすかさず正面から斬りかかった。目にも留まらないほどの凄まじい速さだ。ネルは仰天しながら剣を突き出し、辛くもこれをさばいた。

ライザはおかまいなしに連撃を繰り返した。肩を狙って斬り、胸を狙って突き、足を狙って薙ぎ払い、さらに真つ向から斬り下ろす。ネルは必死にさばいているうちに、いきなり足を蹴られて転んでしまった。

「ああっ！」

倒れたネルの眼前に突きが迫った。彼女は転がってかわし、すかさず立ち上がった。そこに間髪入れず斬撃が飛んでくる。ネルはこれを弾いて跳び下がった。

ネルは猛攻をしのいだものの、全身から血の気が引いていた。反撃の糸口を見いだせない。これではいざずれやられてしまう。

涙目になりながらロイを見ると、彼が叫んだ。

「落ち着け、戦いは冷静さを失った方の負けだぞ！」

ネルが強くうなずくと、ライザが叫んだ。

「あなたはどっちの味方なの！」

「ネルに決まってるだろ、性悪女」

「なんですって！ ロイ、覚えておきなよ。次はあなたの番だからね！」

激昂しているライザを見てネルは考えた。もっと怒らせてみれば隙を見せるかもしれない。

第三十四話

そこでネルは、さらに挑発してみることにした。

「ライザさんって、恋人はいますか？」

「いるよ、ロイが」

「いえ、妄想の恋人じゃなくて」

ライザは目を見張った。

「なんでそんなことを言わなきゃならないの」

ネルは眉をひそめながら頭を下げた。

「ごめんなさい、聞く意味ないですよ。いないのわかってるし」

「はあ？」

「あなたみたいに性格の悪い人につき合う男の人なんて、いるわけがないですもんね」

それを聞いたライザは地を蹴り、ネルに斬りかかった。

「死ね！」

ネルは余裕の表情でかわした。さっきまでと違い、ライザの手と足の動きがばらばらだ。鋭さなど微塵もなく、勢いに任せて攻撃しているように見える。

ネルはさらに挑発を続けた。

「いくら美人でも性格が最悪じゃ誰も寄ってきませんよね、かわいそう。将来は誰にも看取られず一人寂しく死ぬんでしょうね」

ライザは目をむいて再び斬りかかった。ネルはその瞬間を狙い、渾身の力で斬り返した。今度こそ決まりだ。

ところが斬撃は見事に空振りし、ネルの首の前にライザの剣が突きつけられていた。

「え、え？」

ネルが目をしばたたいていると、ライザがにっこりと微笑んだ。

「どうする、まだやるの？」

ネルは剣を投げだした。

「まいりました」

「あのくらいで私を怒らせたつもりでいるんだからかわいいね。強くてもやっぱり子どもだよ」

審判の男性が手を挙げて叫んだ。

「勝負あり！ 勝者ライザ！」

周囲から歓声が上がった。ネルががっくりと肩を落としていると、ライザが笑顔で話しかけてきた。

「あなた、素質あるよ。しばらくここに住んでみれば？」

「今はだめです、護衛中ですから」

「ああ、ロイのお手伝いね。彼一人でも大丈夫だと思うけど」

「私はロイさんについていきたいんです」

ネルの真剣な眼差しを見て、ライザはため息をついた。

「罪な男だよ、あいつって」

彼女はそう言いながらネルの手を握った。

「まあいいや、私はあなたが気に入ったよ。女性でこれだけ強い人はなかなかいないんだよ。これから仲良くしてくれるかな？」

ネルが躊躇していると、ライザは笑いだした。

「あまり警戒しないでよ、そこまで悪い人間じゃないからさ」

そのときロイが近づいてきた。

「驚いたな、お前からそんな言葉が出るとは。てっきりいじめるかと思ってたよ」

「あなた、私をなんだと思ってるわけ」

「見た目は美女、中身は悪魔」

その途端、ロイはライザに殴られた。

「いってえー！」

「死ね！」

ネルはおそろおそろ口を開いた。

「あの、どうかその辺で」

「ああ、ごめんね。あなたの恋人を傷つけちゃいけないよね」
ネルは必死に手を振った。

「恋人なんて、そんな」

「あなたがロイを見るときの目つきは、明らかに恋人に対するものだよ。ロイがあなたを見るときもそうだね」

ネルが真つ赤になりながらうつむいていると、ライザはその肩を叩いた。

「どうぞお幸せにね。あと、私の力が必要になったら呼びに来てよ。その辺の人を捕まえて聞けば家はわかるからさ」

ネルがうなずくと、ライザは手を振って立ち去った。ザウラはそれを見送った後、ロイに声をかけた。

「これからどこに行くんだ」

「とりあえず師匠の家に行ってみるよ」

「そうか、泊まるところがなかったら俺の家に来いよ。じゃ、またな」

ザウラも手を振って立ち去った。賭け試合はまだ続けているが、ロイはそろそろ観戦をやめて師匠の家に向かうことにした。

五人は料理の勘定を済ませ、再び歩き始めた。やがてバートがロイに尋ねた。

「師匠ってどんな人なんですか」

「ひたすら強い」

「他には？」

「常に冷静沈着だな。驚いた顔をほとんど見たことがないよ」

そろそろ日が暮れかかり、周囲を少しずつ闇が包み始めている。

ロイたちは早足で歩き、師匠の家に着した。石でできた二階建ての一軒家だ。

「ルークさん、いらっしやいますか!」

ロイが叫びながら扉を叩くと、一人の男性が出てきた。年齢は二十代半ばくらいで中肉中背、よく引き締まった顔と体をしている。髪と瞳は黒く、肌も浅黒い。布の服を身に着け、腰には一振りの剣を佩いている。

彼はロイの肩を叩いた。

「おお、よく来たね」

「お久しぶりです、お元気そうですね」

二人が笑顔で言葉を交わしていると、バートがぼそりとつぶやいた。

「あまり強そうに見えないな、やけに若いし」

ルークが目をしばたいた。

「じゃあ試してみるかい？」

「え、どうやって」

「まあ中に入りなよ」

ロイたちは師匠につれられて家に入った。中は広間になっていて床に絨毯が敷いてあり、石でできた壁に大小様々な剣が飾ってある。ルークは、広間の真ん中にある木製のテーブルの前に立った。

「ちよつと剣を使うよ。危ないからみんな下がって」

ロイたちが引き下がると、ルークは身構えた。視線の先にあるのは、テーブルの上に乗っている赤く丸い果物だ。

皆が固唾を飲んで見守っている中、ルークは構えを崩して微笑んだ。

「終わったよ」

皆が果物に視線を移すと、真つ二つに断ち割られていた。バートが仰天して叫んだ。

「これは今斬ったんですか？」

「そうだよ」

「いつ斬ったのか全然わからなかったんですけど！」

「それは訓練が足りないね。これ食べるかい？」

ルークは割れた果物を差し出した。バートが受け取ってよく見ると、鮮やかにすっぱり斬られている。彼は愕然としながら言った。

「あなたは本当に人間ですか？」

ルークは頭をかきながら答えた。

「正真正銘の人間だけど、よく化け物呼ばわりされるよ。失礼なところの上ないね」

ロイがバートを見ながら言った。

「そういうわけだから、くれぐれも失礼のないようにな。この人が本気で怒ったら俺は逃げだすぞ」

バートは冷や汗をかきながらうなずいた。

五人はその夜、ルークの家泊まることになった。ロイとルークは一階の広間で話し込んでおり、他の四人は二階の部屋で眠りについていた。

ルークはテーブルを挟んでロイの向かい側に座っており、紅茶を飲みながら言った。

「そうか、レヴィンは殺し屋になったか」

ロイも紅茶を口にしながら答えた。

「はい、残念な話です。ルークさんから教わった剣術をそんなことに使うなんて不届き極まりない」

「技術をどう使おうが本人の勝手だけど、違法なことをやらかすのはちよつとな。教えるんじゃないよ」

そのとき、扉を叩く音がした。ルークは怪訝そうな顔をしながら立ち上がった。

「もう夜も遅いのに、今頃なんの用だろう」

ロイも続けて立ち上がった。

「ルークさん、気をつけてください。凄まじい殺気を感じます」

ルークは頭をかいた。

「嫌だなあ、そういう客。こんな夜中に暴れられたくないもんだ。放っておくか」

しかし、叩く音はどんどん大きくなる。近所迷惑なことこの上ない。ルークが渋々扉を開くと、そこには長髪の若者が立っていた。

「夜分に失礼します、ルークさん」

「失礼だと思ってるなら来るなよ」

ロイは若者の顔を見て、すかさずアーツを構えた。

「噂をすればなんとやらだな。レヴィン、何しに来た！」

ルークは視線を移さないままロイに言った。

「夜中に大きな声を出すなよ」

「すみません」

「それで、レヴィンはなんの用だ」

レヴィンは薄笑いを浮かべた。

「俺は護衛士をやめて殺し屋になったんです」

「さつきロイから聞いたよ」

「でも知名度が低いんで、名のある戦士を殺して回っているんですよ」

「ご苦労なことだな」

レヴィンは腰に帯びている短剣を引き抜いた。

「次の標的はルークさんです。あなたはこの国の剣士の中で一、二を争うほどの腕だ。それを倒したとなれば、俺の名は国中に鳴り響くことになるでしょうから」

第三十五話

ルークは剣の柄に右手をかけながら苦笑した。

「お前に剣術を教えたのは間違いだったな」

「どうしてそう思うんですか」

「その技術をろくなことに使っていないからだよ。もっと人間性をよく調べてから教えるべきだった」

ルークが大きなため息をつくとき、レヴィンはせせら笑った。

「それは残念でしたな」

「今から考え直す気はないか？」

「もう何人も殺してるし、今さら引き返せません」

「そうか、本当に残念だ」

「後悔する必要はないですよ、どうせあなたはこれから死ぬんですから！」

レヴィンは言うが早い右手を一閃させた。二本の短剣が空気を切り裂いて飛んでいく。ルークがわずかに動いてそれをかわすと、レヴィンは瞬時に間合いを詰めて短剣を突きだした。

ロイが叫んだ。

「師匠！」

ルークは跳び下がって攻撃をかわしていた。まだ剣を抜いてもいない。ロイはアーツを構えてレヴィンを撃とうとしたが、ルークに止められた。

「これは一対一の勝負だ、お前は手を出すな」

「でも奴は危険です！」

「そんなことはわかってるよ。いいから黙って見てる」

ロイが渋々アーツを下ろすと、レヴィンがにやりと笑った。

「師匠、助かります。あなたたち二人を相手にするのは無理がありますから」

「一人の敵を二人で倒そうなんて卑怯な真似はできないからね」

「でも、それがきつと命取りになりますよ」

「それならそれで仕方がないさ」

レヴィンは左右二本の短剣を構えた。

「何か言い遺すことはありませんか」

「ないよ、俺はまだ死なないし」

レヴィンが床を蹴り跳びかかった。同時に鋭い突きを放っている。ルークは横に動いてこれをかわした。さらにレヴィンが首筋を狙って斬りつけたがかすりもしない。

「くっ、この……」

レヴィンが目をむいてにらみつけると、ルークは穏やかな声で言った。

「なんだその顔は。俺が教えたことを忘れたのか？ 戦いは冷静さを失った方の負けだぞ」

「うるさい、黙れ！」

「そんな状態じゃ正確な判断が……」

ルークが言い終わらないうちに、レヴィンは左右の短剣を投げつけた。さらに間髪入れず跳びかかり、背中に隠していた長剣を引き抜いて真っ向から斬りつけた。

「死ねえええっ！」

ロイはレヴィンの速度に刮目した。およそ人間とは思えない。腕の立つ戦士であっても、これを避けるのは難しいはずだ。

ルークは二本の短剣をかわすが早いか剣を抜いた。ほぼ同時に彼の前を金色の光が走り、斬撃を弾き返した。その表情にはなんの變化も見られない。ロイは師匠の強さに舌を巻いた。

レヴィンは床に降り立ち、長剣を上段に構えてルークを見据えた。「さすがは俺の師匠、たいした腕ですね」

「お前こそなかなかのものだよ、俺に剣を抜かせたんだからな」ルークの剣から金色の光がほとばしっていた。エクストリアスという名で、数ある魔剣の中で最も斬れ味が鋭いと言われている。

ロイは、剣を抜いた師匠の威圧感に圧倒されていた。見ているだ

けで押し潰されそうだ。こんな相手とは頼まれても戦いたくない。充分な道具を持って挑んだとしても、殺される可能性の方が高いだろう。

ロイは「最強の道具師」などと呼ばれているが、ルークと本気で戦ったことがないのでどちらが強いのか実はわからない。彼の予想では、よくて相討ちと言ったところだ。

レヴィンもかなりの重圧を感じており、その額には冷や汗がにじんでいた。

「よお、ロイ」

「なんだよ」

「どうして俺たちの師匠はこんなに強いんだろうな。まるで化け物じゃないか」

「そう思うなら剣を引けよ、俺ならとっくに放り出してるぞ」

レヴィンは顔を引きつらせた。

「馬鹿言うな。『レヴィンはルークに挑んで歯が立たずに逃げました』なんて噂が広まってみる。商売あがったりだ」

ルークがエクストリアスを突きつけた。

「忠告だ、剣を引け。これ以上やるなら本当に斬るぞ」

「ご心配なく、斬られるのはあなたの方ですから」

レヴィンは突然体勢を下げて疾走し、足を薙ぎ払った。相手が跳び上がってかわしたその瞬間、彼は叫んだ。

「これで終わりだ！」

強烈無比な斬撃が、空中にいるルークを襲った。ロイはそれを見て絶叫した。

「師匠！」

直後に凄まじい金属音が鳴り響き、無数の閃光が走った。ルークはその場に降り立った。相変わらず表情に変化はない。一方、レヴィンは顔が引きつっていた。

「馬鹿な、俺が……」

直後に、レヴィンの手足から鮮血が噴き出した。

「ぐああああっ！」

彼が叫びながらうずくまると、ルークが静かな声で言った。

「早く手当てしないと死ぬぞ」

レヴィンはルークをにらみつけた。

「覚えておけ、この借りは必ず返す！」

「ああ、いつでも来い」

レヴィンは足を引きずりながら立ち去った。ロイはそれを見てルークに尋ねた。

「とどめを刺さなくていいんですか？」

「性懲りもなくまた来るようなら、そのときは容赦なく斬るよ」

ルークは剣を鞘に収めた。

「しかし、あいつもやるようになったなあ。まさか俺が斬られるとはね」

ロイは仰天した。

「どこか斬られたんですか！」

ルークは首の付け根を指さした。ロイがよく見ると赤い筋が走っており、血が流れ出していた。

「すぐに手当てします！」

ロイが急いで手当てをしていると、ルークが真顔で言った。

「あれでしばらくは大人しくしてらと思うけど、くれぐれも油断するなよ。いずれお前も狙われることになるかもしれないから」

「もうすでに狙われてます」

「そうか、まあお前なら心配ないかもな」

ロイは師匠の呑気さを齒がゆく思った。どうやら自分がレヴィンを止めることになりそうだ。おそらく、殺さない限り彼は同じ行動を続けるだろう。そうなると本気でやり合うしかない。

その真剣な表情を見て、ルークが穏やかに言った。

「あいつにまた会うことがあったら伝えてほしい」

「何をですか」

「力をどう使うかは自分次第だ。でもどうせなら、誰かを傷つける

ためじゃなくて誰かを守るために使えってね」

ロイはうなずいた。しかし、言ったところでレヴィンは聞く耳を持たないだろう。同じ人間でありながらちっともわかり合えないのが悲しかった。

第三十六話

翌朝、ロイたちはルークの家を出発した。

別れ際にルークが言った。

「困ったことがあつたらいつでも来いよ、できる限り力になるから」

ロイは深々と頭を下げた。

「ありがとうございます、では失礼します」

五人は街の中を歩いていった。今日も住民たちが賭け試合をやっている。観客の中にはライザもあり、彼女はロイの姿を認めて声をかけてきた。

「あれ、もう行っちゃうんだ」

「ああ、先を急ぐんでな。暇ができたらまた来るよ」

「あなたに暇なときなんてあるの？」

ロイは頭をかいた。

「そう言えないな」

「護衛の人数が足りなくなつたらここに来なよ。腕の立つ人間がいっぱいいるからさ」

ロイは強くうなずいた。この街にはルークを筆頭に凄まじい使い手がそろっている。彼らが手を貸してくれたなら相当な戦力になることは間違いない。

ロイたちはライザに別れを告げ、ハデイスを後にした。

街を出ると渴いた大地が広がっていた。灼熱の太陽が照りつけ、全身から汗が噴き出てくる。バートが布で顔を拭きながらロイにたずねた。

「次はどこへ行くんですか」

「アルナム自治区だな」

「この国に自治区なんてあつたんですね」

ロイはうなずいた。

「アルナム人たちは、数百年前からずっと他者による支配を拒んで

いるんだ」

「そいつらはどんな連中なんですか」

「直情的で好戦的だ。あと、魔物の血を引いている」

「ネルみたいなもんですかね」

そのとたん、ネルがバートをじろりと見た。

「私って直情的で好戦的なわけ？」

「そうだよ」

「あなたにだけは言われたくないんだけど。感情のままに生きてる人間のくせに」

バートはむっとした。

「俺だつてネルに言われたくねえよ」

「はあ？ なんなの、バートのくせに」

「お前こそなんだよ！」

ロイが顔をしかめながら割って入った。

「はい、そこまで。これ以上喧嘩するなら置いていくぞ」

二人は眉を吊り上げながらも押し黙った。

ロイたちはさらに歩き続けた。まったくと言っていいほど魔物の姿が見えない。やがてセレスがロイにたずねた。

「不思議ですね。他の場所なら必ず何匹か出てくるのに」

「たぶん、いなくなっただんじやないかな」

「どうしてですか」

「アルナム人たちの強さと凶暴さは魔物の上に行く。そんな連中の近くに住んでいるのは危険なんだろう」

「なんでそんなに強いんでしょうね」

ロイは首をかしげた。

「俺にもよくわからない。ただ、人間と魔物両方の血を引いてる奴はやたら強いんだよなあ。相乗効果でもあるのかな」

夕方になるまで歩き続けると、アルナム人の街の一つギムリスにさしかかった。今までの都市と違い城壁などどこにもない。建物は堅牢な煉瓦造りであるものの、そのほとんどに大きな窓がある。野

盗や魔物の侵入を想定していないとしか思えなかった。

ロイが周囲を見回しながらつぶやいた。

「まあ、こんな街を襲撃しようなんて命知らずは確かにいないよな」
住民はオレンジ色の髪に黒い肌をしていたり、銀色の髪に紫色の肌をしていたりと様々だが、総じて体が引きしまっており目つきが鋭い。また、幅広の大剣を佩いていたり巨大な斧を背負っていたりと物騒な雰囲気醸し出している。

五人はアルナム人たちに好奇の目で見られながら街を歩いていった。バートはそれが気に入らず彼らをにらみつけている。ロイは、いつか喧嘩騒ぎを起こすのではないかとひやひやしていた。

間もなく、前方からがっしりした男性が歩いてきた。年齢は二十歳前後で、短い金髪に緑色の肌をしている。着ているのは半袖の服と長ズボンだった。武器は何も持っていない。

男はロイたちを一瞥し、馬鹿にしたような笑みを浮かべた。バートはそれを見逃さず、眉間に皺を寄せてにらみつけた。

「何笑ってんだ、この野郎！」

ロイが止めようとしたが遅かった。男は少しずつ近づいてきてバートの前に立った。

「なんの変哲もない普通の人間が、大きな顔をしてこの街を歩くなよ」

「俺は強いから堂々と歩いてるんだ。雑魚の分際で道をふさぐんじやねえよ」

今度は男の目尻が吊り上がった。

「こいつ、馬鹿にしてんのか！」

「見ればわかるだろうが、馬鹿」

男が目をむいてつかみかかると、バートはひらりとかわした。

「へっ、のろまが」

「なんだと、半殺しにしてやるから覚悟しろ！」

そのとき、近くを歩いていた男性が叫んだ。

「おっ、喧嘩が始まるぞ！」

その声を聞いて、周囲の住民たちがぞろぞろと集まってきた。見物するつもりなのだ。ロイは慌ててバートの肩をつかんだ。

「いい加減にしるよ、いきなり住民を敵に回してどうするんだ」

「ご心配なく、こんな奴に負けませんから」

「そういう問題じゃない！」

ロイが叫んだと同時に、男が殴りかかってきた。バートは素早く体をそらしてかわし、相手の腹に強烈な蹴りをお見舞いした。

「ぐえっ！」

男が腹を押さえた途端、バートの拳打がその顔面を直撃した。男はそれでも倒れず、お返しとばかりに頭突きをした。

「ぐあっ！」

後退したバートを、男は続けざまに殴りつけた。バートはのけぞりながらも踏みとどまり、鼻血を垂らし笑顔を浮かべた。

「やるじゃねえか、そうこなくつちなあ！」

バートは疾走し、拳打を連続で繰り出した。男は後退してこれを避けた。しかし、まだ終わらない。肘の一撃が男の顔面を捕らえていた。

彼が顔をしかめながら後退すると、今度は膝蹴りが腹に入った。

バートはこの機を逃さず、相手の顔や腹を続けざまに殴りつけた。

「今度から、俺を見たらよけて通りな！」

周囲の住民たちから感嘆の声が上がった。

「あいつ、やるなあ」

「たいした野郎だぜ」

「普通の人間とは思えないな」

そのとき、一人の少女が現れて叫んだ。

「やめなさい！」

バートは彼女を見つめた。歳は十八くらいに見える。紫色の髪と瞳、白い肌、はっきりした目鼻立ちをしており、豊かな胸と引きしまった体をしていた。着ているのは胸元を大きく露出した服と極端に短いスカートだ。

彼女は男に近づいて声をかけた。

「もうやめなよ、いい大人が」

「邪魔すんな、引っ込んでろ！」

その途端、少女は目をすつと細めた。

「誰に向かって口を聞いているの？」

男は一瞬たじろぎ、バートに視線を移した。

「今日のところは勘弁してやるが、次はないぜ」

彼は唾を吐いて立ち去った。バートはそれを見届けると、ここに

こしながら少女に言った。

「誰だか知らないけど、なかなかいい女だな」

すると彼女も笑みを浮かべた。

「そう？　ありがとう。私はアントラ、あなたは？」

「バートだ、この五人のリーダーだよ」

その途端、彼はネルに殴られた。

「ぐえっ」

「リーダーはロイさんだって何度言えばわかるの？」

「へいへい、すみませんでしたネル様」

アントラが目を丸くした。

「ロイとネルって、まさか……」

バートは殴られた頭をさすりながらたずねた。

「なんだ、知ってるのか」

「道具師ロイと赤眼のネルでしょ？　知ってるよ、超有名人じゃない！」

「い！」

「俺もそこそこ有名なんだけど」

「え、ごめんね。聞いたことない」

バートが肩を落としていると、ロイが少女に尋ねた。

「この街に宿屋はないか？」

「私の家が宿屋だよ」

「それはちょうどよかった、案内してくれないかな」

「喜んでご案内します」

五人はアニトラにつれられて目抜き通りを歩いていった。周囲には商店が立ち並んでおり、筋骨たくましい住民たちが買い物をしている。バートがそれを見てつぶやいた。

「なんだかごつい奴ばっかりいるなあ」

するとアニトラが微笑んだ。

「しかもみんな強いよ」

第三十七話

バートはうなずいた。

「さつき喧嘩した奴もかなり強かったしなあ」

「この街にはもつと強い人がごろごろいるよ」

やがてロイたちは宿屋にたどり着いた。煉瓦造りの三階建てで、やはり窓が大きい。ロイはそれを見てアニトラに言った。

「できれば二階か三階の部屋にしてほしいな。一階はあっさり侵入されそうだから」

アニトラは首をかしげた。

「ロイさんの部屋に侵入する人なんているのかなあ」

「俺じゃなくてセレスの部屋だよ」

「ああ、あの貴族みたいな女の人？ それならあり得るかもね。じやあ、二階か三階が空いてるか聞いてみるよ」

アニトラが宿屋の人間に確認したところ、二階の部屋がいくつか空いていることがわかった。ロイは二つ部屋をとり、片方をセレスとネルに使わせることにした。自分たちは隣の部屋だ。

五人は夕食をとった後、一階のロビーで歓談していた。傍らにはアニトラがおり、この街について話している。

「最近、夜な夜な殺人鬼が出没するんだよ。ここ数日だけで三人が殺されてる。みんな困ってるんだけど、そいつが目茶苦茶強いらしくてどうにもならないんだよね」

ロイが尋ねた。

「そいつの顔はわかってるのか？」

「わからないんだよ。周りが暗いし覆面もしてるし、みんなで取り囲もうとするとあつと言う間に逃げちゃうし」

バートが身を乗り出した。

「俺に任せろ、そいつをぶった斬ってやる!!」

「本当？ 頼りになるなあ」

ロイがぼつりと言った。

「俺は行かないぞ」

バートは眉をひそめた。

「なんでですか、人助けですよ！」

「俺は今、セレスを護衛しているんだ。彼女を置いて出かけるわけにはいかないよ」

「わかりました、じゃあ俺一人でいきます！」

アニトラがバートの肩を叩いた。

「私も行くよ、殺人鬼がよく出る場所に案内するからさ」

「おう、頼むぜ！」

二人はつれ立って宿屋を出ていった。ロイはそれを見届けた後、ネルに話しかけた。

「あいっただけじゃどうも心配だな。無茶しなけりゃいいんだけど」
彼女はロイの顔を見つめた。

「要するに、私も行けと？」

「うん。悪いけど、こっそりついていってくれないかな」

「いいよ、じゃあ行ってくるね」

ネルが出ていった後、ロイはひとりごちた。

「うーん、それでも心配だ」

隣にいるセレスが笑い出した。

「本当に心配性ですね。あの二人なら大丈夫でしょうに」
ガーランドも笑顔で言った。

「そんなに心配ならロイ殿も行けばいいだろう」

「それはできない」

「じゃあ腹を据えて帰りを待つのだな」

ロイは頭を抱えて黙り込んだ。

その頃、バートはアニトラにつれられて街を歩いていた。周囲はすっかり暗くなり、建ち並ぶ家々からもれる明かりだけが道を照らしている。

バートがアニトラに話しかけた。

「ところで、相手は一人なんだよな？」

「目撃されたのは一人だけだけど、まだいるかもね」

「まあ二人だろうが三人だろうが、このバート様にかかれば同じだけどな」

「頼もしいねえ」

アニトラは言葉を交わしながらも、注意深く周囲に視線を走らせていた。腰には長剣を佩いている。殺人鬼に襲われたら自分も戦うつもりなのだ。

バートはそれを見て表情を緩めた。

「お前が戦うことないよ、俺に任せておけって」

「元々私たちの問題だし、あなただけに任せておくわけにはいかないよ」

「そうか、でも無理はするなよ」

アニトラは微笑んだ。

「気遣ってくれてありがとう、優しいんだね」

「そりゃあそうさ、強くて優しいのがバート様……」

彼は最後まで言わず、剣の柄に手をかけた。正面から若い男性が歩いてきたのだ。

「誰か来やがった、油断するなよ」

「わかってる」

二人が身構えていると、彼が声をかけてきた。

「何やってんだ、お前ら」

よく見ると、昼間喧嘩をした男だった。腰には長剣を佩いている。

バートは眉間に皺を寄せた。

「なんだ、お前か。そっちこそ何してんだよ」

彼はバートを見据えながら答えた。

「最近暴れ回ってる殺人鬼を叩き斬ってやろうと思ってな」

「なんだ、俺と同じか」

「同じ？ アニトラ、よそ者にそんなことを頼むなよ。これは俺た

ちの問題だろう」

彼女は目を伏せた。

「確かにそうだよな」

バートはそのようすを見ると、男に食ってかかった。

「お前らじゃどうにもならないから俺を頼ったんだろが、それ以上責めるな！」

「なんだと、よそ者は引っ込んでろ！」

「お前こそ引っ込め！」

アニトラは二人の間に割って入った。

「エドガーもバートさんもやめて！ 私が悪いんだよ」

彼女が辛そうな顔をしているのを見て、バートは引き下がった。

「女を悲しませるのは趣味じゃない、この辺でやめておくよ」

エドガーも表情を和らげた。

「アニトラ、ごめんな。あまり気にしないでくれ」

彼女は笑顔でうなずいた。

「よかった。二人とも目的は同じなんだし、仲良くしてよ」

バートはエドガーを見つめた。

「いけ好かないのはお互い様だ、まあよろしく頼むぜ」

エドガーもバートを見つめ返した。

「おう、くれぐれも足を引っ張るんじゃないぞ」

三人はつれ立って歩き、細い路地に入った。するとアニトラが小声で言った。

「この辺りでよく出るんだよ、二人とも気をつけてね」

バートたちは物陰に隠れた。数人の男性が歩いているが特に変わったようすもない。そこで、しばらく待ってみることにした。

やがて、エドガーがアニトラに話しかけた。

「殺人鬼は相当強いらしい。もし俺とバートが押されてるようなら、お前は急いで逃げろ」

彼女は目を見開いた。

「何言ってるの、私の腕を知ってるでしょ？ あなたよりよっぽど

……」
「確かにお前は強いけど、女だからな。あまり危険な目にあわせるわけにもいかない」

アニトラが沈黙したのを見て、バートが口を開いた。

「そいつの言う通りだ。いざとなったら俺らを盾にして逃げる。むさい男二人が死んだところでどうでもいいけど、お前みたいな女が死んじまったらもつたいない」

アニトラは恥ずかしそうにうつむいた。

引き続きその場でようすを見ていると、突然悲鳴が上がった。バートたちはその方角へ向かって駆けだした。

前方を見ると、一人の男性が喚きながら逃げてきた。右腕から大量の血を流している。

「助けてくれ、奴が出た！」

その後ろから、斧を振りかざした男が迫ってきた。顔は覆面で隠しており、上半身は裸で下半身に腰布を纏っていた。盛り上がった筋肉や太い手足が高い戦闘能力を感じさせる。

三人は逃げてきた男性を通した後、殺人鬼の前に立ち塞がった。

次の瞬間、エドガーが剣を抜くなり斬りつけた。

「喰らいやがれ！」

殺人鬼が斧を振り回してこれを弾くと、続けてバートが真っ向から斬り下げた。

「おらあああつ！」

しかしその一撃はかわされ、バートは強烈な前蹴りを喰らって吹っ飛んだ。さらにアニトラが突きかかったが、男は斧を一閃させてこれも弾き返した。

そのとき突然、紫色の光が走った。男は左肩を斬り裂かれ、悲鳴を上げながら後ずさった。

バートたちが驚いて見ると、そこには魔剣グラフィードを構えたネルが立っていた。アニトラがその姿に感動して叫んだ。

「かっこいいー！ すっごくかっこいいー！」

ネルが続けて斬りつけようとすると、バートが進み出た。

「ネル、下がってくれ。そいつは俺がやる」

「大丈夫なの？ この人かなり強いよ」

「知ってるさ。でもな、いつまでもロイさんやお前に頼りっぱなしじゃ男が廃るんだよ」

バートは単身、殺人鬼に向かって歩いた。

「一対一で戦うから誰も手を出さないでくれ」

それを聞いてネルたちは引き下がった。

第三十八話

バートはすかさず地を蹴り、頭上から剣を振り下ろした。

「らあああつ！」

殺人鬼は斧でがっちりを受け止めた。それでもバートの攻撃は止まらない。彼は間髪入れず胸を薙ぎ払い、顔面を狙って鋭い突きを入れた。

男はすべてかわしたものの、体勢を崩した。バートはその機を逃さず、踏み込んで相手の足を斬り払った。

「ぎゃあああつ！」

殺人鬼が悲鳴を上げながらよろめいたのを見て、バートは冷たい声で言った。

「痛いか、そうだろうな。お前に殺された奴はもつと痛い目にあつたんだよ。その罪を自分の命で償うがいいぜ！」

彼が剣を振りかざした途端、突然誰かが突進してきた。

「おっ？」

バートは向き直ったがすでに遅く、突っ込んできた男の短剣に右腕を斬りつけられた。

「しまった、仲間がいたか！」

バートが腕を押さえながら後ずさった瞬間、斧を持った殺人鬼が斬りかかってきた。形勢逆転だ。ネルが援護しようとする、一瞬速く跳び出した人間がいた。エドガーだった。彼は殺人鬼の一撃を剣で弾き、バートをかばいながら叫んだ。

「しっかりしろ、この程度でやられるんじゃない！」

バートは剣を構え、エドガーの横に並んだ。

「ありがとうよ、助かったぜ！」

「気にするな。これで二対二だ、アントラたちは手を出すなよ！」
アントラたちが何か言おうとすると、バートが先に口を開いた。

「わかってくれ、男には恰好つけたいときがあるんだよ。特に、い

「い女の前じゃあな！」

アニトラたちは押し黙った。

やがて、周囲に住民たちが集まってきた。殺人鬼と仲間は浮足立ち、背を向けて逃げようとした。そのときだ。

バートが殺人鬼に襲いかかり、その肩をざっくりと斬りつけた。

「ぐがあっ！」

男が血飛沫を上げながら倒れ込んだが、仲間はかまわずに逃げた。しかし、エドガーがその背後に迫っていた。

「仲間を置いて自分だけ逃げようなんざ最低な野郎だな」

エドガーの放った強烈な突きが、男の背中から胸にかけて貫いた。彼は鮮血を噴き出し、絶叫しながらその場に倒れ伏した。

一方、殺人鬼は肩を斬られながらもまだ息があった。彼は斧を投げ捨ててバートに懇願した。

「俺が悪かった、この通りだ。何人も殺したことは謝る。もう二度としないから許してくれ」

バートは集まった住民たちに声をかけた。

「こんなこと言ってるぜ、どうする？」

彼らは黙って首を振った。バートはうなずき、殺人鬼の方に向き直った。

「だとさ、残念だったな。何か言い遺すことはあるか？」

「待ってくれ！ 血が騒いでどうしようもなかったんだよ。魔物の血を引いている人間の宿命って奴だ。他の連中だってわかるはずだぜ、自分じゃどうしようもなくなるときが……」

バートはその言葉を手で制した。

「だからって他人を殺していいわけじゃねえよ、じゃあな」

閃光が走り、殺人鬼は血を噴き出して倒れた。バートは剣を振って血を払い、無言で鞘に収めた。

すると、ネルが急いで駆け寄ってきた。

「斬られたみたいだけど大丈夫？」

「心配すんな、かすり傷だよ」

「そう、よかった」

ネルはバートの顔を見つめた。

「なんか今日のアなたは恰好よかったよ、いつもと別人みたい」
バートは照れながら頭をかいた。

「じゃあ、ロイさんから俺に乗り換えるか？」

「それはないよ、私はロイさん一筋だから」

「ちえっ、つまらないな。せっかくがんばったのに」

アニトラに視線を移すと、彼女は笑顔を浮かべてエドガーの手を握りしめている。バートは思わずため息をついた。

「俺にはなんの見返りもなしが、恰好つけ損だな」

ネルがそれを聞いて吹き出した。

「いつものバートに戻っちゃったね」

「どうせ俺はこんな人間だよ」

殺人鬼たちの遺体は住民たちによって片付けられ、バートたちは宿に戻るようになった。エドガーとはここでお別れだ。バートは右手を差し出して言った。

「さっきはありがとうな、お前がいなかったらやばかったよ」

エドガーはその手を握りしめた。

「貸し一つだからな、いつか返せよ」

「おお、二倍にして返してやるぜ！」

「いっそ三倍でもいいぞ」

二人は笑顔で見つめ合った後、手を振って別れた。

宿屋に戻ると、一階のロビーにロイが立っていた。他の人間は寝てしまっており誰もいない。彼は開口一番バートを叱りつけた。

「時間をかけすぎだ、心配したぞ」

「すみません、てこずりました」

「傷まで負ってるじゃないか、まったく。手当するからこっちへ来いよ」

ロイがバートの手を消毒していると、アニトラがおそろおそろ言うた。

「あまり怒らないであげて。バートさんは本当にがんばってくれたんだよ」

ロイは傷口から目を離さずに答えた。

「自分から首を突っ込んだ以上、がんばるのは当然だ。それで手を抜いたら張り倒してるところだよ」

「そんな言い方……彼は命を賭けて戦ってくれたんだよ。殺人鬼も倒してくれたし」

ロイはうなずいた。

「それはたいしたもんだな」

「私は感謝してもしきれないほどだよ、今日会ったばかりの人間のために……」

アニトラが尚も弁護しようとする、ロイはバートを見つめた。

「おい」

「なんですか」

バートがびくびくしていると、ロイは破顔した。

「よくやったな、見直したよ」

バートも満面に笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。ロイさんに褒められるなんて感激です！」

「今後もこの調子で頼むぞ、期待してるからな」

「どーんと任せてください！」

バートは自分の胸を叩いた。

「そうだ、ロイさん。一つ提案があるんですけど」

「なんだよ」

「この頼れる男バートを、今度からリーダーに……」

その途端、彼はネルに殴られた。

「いってえ！ 少しは手加減しろよな！」

「まったくあなたはいつもいつも！」

ロイが笑いながら言った。

「今は無理でも、いずれ護衛士たちのリーダーにはなれるだろうさ。素質は充分ある」

「本当ですか！」

「ああ。ただ、もう少し考えて行動した方がいいな。今のお前は突っ走りすぎだから」

「そうですね、自分でもそう思います」

バートは笑いながら頭をかいた。ロイとネルもそれを見ながら笑顔を増かべた。

第三十九話

翌日。ロイたちはアニトラと別れ、ギムリスの街を後にした。

渴いた大地を半日ほど歩き続けると、アルナム自治区を抜けることができた。相変わらず気温が高く、全身から汗が噴き出てくる。

ロイたちは水筒の水を口にしながら先へ進んだ。

やがてバートがロイに尋ねた。

「次はどこを通るんですか」

「シエルブルの領内だ」

するとセレスが口を挟んだ。

「シエルブルという男は貴族を気取っていますが、実際はただの魔物です。国の許可も得ず勝手に領地を持ち、魔物を集めて住まわせているのです。しかも人間を見つけると捕らえて虐殺します」

バートが目をむいた。

「とんでもない奴ですね！」

「はい。できれば彼の領内を通りたくないのですが、ここを横切らないと三日ほど無駄にしてしまいます。やむを得ません」

「まあ貴族って言うからには、外をふらふらほっつき歩いてるわけでもないんでしょう。黙って通り抜ければ問題ないですよ」

それを聞いてロイが首を振った。

「困ったことに、奴は魔物の軍隊を率いてしばしば野外訓練をするんだ。もしかすると出会ってしまうかもしれない」

「そうになったらそうなったで、運が悪いと思ってあきらめましょう」
五人がさらに進んでいくと、はるか彼方に砂埃が立ち上っているのを目にした。ロイはその途端に顔をしかめた。

「バート、俺たちの運は相当悪いみたいだぞ」

「え、まさかシエルブルが来たんですか？」

「おそらくな」

やがて地平線の向こうから、二輪の馬車に乗った兵隊たちが姿を

現した。百人を超える人数で、それぞれ剣や槍などで武装している。着ているのは革の鎧と長靴だ。

兵士たちはロイの目の前で止まり、その中から一人の男が進み出した。年齢は三十前後。金色の長髪と口髭を生やしており、肌は白く瞳は緑色をしている。やせ型で非常に鼻が高いのが特徴的だ。革の鎧や長靴の他、長剣と緋色のマントを身に着けていた。

彼は五人を見回しながら口を開いた。

「我が名はエリアス・ハミル・シエルブル。貴様らは何者だ」

ロイが進み出て答えた。

「単なる旅人だよ、たまたまここを通っただけだ」

シエルブルはロイの顔をまじまじと見つめた。

「金髪で隻眼、黒ずくめの服に道具袋。貴様は道具師ロイだな。殺された仲間たちの恨み、晴らしてくれるわ！」

ロイは眉間に皺を寄せた。有名であることがもたらすのは利益ばかりでないと感じた瞬間だった。

シエルブルが目をむいて叫んだ。

「この者たちを捕らえよ！」

百人を超える兵士がロイたちを囲んだ。いくらなんでも多勢に無勢だ。抵抗すれば斬り刻まれて死ぬことになる。ロイたちはおとなしく捕まった。

五人は縄で縛られた上で馬車に乗せられ、シエルブルの屋敷へ連行された。煉瓦造りの三階建てで、広々とした中庭がある。そこには噴水や花壇があり、優雅な雰囲気醸し出していた。

ロイたちは縄で縛られたまま地下牢へ放り込まれた。武器や荷物を取り上げられなかったのは不幸中の幸いだが、両手を縛られており扉に鍵をかけられているのでどうにもならない。

バートが歯噛みしながら言った。

「あの偽貴族、俺たちを殺すつもりか？」

ロイも口を開いた。

「十中八九そうだろうな、奴の人間嫌いは有名だし」

彼はネルに視線を移した。

「あいつがまた来たら魔物のふりをしてくれないか。そうすればネルだけでも助かるかもしれない」

「私だけ助かるうとするなんてできないよ！」

「お前一人のためじゃない、みんなのためなんだよ。そこから道が開けるかもしれないだろ？ このまま何もしないよりはずっとましだ」

彼女が黙り込むと、ロイはさらに続けた。

「それに俺は、お前が死ぬところを見たくない」

ネルは声を震わせた。

「私だつてロイさんが死ぬのなんか見たくないよ！」

すると彼はにっこり微笑んだ。

「心配するな、俺は簡単に死ぬような男じゃない。それはお前だつてよく知ってるだろ？」

ネルは強くうなずいた。

「わかった、ロイさんを信じてるよ」

「ああ、そうしてくれ」

やがて、地下牢の入口にシエルプールが現れた。後ろに二人の兵士をつれている。

「諸君、気分はいかがかね」

バートが目尻を吊り上げて怒鳴った。

「いいわけないだろうが、わかりきったことを聞くな！」

「随分威勢のいい人間だな、殺すのが楽しみだよ」

シエルプールが下卑た笑いを浮かべていると、ネルが叫んだ。

「私は人間ではありません、どうかお助けください！」

シエルプールは目を見開いた。

「ほう、何か証拠がおりかな」

「私の髪と目をよくご覧ください」

その言葉が終わるや否や、ネルの髪と瞳が真っ赤に染まった。シエルプールはそれを見て叫んだ。

「おお、これは驚いた。あなたは赤眼だったのか」

「はい。このロイという男に捕らえられ、部下として働くことを余儀なくされておりました」

「それはお気の毒に。わかった、あなただけは助けるとしよう」

彼は兵士に命じて牢屋の扉を開け、ネルをつれ出した。

「縄もほどこいて差し上げたいところだが、残念ながらできない。あなたを全面的に信用していいものかどうか判断できかねるのでな」

ネルは舌打ちをしたい気分だった。もし縄をほどこしてくれたなら、一瞬でシエルブルーを斬り倒して皆を救出しているところだ。

「では、どうすれば信用していただけるのでしょうか」

「そうだな、例えばロイの仲間を斬り殺すとか」

ネルは沈黙した。そんなことをできるわけがない。シエルブルーは「お見通しだ」と言わんばかりに笑みを浮かべた。

「信用はできないが、あなたが赤眼であることは紛れもない事実だ。魔物の本性を取り戻してくれることを期待しているよ」

彼はロイに視線を移した。

「さて、貴様は魔獣の餌にしてやろう。しかし、無抵抗な人間をただ殺すのもおもしろくないな」

シエルブルーは牢屋に入り、ロイの道具袋をごそごと漁った。

「おお、なんだこれは」

彼が取り出したのは先の尖った金属性の棒だった。

「ちょうどいい、このお粗末な武器を貴様に与えよう。せいぜいがんばることだな」

シエルブルーは兵士たちに命じ、ロイを牢屋からつれ出した。

「さあ行くのか、恐怖と絶望の旅へ！」

シエルブルーはロイとネルをつれて中庭へ向かった。ロイはなんとか逃げだそうとしたが、両腕を兵士に抱えられておりどうにもできない。

やがて中庭に着くと、兵士に引つ張られた真紅の生き物が近づいてきた。ロイはそれを見て息を呑んだ。魔物の中でも一番獰猛な、

ガドウーラという魔獣だった。

成人男性の身長を一フィードとすると、ガドウーラの体長は二フィードくらいだ。魔獣としては割と小さい。しかしその強さと凶暴さは群を抜いており、自分の倍くらい大きな獲物を捕食することもしばしばある。外見は獅子に酷似しており、違うのは全身が真紅であることと、頭から前方に向かって鋭い二本の角が生えていることだ。

シエルブルはにやにやと笑いながら、兵士に命じてロイの縄を解かせた。

「彼は私が手塩にかけて育てた最強の魔獣だよ。倒せるものなら倒してみるがいい！」

解放されたロイに、兵士から金属の棒が手渡された。彼が素早く身構えると、同じく解放されたガドウーラが跳びかかってきた。

ロイは間一髪でこれをかわした。シエルブルはすでに引き下がりを、兵士たちに護られながら高笑いしている。ネルは彼らのすぐ横で、はらはらしながら戦いのようすを見つめていた。

真紅の魔獣はロイをにらみつけ、鋭い牙をむき出した。凄まじい威圧感だ。ロイは額に冷や汗をにじませながらにらみ返した。

かつてグレゴールに刻まれた右肩の傷はまだ癒えていない。手負いの状態でガドウーラを相手にするのは厳しすぎる。しかし、やるしかない。

彼は金属の棒をまっすぐに構えた。

第四十話

そのとき頭の中に、師匠であるルークの言葉が浮かんできた。ハデイスの街で剣の訓練をしていた頃に言われたことだった。

「魔獣と戦うときは、とにかく気を抜かないことだ。絶対に相手から目をそらすな。少しでも隙を見せたら喉笛に噛みつかれて終わるだからな」

さらに彼の言葉は続いた。

「肉食の魔獣の目は大体が前面についている。対して草食の連中は側面についていることが多い。肉食は獲物を追いかけて倒すために前方をよく見る必要がある、草食は天敵を警戒するために広範囲を見る必要があるからだ」

次の瞬間、ガドウーラが地を蹴った。鋭い角がロイの腹を狙って突き出されたが、彼は身を翻してかわした。

再びルークの言葉が浮かんでくる。

「お前なら、ゲルガー程度の魔獣は難なく倒せるだろう。しかしガドウーラ辺りは厳しい。もし戦うことがあつたらまず両目を潰せ。顔の前面についているからそう難しくはないはずだ」

再びガドウーラが跳びかかってきた。ロイは瞬時に横へ移動したものの、爪の一撃をかわしきれなかった。左胸に鋭い痛みが走り血がにじんだ。彼は一瞬眉をひそめた後、すぐに表情を引きしめた。

さらにガドウーラは咆哮した。ロイは恐怖に呑み込まれそうだった。この魔獣の力も速度も遥かに自分を上回っている。正直な話、勝算はほとんどない。

真紅の魔獣は牙をむき出して疾走した。

ロイは神経を集中し、狙いすました一撃を相手の右目に叩き込もうとした。しかし、避けられてしまった。

「くそっ！」

魔獣の牙が目の前に迫ってくる。ロイは体をひねってかわそうと

したが、左肩に噛みつかれてしまった。

「ぐあああつ！」

彼が叫んだと同時に、ガドウーラも悲鳴を上げながら跳び下がった。ロイが再び放った一撃に右目を潰されていたのだ。

一人と一匹は、互いに身構えながら距離を取った。「こいつは怖ろしく強い」という思いが双方の頭の中を駆け巡っている。

ロイは左肩と胸から血を流し、ガドウーラは右目から血を滴らせていた。どちらも負けず劣らず辛そうだ。

そのようすを見たシエルブルが目を見張った。

「馬鹿な、ガドウーラと互角だと？ あり得ん。普通の人間が、こんな魔獣とまともに戦えるはずはない！」

ネルはそれを聞いて言った。

「あの人は普通じゃないですから」

「なんだと、そんなに強いのか？」

「私は今まで生きてきて、あんなに強い人を他に見たことがないです」

シエルブルは青ざめながら震えだした。

「いや、いくら強いと言っても所詮は人間だ。魔獣にかなうわけがない」

「そう思われるのでしたら、落ち着いて戦いの続きをご覧になればよろしいでしょう」

ネルはロイの勝利を固く信じていた。彼がこんなところで死ぬわけがない。襲い来る魔物や刺客を物ともせず蹴散らしてきたあの男が、たかが魔獣一匹にやられるはずがない。

ネルがロイに熱い視線を送っていると、彼はガドウーラに向かって突進した。次の瞬間、握っている金属の棒が煌めいた。

「ガアアアツ！」

ガドウーラが絶叫した。その顔から鮮血が噴き出している。ロイが左目を狙い放った突きが、ずれて額を直撃したのだ。

一方、ロイも強烈な反撃を喰らっていた。相手の鋭い爪に胸や足

を切り裂かれ、体のあちらこちらから流血している。ネルは思わず目を覆った。

ロイは笑いながら真紅の魔獣に語りかけた。

「たいした奴だよ、お前は。俺をここまで追い詰めるなんてな。正直言つて恐れ入った」

魔獣は血を滴らせながら咆哮した。まるでロイの言葉に応えているかのようだった。

「だがな、最後に勝つのは俺だ。悪いがお前には死んでもらう」

その言葉が終わるや否や、ガドウーラがロイに跳びかかった。

シエルブルとネルは目を見張った。いよいよ決着がつきそうだ。

魔獣は大きく口を開き、相手の喉笛を狙って噛みつきこうとした。

その途端、ロイが叫んだ。

「おおおおっ！」

彼の握る金属の棒が、ガドウーラの口の中に突きささった。

魔獣は苦悶の表情を浮かべながらも、口の中に入ったロイの手に思いきり噛みついた。しかし、すでに遅かった。

次の瞬間、金属の棒がガドウーラの口から脳天まで貫いた。魔獣

は白目をむいてその場に崩れ落ちた。

ロイが血にまみれた右手を引き抜くと、シエルブルが顔面を蒼白にしながら周囲の兵士に向かって怒鳴った。

「こいつを殺せ！ 今すぐにだ！」

その声に応じて、三人の兵士がロイに斬りかかった。いくら彼が強いと言っても、手負いの状態で三人を相手にするのは無理がある。ネルが慌てて叫んだ。

「ロイさん、逃げて！」

兵士たちが斬りかかった途端に金属の棒が煌めき、彼らは顔面から血を噴き出して倒れた。そこには全身血にまみれたロイが笑みを浮かべながら立っていた。

「おい、シエルブル」

「なっ、なんだ！」

「随分痛い目にあわせてくれたな、次はお前の番だ」

「ほざけ、死にぞこないが！」

シエルブールは剣を引き抜くなり斬りつけた。ロイはこれをひらりとかわし、なおも笑みを浮かべた。

「仲間を呼ばなくていいのか？」

「くっ、この……」

シエルブールは兵士を呼び集めて斬りかからせたが、ことごとくロイに突き殺された。

「こんな馬鹿な、こんなはずは！」

シエルブールの全身に鳥肌が立った。もはやこれは人間ではない。どう見ても化け物だ。

「お前、本当に人間か？」

「真正正銘、人間だよ」

「こんな人間がいるはずがない！」

「いるだろうが、ここに」

シエルブールが再び斬りかかるうとした瞬間、その眼前にロイが迫っていた。

「これで最後だ、祈れ」

偽貴族シエルブールは顔面を突き刺され、絶叫して息絶えた。ロイは動かなくなった相手を見据えて言った。

「見事な血の噴水だな、貴族らしい優雅な死に様だ」

彼は偽貴族の剣を奪い、ネルの縄を切つて解放した。騒ぎを聞きつけた兵士たちが続々と集まってくる。一刻も早く逃げなければならぬ。

二人は立ち塞がる兵士たちを薙ぎ倒しながら地下牢に向かい、牢番を脅して鍵を開けさせた。バートはロイの顔を見て叫んだ。

「さすがロイさん、待ってました！」

「さっさとこんなところからおさらばするぞ。バート、先頭に立って血路を開け」

「任せてくださいー！」

五人は地下牢を抜け出し、廊下に出た。すると、四人の兵士が槍を構えて突きかかってきた。

バートが魔剣グレゴールを引き抜くなり跳躍した。

「うおらあああっ！」

その途端、二人の兵士の首から上が消えていた。続けて紫色の閃光が走り、残る二人を真つ二つに斬り裂いた。ネルの魔剣グラフィードだ。

バートたちの活躍を見たガーランドがぼつりと言った。

「なんだ、俺の出る幕がないな」

するとロイが真顔で言った。

「まだ敵は腐るほどいるさ」

ガーランドは、ロイがふらついているのを見て顔をしかめた。

「おい、大丈夫なのか？」

セレスもロイを見つめて口を開いた。

「全身血まみれですし、ここを抜けたらどこかで休んだ方がいいですね」

ロイは苦笑した。

「俺の心配をしてる暇があったら、ここから脱出する方法を考えてくれ。このままだと危ないぞ」

第四十一話

やがて続々と兵士たちが集まってきた。その手には剣や槍、弓などを握っている。

五人は包囲されつつあった。バートやネルが兵士たちを蹴散らしているものの、数が多すぎてきりがない。ガーランドも襲ってくる敵を必死で突き倒していたが、もう限界だった。

ロイは周囲を見回しながら、脱出する方法を考えていた。このままでは全滅してしまう。そこで彼はバートに呼びかけた。

「バート！」

「なんですか！」

「俺が囿になるから、お前は四人をつれて逃げろ！」

バートは耳を疑った。

「冗談でしょう、怪我してるロイさんを置いて逃げろって言うんですか？」

「そうだ、早くしろ。このままじゃ全滅する！」

ロイは兵士たちの前に進み出て叫んだ。

「俺が道具師ロイだ、挑む奴はいないか！」

兵士たちが喚声を上げながら襲いかかった。ロイは彼ら突き倒しながらバートに向かって言った。

「屋敷の門から出てまっすぐ行ったところにタリスの街がある。馬車を奪ってそこへ向かえ！」

「しかし！」

「しかしも何も無い、早くしろ。依頼人が死んだらどうする！」「ネルが叫んだ。

「私も残ります！」

「駄目だ、早く行け。お前は今のセレスに必要な人間だ」

「でも、ロイさんが……」

「逃げると言ってるんだ！」

そのとき、兵士の間から一人の男が進み出た。年齢は二十歳。短い銀髪に白い肌、引きしまった顔と体をしている。漆黒の鎧を着込み、それと同じ色の槍を手に握っていた。

「全員下がれ！」

彼の声に応じて、兵士たちは引き下がった。

「これ以上手を出すな、ロイ以外の四人はこのまま逃がしてやれ！」

ロイは男に声をかけた。

「誰だか知らないが、助かったよ」

すると男は口角を吊り上げた。

「勘違いすんな、雑魚には用がないっていうだけの話だ」

「ほう」

「俺はラハルト。お前に殺されたシエルブールの補佐をしていた者だ。と言っても、あんな馬鹿が殺されようが別にどうでもいいけどな」

男はさらに続けた。

「今まで数多くの人間と戦ってきたが、お前ほど強い奴は見たことがない。ぜひ一對一で戦ってくれ」

「いいだろう」

ロイはネルに視線を移した。

「そういうことだから早く逃げろ」

「でも……」

「大丈夫だ、俺が簡単に死ぬような男に見えるか？」

ロイがそう言って微笑むと、ネルも笑顔を浮かべた。

「わかった、信じてるよ」

「ああ」

ネルたちは走り去り、ロイはラハルトの方に向き直った。

「わざわざ一對一で戦おうなんて酔狂な奴もいるもんだ」

ラハルトは笑みを浮かべた。

「そうか？ 強い奴を見て、自分の腕が通用するか試してみたいと考えるのは普通だと思うぜ」

「ふーん、そんなもんか」

ロイは二本の棒を構えた。背中には取り返した道具袋もある。これで怪我さえなければ万全の体勢なのだが、仕方のない話だった。

「来いよ、ラハルト。お互い楽しもう」

「ふはは、そうだな。行くぜ！」

二人の間には三フィードほどの距離がある。いくら槍でも普通は届かない。ところが、ラハルトの突きはロイの手元まで伸びてきた。「なんだと！」

ロイが慌ててかわすと、ラハルトが笑い出した。

「魔槍ダイダロスを甘く見るな、普通の槍とは違うんだよ！」

続けて鋭い突きが繰り出され、ロイは真横に跳びながら懸命にかわした。これでは防戦一方だ。そこで彼は、アーツを取り出して矢を放った。

ラハルトはなおも笑いながらあっさりとかわした。

「そんなものが通用するとも……」

言いかけると、いつの間にか金属の棒が眼前に迫っていた。

「げっ！」

ラハルトは体をひねってこれを避けたが、鋭い突きがさらに襲ってくる。彼は顔をしかめながらダイダロスを一振りした。

「縮め！」

すると魔槍はするすると縮み、短剣ほどの長さになった。ラハルトはそれを握りしめて激しい突きを繰り出した。

「喰らいな！」

ロイは紙一重で攻撃をかわし、棒を突き出した。相手がこれをおかずと、今度は分銅の付いた鎖を投げうった。

鎖はラハルトの剣に巻きついた。振りほどこうとしたがすぐには取れない。ロイはそれを引っ張りつつ、瓶を構えて栓を開けた。途端に中から緑色の液体が噴き出した。

これはロイ特製の毒薬だ。浴びれば一瞬で体が溶けてしまう。ラハルトはその効果を知らなかったものの、危険を感じてすかさず跳

び下がった。

彼は液体をかわすことができたが、ダイダロスを鎖に絡め取られてしまっていた。ロイは魔槍を握って突きつけた。

「勝負あつたな」

「そう思うだろ」

ラハルトはにやりと笑い、背中から何かを引き抜いた。

「もう一本あるんだな、これが」

すかさず鋭い突きがロイを襲った。彼は面食らいながら真横に跳び、同時にアーツの矢を放った。

ラハルトは素早くこれをかわし、今度は自分から突っ込んできた。槍は剣ほどの長さに縮んでいる。

「おら、受けてみな！」

漆黒の魔槍がロイに迫った。なんとか避けたが攻撃は止まらない。間断なく繰り出される鋭い突きによって防戦一方になった。

「どうした、最強の道具師！ お前の力はその程度か？」

その瞬間、ロイは地面に向かって数個の黒い球を投げつけた。途端にもうもうと煙が噴き出て二人の視界を閉ざしていく。ラハルトは攻撃の手を休め、急いで後退した。

「この煙に紛れて俺を刺すつもりなんだろうが、そうはいかないぜ」
ラハルトは一旦距離を取った。立ち込めた煙の中に激しく動くものが見える。彼は薄笑いを浮かべながら槍の一撃を繰り出した。

「そこだ！」

手応えがあつた。

しかし、どうもおかしい。人ではなく、何か柔らかいものを突いたような感じだ。彼を首を傾げていると、ようやく煙が晴れてきてロイが姿を現した。

ラハルトは目を見張った。自分の槍はロイではなく、彼が棒の先にぶら下げている道具袋を突き刺していたのだ。

「し、しまっ……」

槍を引き抜いたときにはすでに遅く、ロイの棒が眼前に迫ってい

た。彼は思わず目を閉じた。

しかし、何も起こらない。ラハルトがおそろおそろ目を開けると、ロイは棒を突きつけたまま立っていた。

「なぜ殺さない、お前は勝ったんだぞ！」

ラハルトが叫ぶと、ロイは笑みを浮かべた。

「お前は実に腕の立つ男だ、殺すのは惜しい」

「馬鹿な、俺は敵だぞ！」

「そんなことはわかってる。どうだ、その力をもっと役立ててみないか？」

ラハルトは沈黙した。どちらかが死んで終わると思っていたのに予想外だ。

ロイがふらつきながら口を開いた。

「お前の力を必要としている人間が必ず……」

彼は言いかけ、その場に倒れ伏した。すると、すかさず周囲の兵士たちが駆け寄ってきて剣を突きつけた。

その一人が憎々しげに言った。

「ラハルト様、こいつを殺していいですか」

「やめる」

「えっ、なぜ」

周囲がざわついている中、ラハルトはさらに言った。

「彼の手当てをしてやれ」

「馬鹿な！」

「俺の言うことが聞けないのか」

兵士たちは渋々ロイを担ぎ上げ、屋敷の一室へとつれていった。ラハルトはその後に続いた。

ロイはしばらくしてから意識を取り戻した。ベッドに寝かされており、傷もすべて手当てされている。

「これは一体？」

彼は首をかしげた。自分はさっきまでラハルトと戦っていたはず

だ。それなのにどうしてここにいるのかわからない。

「俺は自力で脱出して、誰かの家の前で行き倒れたのか？」

頭を抱えているとラハルトが部屋に入ってきた。ロイはぎょっとして身構えた。

「お前！」

「落ち着け、もう戦う気はないよ」

ロイがなおも疑っていると、ラハルトはさらに続けた。

「俺は元々シエルブルーに忠誠心なんかないんだ。だから奴が殺されたところで、無理して仇を討つ必要もないのさ」

第四十二話

ロイは怪訝そうな顔をして尋ねた。

「じゃあ、なんで従ってたんだけ」

「あいつが軍隊を作ってこの国に居座り、人間たちを虐殺してるって聞いてな。おもしろそうだと思うたんだよ」

ロイは眉間に皺を寄せた。

「他人を虐殺するのがおもしろいのか？」

「違うよ。そんなことをすれば、いずれシエルブルを討伐しようと思ってる奴が出るだろう。そういう連中は大概腕が立つ。自分の実力を試すのにつけてつけというわけだ」

「要するに強い人間と戦いたかったんだな」

「ラハルトが頷くと、ロイはさらに続けた。

「それならハデイスの街へ行くといいよ」

「そこには強い奴がいるのか？」

「ああ、掃いて捨てるほどな。俺に匹敵する奴もざらにいる」

「ラハルトは目を輝かせた。

「うおお、なんていいところだ！でも俺みたいな魔物を受け入れてくれるかな？」

「魔物も腐るほどいるよ。お前みたいに人間っぽいんじゃないよ、もっとごつい連中がな」

「いよいよ気に入った！」

「ラハルトが満面に笑みを浮かべたのを見て、ロイも微笑んだ。

「あと、強くなりたいなら俺の師匠を訪ねるといいよ。ルークって言うんだ」

「強いのか？」

「強いなんてもんじゃないよ、あれほどの人を他に知らない」

「ロイ、ありがとう！これから行ってみるよ！」

「そうだ、一つ忠告しとく。あの街で悪事を働くと一瞬で叩き斬ら

れるから注意しろよ」

「ああ、肝に命じておく」

ロイはベッドから降りて歩きだした。

「じゃあ俺は行くよ、手当てしてくれてありがとう」

「いやいや。これからどこに行くんだ？」

「王宮だよ、王女を護衛してるんでな」

その途端、ラハルトは表情を曇らせた。

「危険だぞ、充分気をつけろよ」

「なんか知ってるような口ぶりだな」

「王宮に、隣国と内通してる奴がいるらしい。シエルブルーを使つて混乱を起こしていたのもそいつ、王女の暗殺を企んでいるのもそいつだ」

ロイは目を見張った。

「名前は？」

「そこまでは知らない。ただ、執政官の一人だという噂がある」

ロイは表情を引きしめた。執政官は全部で五人おり、国王に次ぐ権力者だ。噂が本当であれば、これからそんな敵と戦わなければならない。

「ある程度予想はしていたが、まさか執政官とはな」

「あくまで噂だからな、違つかもしれないぞ。でも用心するに越したことはない」

「有力な情報をありがとう」

ロイはラハルトに別れを告げ、シエルブルーの屋敷を出た。すると、ネルがぼつんと立っているのを目にした。

近づいて声をかけると彼女は叫んだ。

「ロイさん！」

「逃げるって言っただろっ」

「他の三人は逃げたけど、私はどうしても……」

「護衛士の仕事は依頼者を護ることだ。つまり、セレスをほったらかしてここに残るようでは失格だぞ」

ネルはうつむいた。

「ごめんなさい、その通りです」

ロイは、意気消沈している彼女の髪をくしゃくしゃと撫でた。

「でも嬉しかったよ、ありがとうな」

ネルは笑顔を浮かべてロイに抱きついた。

「よかった、本当によかったよ」

「そうだな、早くセレスたちに合流しよう」

ロイとネルはタリスの街に向かい、日が落ちる頃に到着した。バートたちはどこかの宿にいるはずだ。しかし、いくら探しても彼らは見つからなかった。

ネルが青ざめながら言った。

「もしかして誰かに捕まったのかな？」

ロイは渋面を作りながら頷いた。

「その可能性は充分ある」

周囲の住民に聞いてみたが、手掛かりはつかめない。ロイは街の門に向かい、番兵に声をかけた。

「三人組を探している。貴族と剣士と兵士だ。それらしき人間を見なかったか？」

番兵はうなずいた。

「確かに来たよ、もしかしてあんたはロイさんか？」

「そうだ」

「バートって人から伝言がある。アンガス様の邸宅にいるから来てほしいと」

「それはどの辺にあるんだ」

「目抜き通りをまっすぐ行けば左側に邸宅があるよ」

ロイたちは急いでそこに向かった。やがて門の前にたどり着くと、番兵に誰何された。

「誰だお前は、なんの用で来た」

「王女を探している。ここに来なかったか？」

「ああ、丁重にお迎えした。今はこの屋敷の中にいらっしやる」

「俺はロイ、彼女の護衛だ。中に入れてくれ」

「確認するからここで待っている」

兵士は中に入っけいき、セレスをつれて出てきた。彼女は目を見開いて叫んだ。

「ロイさん、よかつた!」

「ここにいたか、探したよ」

ロイたちは兵士につれられて邸宅の中に入った。廊下の壁には様々な絵画が飾つてあり、床には金糸で彩られた赤い絨毯が敷きつめられている。

ネルが絵画を眺めながら言った。

「ロイさん、お金持ちつてすごいですねえ」

「本当だな、少しは貧乏人に流してくれればいいんだが」

やがて三人は大部屋に通された。中央に木製のテーブルと椅子があり、豪華な食事が並んでいる。ちょうどそこでバートとガーランドが食事をしていた。

バートが椅子から立ち上がったて叫んだ。

「ロイさん!」

その途端、彼の口から食べていた物が飛び出した。ロイは顔をしかめた。

「汚いな、まったく」

「すいません。それより、よくご無事で!」

「俺はそう簡単には死なないよ」

「ですよね」

ガーランドも笑顔で話しかけてきた。

「無事で何よりだ。怪我は大丈夫なのか?」

「ラハルトが手当てをしてくれたよ」

「どういつ風の吹き回しなんだ」

「まあ色々あるんだよ。それより、バートはちゃんとリーダーを努めたか?」

バートが慌てて口を挟んだ。

「もちろんですよ！」

「お前に聞いてないよ」

バートが沈黙すると、ガーランドが笑いながら言った。

「街に着くまではしっかりリーダーを努めてくれたよ」

「その後は？」

「美女を見つけてついていってしまった。急いで引き止めたけどな」

ロイがじろりとバートをにらむと、彼は慌てて視線をそらした。

「あと、こんなことを言ってたな。『ロイさん亡き今、俺ががんばらなきゃ』と」

「亡き今？」

バートが両手を振りながら叫んだ。

「いや、ロイさんがいない今って言いたかったんです！」

「お前の中では俺が死んだことになってたのか、ふーん」

「違いますって！」

必死に否定しているバートを見て、ロイは笑みを浮かべた。

「まあ、よくやってくれたよ。ご苦労さん」

「ありがとうございます！」

五人は宿泊用に二つの部屋をあてがわれた。男性三人が片方を使い、女性二人がもう片方を使うことになる。

ネルは疲れていたもので、さっさとベッドに入った。セレスはまだ眠くなかったので自分のベッドに座っていた。

ネルがまどろんでいると、セレスが声をかけてきた。

「ネルさん」

「なんででしょうか」

「あなたとロイさんは恋人同士なんですか？」

ネルは一瞬で眠気が吹っ飛んでしまった。

「いえ、あのその……」

うつろたえている彼女を見て、セレスはくすりと笑った。

「そんなに慌てなくてもいいですよ、落ち着いてください」

ネルは必死になって気を落ち着かせようとしたが、徒勞に終わった。

「こっ、恋人同士っていうほどじゃないと思います！」

「そうですか。あなたは彼の何をどう思っているんですか？」

「かつこいいし素敵な人だと思います」

「それだけですか？」

ネルは沈黙した。一緒にいればいるほど、どんどんロイに惹かれていく。本当は心の底から彼が好きだ。でも、それを打ち明けていいものだろうか。

ちらちらとセレスのようすをうかがっていると、彼女は口を開いた。

「あなたが恋人でないのなら、私が彼とおつき合いさせていただいてよろしいでしょうか？」

ネルは心の中に凄まじい敵意が湧き上がってくるのを感じた。

「駄目です！」

「どうしてですか」

「それは……」

ネルは押し黙った。恋人ではないと明言した以上、止める理由がない。

唇を噛みしめていると、セレスが笑いかけてきた。

「あなたはロイさんが大好きなんですね、よくわかりました」

「えっ」

「どうやら私の出る幕はなさそうですね」

「でも、私たちは恋人同士じゃ……」

セレスはにこにこ笑いながら言った。

「あなたがロイさんを心から慕っているのはよくわかりますし、彼があなたを愛しているのもわかります。余計なことを聞いてごめんなさい」

ネルが真っ赤になりながら沈黙していると、セレスはさらに続け

た。

「あなた方はよくお似合いですし、きっとうまくいくと思いますよ。その恋、微力ながら応援させていただきます」

「ありがとうございます！」

第四十三話

そのとき、ドアを叩く音がした。ネルは魔剣グラフィードを引き寄せながら尋ねた。

「どちら様ですか」

すると若い女の声が返ってきた。

「王宮の侍女です。たまたまこの街に立ち寄ったところ、セレス様がいらつしやるということを耳に致しました。どうか会わせていただけないでしょうか？」

セレスに視線を向けると、彼女は無言で頷いた。ネルはドアに近づいてそつと開けてみた。

そこには二十歳くらいの女性が立っていた。肩まで伸びた赤い髪に白い肌、すつきりした顔立ちに引きしまった体をしている。革の鎧を身に着け長剣を佩いており、とても王宮の侍女には見えない。何より問題なのは、彼女の瞳の色が髪と同様に赤であることだ。

ネルは目を見開いた。

「あなた、まさか赤眼……」

そのとたん、思いきり突き飛ばされた。

「どきな、あんたに用はないんだよ！」

ネルは壁に叩きつけられながら叫んだ。

「誰か来て！」

その声を聞いて、ロイとバートがすかさず飛んできた。女は彼らにかまわず、剣を抜くなりセレスを斬りつけた。

セレスは間一髪でこれをかわし、自分も剣を抜いて叫んだ。

「あなたは何者ですか！」

女は笑みを浮かべながら答えた。

「殺し屋ですよ、王女様。赤眼のケイトと申します」

「誰に依頼されてこんなことを！」

「言っわけないでしょう」

バートが彼女の背後から怒鳴った。

「おい、セレスから離れる！」

ケイトは端正な顔をバートに向けた。

「あら、なかなかいい男じゃないの」

「え？」

「ねえ、私の味方になってくれない？」

「なるわけないだ……」

言いかけてバートは硬直した。妖しく光るケイトの瞳に、目が釘づけになってしまったのだ。

ロイが顔をしかめながら叫んだ。

「まずい、魅惑の術か！」

ケイトはロイに向かって微笑んだ。

「あなたもいい男ねえ、私の仲間にしてあげるわ！」

再びケイトの瞳が光り、ロイもそれに魅入ってしまった。二人とも全然動こうとしない。

ネルがグラフィードを引き抜いて叫んだ。

「早く出ていかないと本気で斬るよ！」

彼女の髪と瞳が真っ赤に染まっているのを見て、ケイトは目を見張った。

「え、あなたも赤眼なの？」

「そうだよ、『赤眼のネル』って聞いたことがあるでしょ？」

ケイトは笑い出した。

「凄腕の剣士って聞いてたから、どれほどのものかと思えば。全然たいしたことなさそうだね」

「なんですって！」

「あなたなんか私が相手するまでもないね。そこの彼、やっちゃってよ！」

その言葉が終わるや否や、バートが斬りかかってきた。ネルは慌てて叫んだ。

「ちよっと、バート！ 私だよ、ネルだよ！」

ケイトがそれを見てあざ笑った。

「無駄だよ、彼はもう私の虜だからさ」

ネルは窮地に立たされた。相手が全力で斬りかかってくるのに対し、自分は相手を斬るわけにいかない。このまま戦い続ければ勝負は見えている。

「ロイさん、助けて！」

思わず叫ぶと、ケイトがくすくす笑った。

「そっちの彼も術にかかっているからねえ、無理な話だよ」

「ロイさん！」

再び叫ぶと、彼が疾走した。

ネルは天に祈った。ロイが正気を取り戻さなければもう終わりだ。自分もセレスも殺され最悪の結末が待っている。

「ロイさん、お願い！」

次の瞬間、彼はバートの腕をつかんでねじ上げていた。

「ネル、すまない。大丈夫だったか？」

ネルは安堵のため息をついた。

「うん、でも本当に怖かったよ！」

「本当にすまなかった。俺としたことが、あんな術にかかってしまつとは情けない限りだ」

ケイトが目をしばたいた。

「え、なんで効かないの？」

「俺にとつては魅惑の術より、ネルの方が魅力的だからだよ」

「あなたはそんなにこの子が好きなの？」

ロイは力強く頷いた。

「最愛の女性であり、最良のパートナーでもある」

ネルは顔に血が上ってしまい、剣を取り落としそうになった。するとロイは彼女に向かって微笑んだ。

「世の中の女性たちは俺の強さを認めるものの、きつい物言いや殺伐とした雰囲気を怖れて一定の距離を置いている。でも、お前だけは違った。本当に嬉しかったよ」

ロイがそう言いながらバートを殴りつけると、彼は正気を取り戻した。

「ありゃ、俺は一体……」

「魅惑の術にかかってたんだよ、すっかりしろ」

ケイトは剣を構えながらロイをにらみつけた。

「戦いの場で愛の告白とは、やってくれるじゃないの」

「お前に言わされたようなもんだよ」

「とにかく、邪魔するならあなたも消すよ!」

ロイはケイトをにらみつけた。

「死んでもいいのならばかかってこい!」

ケイトは彼の眼力に押され、全身から血の気が引いた。

「くっ、この!」

彼女は地を蹴り、ロイを真つ向から斬り下げた。しかし、綺麗に避けられかすりもしない。続けて横薙ぎの一撃を放ち、さらに数本の短剣を投げつけたがことごとくかわされた。

「なんなのよ、こいつは!」

「道具師ロイだよ、知らないのか」

「そりゃ知ってるけど、ここまで強いなんて……」

ケイトはそう言いながら、先端に分銅がついた鎖を投げつけた。

それは一瞬でロイに巻きついた。

「し、しまっ……」

「っーかまえた! もう逃げられないよ!」

彼女は間髪入れず右手でロイの首をつかみ、そのままひねり殺そうと力を入れた。

「あっはははは! 死ね!」

その瞬間、ネルがグラフィードを振りかざして斬りかかった。ケイトはぎよっとしてロイを解放し、すかさず跳び下がった。

「ちっ、よくも邪魔を!」

彼女は短剣を引き抜いて投げつけようとしたが、すでにネルの一撃が眼前に迫っていた。

「くっ、この女！」

ケイトは辛くもこれかわし、部屋の入り口まで跳び下がった。

「今回は見逃してあげるけど、次はないよ！」

彼女が捨て台詞を吐いて走り去ったのを見て、ネルは胸を撫で下ろした。

「よかった、一時はどうなるかと思ったよ」
するとロイに肩を叩かれた。

「ネル、ありがとう。本当に助かったよ」
彼女はどぎまぎしながらうつむいた。

「え、えーと……」

「なんだ、どうしたんだよ」

ネルは、辛うじて聞き取れるくらいの小さな声で言った。

「私もロイさんが大好きです」

ロイは笑顔で彼女を抱き寄せた。

「嬉しいよ、これからもよろしくな」

第四十四話

ロイたちはタリスの街を出発し、半日ほど歩き続けて首都クレアラントに到着した。高さ十フィードほどの城壁に守られた城塞都市だ。

城門の近くまで来ると、見張りの兵士が叫んだ。

「セレス様、お戻りになられたのですね！」

直ちに門が開かれ、五人は兵士たちに笑顔で迎えられた。

その後、彼らに導かれ王宮に向かった。城は巨大な堀と堅固な城壁に囲まれており、内部に尖塔がいくつも建ち並んでいる。バートとネルは威圧感に圧倒されながら先に進んだ。

一方、ロイは兵士の一人に話しかけていた。

「以前ガルシアっていう奴にこんな話を聞いたんだ。『ガーランドが王女を誘拐したという噂で城内は持ちきりだ』とな。それは本当なのか？」

兵士は首を振った。

「そういったことを吹聴している輩はいるが、大半の人間は信じていない。彼が忠臣であることは知れ渡っているからな」

ロイはうなずいた。かつてガルシアが言っていたことは嘘だったようだ。

そのときセレスが口を開いた。

「ところで、父上のご容体は？」

兵士の表情が曇った。

「それが……」

「えっ？ どうなったのですか！」

「亡くなられました。すでに葬儀も済み、遺体は墓所に納められております」

彼女の顔が引きつった。

「私は……間に合わなかったと？」

兵士は沈黙し、セレスも口を閉じた。

五人と兵士たちは城の中へと入っていった。鮮やかなステンドグラスから差し込む光が、彼らを優しく照らしている。天井に描かれた神々や天使の絵、森の太木を思わせる柱が建ち並ぶ柱廊、所々に飾られた女神の彫像や銀の燭台。バートとネルは目を丸くしながらそれらを眺めたが、ロイは気にも止めず歩き続けた。

城の中央にある大広間に入ると、四十がらみの男性がこちらに視線を向けた。銀糸に彩られた群青色の服を着ており、顔のふっくらした温厚そうな人物だ。

彼はセレスを見るなり声を上げた。

「王女、よくご無事で！」

「クルセウス、ご苦労でした、色々大変だったでしょう」

「とんでもございません、私の苦労など微々たるものです。それより国王が……」

「最後に一目お会いしたかったです」

「手を尽くして良薬を求め、優秀な医者を集めたのですが。力及ばず、誠に申しわけございませんでした」

「謝ることなどありません、本当にご苦労でした。父が言い遣したことはありますか？」

クルセウスはセレスをまっすぐに見つめて言った。

「国王陛下はご臨終の間際に五人の執政官を呼び集め、こう仰せられました。『王位はセレスに継承する』と」

「王の座につくつもりはありません」

クルセウスは眉をひそめた。

「それは困ります。この国の王位につけるのは王族だけなのですから。現在はやむを得ず私が代理を努めておりますが、いつまでもこうしているわけにはまいりません」

「でも、私を暗殺しようとする一派もいることですし」

「そんな不届き者どもは、いずれ捕らえて獄に放り込みます。どうかご安心ください」

「他の執政官たちは、私が王位につくことに賛成なのですか？」

「はい」

セレスはため息をついた。

「それなら仕方がないですね」

「ありがとうございます、ただ一つ問題が」

「なんででしょうか」

「王位につくには戴冠式を行う必要があります。その際は大司教様にご出席いただかなければならないのですが、今いらっしやらないのです」

セレスは首をかしげた。

「どちらへ行かれたのでしょうか」

「存じません。ただ、誘拐されたという噂が立っております」

セレスは目を見張った。

「誘拐？ 身代金目的ですか？」

「いいえ、それなら身代金の要求があるはずですよ。私が思うに、もし誘拐が本当の話であるなら……」

「あるなら？」

「戴冠式を行わせないことが目的なのではないでしょうか」

セレスが沈黙すると、クルセウスはさらに続けた。

「大司教は捜索します。セレス様はごゆっくりお休みください」

セレスはロイたちをつれて広間を出た。次に向かったのは地下にある墓所だった。

薄暗い階段を下っていくと、広々とした地下室に出た。そこには金や宝石で彩られた棺がいくつも並べられており、蓋の部分には納められた人間の名前が刻まれていた。

セレスはその一つを見つめながらひざまずいた。

「父上、誠に申しわけございませんでした」

ロイは彼女を見つめながら尋ねた。

「今さらこんなことを聞くのもなんだが、お前さんはどうしてもこの城を離れざるを得なかったのか？」

「はい、何度も命を狙われましたから。それで父上が私に護衛をつけ、一時的に城を離れさせたのです」

「ガーランドも口を開いた。」

「ところが護衛も片端から殺され、最後には俺一人になってしまったわけだ」

「ロイはため息をついた。」

「よくそんな状況で、王宮に戻る気になったもんだな」

「セレスはロイをじっと見つめた。」

「あなたにも色々と苦労をかけました。それでこんなことを頼むのは心苦しいのですが……」

「状況が落ち着くまで護衛を続けてほしいって話か？」

「その通りです」

「わかった」

「ロイはネルに視線を移した。」

「頼まれてほしいことがあるんだ」

「何」

「この街にある護衛士の組合に行って、期間が延長になることを伝えてほしい」

「ネルはうなずいた。」

「組合ってどの辺にあるの？」

「目抜き通りの真ん中辺りにある、一番大きな建物だよ。遠くからでもはつきり目立つからすぐわかるはずだ」

「わかった、行ってくるね」

「ネルは王宮を出て城下町へ向かった。」

「目指す建物はすぐに見つかった。五階建てで入口にプレートがあり、色々な名前が刻まれている。複数の組合が共同で使っているのだ。」

「プレートによると、自分たちが所属するロゼッタ組合は一階の中央にある。「五階の隅にでもあるのだらう」と思っていた彼女は驚いた。正式な国の認可を受けていないくせに、たいした幅の効かせ

方だ。

中に入ると長椅子がいくつも並んでいて、その向こうには受付カウンターがあった。ロゼッタ組合の受付には五人の若い女性がおり、その前には依頼人たちが座って話し込んでいる。

ネルは受付の女性に声をかけようとしたが、なかなか話が途切れない。仕方がないので長椅子に座り待っていると、横から顔をつつかれた。

「何してんの、この魔物が」

驚いて目を向けると、二十歳くらいの女性だった。肩まで伸びた茶色の髪に茶色の瞳、日に焼けた肌。はっきりした目鼻立ちに引きしまった体。身に着けているのは革の鎧と革の長靴だ。

「アニエスさん！」

声を上げると、アニエスは目を細めた。

「本つ当に気に入らないよ。あなたみたいな魔物が、今やロイの右腕みたいになっちゃってさ。ものすごく目障りなんだけど」

「すみません」

「その上『赤眼のネル』とか言われちゃってさ。あまりいい気になつてると後ろから首をしめるよ」

「本当にごめんなさい」

ネルはぺこぺこ頭を下げた。どうもこの女性は苦手だ。「私は魔物じゃないです」と主張したかったが、言った途端に噛みつかれそうなのでやめておいた。

「ところで何してんの。まさかこんなところで暴れるつもり？」

「そんなわけではないです！」

「わかんないよ、あなたのことだし。自分がたくさん人間を引き裂いたことを覚えてないの？」

ネルはしばらく沈黙した後、おずおずと口を開いた。

「私が多くの人間を虐殺したのは事実です。ロイさんを殺そうとしたこともありました。でも、もう二度と同じ過ちは犯しません」

アニエスはネルをまじまじと見つめた。

「ふーん、驚いた。本当に変わったねえ。前に会ったときのあなたは血に飢えた魔物そのものだったよ。体中から凄まじい殺気を放ってたしね。でも今は、その辺にいる女の子と変わらない」

第四十五話

ネルはにっこりと微笑んだ。

「ありがとうございます！」

「別に褒めたわけじゃないよ、変わったって言っただけで」

「普通に見られたのがすごく嬉しいんです。私は普通じゃないから
アニエスが沈黙すると、ネルはさらに続けた。

「あなたやロイさんには色々ご迷惑をおかけしました。本当に申し
わけございません」

アニエスは頬をかきながら言った。

「随分丸くなっちゃったんだね、なんか張り合いがないよ」

「そうですか？」

「あの時みたいに血相変えて跳びかかってきてくれれば、容赦なく
葬ってあげたのに」

彼女はそう言いながら、深いため息をついた。

「あーあ、だめだねこれは。今のあなたを憎む気にはとてもなれな
いよ」

「よかったです」

「うるさいよ。ところで何しに来たの、あなたはロイと一緒にだった
はずだけど」

「それがですね」

ネルは今までのいきさつを話した。王女を護衛してこの街まで来
たこと。国王が既に亡くなっていったこと。異常事態が収まるまで護
衛の期間が延長されたこと。アニエスはいちいち頷きながら聞いて
いた。

「それで報告に来たってわけね」

「はい」

「じゃあ椅子に座っててもしょうがないでしょ、さっさと中に入り
なよ」

アニエスはネルを、カウンターの横にある扉の前へつれていった。
「関係者はここから入るんだよ、覚えておいてね」

部屋の中に入ると、十人くらいの男性が机に向かって書類と格闘していた。アニエスはその中の一人に声をかけた。

「ネルが報告に来たんだったさ」

男性は顔を上げた。年齢は三十歳前後で精悍な顔立ちをしている。

「ああ、君が赤眼のネルか」

「はい、どうも初めまして」

「タイラーだ、初めまして。護衛は終了したのか？」

「それがですね」

期間が延長になったことを話すと、男性は顔をしかめた。

「困ったもんだ、君やロイに護衛してほしいって客は山ほどいるの
に」

「申しわけありません」

「まあ事情が事情だから仕方がない。応援が必要なら言ってくれ、
三人じゃ心もとないだろう」

「そうですね、できればもう一人くらいほしいです」

男性はアニエスに視線を移した。

「うつつつけの奴がいるじゃないか、お前が行ってこい」

「ええー！」

「なんだ、不満か？」

「いえ、その……」

「王族の護衛なんて、これ以上ないくらい大きな仕事だ。気合いを
入れてがんばってこい！」

タイラーに肩を叩かれ、アニエスは渋々頷いた。

その後、ネルとアニエスは建物を出て王宮へ向かった。

「アニエスさん、ごめんなさい。本当はお嫌なんですよね？」

「まあね、あなたみたいなのと一緒の仕事することになるなんて
思わなかったよ」

「断ってもよかったんじゃないですか？」

「タイラーに言われたんじや断れないよ。組合のトップだからね、まだ若いくせに」

ネルは笑みを浮かべて言った。

「でも、アニエスさんが一緒だと心強いです。よろしくお願いします」

「こちらこそ。ところで、ロイとはどこまで進んだの？」

「なっ……」

ネルが目を見開くと、アニエスはくすくす笑いながら言った。

「ああ、やっぱりそういう関係になったんだ。予想通りだよ」

「いえ、あの、まだそんな……」

「いいよいよ、隠さなくて。あっ、でもさあ」

アニエスは突然、真顔になった。

「子どもができたら大変だよ。まさかつれたまま護衛なんかできないし。そうなったらあなたは一時休業かな？」

「あの、えーと……」

ネルは耳まで真っ赤にして、しどろもどろになりながら歩き続けた。

ロイたちが王宮に到着してから十日が経過した。特に異変は見られない。また、大司教の行方は未だにわからなかった。

その間、ロイはセレスに一つの提案をした。

「できれば今のうちに、腕の立つ人間を集めておきたいんだが」

「どうしてですか」

「お前さんの命を狙っている人間は、恐らくかなりの大物だ。俺たちの手に余るかもしれない」

「わかりました、認めましょう」

ロイは護衛士の組合を通じ、ハデイスの街とレン族の集落に使者を送った。

やがて、続々と猛者が集まってきた。ハデイスの街からはロイの師匠ルークにその弟子ライザ、魔槍の使い手ラルト。レン族から

は勇士リカルドに通訳の少女エリス。エリスは戦力にならないとしても、他の四人は超一流の使い手ばかりだ。

ロイはルークに声をかけた。

「師匠、お呼び立てしてすみません」

「いやいや、お前の力になれるなら嬉しいよ」

「ありがとうございます。ライザとラハルトもすまなかったな」

「いーえ」

「ロイは恩人だからな、どんどん俺を使ってくれ」

次にロイは、リカルドとエリスに声をかけた。

「遠いところを、わざわざすまなかった」

エリスは笑いながら言った。

「いいよいいよ、おかげで首都を見物するいい機会ができたし」

リカルドもエリスの通訳を介して答えた。

「気にするな。むしろ、俺を呼んでくれて嬉しかったよ」

ルークたち五人は部屋をあてがわれ、しばらく王宮で生活することになった。

それから数日が経ったが、依然として大司教の消息はつかめない。ロイがいつも通りセレスにつき従っていると、廊下で一人の兵士に声をかけられた。

「ロイ、久しぶりだな」

そこにいたのは、かつてセレスの命を狙った男だった。

「なんだ、ガルシアじゃないか」

「折り入って話がある、ちよつと来てくれないか」

「俺は王女の側を離れることができない」

すると、ガルシアはセレスに視線を移した。

「セレス様、お久しぶりです。その節は大変申しわけございませんでした」

「いいえ、過ぎたことです」

「実は大司教についてお話があります」

セレスは目を見張った。

「行方をご存じなのですか？」

「はい。しかし、ここで話するわけにはまいりません」

セレスは二人を近くの部屋につれこみ、内側から鍵をかけた。

「これでいいですか？」

「ありがとうございます、ではお話致します」

ガルシアは、ようやく聞き取れるくらい小さな声で話した。

「大司教はザムールの街に監禁されています」

ロイの顔色が変わった。

「よりによってあの街か」

セレスがロイに尋ねた。

「あの街とは？」

「人間型の魔物たちが住んでいる。人口は五百人に満たないと思うが、彼ら一人一人の戦闘能力が極めて高い上に魔獣まで飼っているので侮れない」

ガルシアもロイに尋ねた。

「続けていいか？」

「ああ、すまなかった」

「大司教を監禁している理由は、戴冠式を行わせないためです」

「彼は無事なのでしょうか？」

「わかりません、殺された可能性もなきにしもあらずです」

ガルシアは一呼吸置いて、さらに続けた。

「申しわけございませんが、私がお伝えできるのはここまでです。

これ以上話せば自分の命が危なくなりますから」

「わかりました、ありがとうございます」

ガルシアはロイに視線を移し、肩を落としながら言った。

「ロイ、俺は仕える人間を完全に間違えた。今は本当に後悔している。かと言っていきなり寝返れば、奴に間違いなく消される。だからしばらくはこのままいこうと思う」

「お前の気持ちはよくわかった」

「じゃあ、またな。セレス様、失礼致します」

ガルシアは立ち去った。

セレスはロイに視線を移した。

「私は大司教を救出したいと思います。そのためにはザムールに軍勢を送るべきだと考えていますが、どうでしょうか」

ロイは首を振った。

「軍勢を送ったりしたら、それこそ大司教の命が危なくなる。しかも、多くの人数を動かすには時間がかかるだろう。その間に奴らがこちらの動きを察知し、大司教を他の場所へ移してしまったらそれまでだ」

セレスが押し黙ると、ロイはさらに続けた。

「他にも問題はある。ザムールの住民は、人間で言えばハデイスの住民のようなものだ。半端な強さじゃない。普通の軍隊なんか送ったら、何千人いようが潰されるぞ」

第四十六話

セレスは肩を落としながら尋ねた。

「では、ロイさんならどうするのですか」

「とりあえず平和的に交渉だな。それが駄目なら次の手を打つまでだ」

「次の手とは？」

「腕の立つ人間を潜入させて、こっそり大司教を奪還する」

セレスは目を見張った。

「普通の街ならいざ知らず、そんな危険なところに潜入などできるのでしょうか？」

「普通の奴にはできないな」

「では、普通でない人間ならできるといことですね」

「そういうことだ」

セレスはロイの手を握りしめた。

「わかりました。では、あなたにお願いします。どうか大司教を救い出してください」

「えっ？」

ロイは慌てて首を振った。

「無理だよ、俺の任務は護衛なんだ。つまり、お前さんの傍を絶対に離れられないわけさ。それとも一緒に潜入するか？」

「いいえ、私が行ったところで足手まといになることは目に見えています」

「だろう。つまり、俺が潜入するのは不可能ということだよ」

セレスはロイを見つめながら訴えた。

「そうおっしゃられても、あなたに匹敵するほど腕の立つ人間など

……」

「いるわ」

「えっ？」

「師匠がいる」

セレスはロイの手を握りしめた。

「ロイさん、大司教を救出できるのはあなたとお仲間を置いて他にありません。どうか作戦の指揮を執ってください」

「もはや、護衛の範疇を越えているとしか思えないんだが」

セレスは深々と頭を下げた。

「お願いします、このままでは国王不在の状態が延々と続いてしまうのです。大司教がお亡くなりになったのであれば次の司教を選ぶことになりませんが、生きていたのであればそれはできません。つまり、彼を救出しない限り戴冠式は不可能なのです」

「いや、だから俺はあくまで護衛士であって……」

ロイは言いかけてやめた。

本来なら平民が王女にこんな口を聞くことなど許されないし、王女が平民に頭を下げることなどあり得ない。それなのに今のような状況になったのは、一重にセレスがロイの人物と実力を高く買っているからだ。

ここまで自分を評価してくれている王女の頼みを、無下に断ることもできようか。

ロイはセレスの目をじつと見つめた。

「王女が頭を下げて頼んでいるのを断るわけにもいかない。やろう彼女が目を輝かせた。

「ありがとうございます！ 私にできることがあればなんでもおっしゃってください！」

「じゃあ、今すぐに腕利きの兵士を集めてくれ。人数は少なくてもかまわないから、とにかく強い奴を頼む」

「わかりました、ガーランドに命じてすぐに集めさせます」

ロイは王宮の中央にある広間に、セレスと仲間たちを集めた。ガーランドだけは兵士を選ぶために不在だった。

ロイが全員に呼びかけた。

「これから大司教を奪還する。どうか皆の力を貸してほしい」
異を唱える人間は一人もいなかった。彼は内心喜びながら、さらに続けた。

「そのために作戦を立てた。俺が指揮官になるから従ってくれ。非常に危険だが、ここにいる皆なら成功させることができる」と信じている」

バートが腕を振り上げた。

「ロイさん、任せてください！」

ネルも拳を握りしめながら同調した。

「私もがんばります！」

ルークは腕を組みながら言った。

「とりあえず作戦を聞こう。あまりに酷いようなら修正させてもらう」

ロイは苦笑しながら説明した。

「まず、ここにいる全員を三つの集団に分ける。交渉組、戦闘組、潜入組だ」

ラハルトがにやにやしながら頷いた。

「俺は戦闘組で決まりだな」

「まあ最後まで聞いてくれ。最初にザムールの街へ入るのは交渉組と戦闘組だ。潜入組には待機してもらおう」

アニエスが黙って頷いている。ロイはさらに続けた。

「まず交渉組が街の住民と話し合いをする。目的は大司教が本当に監禁されているかどうか確認することと、彼を返還してもらおうことだ」

黙って聞いていたライザが口を開いた。

「ザムールの住民って、人の話をまともに聞く連中じゃないよ。交渉なんてするだけ無駄だと思うけどね」

「俺もそう思うが、物は試しだ。まあ、おそらく決裂する。さらに奴らは攻撃してくるだろう。そうなったら交渉組はさっさと逃げ、戦闘組が戦うんだ」

リカルドがエリスの通訳を介して尋ねた。

「いくらなんでも多勢に無勢だろう、街の住民は五百人近くいるんだぞ」

「五百人と言っても全員が戦闘員ではないし、不在の奴もいるはずだ」

「だからと言って……」

「まあ聞いてくれ。戦闘組の目的は、あくまで連中を引きつけることだ。適当に暴れたらさっさと引き上げてかまわない。それに兵士の援護もあるしな」

ロイの話はさらに続いた。

「潜入組は戦闘組が暴れ始めたら、頃合いを見て街に入ってくれ。それから適当な奴を締め上げて大司教の居場所を聞き出し、彼を見つけてつれ帰ってほしい。以上だ」

その場にいる全員が息を呑んだ。成功の確率はさておき、あまりにも危険すぎる。交渉組はともかく、戦闘組と潜入組が生きて帰れる保証はどこにもない。

ロイはルークの顔をじつと見つめた。

「師匠、いかがでしょうか」

ルークは腕を組んだまま頷いた。

「俺はかまわないよ。ただ、できれば潜入組にしてほしいな。おもしろそうだから」

ライザも笑顔を浮かべながら手を上げた。

「はいはい、私も潜入組がいい！」

バートが拳を振りかざした。

「俺は、誰がなんと言おうと戦闘組だ！」

さらにラハルトも続いた。

「右に同じ！ 暴れさせてもらうぜ！」

ロイは深々と頷いた。

「いいだろう、では人選を発表する」

交渉組はロイ、セレス、エリス、ガーランド。

戦闘組はバート、ラハルト、アニエス、リカルド。

潜入組はルーク、ライザ、ネル。

さらに、選りすぐられた五十人の兵士が戦闘組を援護することになった。

ロイが再び全員に呼びかけた。

「すぐに出発するから、急いで準備を整えてくれ」

間もなく、ロイたちはザムールの街へ向かって出発した。

道中、アニエスがセレスに尋ねた。

「大司教がいないと戴冠式ができないから、彼を救出するんですよね？」

「その通りです」

「司教なしでも戴冠式ができるように、仕組みを変えてしまっただけですか？」

「古くからのしきたりを変えらるというのは中々難しいのです。それに、いずれにしろ大司教を放っておくわけには参りませんし」

「でも、王女様自ら出向くのは危険だと思いますが」

「私は交渉が終わり次第引っ込みますから、どうぞご心配なく。アニエスさんこそ充分に気をつけてください」

一方、ネルは彼女たちの話など上の空だった。ルークはロイを凌ぐほどの剣士で、ライザも超一流の使い手だ。潜入組として選ばれた三人の中で、明らかに自分が一番弱い。なんとしても足を引っぱらないようにしなければいけない。

彼女が唇を噛みしめていると、ロイに肩を叩かれた。

「そう硬くなるなよ、実力が発揮できなくなるぞ」

ネルは青ざめた顔で答えた。

「でも、他の二人が強すぎて……」

「そりゃあ仕方がない。この国で最も強力な戦闘集団と言えば、ハデイスの住民だ。彼らはその中で上位にいるくらいだから、もう別

格なんだよ」

「いよいよネルの表情がこわ張った。ロイは笑顔を浮かべながら彼女の頭を撫でた。

「彼らと一緒に行って、その剣技を参考にしてきた。いい部分をどんどん見て盗むんだ。そうすればお前はもっともっと強くなれる」

ネルは力強くうなずいた。

「がんばります！」

「その意気だ、必ず生きて帰るんだぞ」

第四十七話

ロイたちは隊列を組んで歩き続け、ザムールの街に到着した。他の都市と違い城壁がまったくない。人間型の魔物に加えて魔獣まで住んでいるようなところを、わざわざ襲撃するような者がいないからだ。

ネル、ルーク、ライザの三人は、ロイたちが街に入ったのを確認してから後に続いた。できる限り目立たないように行動しなければならぬ。そこで、近くの建物の陰に隠れることにした。

ロイたちは住民に呼び止められた。背後に五十人もの兵士を従えているので当然だ。相手は剣を佩いた男が五人、魔獣が五匹。魔獣はラディングラーという種類で、形は犬に酷似している。体長は人間の成人男性と同じくらいで、鋭い牙と爪に加えて優れた嗅覚を持っている危険な存在だ。

彼らは血の臭いを嗅ぎつけるとどこからともなく現れ、みんな獲物を食い殺してしまう。この街には多数のラディングラーが放し飼いにされているため、彼らの一匹に襲われて傷つこうものなら生命の危機に陥ることになる。

ネルは建物の陰で、はらはらしながらロイたちのようすを伺っていた。セレスと住民たちの話し合う声が聞こえてくる。どうも交渉ははかばかしくないようだ。

魔物たちはいずれも堂々たる偉丈夫で、革の鎧を身に着け剣を佩いている。その中の一人である三十がらの男が、セレスを見ながら口を開いた。

「大司教がここにいるのをどうやって知ったのかわからねえが、とにかく返す気なんざさらさらねえんだよ」

「どうしてですか。彼を監禁することが、あなた方にどのような利益をもたらすのですか？」

「ぶっちゃけて言うなら金だな。それから、この国の政権が代わっ

た後にうまい汁を吸えることになってる」

「交代？ 誰が政権を握るのですか？」

男は下卑た笑いを浮かべた。他の四人もにやにやしなからセレスを眺めている。彼女はかまわずに問い詰めた。

「答えてください！」

「そいつは言えねえな。とにかく、ロイをつれてこようがレン族をつれてこようが司教を返すつもりはねえよ」

男はそう言うなり剣を抜き、他の四人も一斉に抜きつれた。ロイの予測した通りだ。

「いい機会だ、あんたをここでぶった斬っておこう。そうすりゃさつさとことが運ぶからな」

それを聞いてロイが進み出た。男たちがにらみつけてきたが、彼は一向に動じない。こうなることは想定済みだ。

「セレス、下がれ。エリスもだ。バートたちは前へ出る！」

セレスたちはガーランドに護られながら引き下がり、代わりに戦闘組の四人が進み出た。バートは魔剣グレゴールを、ラハルトは魔槍ダイダロスを構えている。アニエスの武器は弓、リカルドは手斧だ。

男の一人が呼びかけると、周囲からわらわらと魔物や魔獣が集まってきた。援護の兵士たちを合わせても、住民側の数の方が上回っている。しかし、戦闘組の四人に恐れはなかった。

バートが真っ先に地を蹴り、先頭の男性に斬りかかった。

「うおらあああっ！」

男は右手の剣でがちりと受け止め、すかさず左の拳打を繰り出した。バートは瞬時に後退してかわしている。男は舌打ちし、戦闘組の四人を見据えながら怒鳴った。

「こいつらをやっちまえ、皆殺しだ！」

その声に応じ、ラディンガーの群れが一斉に跳びかかってきた。応戦したのはラハルトだ。彼は目にも留まらぬ速さで突きを繰り出し、次々と魔獣たちの体を買いた。

「おらおら、おらおらおらああ！」

リカルドも負けてはいない。彼は手斧を振りかぶるなり、渾身の力でラディングガーを斬りつけた。

「ウオオオオッ！」

凄まじい一撃が、魔獣を真つ二つに斬り裂いた。その体は瞬時に肉塊と化し、数フィード先まで弾き飛ばされて転がった。

住民たちの一人が顔面を蒼白にしながら叫んだ。

「なんだこいつら、目茶苦茶強いぞ！」

その途端、彼の額に矢が突き刺さった。撃つたのはアニエスだ。

彼女はにこにこしながら住民たちに向かって言った。

「道具師アニエスもいるよ、忘れないでね！」

一方、ネルたちは相変わらず建物の陰からようすを眺めていた。

ロイたちと住民の戦いはいよいよ激しさを増している。中でもラハルト、リカルド、アニエスの働きは凄まじいものがあり、並み居る敵を次々と血祭りに上げていた。

ルークは腕組みをしながら何度も頷いている。ネルは小声で彼に尋ねた。

「戦闘組で一番強いのは誰ですかね？」

「みんな強いけど、あえて言うならリカルドかなあ。普通の手斧だけであそこまで戦えるのは驚異だよ」

ネルはリカルドを観察してみた。なるほど、斬撃の威力が凄まじい。喰らった相手は漏れなく真つ二つだ。それでいながら、俊敏さは群を抜いている。住民たちが必死に斬りつけ、魔獣たちも次々に襲いかかっているのだが、それらの攻撃はかする心配すらない。

ネルは感心しながらさらに尋ねた。

「じゃあ、ルークさんとどっちが強いんですか？」

黙っていたライザが笑い出した。

「そんなの聞くまでもないでしょ」

どうやら愚問だったらしい。ネルは愛想笑いをしながら、同時に

恐怖を感じていた。リカルドですらあの強さなのに、それを上回るなどもはや人間ではない。こんな男を敵に回そうものなら、間違はなくあの世逝きだ。

ネルが身震いしていると、ライザがルークに言った。

「戦いも白熱してきたことだし、そろそろ行きませんか？」

「そうだね、頃合いだな。じゃあ行こうか」

二人がのろのろと歩きだしたのを見て、ネルは慌てて後に続いた。それにしても、この師弟は緊張感がまるでない。強いのはわかるが、本当に大丈夫なのだろうか。ネルは段々と不安になってきた。

ルークはそんな彼女を見て、不思議そうな顔をした。

「どうしたの、具合でも悪いのかい？」

「いえ、その……」

ネルは、緊張感のなさを指摘しようか迷った。下手なことを言うてこの二人を怒らせるのは怖すぎる。ルークの圧倒的な強さもライザの悪辣な性格も、自分にとっては脅威そのものだ。

彼女は無理に笑顔を作った。

「なんでもありません、気にしないでください」

すると、ライザに顔をのぞき込まれた。明らかに疑われている。

「もしかして、私たちのことを怖がってる？」

「気のせいです！」

「そうかなあ、なんか顔色が悪いよ」

「ちよつと緊張しちゃって」

ネルが冷や汗をかいていると、ルークが笑顔で言った。

「そんなに緊張しなくていいよ、俺たちがついてるから」

「そ、そうですよね」

敵よりあなたたちのの方が怖いですが、とはとても言えない。ネルは顔を引きつらせながら頷いた。

ネルたち三人は、こそこそと街の中を進んでいった。バートたちの奮闘が伝わっているらしく、抜き身の剣を持った魔物や牙をむき

出した魔獣たちが走っていくのが見える。

ルークがそのようすを眺めながらつぶやいた。

「ロイの陽動はうまくいってるなあ」

するとライザが頷いた。

「そうですね、さすがです」

「それにしてもさあ、あいつは魔剣を使う気はないのかねえ」

「ないんじゃないですか、あまり価値を認めてないみたいだし」

「魔剣はかなり役に立つのにね。剣は何体か敵を斬れば歯こぼれして使えなくなることがあるけど、魔剣はいくら斬ろうがその心配がない」

「まあ、しょうがないですよ。才能がないから使えないわけ」

ライザはけらけらと笑っている。ネルは無性に腹が立ち、恐怖も忘れて彼女に食ってかかった。

「ロイさんは魔剣を使わなくても充分強いです！」

ライザは目を見開いて固まっている。ネルは「しまった」と思ったがもう遅い。仕方がないので、必死になって頭を下げた。

「ご、ごめんなさい。つい」

すると、ライザは笑いながら手を振った。

「こつちこそごめん、あなたが怒るのも無理ないよね」

ネルは胸を撫で降ろした。悪辣な女性とばかり思っていたが、意外とそうでもないかもしれない。そんなことを考えていると、ルークが走っていく住民たちを眺めながら言った。

「さて、そろそろ捕まえるかな」

第四十八話

ライザはそれを聞くと剣を抜いた。レクスタードという魔剣で、赤紫色のまがましい光を放っている。

ネルがそれを見てぞっとしていると、ライザがルークに話しかけた。

「まず私がやってみます」

「うん、じゃあよろしく。危なくなったら手を貸すよ」

ライザは走ってきた三人組を呼び止めた。いずれもたくましい男性だ。手には剣や槍を握っており、革の鎧を着込んでいる。彼らはライザを見て胡散臭そうな顔をした。

「ちよつと聞くけどさあ、大司教の居場所を知らない？」

その中の一人が、眉間に皺を寄せながら答えた。

「知っても教えねえよ、誰だお前は」

「ハデイスから来たライザだよ、よろしくね」

彼らの表情が険しくなった。ハデイスは剣士の街として有名だ。

そこから来た人間なら、女性であっても油断できない。

男の一人が眉を吊り上げた。

「そうか、お前は王女の仲間だな。じゃあ生かして返すわけにいかねえな！」

彼は地を蹴り、ライザに斬りかかった。凄まじい剣速だ。ところが次の瞬間、その首から上が消えていた。

「こいつ、よくも！」

もう一人の男が激昂して突きかかったが、これもライザの敵ではない。彼女が脇をすり抜けた途端、胴を真つ二つにたち割られてその場に転がった。

最後の一人は急いで三又の槍を構えた。槍先だけでなく柄まで鉄でできた強力な武器だ。

「お前、本当に女か？」

「うん、男に見える？」

「男にだって、ここまで強い奴はそういねえぞ」

「それはありがとね。ところで、大司教の居場所を……」

「誰が教えるか、馬鹿が！」

男は目を見開き、同時に鋭い突きを繰り出した。ライザは身を翻してかわしながら前進して斬りつけた。しかし、綺麗にかわされている。彼女は続けざまに真っ向から斬り下ろし、腰を狙って薙ぎ払い、胸を目掛けて連続で突きを入れたが、すべて槍の柄でさばかれた。

「へえ、やるねえ。さすがザムールの住民だわ」

「余裕ぶってられるのも今の内だけ。おい、誰か加勢しやがれ！」

彼の呼び声に応じて、五人の住民が駆けてきた。三匹のラディンガーもつれている。

ライザは目を見開いて叫んだ。

「師匠！、ちよつと多いですよー！」

ルークはそれを聞くと、頭をかきながらネルに呼びかけた。

「だってさ、行こうか」

「はい！」

ルークは住民たち目がけて走りだした。怖ろしいほどの速さで、ネルはとても追いつけない。

「ちよつ、待っ……」

声をかけた瞬間、金色の光がほとばしった。ルークの魔剣エクストリアスだ。

彼は疾風そのものだった。しかも、ただの風ではない。通り抜けると同時にラディンガー二匹、住民三人を斬り裂いている。

ネルは絶句した。ロイは「剣技を盗め」などと言っていたが、速すぎてはつきり見えない。これを参考にするのは難しい話だ。

残る二人とラディンガー一匹が、ルーク目がけて一斉に跳びかかった。しかし、彼らは剣を振り下ろすことすらできず、バラバラに斬り裂かれて転がった。

ネルは目の前の光景が信じられなかった。やはりこの男は人間ではない。魔物でもない。おそらく、別の次元の生き物だ。彼が通り抜けると同時に無数の閃光が走り、後には肉塊だけが残される。相手が何人いようがまるでおかまいなしだ。もはや神業としか言いようがない。

ライザと対峙していた男も、口をあんぐりと開けていた。その顔からはすっかり血の気が引いている。

「ちょ、ちよっと待て。なんだありゃあ！」

「私の師匠だよ、強いでしょ」

「強いとかそう言う話じゃねえ、生きてる世界が違うぞ！」

「確かにねえ、私は何度挑んでも勝てないし」

「ち、畜生！」

男は素早く槍を突き出したが、逆にライザの斬撃を喰らって右手の指を斬り落とされた。

「うぎゃあああつ！」

ライザは満面に笑みを浮かべた。これ以上ないというくらい嬉しそうだ。

「槍を持ってなくなっちゃったね、ごめんねー」

「うぐつ、うぐあああ！」

「ところでさあ、そろそろ大司教の居場所を教えてよ」

「しっ、知らね……」

その途端、ライザは男の太腿を突き刺した。良心の呵責などまったくないので、相変わらず笑顔のままだ。

「ぎゃああああ！　いてええええ！」

「いい声で鳴くねえ、もつとよろしく」

「ひいつ、助け、助けて……」

「だから大司教の居場所！」

このままいたぶられつづけければ、いずれ死んでしまう。男は涙を浮かべながら何度も頷いた。

「わかった、教える！　教えるから！」

「じゃあさっさと案内してよ、ちんたらしてたら首をはねるよ」

男は涙を流しながら歩きだし、三人は彼に続いた。

ネルはさつきから血の気が引いてしまい、元に戻らない。「ライザが悪辣でないかも」などと思っただ自分が馬鹿だった。これ以上ないというくらい酷い。さつきから、暇さえあれば男の体を突き刺して楽しんでる。

ルークの強さも脅威だ。しかも、この男はライザの師匠とききてい。仲はいいようだし、間違っただライザを敵に回そうものなら彼も敵に回るのではないだろうか。

そんなことを考えていると、ルークが小声で話しかけてきた。

「ごめんね、不快な思いをさせて」

ライザのことを言っているようだ。ネルはときどきしながら尋ねてみた。

「なんのことですか」

「ライザだよ、弱い者いじめと残酷なことが大好きなんだ。やめるように何度も言ってるんだけど、全然聞かないんだよねえ」

ネルはほっとした。弟子は最悪だが、師匠はまともな人間らしい。

「そうですね、ちょっと酷い気がします。魔物より怖……」

ネルは言いかけ、慌てて口を押さえた。ライザがこちらを見つめていることに気づいたのだ。

「へー、魔物より怖いんだ。ごめんね」

「ち、違います！ ライザさんのことじゃなくて」

「じゃあ誰のこと？」

「えっと……」

ネルが冷や汗をかいていると、ライザはふっと笑みをこぼした。

「ごめんね、屈折してて。自分でもわかってるんだけどさ」

「え？」

「単なる八つ当たりなんだよ」

ライザが遠い目をしているのを見て、ネルは顔を引きしめた。なんだか深刻な話をされそうだ。

「私、本当は男に生まれたかったんだよ。女っていくら努力しても、ある程度しか強くなれないからさ」

「ライザさんは充分強いじゃないですか!」

「そこにいる師匠より弱いでしょ、どう見ても」

ネルは沈黙した。それは否定できない。

「私は彼より強くなりたいんだよ。でも無理なんだよね。男に生まれてたり、あなたみたいに特殊な力を持つてるなら話は別だけど」

ルークが頭をかきながら口を挟んだ。

「そこまで強くならなかつていいと思うけどなあ」

「一番上にいる人間には、二番目や三番目にいる人間の気持ちなんかわからないですよね」

ルークもネルに続いて押し黙った。

「だから結局、男やネルみたいな人に八つ当たりするんだよ。ごめんね」

ネルには理解できなかった。自分はロイより弱いが、かと言って彼を超えようなどと思わない。むしろ、男性より強い女性など相手が引いてしまうのではないだろうか。

そんなことを考えているうちに、ライザがぽつりと言った。

「私は、女である前に剣士だから」

ネルは彼女の顔を見てはっとした。どこか悲しげで寂しげな表情だ。声をかけたいが、言葉が出てこない。

そのとき、物陰から三人の住民が跳び出した。二人は男性で一人は女性だ。彼らは剣をそろえ、ライザ目がけて突っ込んできた。

ライザは抜き撃ちで一人を倒し、続けざまにもう一人の顔を両断した。残ったのは女性だけだ。彼女は青ざめた顔をしながら、渾身の力でライザを斬り下げた。

「やあつ!」

その斬撃は頬をかすめた。斬った部分から血が流れ出ている。ライザがにらみつけると、女は震えながら後ずさった。その瞬間にライザは右手を一閃させ、相手の剣を弾き飛ばした。

「あつ！」

女は慌てて逃げ出そうとしたが、転んでしまった。もう斬撃から逃れるすべはない。彼女は思わず目をつぶり、両手で頭を抱えてうずくまった。

その場にいる誰もが、この女性の命運は尽きたと感じた。しかし、予想に反して何も起きない。彼女が恐る恐る目を開くと、ライザはにっこりと微笑んだ。

「あなたも女性なのにがんばってるんだね、見逃してあげるから行きなよ」

ネルはライザの意外な優しさに目を見張った。極悪非道の人物かと思つてばかりいたが、いいところもあるらしい。

ライザは女が走り去つたのを見届け、ルークに視線を移した。

「大体、ハデイスの住民がいけないんです」

「なんでだよ」

「男だろうが女だろうが魔物だろうが、剣を使える者にこそ価値がある。そんな方針を取ってるから、私みたいな人間ができるんですよ」

「それは一理あるね」

ライザが顔を赤らめる一方、ルークは何度も頷いている。ネルは黙つて成り行きを見守っていた。

「私はあの街で暮らしているうちに、女としての自分を見失つてしまいました。師匠、お願いします。私を女に戻してください」

「そう言われても、具体的にどうすればいいやらなあ」

ルークが首をかしげているのを見て、ネルは呆然と立ち尽くした。今のはライザなりの愛の告白だ。ところが、彼はまったく理解できていない。

彼女が盛大なため息をついたのを見て、ネルはその肩を叩いた。

「がんばってください、応援しますから！」

「ありがと。彼は本っ当に強いけど、人の心の機微がわからないんだよねえ」

するとルークが尋ねた。

「人の心がわかってない？ 誰がだよ」

ネルとライザは顔を見合わせた。これはお手上げだ。二人は苦笑しながら声をそろえて言い放った。

「あなたです！」

第四十九話

その間に、ライザが捕まえた槍使いはどこかに逃亡してしまっていた。これでは大司教の場所がわからない。

ライザがルークに尋ねた。

「また案内役を探しますか？」

「うん。それにしても、ちょっと時間を食いすぎたな。そろそろ危険な奴が出てきそうだ」

「危険な奴って、ダグラスですか」

「そうだよ、いなければ助かるんだけどねえ」

ネルは目をしばたいた。ルークほどの剣士が相手を怖れる必要などあるのだろうか。

「ライザさん、ダグラスって誰ですか」

「え、知らないの？ この国の剣士の中で一、二を争ってるのが、うちの師匠とダグラスだよ」

ネルは戦慄した。そんな相手がいるなど聞いていない。とんでもない街に来てしまったものだ。

そのとき、逃亡したはずの槍使いがひよっこり姿を現した。ライザがそれを見逃すはずもない。彼は再び捕らえられ、案内役を努めることになった。

「あなた馬鹿だねえ、なんでまた戻ってきたわけ？」

「いや、もういなくなつたかと思つて」

彼はネルたちを、煉瓦造りの建物の前へつれていった。ここに大司教がいるらしい。

「着きました」

「さつさと中に入ってよ、あなたが先頭に立つてくれないと困るんだよね」

「え、なんで」

「畏が仕掛けてあつたら困るでしょうが」

男は先頭に立つて建物の中へ入っていった。ライザは剣を突きつけながらその後が続いている。ネルも緊張しながら歩いたが、ルークだけはあくびをしていた。

廊下を通り抜けて広間に入ると、布に覆われた物体がいくつも転がっている。ライザは槍使いをつつきながら尋ねた。

「ちよつと、なんなのこれは。大司教はどこなの」

「へっへへ、それはですねえ」

その途端、背後の扉が勢いよく閉まった。閉じ込められたらしい。男が満面に笑みを浮かべた。

「このこついてきやがって、この馬鹿どもが。おい、やっちまえ！」

その途端に、布の下から剣を持った男たちが跳び出した。人数は三十人を超えている。

ライザは舌打ちし、案内役の首を一瞬ではね飛ばした。

「やっってくれるじゃないの、まったくさあ！」

男たちは一斉に斬りかかってきた。筋骨たくましい者ばかりで斬撃も鋭い。鎧を着ていないのがせめてもの救いだ。ライザは右へ左へと移動しながら攻撃をかわし、目の前の相手を袈裟がけに斬りつけた。

「ぐぎゃああつ！」

血飛沫が上がり、男は目をむいて崩れ落ちた。しかし、他の住民たちは怯むようすもない。ライザは突きかかってきた敵を斬り伏せ、斬りかかってきた敵を薙ぎ払い、突進してきた敵を蹴り倒した。

ネルも六人の敵を相手に渡り合った。非常に厳しい状況だが文句は言えない。ルークなど、二十人近くを相手にしているのだ。なんとか目の前の住民たちを葬り、彼に手を貸さなければならぬ。

ネルが一人の顔面を貫いた途端、横からもう一人が鋭い突きを放った。身を翻してかわしたが、さらに他の住民が斬りかかってくる。さばいてもさばいてもきりがない。

このままではやられる。そう思った瞬間、ライザが絶叫した。

「ガアアアッ！」

ネルが驚いて硬直すると、赤紫色の閃光が連続で走った。続けて凄まじい血飛沫が上がり、男たちの首や手足があちらこちらに跳び散った。もはや、ライザと住民たちのどちらが魔物なのか見分けがつかない。

ネルが固まっている間にライザは暴れまくった。一人の首をはね飛ばし、一人の肩から脇腹までを断ち割り、跳躍すると同時に一人の腰を真つ二つに斬り裂き、それでもなお止まらない。鮮血の噴水の中を驀進する彼女を見て、ネルは全身から血の気が引いた。

ルークの働きはさらに凄まじく、二十近くいた相手が肉塊と化して転がっている。彼はそれにも飽きたらず、ネルの方に向かって跳躍した。途端に周囲の男たちが血飛沫を上げ、絶叫しながら崩れ落ちた。

もう誰も向かってくる者はいない。ネルは呆然と立ち尽くしていた。三十人を超える住民が、たった二人の剣士により全滅だ。もう化け物としか言いようがない。

ライザは、血に塗れたレクスタードを握りしめて呼吸を整えている。片やルークは息一つ切らしていない。ネルはようやく我に返ったが、二人が怖ろしくて声をかけられなかった。

ルークはネルの気持ちも知らず、笑顔で声をかけてきた。

「怪我はなかったかい？」

「え？ は、はい！」

なんとか答えたのはいいが、全身の震えが止まらない。

「あ、あの、ありがとうございます」

「どういたしまして。なんか泣いてるけど大丈夫？」

「はっ、はいっ！」

ライザも笑顔で声をかけてきた。

「ネル、もうちょっとがんばってね。疲れちゃったよ私」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

ネルは心の中でロイに文句を言った。頼むからこんな人たちと組

ませないでほしい。怖すぎて死んでしまいそうだ。

そのとき、扉を開ける音がした。ネルたちが目を向けると、一人の男性が入ってきた。

年齢は二十代後半。黒い瞳に短髪、茶色の肌。精悍な顔立ちや鍛え上げられた体、全身に刻まれた傷が、歴戦の戦士であることを物語っている。着ているのは革の鎧で、左右の腰に剣を一本ずつ佩いていた。

男は周囲を見回しながら言った。

「ありやりや、全滅かよ。やっぱり雑魚が何人いても駄目だな」

彼は二本の剣を抜いた。漆黒に輝く魔剣だ。ネルたちが一斉に身構えると、男は笑いながらルークに声をかけた。

「おい、このお嬢ちゃんたちを退かせろ。女を斬るのは趣味じゃねえんだ」

ルークも笑みを浮かべた。

「わかった。ライザ、ネル、下がっててくれ」

「師匠、ここは三人で……」

「駄目だよ、そんなの卑怯じゃないか。俺がやるさ」

「じゃあ、まず私が彼と戦います！」

「やめときなよ、お前がダグラスと戦ったら即死だから」

ライザは、泣きだしそうな顔をしながら唇を噛んだ。ルークはそれを見て苦笑した。

「お前が弱いわけじゃない、相手が強すぎるんだ。あまり気に病まない方がいいよ」

ライザは泣く泣く引き下がり、ネルも彼女に続いた。ルークとダグラスは剣を構えながらにらみ合っている。一触即発だった。

先に動いたのはルークだ。彼は相手を目掛けて地を蹴り、一瞬で数フィード先まで通りすぎた。同時に無数の斬撃がダグラスを襲ったが、彼は左右の剣を巧みに操ってすべてさばききった。

「さすがはルーク、相変わらぬ強さだな」

ダグラスは顔色一つ変えていない。ルークはそれを見てため息を

ついた。

「いやいや、かすりもしないとはな。本当にたいしたもんだ」

「お褒めに預かり光栄だよ」

ダグラスが一瞬で間合いを詰め、凄まじい勢いで上下左右から何度も斬りつけた。十段斬りと呼ばれる技で、防げる人間は国内に数えるほどしかない。ルークは剣を縦横無尽に動かし、辛くもこれをさばききった。

第五十話

ネルは、ひやひやししながら戦いを見守っていた。中距離ではルークに分があり、近距離ではダグラスに分があるようだ。

ライザに視線を移すと、彼女はうつむいている。ネルはそつと声をかけた。

「どうしたんですか」

「なんか悔しくってさ。師匠が強敵と戦ってるのに、自分は何もできないなんて」

「彼が一人で戦うって言ってるんだから仕方がないですよ」

ライザはさらにうつむいた。ネルはなんとか励まそうとしたが、言葉が浮かんでこない。

「ネル。私はあの人に何度も頼ってきたのに、あの人は辛いときでも私を頼ろうとしないんだよ。そりゃ力不足なのはわかるけど……なんか悲しいよね」

ネルはそれを聞いて沈黙した。

自分は、少しでもロイの力になりたいと思っている。しかし、実際のところ役に立っているだろうか。

戦闘能力、知識、経験。すべてにおいて、ロイは自分を上回っている。しかも、その差は図り知れないほど大きい。彼の右腕になるうとするなら、もっと実力をつける必要がある。

ライザもまた、ルークとの力の差を感じているはずだ。それだけに辛いのだろう。

「ライザさん、元気を出してください。力になれないならなれないで仕方ありません。せめて彼を精一杯応援しましょう」

「そうだね、くよくよしてもしょうがないよ。今の私にできることをやらないとね」

ライザはルークに視線を移した。その顔から憂いは消えている。ネルは安心し、一緒に応援することにした。

ルークは明らかに苦戦していた。なんとか距離を離そうとするのだが、相手がそれを許さない。至近距離で何度も十段斬りを繰り返すダグラスに、心底辟易した。

しばらく斬り合っているうちに、鋭い斬撃がルークの左腕をかすめた。そこから血が流れ出し、彼の体を赤く染めていく。それを見てライザが顔を引きつらせた。

「師匠！」

「心配するな、たいした傷じゃない」

ルークは顔色一つ変えなかったが、ネルは大きな不安を感じていた。これは明らかに劣勢だ。このまま至近距離で斬り合えば、おそらく負けてしまうだろう。

彼女はこっそりとライザに近づいて耳打ちした。

「ルークさんに加勢しましょう」

ライザは目を見開いてこちらをじっと見つめている。ネルはさらに続けた。

「このまま戦い続ければたぶん負けます。卑怯と言われたとしても、ルークさんが命を落とすよりはいいでしょ？」

彼女が無言で考え込んでいるのを見て、ネルは苛立ちを覚えた。何を迷う必要があるのだ。本当は一对一で勝つてほしかったが、こうなった以上は仕方がないではないか。

ライザはようやくうなずいた。

「わかった、加勢するよ。ネルも手を貸してくれるよね？」

「もちろんです」

「ありがとう。師匠！ 私たちも加勢します！」

ネルはルークがうなずいてくれることを期待した。いくらダグラスが強いと言っても、この三人で一斉にかかれば勝てるはずだ。

ところが、ルークは黙って首を振っている。ネルにはとても信じられなかった。ダグラスの斬撃はいよいよ激しさを増し、ルークは防戦一方になっている。このままみすみすやられるつもりなのだろうか。

慌ててライザに視線を移すと、彼女は目を見開いたままつぶやいた。

「師匠、まさかあれをやる気じゃ」

「あれって？」

「ものすごく危険な技だよ。当てればどんな相手でも倒せるけど、はずせば反撃を喰らって確実に死ぬ」

ネルは息を呑んだ。一か八かの賭けではないか。彼女は慌てて主張した。

「そんなことをしなくても、私たちが加勢すれば……」

「私は師匠を信じるよ」

「でも、もし失敗したら」

「そのときは私が時間を稼ぐから、あなたは逃げなよ」

必死で説得したが、ライザの考えは変わらない。ネルは大きなため息をつきながら黙り込んだ。こうなったら、成り行きを見守るしかない。

ルークは突然跳び下がり、剣を鞘に収めて腰をかがめた。どうやら、鞘の中で剣を加速して抜き撃ちで倒すつもりらしい。ネルは一抹の不安を感じた。これなら高速で強力な斬撃を繰り出すことができるが、はずしてしまえば隙を狙われて終わりだ。

ダグラスは相手が抜き撃ちを狙っているのを見て、警戒しながらじりじりと間合いを詰めた。喰らえば自分が即死、かわせばルークが即死だ。

ルークは右手で柄を握りしめ、突然目を見開いた。ネルも刮目した。この一瞬で勝負が決まるはずだ。

彼は凄まじい速度で右手を一閃させた。だが、ダグラスは瞬時に後退してこれを知った。

はずしてしまった、これで終わりだ。ネルはそう思いかけ、すぐに撤回した。ルークは右手を振っただけで、実際は剣を抜いていなかったのだ。彼は左の逆手で剣を引き抜き、相手に斬撃を浴びせた。ダグラスは驚きながらも、なんとかかわしている。だが、続く

ルークの体当たりによって体勢を崩された。そのときだ。

無数の閃光が走り、同時に連続で金属音が鳴り響いた。直後に凄まじい血飛沫が上がり、周囲を赤く染めた。

倒れたのはダグラスだ。彼は全身血に塗れながら、震える手で鍵を差し出した。

「俺……の負けだ……大司教は地下室に……いる」

ルークも肩や胸から血を流しているものの、なんとか立っている。彼はその場に屈み込み、ダグラスの手を握った。

「すまない、ダグラス」

「気を……つける……糸を引いてるのは巨大な……」

彼は息絶え、動かなくなった。

全身に傷を負わされたものの、ルークの勝利だ。ライザは満面に笑みを浮かべながら彼に抱きついた。

「師匠、勝つと信じてました！」

「そうか、ありがとうな」

「傷は大丈夫ですか？」

「致命傷には至らなかつたけど、体力も精神力も使い果たした。すまないが肩を貸してくれないか」

彼は脂汗をかいており、かなり辛そうだ。ネルは見かねて口を開いた。

「私が大司教をつれてきますから、ルークさんたちはここで休んでいてください」

「本当にすまない」

ネルは鍵を受け取り、地下へと急いだ。部屋は一つしかない。ダグラスの話が本当であれば、ここに大司教が監禁されているはずだ。急いで扉を開けると、黴の臭いが鼻をついた。薄暗くて周りがよく見えない。ネルは壁を伝って歩きながら呼びかけた。

「大司教様、いらつしゃいますか！」

返事はない。仕方がないので先に進んでいくと、奥に扉があった。「この中にいるのかな？」

鍵はかかっているようないようだ。少しずつ扉を開いてみると、中から明るい光が漏れてくる。ネルはおそろおそろの中に入った。

「大司教様、助けに……」

彼女は言いかけて絶句した。目の前で二十歳くらいの女性が、男性の体を引きちぎりながら食べているのだ。

女性は肩まで伸びた赤い髪に白い肌、すっきりした顔立ちに引きしまった体をしている。着ている紫色の服は、血でぐしょぐしょに濡れていた。

彼女はネルを見てにやりと笑った。

「あら、ネルじゃない。久しぶり」

「あなたは、確か殺し屋の……」

「そう、赤眼のケイトだよ」

「今食べてるのって、まさか……」

「大司教だよ、ごめんね。お腹がすいたから食べちゃった」

第五十一話

ネルの心に怒りが湧き起こった。なんとということをしてくれるのだ。これでは、大司教を助けるために奮闘した皆の苦勞が水の泡ではないか。

「あなたって人は！」

「人じゃないし」

ネルはそう言われて沈黙した。確かに、この女性はれっきとした魔物なのだ。魔物が人間をとって食べるのは当たり前のことなのだから、文句を言っても仕方がないだろう。

「ケイトさん、どうしてここにいますか？」

「私はここの住民だから。あなたこそ、なんで大司教を助けに来たの？」

「王女様が彼を助けたいとおっしゃってますから」

「ふーん、大変だね」

とにかく、大司教が死んでしまった以上この街に用はない。せめて、この死体が本人である確認をしてから戻ることになろう。

そう思いながら男性を見たが、確認のしようがなかった。顔がひしゃげてしまっており誰だかわからない。辛うじて男性であることがわかるくらいだ。大司教の人相を詳しく聞いていたものの、これではどうにもならない。

そのとき、ネルは男性が首飾りをしていることに気づいた。これを持っていけば証明になるかもしれない。

「ケイトさん、あなたが大司教を殺したことについては何も言いません。ただ、お願いがあります。その首飾りを渡してください」

彼女はネルの顔をしげしげと眺めた後、首を振った。

「やだ」

「どうしてですか！」

「あなたって、王女の仲間でしょ。だったら協力するわけにはいか

ないんだよね」

「ケイトさんは、なぜセレス様を……」

「ガゼニアから、彼女を暗殺するよう依頼が来てるんだよ」

ネルは戦慄した。ガゼニアは隣の王国だ。まさか、そんな巨大なものを敵に回しているとは思ってもみなかった。

硬直していると、ケイトが死体を放り投げて短剣を抜いた。

「そう驚かなくてもいいよ、これから死んでいくあなたには関係ないことだからさ」

逃げようとすれば、背後から突き刺されるのは目に見えている。

ここは戦うしかない。

ネルは素早く視線を走らせた。成人男性の身長を一フィードとすると、この部屋の広さは一・五フィード四方で、天井の高さは一フィードちよつとだ。ただでさえ狭いのに木製のテーブルや椅子、本棚まで置いてある。ここで剣を振り回して戦えば関係ないものを斬りつけてしまうだろう。その隙を狙われたら一巻の終わりだ。

それでも、ネルは魔剣グラフィードを引き抜いた。斬ることができないのなら短めに持って突けばいいのだ。かなり厳しい戦いになるが、この際ぜいたくは言っていられない。

「ネル、あなたは赤眼なんだよね？」

「赤眼の血を引いた人間です」

「ふーん、人間なんだ。今のあなたは完全に魔物だけだね」

ネルの髪と瞳は、いつの間にか赤く染まっている。ケイトはそれを見てにやにやと笑っていた。

「何がおかしいんですか！」

「あなた、人間を引き裂いて食べたことがあるでしょ？」

ネルは頭がくらくらした。絶対に思い出したくない過去だ。かつて自分は、人間と魔物の集団を襲って食い殺した。あのときは本当に、どうかしていたとしか思えない。

「ねえ、あるんでしょ？」

「う……」

「あるんだね」

ネルはうつむいた。確かにある。それは消すことのできない事実だ。ケイトはネルの顔をじっと見つめながら尋ねた。

「あなた、本当に自分のことを人間だと思ってるの？ まっとうな人間から見れば、あなたは紛れもなく化け物だよ」

「ば、化け物……？」

「そう。そんなあなたが、普通の人間たちと一緒に暮らしていこうなんて無理があるんだよ」

ネルは沈黙した。返す言葉がない。ハデイスのような街なら自分は違和感なく暮らしていくことができるだろうが、それでも化け物であることに変わりはないだろう。

「ネル、私はあなたを殺そうと思ってたけど、場合によっちゃ考え直してもいいよ」

「どうすればいいんですか？」

「セレスを裏切って、私たちの仲間になってくれればいいの。そうすれば命は助けてあげるし、それに」

「それに？」

「赤眼として生きることの楽しさを教えてあげる」

赤眼の血を引くのが苦痛でしかない自分にとっては、新鮮な言葉だ。どう楽しいのかぜひ聞いてみたい。

「楽しいことなんてあるんですか？」

「もちろん。赤眼の女性は魅惑の術を使えるんだよ」

そう言えば、以前ロイとバートが引つかかったことがある。

「やり方は簡単、相手の眼を見て強く念じるだけ。『あなたは私のもの、あなたは私のもの』ってね。術が成功すれば、その人はあなたの虜になってなんでも言うことを聞くようになるんだよ」

「便利ですねえ」

「でしょ。あなた、好きな人はいる？」

「え、まあ」

「ロイでしょ？ じゃあ術をかけるといいよ。そうすれば彼もあな

たの味方になるから、力を合わせて王女を殺してくれればいい」

ロイを魅惑の術で仲間にした上で、バートたちを裏切り王女を殺して逃亡。悪魔の所業だ。

「ケイトさん、私にはでき……」

そこまで言うと、ネルは言葉を詰まらせた。なぜか「できません」と言うことができない。どうしてだろう。

必死に口をぱくぱくさせていると、ケイトがくすくす笑った。

「そうそう、言えないよね。理由を教えてあげようか？」

「はい」

「あなたが、もう魅惑の術にかかっているからだよ」

ネルは愕然とした。かかるのは男性だけかと思っていたが、そうではないらしい。ケイトがにこりと笑った。

「女性を虜にするのは無理なんだけど、言うことを聞かせることはできるんだよ。さあ、ネル。ロイを仲間に引き入れて王女を殺してきなさい」

ネルはケイトから首飾りを受け取って地下室を後にした。

広間では、ライザがルークの手当てをしている。ネルは二人に近づいて声をかけた。

「残念ながら、大司教は殺された後でした。これは遺品です」

ライザは眉をひそめた。ネルの髪と瞳が赤く染まっていることに気づいたのだ。

「どうしたの、赤眼になっちゃって。もしかして敵に襲われたとか？」

「ええ、まあ。倒しましたけど」

ネルは薄笑いを浮かべている。ライザは怪訝そうにじろじろと彼女を見た。

「なんか変だね」

「何がですか」

「いや、あなたが。どんな風について聞かれると答えられないんだけ

ど」

「どこもおかしくくないですよ」

別に自分自身は何も変わっていない。ただ、「ケイトの命令を遂行しなければならぬ」と強く思っているだけだ。それがいいことなのが悪いことなのかと聞かれれば、悪いことだと答えるだろう。しかし、逆らうことができない。

ルークが顔をのぞきこんできた。

「まさか、何かの術によって惑わされてるのかな？」

さすがはルーク、おそろしく鋭い。ロイの師匠だけのことはある。ネルは一瞬ぎよつとしたが、すぐに気を取り直して首を振った。

「気のせいですよ」

「ならいいけどね」

「それより、早く街を出しましょう」

三人が建物を出ると、いきなり二十人近い男たちに囲まれた。ルークが負傷した状態でこれは厳しい。ライザが唇を噛みしめていると、彼が真顔でこう言った。

「ライザ、ネルをつれて逃げろ。奴らは俺が引きつける」

「なんでですか！」

「お前とネルだけでこの人数は無理だろう。悔しいが、今の俺はまともに戦えないんだ」

「あなたを置いて逃げることでできません！」

その間に、男たちが斬りかかってきた。ライザは抜き撃ちで一人を倒し、さらに二人目の胸を薙ぎ払い、鋭い突きを放つてもう一人の顔面を貫いた。だが、彼らは次々と斬りかかってくる。これではきりがない。

そのとき、ネルが進み出た。

「ちよつとネル、無理しちゃ駄目……」

ライザは言いかけて口を止めた。ネルが凄まじい勢いで男たちを撫で斬りにしている。妙なことに、彼らはなんの抵抗もせずただ殺されていくだけだ。据え物を斬っているのと変わらない。

ライザが口をぱくぱくさせていると、ルークがしみじみと言った。
「魅惑の術だな、ここまで強力なのは初めて見た」

第五十二話

「魅惑の術って、赤眼の女性が使う……」

「そうだ。連中はただでさえ強いくせに、そんな特技まで持つてる。だから始末におえないんだよ」

ライザは冷や汗をにじませながらネルを見つめた。男たちを虜にしながら嬉々として斬り伏せている彼女は、赤眼そのものだ。あまりにもまがまがしく、およそ人間には見えない。

ネルは住民を一人残らず斬り殺した後、満面に笑みを浮かべた。自分は、世の中の男たちを自在に操ることができる。生かすも殺すも思いのままだ。こんな痛快な話はない。

ライザはおそろおそろネルに近づき、話しかけた。

「ねえ」

「なんですか」

「お願い、正気を取り戻して」

「至って正気ですけど」

「とてもそうは見えないよ。今のあなたは、私が知ってるネルじゃない」

ネルは目をしばたいた。自分はケイトの命令に従っているものの、別に気が違っているわけではない。「正気を取り戻して」などと言われるのは心外だ。

黙っていたルークが口を開いた。

「ネルは複雑な心を持つてるみたいだね」

「私ですか？　すごく単純だと思いますけど」

「いやいや。人間としての自分と、魔物としての自分を持つてるんだよ。普段は魔物の部分を押さえ込んでるけど、それが何かの拍子で表に出ることがあるみたいだ」

「そんな……」

「魅惑の術は使わない方がいいよ。使えば、君はどんどん魔物にな

つてしまう。心も体もね」

ネルは愕然とした。魔物としての自分は人間としての自分と同化し、完全に消滅したはずだ。それが、魅惑の術を使うことによって再び現れたらしい。

「ネル。君は住民たちを殺しているとき、どんな感情を持ったんだ？」

「楽しくて仕方がありませんでした。もっと操りたい、もっと殺したい。そればかりが頭の中にあっただんです」

「その思考回路は魔物そのものだ。気をつけないと、どんどん道を踏み外すよ」

そのときネルの頭の中で、自分の声がした。

「前のあなたと同じだね、何も変わってないよ」

必死に打ち消そうとしたが、その声はさらに響いてくる。

「結局、あなたは化け物なんだよ。いくら人間のふりをして生きようとしても無理な話。さっさとあきらめて魔物として生きるというよ。そうすれば苦しむこともないから」

ネルはこのときを境に、人間としての心を失ってしまった。

ネルたちが街の入口付近まで戻ってくると、戦闘組と兵士たちが奮闘していた。

バートたち四人は健在だが、五十人いた兵士は二十人近くまで減らされている。百人近い住民たちに囲まれているので無理もない。

ネルたちは交渉組の四人に駆け寄り、大司教が既に殺されたことを告げた。セレスは青ざめた顔をしながら、手渡された首飾りを見つめている。

「確かに彼のものです、間違いありません」

セレスの言葉を聞くと、ロイは戦闘組に呼びかけた。

「全員撤退！」

その声に応じて兵士たちが退却を始めた。しかし、住民たちが次から次へと襲いかかってきてなかなか逃げられない。戦闘組の四人

が必死に食い止めているものの、もう限界だ。

ロイはガーランドに声をかけた。

「しばらくの間、セレスを頼む」

「わかった」

彼は金属性の棒を引き抜き、戦闘組の援護に向かった。その前に数十人の男たちが立ち塞がったが、ものともしない。

「おおおおっ！」

金属の棒が閃光となって走り、次々と住民たちの顔面を貫いた。周囲の男たちは絶句し、血の気の引いた顔でロイを見ている。

「俺が道具師ロイだ、死にたい奴はかかってこい！ 残らず地獄に送ってやる！」

住民たちが一斉に斬りかかったが、かすりもしない。ロイが凄まじい速さで駆け抜けけると、男たちは血飛沫を上げて倒れ伏した。

ロイが兵士たちに向かって叫んだ。

「今のうちに、セレスをつれて逃げる！」

兵士たちが一斉に退却を始め、続けてバートたちも少しずつ下がりはじめた。ロイの凄まじい勢いに押され、住民たちの追撃は鈍っている。彼はセレスたちが完全に退却したのを見届け、戦闘組に呼びかけた。

「俺たちも逃げるぞ、急げ！」

ロイは強酸性の毒液を撒き散らして住民たちの動きを止め、一目散に逃げ出した。バートたちも後に続いている。住民たちは追いかけてきたものの、しばらくすると諦めた。

ロイは全員を集合させ、王城へ帰還した。二十八人の兵士が死亡し二十二人が負傷、ルークやライザ、バートも傷を負っている。

彼らが手当を受けている間、ロイとセレスは部屋の中で話し込んでいた。傍らにはネルもいる。

「戴冠式は後にした方がいい。まずは、大司教の誘拐を指示した人間を突き止めるのが先だ」

「そうですね。新しく大司教を選んでも、また同じことの繰り返しになりそうですし」

「じゃあガルシアを探して、詳しい話を聞いてみるか？」

「そうしたいのは山々なのですが、彼の行方がわからないのです」

ネルは赤眼になったまま、じつとロイを見つめていた。魅惑の術は、相手が視線を合わせてくれないと効果がない。それなのに彼はちっとも顔を見てくれないのだ。

さっさとロイを虜にしてセレスを暗殺し、この城を抜け出したい。そう思っているのにこれではどうしようもなかった。いくらなんでも、ロイの目の前で王女に手を出すのは無理がある。なんとしても彼を味方につけなければならぬ。

ロイはセレスと話し合いを続けているが、名案は浮かばないようだ。ネルがいらついていると、彼はいきなり話しかけてきた。

「ネル、いつまで赤眼でいるつもりなんだ」

「いつまでもだよ、敵に襲われたときにこの方が有利だから」

「ふーん、そうか」

ロイは相変わらず視線を反らしたままだ。ネルは彼の前に回り込み、その瞳をのぞき込んだ。

「なんで視線を合わせてくれないの」

すると、ロイはそっぽを向きながら答えた。

「お前、魅惑の術を覚えたらしいじゃないか。そんなものを喰らったらたまらないからな」

ネルはぎょっとした。完全に見透かされている。

「ロイさんは、私がそんなことをすると思ってるの？」

「思いたくないし、信じてやりたいさ。でも、今のお前はなんだかおかしい。ずっと赤眼のままだし、やたら俺を見つめてくる。これじゃ疑うなと言う方が無理な話だよ」

「酷い！」

ネルは怒ったふりをして部屋を飛び出した。作戦失敗だ。こうなったら、他の人間を味方につけるしかない。

別の部屋をのぞいてみると、ルークとライザが手当を受けている。仲間にするのにうつてつけた。

「ルークさん、お疲れ様でした。傷はどうですか」

「血は止まったし特に問題ないよ」

「ライザさんもお疲れ様でした。傷は……」

「私はかすり傷しかおつてないから大丈夫だよ」

二人は笑っているものの、視線を合わせてくれない。ネルは心の中で舌打ちをした。

「ライザさん、なんで目を合わせてくれないんですか！」

「怒らないでよ、仕方ないでしょ。いい加減、赤眼から元に戻つてよ」

駄目だ、この二人にも効かない。ネルは落胆しながら部屋を出た。王宮の中庭を歩いていると、女官服を着た侍女らしき人間が近づいてくる。ネルはそれを見てあつと声を上げた。誰かと思えばケイトだ。

「ケイトさん！」

「しっ、声が大きいよ」

「髪の毛が黒いから、全然わかりませんでした」

「単に染めただけだよ、ちよつとこつちに来て」

ケイトはネルを近くの部屋につれこんで鍵を閉めた。ロイたちにも見つかろうものなら大変だ。

「ネル、魅惑の術はどうだった？」

「術自体は最高です。でも、ロイさんやルークさんに通じなくて」

「やっぱりか、困ったねえ。あのロイって男、本当に隙がないんだよ。うっかり間合いに踏み込んだら一瞬で殺されるだろうし、正直どうすればいいのか……」

ケイトは頭をかきながらため息をついている。ネルもそうしたい気分だった。

「こうなったら、他の人たちを当たってみます。バート辺りなら簡単に引つかかるだろうし、リカルドさんやラハルトさんを味方につ

ければ心強いし」

「うん。ところでさ、その前に仲間を紹介するよ。みんな協力した方がいいでしょ？」

「ぜひお願いします」

ケイトは先に立って王宮の廊下を歩いていった。彼女は時々兵士に目をつけられるが、その度に魅惑の術を使って乗り切っている。ネルは感心しながら後についていった。

やがて、廊下の向こうから一組の男女が歩いてきた。男は引きしまった顔とがっちりした体をしており、身に着けているのは腰布と斧だけだ。少女はぱっちりした目が特徴的で、よく鍛えられた体をしている。着ているのは一枚の大きな布であつらえた服で、腰には剣を佩いていた。

ケイトは二人をまじまじと見つめた後、慌てて目を伏せた。魅惑の術はどうしたのだろう。ネルは不審に思いながら進み出て、彼らに声をかけた。

「リカルドさん、エリス、お疲れ様」

すると、エリスが笑顔で答えた。

「ありがとう、ネルもお疲れ様」

特に怪しまれてはいないようだ。ネルがため息をついていると、リカルドが何やら言っているのに気づいた。

「彼はなんて言ってるの？」

「赤眼の匂いがあるってさ」

「それは、私が赤眼になってるから……」

「ううん、ネルじゃなくてそっちの人」

ネルとケイトは硬直した。なんとという鼻のよさだ。さすがは魔物にすら怖れられているレン族の戦士、並の人間ではない。

ネルは必死でリカルドに魅惑の術をかけたが、まるで変化がなかった。エリスにかけても同様だ。一体どういうことだろう。

こうなったら、なんとかごまかして通るしかない。ネルは無理に笑顔を作ってエリスに言った。

「この人、私の友だちなんだよ。気にしないで」

「ふーん」

「じゃ、急ぐから。またね」

エリスは目を細めてこちらを見た。明らかに疑われている。ネルは冷や汗をかきながら通りすぎ、ケイトも心臓をどきどきさせながら後に続いた。リカルドの刺すような視線が怖ろしくて仕方がない。彼らの姿が見えなくなったところで、ケイトは大きく息を吐き出した。

「なんなの、あいつらは。術が効かないんだけど！」

「私事です、本当に困りました」

「何者なの、一体」

「レン族の人たちです」

「あー、なるほど納得」

「どうしてですか」

ケイトは苦笑した。その額にはじつとりと汗がにじんでいる。

「レン族って、野獣や魔物が出る森の中に平気で住んでる連中だから。男女問わずものすごく強いし、術もほとんど効かないんだよね」

「へえ、すごいですね」

「なんでロイの仲間ってとんでもない奴ばっかりなの？ ルークっ

て超有名な剣士だし、その上レン族の戦士とか……」

「本人が半端なく強いからじゃないですか？」

「やっぱりねえ、そうだよねえ。やだなあ、なんでよりによってあんな連中が敵に……」

ケイトはぶつぶつ文句を言っている。ネルが彼女をなだめていると、誰かの視線を感じた。咄嗟に目を向けたが誰もいない。

「ネル、どうしたの」

「誰かに見られてたような……」

「誰もいないじゃない、気のせいだよ」

第五十三話

「そうですか、それならいいんですけど」

その後、ケイトはネルを王宮内の一室に案内した。扉の前に一人の兵士が立っている。彼はネルを見て目を見開いた。

「お前は、確か……」

「あつ、ガルシアさん！」

「なぜここに来た？」

「ケイトさんの仲間になったからです」

彼は「信じられない」と言いたげに何度も首を振っている。ケイトはそれを見て言った。

「どうでもいいから、さっさと通してよ」

部屋の中に入ると、二人の男性がいた。

一人はやせ型で長身の若者だ。胸まで伸びた漆黒の長髪、病的なほどに白い肌をしている。着ているのは長袖の服とズボンで、腰に数本の短剣を帯びていた。

もう一人は四十がらみの男性だ。銀糸に彩られた群青色の服を着ており、顔のふつくらした温厚そうな人物である。

ネルは彼らを見て、思わずつぶやいた。

「レヴィン！ それにクルセウス様？」

二人はこちらに視線を向け、クルセウスが話しかけてきた。

「ネルではないか、なぜケイトと一緒にいるのかね」

「この度、彼女の仲間になりました。よろしくお願いします」

「ほう、そうか。それは心強い限りだ」

ネルは内心驚いていた。黒幕はクルセウスだったらしい。その温厚そうな外見からはまったく予想できなかった。

黙っていたレヴィンが口を開いた。

「クルセウス様、ロイがついている以上王女の暗殺は難しいです。奴一人でもてこずるのに、周囲には仲間や兵士たちがいますし」

「それをなんとかするのがお前の仕事だろう。ネルとケイトを使って片づけてこい」

なぜ彼はセレスを狙うのだろうか。ネルはクルセウスに尋ねてみた。「王女を暗殺する理由はなんですか」

「邪魔だからだよ。私の目的は、この国をガザニアの一部にすることなんだ。元々私はガザニアの人間でね。いや、正確に言うと魔物だな」

「え？」

「あまり知られていないが、あの国の上層部は魔物で占められているんだ」

「ところで、王妃の暗殺を指示したのはあなたですか」

「その通り。あと、王は病死したのではない。私が毒殺したのだ」

ネルは驚いて声を上げた。セレスが聞いたら激怒するに違いない。クルセウスがレヴィンに呼びかけた。

「新しい仲間も増えたことだし、王女を仕留めてこい。失敗は許されないぞ」

「承知致しました」

ネルたちが部屋を出ると、エリスとリカルドが走り去っていくのが見えた。どうやら、尾行された上に話を立ち聞きされたらしい。

ケイトが舌打ちした。

「ガルシアの奴、なんで阻止しなかったんだろ。なんのための番兵だかわからないよ」

こうなれば一刻の猶予もない。ネルたちは王女を殺害すべく走り出した。

一方、ロイは仲間を一室に集めて小瓶を配っていた。その中には赤い液体が入っている。セレスが怪訝そうな顔をして尋ねた。

「これ、なんの薬ですか」

「魅惑の術にやられたときに、これを飲めば元に戻る。そういう薬だよ」

バートがしげしげと瓶を眺めた。なんだかものすごくまずそうだ。

「そんなものがあつたんですね、どんな味なんですか」

「前に俺が作ったんだ、味が気になるならなめてみるよ」

バートは薬を少しだけなめてみた。

「ぶぐえええっ！」

「吐くなよ、汚いなあ」

「死ぬほどまずいです！」

「魅惑の術にかかりそうになったら、死ぬ気でそれを飲め」

そのとき、エリスたちが駆け込んできた。

「ロイ、大変だよ！ クルセウスがセレスの命を狙ってる。レヴィンにケイト、ネルの三人が殺しに来るってさ！」

セレスの顔色が変わった。他の二人はともかく、なぜネルが敵に回るのかわからない。

続けてガルシアも駆け込んできた。

「ロイ、すまない。俺をこっちに入れてくれ。クルセウスはガザニアの手先だ！」

「なんだって？」

「今こそ言う。あいつは、この国をまるごとガザニアに譲り渡すつもりなんだ。王妃を暗殺したのも奴だし、国王を毒殺したのも奴だ！」

セレスの眉がみるみるうちに吊り上がった。

「あの男、許せない！」

彼女は傍らにいたガーランドに向かって怒鳴った。平時からは想像もできないほどの剣幕だ。

「軍勢を集めなさい、クルセウスを討伐します！」

「かしこまりました！」

ガーランドは急いで退出した。ロイはそれを見ながら腕組みをしている。ネルは、ケイトの魅惑の術にかかっていると見て間違いない。元に戻すには薬を飲ませるのがとっさり早いが、どうやって実行すればいいだろう。

その間に、ネルたちが到着した。

ネル側はたった三人であるのに対し、こちらはガーランド以外全員がそろっている。一見勝負にならなそうだが、魅惑の術を使われればわからない。

ネルは赤眼になった状態で、ロイたちをにらみつけて怒鳴った。

「喰らえ！」

彼女の目を見たら大変だ。皆が視線を反らす中、リカルドとエリスだけは平然としている。それを見たケイトが舌打ちをした。

「くっ、レン族がいたか！」

彼女は短剣を抜くが早いか、リカルドに突きかかった。しかし、綺麗にかわされている。同時に彼の剛腕が唸りを上げ、ケイトの腹を直撃した。

「ぐえっ！」

さらに、エリスの回し蹴りが側頭部を襲った。ケイトはまともに喰らってしまった、ふらついている。ネルはそれを見て激昂し、グラフィードを引き抜いてエリスに斬りかかった。

「お前、殺してやる！」

紫色の閃光が走った。エリスは素早く後退してかわしている。そこにレヴィンの短剣が飛んできたが、リカルドが斧を一閃させて叩き落とした。

レヴィンはネルたちに声をかけた。

「レン族二人を片づける、俺はロイを倒す！」

ネルはうなずき、リカルドを真っ向から斬り下ろした。彼は斧でこれを防いだが、よろけている。そこにケイトが突きかかった。

「さっきはよくもやってくれたね！」

そのときラハルトが疾走し、魔槍ダイダロスでこれをさばいた。ケイトは眉を吊り上げて彼をにらみつけている。ラハルトは突きかかるうとして、つい視線を合わせてしまった。

「くっ！」

慌てて薬を取り出そうとした瞬間、ネルのグラフィードが襲って

きた。なんとか跳び下がってかわしたが、次から次へと斬りつけてくる。

「まずい、やられ……」

その瞬間、バートがラハルトをかばって斬撃を受け止めた。

「早く薬を！」

「す、すまない」

ラハルトは急いで薬を飲み下した。苦いような辛いような凄まじいまずさで、思わず吐き出したくなる。これは正気に戻るわけだ。

バートは必死にネルの斬撃をさばいたが、あまりの凄まじさに反撃の糸口を見出だせない。ライザも進み出て加勢したが、相手の目を見られないのが辛すぎる。ルークは負傷していて戦力にならないし、セレスは最初から論外だ。これは厳しいかもしれない。

第五十四話

一方、ロイはレヴィンと対峙していた、この黒髪の青年は、相変わらず凄まじい殺気をみなぎらせている。

「ロイ、部屋の中じゃお互いやり辛いだろう。場所を移さないか？」
「いいだろう」

二人は王宮の中庭に向かった。広々とした芝生の真ん中に噴水がある、とても静かな場所だ。

レヴィンはそこで足を止めた。

「ここでもいいか？」

「ああ」

身構えた二人を見て、警護の兵士たちが騒いでいる。ロイはさすが彼らに声をかけた。

「こいつは俺の客だ、絶対に手を出すな！」

兵士たちに加勢させたところで、被害が増えるだけだ。ロイは金属の棒を右手で握りしめながら、じつとレヴィンの隙を伺った。

先に動いたのはレヴィンだ。彼は先の尖った金属の棒を三本取り出し、まとめて投げうった。ロイは素早く横へ跳んでかわしている。レヴィンはその間に間合いを詰め、鉄の鎖で作った輪を相手の首に引っかけた。

「喰らえ！」

彼は思いきり鎖を引っ張った。これには鋭く小さな刃物がいくつも付いていて、瞬時に引けば敵の首を掻き切ることができる。だがロイはとつとに抜け出しており、横に向かって走りながらアーツの矢を連射した。

レヴィンは流れるように移動してかわしている。当たるところがかすりもしない。その上、お返しと言わんばかりに次々と短剣を投げつけている。周囲の兵士たちは、その俊敏さに驚嘆の声を上げた。ロイは顔を引きしめた。これは手ごわい。以前より格段に腕を上

げたようだ。全力を尽くさないと間違ひなくやられる。

彼はレヴィンが至近距離に来たのを見計らって、地面に黒い球を投げつけた。途端に煙が立ち上り、二人の視界を閉ざしていく。その間にロイは金属の棒を振りかざし、レヴィンがいた位置に向かって凄まじい速さで連撃を繰り返した。元の位置にいるなら必ず喰らうはずだ。見えない攻撃はかわしようがない。

しかし、まったく手応えはなかった。ロイが煙から跳び出すと、レヴィンは既に外におり笑みを浮かべている。

「お前のやることはお見通しだよ」

ロイは心の中で歯噛みをした。こちらの手の内を知っている人間ほど戦い辛い相手はない。

彼は道具袋から、先端に分銅が付いた長い鎖を取り出した。レヴィンはそれを見てにやにやと笑っている。

「なんだそりゃ、そんなものが通用すると思ってるのか？」

「やってみなけりゃわからないだろう」

ロイは右手で鎖を振り回しつつ、左手で金属の棒を構えた。戦法は至極単純だ。鎖で相手をからめ捕り逃げられなくした上で、棒を使って貫く。成功させればレヴィンを倒せるだろうが、鎖で動きを止めるのが難しい。

次の瞬間、鎖が空気を切り裂いてレヴィンに殺到した。しかし、彼にとつてこんな攻撃は牽制にすらならない。すかさず間合いを詰め、渾身の力で短剣を突き出そうとした。そのときだ。

ロイは鎖を手放すが早いか、道具袋から瓶を取り出して栓を開けた。

「待ってたよ、レヴィン」

緑色の液体が勢いよく噴き出し、レヴィンの右半身に振りかかった。あつと言う間に体を溶かしてしまう、強酸性の毒液だ。

「ぎゃああああっ！」

絶叫したレヴィンの胸を、ロイの棒が一瞬で貫いた。凄まじい鮮血が噴き出し、周囲を赤く染めていく。彼はロイを見ながら口をば

くばくさせた後、微かな声でこう言った。

「止めてくれてありがとう……じゃあな」

レヴィンは目を見開いたままその場に崩れ落ち、二度と動くことはなかった。

敵であるとは言え、かつてルークのもとで一緒に剣術を学んだ仲だ。ロイの胸中は複雑だった。

「すまない、レヴィン。こんな形でしか止められなくて」

彼はレヴィンの目をそっと閉じると、バートたちが戦っている部屋へと向かった。

ロイが戻ると、そこでは相変わらず激戦が続いていた。

相手がたつた二人であるにも関わらず、バートたちは押されっぱなしだ。ネルに対して全力で戦えないことに加え、魅惑の術をかわしながら戦わなければならない。リカルドやライザといった猛者たちもほとほと困り果て渋面を作っている。

ロイはネルとケイトに呼びかけた。

「もうやめとけ、レヴィンは死んだぞ」

ケイトが目を見開いた。信じられないとでも言いたげだ。

「嘘でしょ？」

「いや、確かに殺した。俺がここに立っていることが何よりの証拠だ」

ケイトは何度も首を振った後、震える声で言った。

「ネル、もう勝ち目ないよ。早く逃げよう！」

「あなた一人で逃げてください、私は残ります」

「どうして！」

「ロイを倒したいからです」

「馬鹿！ 死んだって知らないからね！」

ケイトは走り去った。

ネルは相変わらず赤眼のまま、ロイをじっと見つめている。一方、彼は視線を反らしつつバートたちに呼びかけた。

「後は俺に任せろ、全員手を出すな！」

皆がうなずくと、ロイは背中から薬を取り出して口に含んだ。魅惑の術をかけられても、これを飲めば心配ない。

ネルが目を細めながら微笑んだ。

「最高の護衛士にして最強の道具師、ロイ。人間にも魔物にも心から怖れられる男。そんなあなたを引き裂くことができるなんて、魔物冥利に尽きるよ」

ロイは薬のせいで何も言えない。ただ適当にうなずいている。

「魅惑の術はかけないから、私を見てかかってきなよ。そうしないと楽しめないからさ」

ロイはネルに視線を合わせた。仮に術をかけられても薬がある。それより、よそ見をしていてばっさり斬られる方が怖い。

次の瞬間、ネルのグラフィードが紫色に煌めいた。凄まじい斬撃が連続でロイに襲いかかる。彼は武器を手にすることなく、身を翻してひたすらかわした。

ネルは目をむいてロイをにらみつけた。その唇が怒りで震えている。

「なんで武器を使わないの！ どれだけ馬鹿にすれば気が済むわけ？」

ロイは激しく手を振った。決して馬鹿にしているわけではない。大切な人を間違っても傷つけないだけだ。しかし、それが伝わらない。

「そう、わかったよ。『お前なんか俺に勝てるわけないだろ』って言いたいんだね。どうせ私は弱いですよ！」

ネルの目がさらに吊り上がり、眉間に皺が寄った。いよいよ怒らせたらしい。

「お前なんか死んじゃえ！」

ネルは真つ向から剣を振り下ろしたが、またしてもかわされている。すかさず次の斬撃に移ろうとすると、突然ロイに口づけをされた。

「む、むぐ？」

ネルは一瞬目を見開き、顔をしかめた。薬を口移しで飲まされてしまったのだ。

「うええ、何これ！」

「魅惑の術を解く薬だよ」

ネルはきよとんとした顔でロイを見つめた。なぜ自分が彼と戦っていたのかわからない。

「ロイさん、私……」

「元に戻ったのか？」

確かに魅惑の術は解けた。しかし、相変わらず自分の心は魔物のままだ。

「元になんか戻ってないよ、私は魔物としてあなたを……」

「お前は人間だよ」

ネルは彼の言葉に硬直した。なぜか、心の中から熱いものが込み上げてくる。

「世界中の人々が否定しようが、俺はお前を人間だと思ってる。だから頼む、その心を取り戻してくれ」

ネルの瞳から涙が溢れ出た。体の震えが止まらない。

そうだ。彼は、ありのままの私を受け入れてくれた最愛の人だ。

それなのに、一体自分は何をしているのだろう。

「本当にごめんなさい、許してください……」

彼女ははらはらと涙を流しながらロイに抱きつき、バートたちは笑顔でそのようすを見守っていた。

第五十五話

セレスがガーランドを通じて城内の兵に呼びかけた結果、二百人近くが集まった。討伐の対象が執政官であるということに、彼らは戸惑いの色を隠せないでいる。

セレスは王妃の形見である剣を抜き、兵士たちに向かって言った。「これより逆臣クルセウスを討伐します。罪状は国王と王妃を殺害したこと、及び私の暗殺を部下に命じたことです。しかも彼は隣国と内通し、この国を勝手に譲り渡そうと企んでいます。もはや生かしておくわけにはいきません！」

兵士たちの間にざわめきが起こった。にわかには信じられないようだ。

セレスはロイに声をかけた。

「ロイさんたちには本当にお世話になりました。今回は私自ら指揮を執り、クルセウスを討ち果たしてみせます。あなた方はゆっくりお休みください」

「俺はついていくよ、護衛だからな」

「しかし、お疲れでしょう」

「別に疲れちゃいない。ただ、他の連中はしばらく休ませてやってくれ」

「わかりました」

今回はロイ、ガーランド、ガルシアの三人が討伐隊に加わり仲間たちは待機することになった。

相手はクルセウス一人だ。例え味方する兵がいたとしても、たいした数ではないだろう。

クルセウスがいた部屋を包囲して中を見ると、もぬけの空だった。一足遅かったようだ。

セレスは悔しげに唇を噛みしめている。ロイはそれを見ながら静

かに言った。

「きつと今頃は、隣国に向かって逃亡しているだろう。追っ手をかけるか？」

「もちろんです！」

セレスが追っ手を走らせてからしばらくすると、一人の兵士が駆け戻ってきた。

「クルセウスが自分の邸宅に逃げ込んだのを目撃しました！」

「よくやりました、ご苦労様です」

セレスはロイたちを引きつれてクルセウスの邸宅に向かった。煉瓦造りで三階建ての巨大な家だ。扉は開け放たれている。ロイは中をのぞき込みながらしみじみと言った。

「怖ろしいほどの殺気が充満してる。『いつでも来い』って感じだな」

「だからと言って、ここで退くつもりなどありません！」

「そうか、じゃあがんばれ。くれぐれも注意するようにな」

セレスは兵士たちを引きつれて中に突入した。彼女の前方をガルシア、両脇をロイとガーランドが固めている。

彼女たちは緋色の絨毯を踏みしめながら進んだ。ベージュ色の壁や金の燭台、壁に飾られた絵画の数々が視界に入ってくる。よく見れば、虐殺の場面が描かれた凄惨な絵ばかりだ。ロイはその近くを通りながらつぶやいた。

「悪趣味な奴だな」

その途端に絵画が破れ、中から無数の槍が突き出された。ロイはセレスをかばいながらかわしたが、周囲にいた兵士たちが貫かれている。彼は思わず舌打ちした。

「くそ、俺が気づかないとは」

次の瞬間、革の鎧をまとった二足歩行のトカゲたちが跳び出してきた。その手には血に塗れた槍が握られている。

ガルシアが彼らに呼びかけた。

「やめとけ、こっちにはロイがいるんだ。勝負にならないぞ！」

トカゲの一匹が目を見開き、ガルシアに槍を突きつけた。相当怒っているようだ。

「黙れ、この裏切り者！ どの面下げてここに来た！」

「クルセウスがガザニアの手先だと知ってたら、最初から従わなかつたさ」

「そうかそうか、槍の錆にしてやるから動くな！」

トカゲたちは突きかかってきた。合わせて二十匹足らずだが、廊下が狭いために包囲殲滅することができない。一度に戦える人数はせいぜい四人だ。

敵は手練がそろっており、味方の兵士たちはばたばたと倒されていく。ロイは見るにたえず、セレスに作戦を耳打ちした。

「わかりました、やってみます！」

トカゲたちは何度も前後を入れ替えながら、巧みに兵士たちの行く手を阻み続けている。しかし、遂に変化が起きた。最前列の兵士たちが突然しゃがみ込んだのだ。

トカゲたちが目を見張ったそのとき、一列目と二列目の兵士たちが一斉に矢を放った。トカゲたちは咄嗟の出来事に戸惑い、体には矢を受けながら叫んでいる。先頭の兵士たちは連射を加えた後、剣を抜いて斬りかかった。

トカゲ隊は大混乱に陥った。槍を使って至近距離で戦うのは難しい。増してここは狭い廊下だ。圧倒的に不利であることは間違いない。

兵士たちに続いてガルシアが斬りかかり、次々にトカゲたちの首をはね飛ばして血の海へ沈めている。ガールランドも踏み込み、体勢を崩した敵を矢継ぎ早に突き殺した。

間もなくトカゲたちは全滅した。兵士たちは勝利を喜び、歓声を上げている。ロイはそれを見ながらぽつりと言った。

「二百人が二十人に勝って喜ぶな。むしろ負けたら恥だ」

セレスは苦笑しながらロイを見つめている。この辛辣さは彼の特徴の一つに挙げられるだろう。それはさて置き、礼を言わなければ

ならない。

「ロイさん、ありがとうございました」

「礼なんかいい。それより、人を動かす立場にあるならもつと頭を使え。味方がやられているのに何もできないようでは指揮官失格だ」
「も、申しわけありません」

セレスはうなだれた。自分は王女でありながら、どうもこの男に頭が上がらない。

廊下を進んでいくと、人が二人並んで通れそうな大きさの扉を見つけた。鍵はかかっていない。兵士たちが盾で身を護りながら入ると、広々とした部屋に出た。

中にいたのは、八人のたくましい男性だ。革の鎧を着込んで曲刀を構えている。その隙のなさから見てかなりの使い手のようだ。

セレスは彼らに声をかけてみた。

「武器を捨てて降伏しなさい、そうすれば命までは取りませんから」
彼女は懸命に説得したが、彼らは黙り込んでいる。やがて、男の一人が笑いながら口を開いた。

「なんで自分より弱い相手に降伏する必要があるんだ、馬鹿が」

「なんですって、たった八人で思い上がりも甚だしい！」

「思い上がってるのはお前だ、兵士が何人いようが烏合の衆さ。指揮官が指揮官だしな」

セレスが顔を真っ赤にしているのを見て、ロイはため息をついた。
こんな安い挑発に乗るようでは先が思いやられる。

「落ち着け。こちらが圧倒的に有利なのは紛れもない事実だから」
「そ、そうですね」

セレスは兵士たちに命じて、一斉に斬りかからせた。いくら相手が強くても、たかが八人だ。あつと言う間に決着が着くだろう。

ところが予想に反して、彼らは善戦した。少ない人数なりに連携し、群がる兵士たちを次々と斬り殺している。

ガルシアがそのようすを見ながらつぶやいた。

「あいつら、かなり強いな。こりゃ甚大な被害が出るぞ」

兵士が斬りかかると、男の一人がさかさず薙ぎ払って首を飛ばした。さらに他の兵士が突きかかったが、別の男によって正面から斬り伏せられている。包囲して一斉に襲いかかろうとすると、彼らはさかさず剣をそろえて突っ込み血路を開いて抜け出してしまふ。

上がるのは味方の血飛沫ばかりだ。セレスは苦りきった顔でロイを見た。

「どうした、何か言いたそうだな」

「お聞きしたいことがあります。あなたが指揮官ならどうしますか」「さあな。それより、相手がなぜあそこまで強いのかよく考えてみな」

「剣の腕が立つからでは？」

「そんなことはわかってる、他にも理由があるだろう」

第五十六話

「きちんと統制されてるからですかね」

「そうだ。一人一人が、自分のするべきことをしっかりと理解している。それに比べてこっちを見る、バラバラだ」

セレスは再び、男たちに視線を移した。個々の技量は相当なものだが、彼らは決して一人で戦わない。常に四人一組で行動している。誰かが劣勢になれば他の者が援護し、片方の四人組が包囲されそうになればもう片方が突撃して脱出させる。

セレスは感嘆した。見事なものだ。相手を「烏合の衆」と罵倒するだけのことはある。

「ロイさん、よくわかりました」

「それなら、この後どうすればいいかわかるだろう」

セレスは強くうなずき、周囲の兵士を呼び集めて指示を与えた。彼女の作戦はこうだ。五人組を八個作り、それぞれが一人を狙って集中的に攻撃する。相手を分断するのが目的だ。さらに、五人組は頻繁に新しい組と入れ替える。こうすれば敵は疲弊の一途をたどるのに対し、こちらは常に万全の状態で戦うことができるわけだ。

彼女が作戦を実行すると、八人は完全に分断された。それでも彼らは目の前の兵士たちを叩き斬り、首をはね、顔面を薙ぎ払い暴れまくっている。あまり効果はなかったようだ。

ロイはそれを見ながら考えた。最悪、遠巻きに包囲しながら一斉に矢を放って射殺すという方法もある。しかし、これでは腰抜けもいいところだ。これだけの人数差がありながら手も足も出さず、射殺することしかできなかったと言うのは余りにも情けない。士気の低下は免れないし、その話が広がれば嘲笑されることになるだろう。王宮の兵士たちが物笑いの種になるのはまずい。

ロイはガーランドに声をかけた。

「どう思う？ 王宮の兵士がそろいもそろってやられっぱなしだぞ」

「彼らを束ねる人間として情けない限りだ」

「じゃあ、汚名返上のために一肌脱いでくれないか」

「俺にできることなら」

ロイはセレスに視線を移した。彼女は、戦況の悪化に顔をしかめている。

「セレス、話がある」

「なんでしようか」

「ガーランドに一騎討ちをさせてみたらどうだろう。勝てばあいつらが降伏、負ければ俺たちが撤退だ」

「仮に勝ったとしても、彼らは降伏などするでしょうか？」

「しなければしないで、射殺してかまわないさ。『セレス側は代表を立てて一騎討ちをし、相手を打ち破った。だが、彼らが約束を違え抵抗したためにこれを射殺した』という講図が成り立つからな。

こうすれば士気の低下は防げるし、面目も立つ」

「なるほど」

「それから、降伏後の処罰は国外追放に留めることだ。死刑になるとわかって降伏する奴なんかいないからな」

セレスはうなずいた。差し当たって問題なのは、ガーランドが勝てるかどうかと言うことだ。

「ロイさんから見ても、ガーランドは勝てると思いますか？」

「なんとかいけるだろう」

「わかりました」

セレスは兵士たちに向かって叫んだ。

「全員、剣を引きなさい！」

彼らは命令に従ったものの、怪訝そうな顔をしてこちらを見ている。セレスはかまわず、八人の中で一番大柄な男に話しかけた。

「一つ勝負をしませんか？ あなた方が勝てば、私たちはここからすぐに撤退します」

「ほう、お前が勝ったら？」

「降伏してもらいます。命は取りません。ただ、色々調べた上で国

外に追放します」

「お前が約束を破らないという保証は？」

「私はこう見えても王女です。軽々しく約束を破るようなことがあれば、人心が私から離れていってしまいます。ですから、そのようなことは決して致しません」

八人は顔を見合わせて話し合った後、勝負することを承諾した。代表として戦うのはさっきの大柄な男だ。威めしい顔立ちに鍛え上げられた体をしている。武器は腰に佩いた数本の曲刀だ。

ガーランドは無言で進み出て男と対峙した。武器は、柄の部分まで鉄でできた槍だ。その他、腰に剣も佩いている。

先に仕掛けたのはガーランドだった。

「うおおおっ！」

彼は槍を構え、大きく踏み込んで突きかかった。しかし、男は横に跳んでかわしている。ガーランドはすかさず槍を引き、相手が着地した場所を狙って鋭い一撃を放った。

男は舌打ちしながらこれをかわし、斬りかかろうとした。だが、ガーランドは既に槍を引いており隙を見せない。男は眉間にしわを寄せながら言った。

「雑魚ばかりかと思っていたら、少しはできる奴もいるようだな」

「まあな、王宮の兵士をなめてもらっては困る」

「だが、いずれにしろ勝つのは俺だ。戦ったことを後悔しながらあの世へ逝くがいい！」

男が剣を振りかざして疾走した。ガーランドはすかさず槍を繰り出したが、まるで当たらない。その隙に男は間合いを詰め、ガーランドを真っ向から斬り下ろした。

セレスが目を見開いて叫んだ。

「ガーランド！」

しかし、ガーランドは反転して斬撃をかわしていた。それだけでは終わらない。彼は石突きを相手の胸に直撃させ、その場に打ち倒した。

「ぐっつ！」

男は急いで立ち上がるうとしたが、目の前に槍を突きつけられてしまつてできない。

ガーランドが男たちに呼びかけた。

「全員、剣を捨てろ！」

彼らは渋々剣を投げ捨て、身柄を拘束された。セレスは男たちに三十人の兵士をつけ、王城へ護送させた。

残っている兵士は百四十人余りである。クルセウス一人を捕らえるには充分な人数だが、また思わぬ横槍が入る可能性もある。セレスたちは気を引きしめながら先に進んだ。

その後、あちこちの部屋をのぞいてみたが人っ子一人見つからない。業を煮やしたセレスは、手分けして探すことにした。兵士たちは散つていき、彼女の周囲には十人の兵とロイ、ガルシア、ガーランドだけが残つた。

ロイは周囲を警戒しながら考え込んだ。本当にクルセウスはここにいるのだろうか。隠し通路を使ってとつくに逃げてしまったという可能性もあるし、ここに逃げ込んだという情報自体が間違っているかもしれない。自分が彼の立場だったら、とつくに逃亡しているところかロイの考えをよそに、クルセウスが見つかったという情報が入つた。三階の一番奥にある広間にいるらしい。セレスは周囲の兵をかき集めながら、そこに向かった。

彼女が広間に続く扉を開けると、確かにクルセウスがそこにいた。壁際に立つており、その横には天井から伸びた紐がある。セレスはロイたちを引きつれて広間に入り、彼に向かつて叫んだ。

「クルセウス、国王と王妃を殺害した罪であなたを討伐します！」
すると彼はにやりと笑い、紐を思い切り引いた。その直後にセレスたちの背後にある扉が閉まつた。押しても引いても全く動かない。他に入入り口はなく、完全に閉じ込められたようだ。

「王女、まさか私を追い詰めたつもりではなからうな？ 追い詰められたのは貴様の方だ、もう逃げ場はないぞ！」

セレスの周りにはロイ、ガーランド、ガルシアの他、二十人近い兵士がいる。それに対しクルセウス側は彼一人だけで、誰の目から見てもこちらが有利なのは明らかだ。

セレスは目を細めながら言った。

「負け惜しみも大概にして、潔く降伏しなさい」

「笑わせるな、降伏する必要など微塵もない」

彼はすらりと剣を抜いた。針をそのままの大きくしたような細身のもので、いわゆる突剣だ。相手を突き殺すのに特化しており、斬ったり薙ぎ払ったりするには向かない。ちなみにアルデリアスと言う名で、緑銀に光る魔剣だ。

彼は目を見開くと同時にアルデリアスを突き出した。セレスとの間には三フィードの距離があり、普通は当たるわけがない。ところが剣はするすると伸びてきて、一瞬で彼女の眼前に迫った。

ロイが慌てて叫んだ。

「セレス、よける！」

しかし、もう間に合わない。凄まじい血飛沫が上がり、周囲を赤く染めていく。貫かれたのはセレスではなく、前方を固めていたガルシアだった。彼は自分の身を挺して王女を護ったのだ。

ガルシアがその場に崩れ落ちると、セレスは狼狽しながら屈み込んだ。

「ガ、ガルシアさん……」

「セレス様、どうかお気になさらないでください。道を踏み外した者の、せめてもの償いです」

彼はロイに視線を移した。

「頼む、クルセウスを止めてくれ。奴の毒牙から王女を護りきれるのはお前だけ……」

ガルシアは言いかけて事切れた。その瞳からは一筋の涙が流れている。ロイは大きくうなずき、セレスに話しかけた。

「俺と兵士たちで奴を仕留めるから、ガーランドと一緒に下がっていてくれ」

「わかりました、ご武運をお祈りします」

第五十七話

ロイと二十人近い兵士がクルセウスを包囲した。絶対的に不利な状況であるにも関わらず、彼は不敵に笑っている。

「やめておけ、私の狙いは王女一人だ。雑兵などに興味はない。ロイ、貴様にもだ」

「お前の興味云々など知ったことか。潔く降伏しろ、でなければここで死ぬことになるぞ」

「これ以上笑わせるな、戦えば死ぬのは貴様らだ。嘘だと思っならかかってこい」

ロイはクルセウスの顔をにらみつけながら考えた。別に虚勢を張っているようには見えない。この自信はどこから来るのだろうか。

「ロイ、貴様はこの国で最強と言われている。しかしな、隣国ガザニアには同程度の腕を持った者が掃いて捨てるほどいるのだ。嘘だと思っなら行ってみるがいい、ただし」

彼はアルデリアスを突きつけた。それは緑銀に輝きつつ、周囲に無言の重圧を与えている。

「私を倒すことができればの話だ。ここで敗れて命を落とすようであれば、端から論外だよ」

「そうか、おもしろい話を聞いた。俺も最近、ガザニアに興味を湧き始めていたところだ。折を見て出向くことにするよ、ここでお前を倒してな」

「ほう、では貴様の實力を見てやるとするか」

クルセウスはにやりと笑い、アルデリアスを突き出した。瞬時に切っ先が伸びてロイに迫ったが、彼は横に跳んでかわしている。

それを見た兵士たちが一斉に斬りかかった。

「ガザニアの手先め、覚悟！」

クルセウスは剣を引きつつ、くるくると回りながら斬撃をかわした。同時に周囲の兵士三人を突き殺している。ロイはその剣技に内

心舌を巻きつつ、先端に分銅の付いた鎖を右手で振り回した。

兵士たちは間髪入れず突きかかったが、まるで歯が立たない。一人、また一人と倒され、みるみるうちに人数が減っていく。彼らの顔に焦りが見え始めたそのとき、ロイの鎖分銅がアルデリアスに巻きついた。

「くっ、貴様！」

「これで終わりだ」

ロイはすかさず左手でアーツの矢を放った。クルセウスは仕方なくアルデリアスを手放し、矢をかわすために横へ跳んでいる。もう武器は持っていない。その場の誰もが、これで勝負がついたと思った。

ところが、クルセウスはなおも不敵な笑みを浮かべている。ロイが眉をひそめていると、彼は両手を突き出して叫んだ。

「ぬうん！」

十本の指が一瞬にして伸び、人間の腕ほどの長さになった。それぞれがまばゆい光を放っており、剣に匹敵するほどに鋭い。次の瞬間、彼は目を見開いて叫んだ。

「ふはははは、一人残らず地獄に落ちろ！」

クルセウスが疾走すると同時に爪が煌めき、周囲の兵士たちをすたずたに斬り裂いていく。彼らの一人が胸を目掛けて薙ぎ払ったが、クルセウスはこれを右の爪で受け止め、すかさず左の爪で顔面を斬り裂いた。

「ぐぎやあああつ！」

凄まじい血飛沫を上げる兵士をクルセウスはなおも斬り刻み、ばらばらにしたところでようやく動きを止めた。その顔には薄笑いを浮かべている。

「ロイ、どうだ。少しは驚いたか？」

「その程度でいちいち驚いていたら、護衛士なんぞ務まらないさ」「言うではないか、口だけはたいしたものだな」

ロイは素早く視線を走らせた。少し戦っただけであるにも関わら

ず、兵士は九人にまで減っている。これは凄まじい強さだ。だが、呑まれるわけにはいかない。

兵士たちは完全に怖じけづいてしまい、剣を構えながら震えている。ロイは彼らを横目で見ながら叱咤した。

「そんな様でどうする！ 今、お前たちは王女の直属なんだぞ。その誇りを持って死ぬ気で戦え！」

しかし、彼らは戦意を喪失したままだ。ロイは仕方なく全員を下がらせ、金属の棒を二本引き抜いた。屈強な戦士や魔獣を腐るほど血の海に沈めた、ロイ最強の武器だ。

「ほう、貴様が来るのか。兵士たちよりは楽しませてくれるのだからな？」

「いや、お前が楽しむ前に地獄へ送ってやる」

「ふっ、できるものならやってみるがいい！」

ロイは一瞬で間合いを詰め、顔面を目がけて鋭い突きを繰り出した。しかし、クルセウスは少し横に移動しただけでかわしている。その直後、凄まじい速度の斬撃がロイに襲いかかった。

「くっ！」

彼は体をひねって避け、続く一撃を棒で受け流した。それでも相手の勢いは止まらず、間断なく斬りつけてくる。ロイはすかさず地面に向かって黒い玉を投げつけた。それはもうもう煙を噴き出し、視界を閉ざしていく。クルセウスは舌打ちしながら跳び下がったが、そこに煙から走り出たロイの矢が殺到した。

「小癩な真似を！」

彼が矢を叩き落とした途端に閃光が走り、その胸をロイの棒が貫いた。緑色の血が噴き出して周囲の床を染めていく。それでもクルセウスは倒れていない。彼はセレスを睨み据え、彼女目がけて疾走した。

「なんとんでも、貴様だけは！」

しかし、その斬撃が届くことはなかった。彼の首をロイの棒が貫いていたのだ。

「俺に背中を見せてどうする」

棒を引き抜くとクルセウスは震えながら振り向き、緑色の血を撒き散らしながらその場に崩れ落ちた。

「貴……様は本当に……人間か？」

「どこからどう見ても人間だろう」

「私の……予想を遥かに超えている……これならガザニア……」

彼は吐血しながら息絶えた。

セレスが青ざめた顔でこちらを見つめている。クルセウスの強さに圧倒され、恐怖の余り倒れかかっていたのだ。

「セレス、ご両親の仇は討ったぞ」

そう言つと、よくやく彼女の顔に生気が戻つた。

「ありがとうございます。もう、なんとお礼を言えばよいのか……」

「気にするな。それより、ガルシアには気の毒なことをしたな」

床には兵士やクルセウスの他、ガルシアの死体が転がっている。

セレスは彼の前に屈み込み、そつと顔に触れながら言った。

「あなたに助けられた命、決して無駄にはしません。今後、ガザニアからこの国を全力で守るつもりです」

ロイはセレスに近づいて見つめた。彼女は決意に満ちた、迷いのない顔をしている。

「そうだな、まずは戴冠式を済ませて王位につくことだ。上に立つ人間がいなければまとまるものもまとまらない」

「はい。ロイさん、本当にありがとうございます」

「礼はいい。それより、戴冠式が済んだらガザニアに行ってみようと思う。どんな国なのか興味があったんでな」

「わかりました、ご無事をお祈りしております」

第五十八話

クルセウスが世を去ってから半月余りが経過し、戴冠式当日となった。

場所は首都の中心にある大聖堂だ。形はドーム型で三百人を収容できる広さがあり、側面のステンドグラスから明るいい光が差し込んでくる。

出席しているのはこの国の執政官や貴族、外国の王族たちだ。また、ロイたちや兵士が警護している他、ハデイスの住民やレン族の面々、ロイの組合に所属する護衛士たちも入口付近の椅子に座っていた。

この式が終われば、セレスは国王として認められることになる。彼女に反感を持つ者たちが黙って見過ごすわけもない。ロイはそう考え、強力な仲間を呼び集めていたのだ。

この他にも、数百人の兵士たちが大聖堂の周囲を警戒している。これならセレスを狙われたとしても問題はないはずだ。誰もがそう思っていたが、危機は突然訪れた。入口の扉を叩き壊し、数十人の赤眼がなだれ込んできたのだ。

先頭にいるのはケイトで、後はすべて男性だった。赤眼の男は魅惑の術を使えないものの、戦闘能力は女より高い。ハデイスの住民を初め、周囲にいる人間たちは気を引きしめながら一斉に抜きつれた。

大聖堂の一番奥には、セレスと大司教がいる。ケイトは彼女たちを見つけると笑いながら言った。

「借りを返しにきたよ、さあ始めましょうか！」

セレスを狙う刺客たちと、それを阻もうとする人間が激突した。赤眼の一団は凄まじい速さで斬りかかってくるが、人間たちも負けてはいない。

レン族を率いるリカルドが、叫びつつ斧を振り下ろした。

「うおおおつ！」

途端に目の前の赤眼が真っ二つに斬り裂かれて転がった。刺客の面々は仰天してたじろいでいる。

「なんだこいつは、人間なのか？」

「この強さ、まさかレン族……」

赤眼たちが騒いでいる間に金色の閃光が走り、彼らを次々と薙ぎ倒した。ルークの魔剣エクストリアスだ。さらにハデイスの住民とレン族が剣をそろえて突っ込み、刺客の一団は大混乱に陥った。

ロイはセレスの近くから、戦いのようすをじっと観察していた。さすがは国内最強の戦闘集団と、最も凶暴な原住民たちだ。これなら、彼女に危害が及ぶ心配はないだろう。

ところがそのとき、聖堂のステンドグラスを叩き割って飛び込んできた男たちがいた。見た目は人間だが背中に鳥のような黒い羽根があり、異常に胸筋が盛り上がっている。数は三十人前後で、着ているのは革の鎧だ。武器は曲刀や槍である。ロイですら見たことがない種類の魔物だ。

彼らは喚きながら、一斉に飛びかかってきた。狙いはセレスだ。

ロイは素早く彼女を後方に下げ、ネルやバート、ラハルトやガーランドを前方に配置した。

ラハルトが目を見開いて叫んだ。

「おらあああつ！」

魔槍ダイダロスが一直線に伸び、先頭の男を貫いた。絶叫が響き渡り、凄まじい量の鮮血が飛び散っている。

「もう一本あるぜ、喰らいやがれ！」

彼は二本の槍を自在に操り、次々と魔物たちを突き殺した。それでも彼らは怯むことなく襲いかかってくる。バートやネルは剣を振りかざして立ち向かい、一人、また一人と血の海に沈めた。

ロイは後方で戦況の把握に努めていた。赤眼はルークやリカルドたちが押さえ込んでおり、翼の生えた魔物たちはネルたちや護衛士の一団が阻んでいる。今のところ問題はなさそうだ。そう思った矢

先、すぐ近くのから凄まじい殺気を感じた。

「なんだ、誰が……」

視線を向けると、そこには筋骨たくましい男が立っていた。下半身の腰布と両腕の鉄甲以外、何も身に着けていない。体は漆黒で、髪は赤い長髪だ。目つきが異常に鋭く顔は角張っており、口元からは鋭い牙がのぞいている。

ロイは戦慄した。こんな男が近くにいなながら、全然気づかなかつたとは怖ろしい話だ。きつと巧みに気配を消しながらここまで来たのだろう。

男は口を開け、鋭い牙を剥き出して言った。

「俺、王女、食う。フォーマルハウト様のご命令」

周囲の兵士たちが斬りかかると、彼は鉄甲で攻撃をさばきつつ疾走した。凄まじい速さだ。

「全員、殺す。うがああああっ！」

兵士たちは次々と弾き飛ばされていく。ロイはすかさず毒液の入った瓶を取り出し、相手を目掛けて栓を開けた。

「これでも喰らえ！」

ところが、男が突然視界から消えた。慌てて探すと、なんと自分の頭上にいる。ロイは彼の跳躍力に仰天した。

「うがああああっ！」

次の瞬間、男の放った蹴りがロイの胸に炸裂した。気が遠くなりそうな痛みだ。彼はその場に倒れ込んでしまった。

「があああっ！」

さらに男の拳が襲ってくる。ロイは転がりながら必死にかわし、急いで起き上がった。一対一で戦って、ここまで強い相手はそういない。

「おい、お前はガザニアから来たのか？」

「そう、ガザニア。俺の国。魔物ばかりで居心地いい。ここは駄目」

そのとき、包囲を抜けたケイトが向かってきた。

「あつははは、そいつは強いよ！ ロイだって倒すのは無理だね！」
彼女は次々と短剣を投げつけてくる。ロイはすべてかわしたものの、続く男の拳打を喰らってしまった。

「ぐあつ！」

二人を相手にするのは無理がある。歯噛みしていると、ネルが進み出た。

「ケイトさんは私が倒します、ロイさんはあの男を！」

ロイは強くうなずいた。こんなところで死ぬわけにはいかない。
「行くぞ！」

アーツの矢を次々と発射したが、男は余裕でかわしている。次に毒液をぶちまけたがこれも当たらない。こうなれば、頼みは金属の棒だ。ロイは二本の棒を引き抜くが早い、相手目がけて凄まじい連撃を放った。

「おおおおつ！」

男はこれを鉄甲でさばき続けている。しかし、やがて一発が防御をすり抜けて彼の胸を直撃した。

「ぐええつ！」

男は血を噴き出しながら後ずさっている。ロイはその足を踏みつけて逃げられなくなった上で、顔面目がけて渾身の突きを放った。

「これで終わりだ！」

金属の棒は男の口から後頭部まで貫き、彼は目を見開いたままその場に崩れ落ちた。

「怖ろしい奴だった……」

ネルに視線を移すと、彼女のグラフィードが相手の胸を貫いていた。こちらも勝負がついたようだ。

「ケイトさん、ごめんなさい」

「あ、あつ……」

ケイトはその場に膝をつき、微笑みながら言った。

「そう、あなたは人間と共に生きるんだね。それも一興……」

彼女は倒れ伏し、二度と起き上がることはなかった。

ロイが周囲を見回すと、大勢は決していた。刺客たちはほとんどが倒されて数人しか残っていない。間もなく彼らも包囲され、全身に斬撃を浴びて絶命した。こちらは兵士が数人やられただけで、後にはたいした被害もない。ロイは戦果に満足してうなずいた。

戴冠式は続行され、セレスは新しい大司教によって国王に任命された。前途多難ではあるが、これで一段落だ。

ロイは式が終わった後、全員を集めて話をした。皆は真剣な表情で彼に視線を集めている。

「今回は手を貸してくれて本当にありがとう。前に言った通り、俺はこれからガザニアに向かう。どんな国であるのか、実際にこの目で確かめてくるのが狙いだ。そのパートナーとして」

彼はネルに視線を移した。

「彼女をつれていきたい。他のみんなは国内で実力の向上に努めてくれ。今後ガザニアが進攻してくる可能性もあるからな」

横を見ると、アニエスとバートがふくれている。

「ふーん、私はつれてつてくれないんだ。二人だけでよろしくやるつもりなんだね！」

「ロイさん、なんで俺まで留守番なんですか！」

「すまない、あまり大人数で行くと目立ってしまうからな」

ロイがアニエスたちを説得していると、セレスが笑顔で言った。

「ロイさんのことだから、見てくるだけでは終わらないでしょう？」

「まあな」

できればセレスを狙ったフォーマルハウトと言う者の居場所を突き止め、二度と彼女を狙わないよう痛めつけておきたい。そう思っている、ネルがロイの手をしっかりと握りしめた。

「頼りにしてます、これからもよろしく」

「こちらこそ」

ロイはネルの手をしっかりと握り返した。この先どんな困難が待ち受けていようと、彼女と一緒に乗り越えてみせる。彼の心の中は、強い決意で満ち溢れていた。

(第二部 完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382/>

道具師と赤眼の少女

2011年7月30日03時25分発行